

長池・二日市・御経塚遺跡群

御経塚第二土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

1998

石川県野々市町教育委員会
野々市町御経塚第二土地区画整理組合

長池・二日市・御経塚遺跡群

御経塚第二土地区画整理事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

長池ニシタンボ遺跡

二日市イシバチ遺跡

御経塚オツソ遺跡

1998

石川県野々市町教育委員会
野々市町御経塚第二土地区画整理組合

例 言

- 1 本書は石川県石川郡野々市町長池町・二日市町・御経塚町地内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。長池ニシタンボ遺跡・二日市イシバチ遺跡・御経塚オツソ遺跡の調査報告を合冊したので、長池・二日市・御経塚遺跡群と総称する。
- 2 調査は野々市町御経塚第二土地区画整理事業に係るもので、長池ニシタンボ遺跡は平成3年度、二日市イシバチ遺跡は平成4～6年度、御経塚オツソ遺跡は平成元年度・8年度に発掘調査を野々市町教育委員会が実施した。期間、面積は各遺跡の経過と概要で述べた。
各遺跡の出土遺物・調査図面類の整理作業及び報告書作成については平成6年度より開始し、9年度に終了した。
- 3 現地調査・出土品の整理は吉田淳が担当した。
- 4 発掘調査あたっては御経塚第二土地区画整理組合理事長 塚崎吉信、副理事長 杉林敏信、塚崎昭夫及び組合員各位、野々市町都市計画課の御協力を得た。
- 5 現場調査・出土品整理の参加協力は各遺跡の経過と概要で記載した。
- 6 発掘調査及び本書の執筆にあたっては下記の方々から御教示・指導を得た。記して感謝申し上げたい。
(敬称略)
垣内光次郎、木田 清、楠 正勝、出越茂和、栃木英道、藤田邦雄、増山 仁、南 久和、
安 英樹、湯尻修平、
- 7 本書の執筆編集は吉田が担当した。
- 8 本書の各図・写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 本書での遺構・地図等の方位はすべて真北を表示する。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、(m) で表示する。
 - (3) 各図の縮尺は以下のとおりである。
遺構 1/200、1/120、1/60
土器 1/3、石器その他1/1、1/2、1/3、
 - (4) 出土遺物実測図中の番号は、遺構図出土位置・遺物一覧表・写真図版中の番号に対応する。
 - (5) 遺構名の略号は以下のとおりである。
周溝を持つ建物及び竪穴建物 (S I) 掘立柱建物 (S B) 柱列 (S A) 土坑 (S K)
溝 (S D) ピット (S P) 竪穴状遺構 (S X) 井戸 (S E)
- 9 本遺跡の出土遺物、記録資料は野々市町教育委員会で一括保管している。

目 次

I	位置と環境	1
	1 地理的環境と遺跡の位置	1
	2 周辺の遺跡	1
II	調査の経緯	2
III	長池ニシタンボ遺跡	9
	1 調査の経過と概要	10
	2 弥生・古墳時代の遺構と遺物	13
	3 その他の時代の遺構と遺物	40
	4 石器・石製品・金属器	40
	5 ま と め	44
	遺物一覧表	46
	写真図版	51
IV	二日市イシバチ遺跡	69
	1 調査の経過と概要	70
	2 弥生時代以前の遺構と遺物	73
	3 中世以降の遺構と遺物	90
	4 ま と め	115
	遺物一覧表	117
	写真図版	123
V	御経塚オッソ遺跡	145
	1 調査の経過と概要	147
	2 遺構と遺物	147
	3 ま と め	149
	遺物一覧表	159
	写真図版	161

I 位置と環境

1 地理的環境と遺跡の位置

石川郡野々市町は石川県の中央部金沢市に南郊し、西は松任市、南は鶴来町と接する南北6.7km、東西4.5km、面積13.56km²、人口4万3千人の平野部の町である。この野々市町周辺は稲作を中心とする田園地帯であり、美田が一面に続くなか集落が点在する風景であった。1970年代に農地の市街化が始まり金沢市近郊としてのベッドタウン化が著しく進み、農村と新興住宅街が混在する地域となった。しかも近年の農業衰退が加わり都市開発は急激に進行を速めつつある。ここ20年で人口が約2万人増加し2倍になったことから窺われる。

本町は白山連峰を源とする県下最大の手取川によって形成された手取川扇状地北東部の扇央から扇端部に町域をもつ。手取川は古来より暴れ川として知られ、現在は鶴来町で流路を北より西に向きを変え日本海にそそぐが、氾濫のたびに流れを南に変えて行ったことが知られている。この旧河道跡で現支流を利用する七ヶ用水の上流側2流の富樫・郷用水である十人川や安原川が北に流れ本町内を潤す。扇状地は鶴来町を扇頂として扇径約12km、展開度約110度の規模で、勾配は扇央1/170、扇端1/200を測る。東側では富樫山地の低い急崖と接し、北東端では同山地からの伏見川の形成する泉野扇状地と重なり不鮮明となる。

本遺跡群は野々市町の北西部に位置し、JR野々市駅を起点に長池町地内の長池ニシタンボ遺跡は西北西へ500m、二日市町地内の二日市イシバチ遺跡は南西へ500m、御経塚町地内の御経塚オツソ遺跡は北東へ600m、いずれもJR北陸本線の北側、郷用水分流の大塚川(馬場川)と安原川の間を展開する。各遺跡は扇状地端部に立地し標高は11~13mである。現在は近世から明治大正期の耕地整理にいたる開発により平坦であるが、以前は河川や小支流が入り組み微高地と低湿地が繰り返す複雑な地形が想定できる。実際に周辺の調査では東西にほぼ100m前後の距離をおき河道跡、低湿地を確認しており、遺跡はこの低地間、南北方向の微高地上に存在している。また標高10mより低地が地下水自噴地帯であったことから、地下水位は地表に近かったものと考えられる。

長池、二日市は旧郷村、御経塚は旧押野村に属しいずれも近世から村名が見られる。

- 参考文献 『石川県の地名』平凡社 1991年
『押野村史』石川郡押野村史編集委員会 1956年



第1図 野々市位置図
(1/3,000,000)

2 周辺の遺跡

本遺跡群の所在する手取川扇状地北端部及び以北の沖積平地は遺跡の密集する地域で、縄文時代から中近世にわたり注目する遺跡も多い。多岐にわたる開発に伴う遺跡の発見が相次いでいる地域でもある。

現時点では縄文時代前期末より中期初頭の土器が出土した上安原遺跡(01047)がもっとも古い時期

である。中期中葉では古府ヒビタ遺跡(01078)、後葉では北塚遺跡(01088)が存在する。後期では前葉主体の遺跡は発見されていないが押野大塚遺跡(16038)において前葉末が僅かに出土している。中葉では、馬替遺跡(01400)、米泉遺跡(01125)がありこれ以降晩期にかけて遺跡がしだいに増え、一塚遺跡(08125)、国指定史跡の御経塚遺跡(16027)と新保本町チカモリ遺跡(01064)、中屋遺跡(01050)、中屋サワ遺跡(01052)、長竹遺跡(08044)、乾町遺跡(08045)を周辺に有する。標識遺跡をはじめ多くの縄文時代の遺跡が集中する、環境基盤の安定した地域と考えられる。弥生時代では扇端部の八田中遺跡(08128)、御経塚遺跡、扇中央部では前述の乾町遺跡で最古の弥生土器が出土している。中期になると畿内第Ⅱ様式併行の良好な資料が出土した八木ジワリ遺跡(01059)が北方に位置するが、Ⅲ～Ⅳ様式は少なく上荒屋遺跡(01053)で確認されるが総じてこの時期までは散発的な様相である。後期になると、稲作を基盤とする集落の定着により遺跡は急激に増加し周辺に展開してくる。付近では、横江古屋敷遺跡(08142)、御経塚シンデン遺跡(16030)、御経塚遺跡(ツカダ・デト地区)が1km内に近在する。西方では旭遺跡群の一塚遺跡、八田小鮎遺跡(08127)がある。一塚遺跡では後期末以降は墓域となり、山陰との関係を示す四隅突出型墳墓が検出された。東方では押野タチナカ遺跡(16036)、押野ウマワタリ遺跡(16037)があげられる。

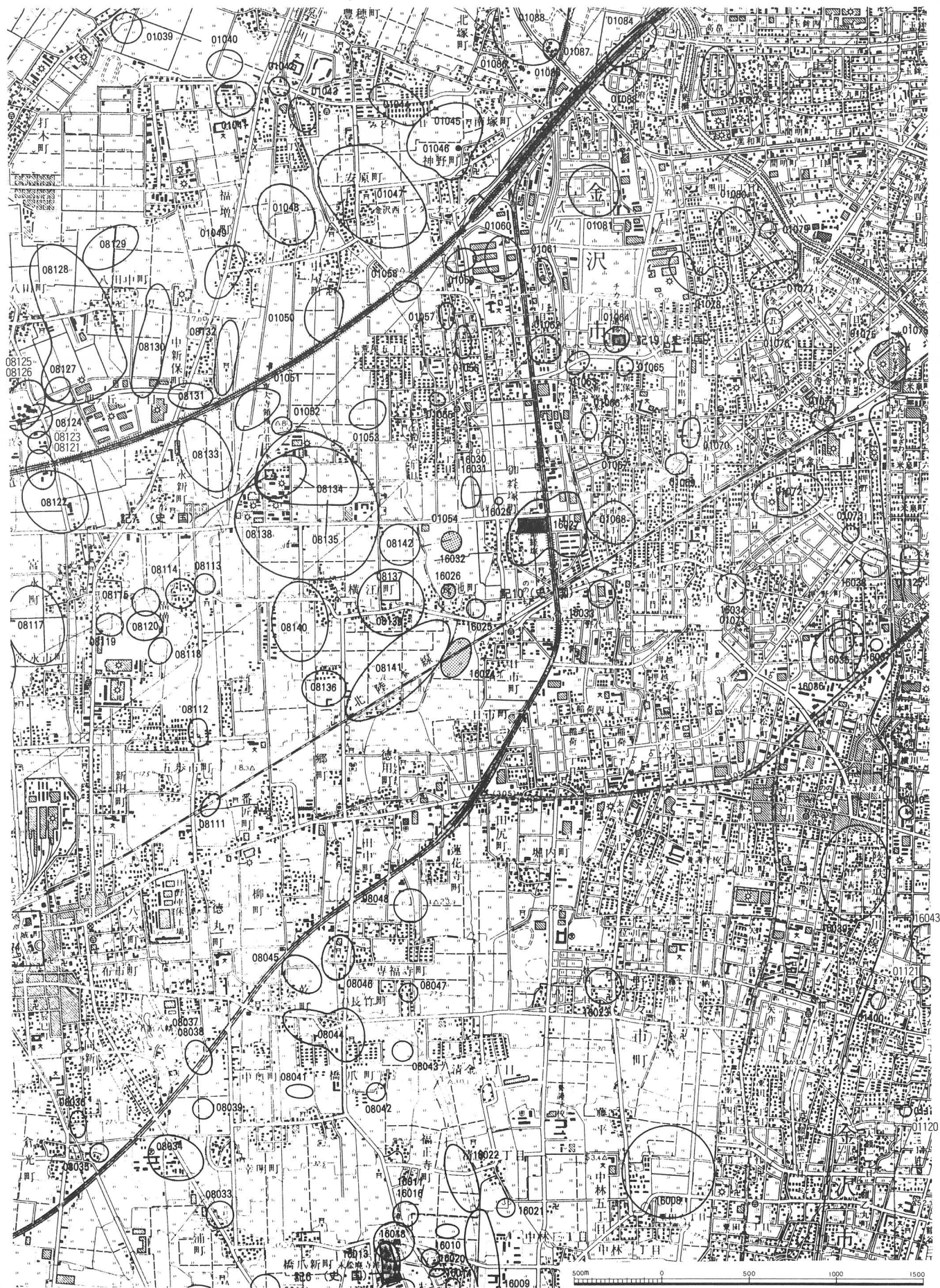
古墳時代にはいと遺跡は減少し、前期の集落では上荒屋遺跡(01053)、旭遺跡群の宮永遺跡(08121)、旭小学校遺跡(08123)、御経塚遺跡などが見られ、一塚墳墓・古墳群(08126)、御経塚シンデン古墳群(16031)、横江古屋敷遺跡では弥生後期集落地を墓域とし前方後方墳を含む初期の古墳群が出現するが、これ以降遺跡数は少なくなる。

奈良・平安時代には扇中央部で政治勢力を背景とする開発が着手され、象徴となる白鳳の大寺院末松廃寺(16013)をはじめ末松ダイカン遺跡(16018)、三浦遺跡(08034)、幸明遺跡(08039)、粟田遺跡(16008)など遺跡が増加するが、扇端部にあたるこの周辺でも、横江荘遺跡(08135)、上荒屋遺跡や八日市サイマツ(01069)及びB遺跡(01068)が存在する。

中世期では御経塚遺跡デト地区、長池キタバシ遺跡(16025)、東方では林系武士団宮永氏の関係を窺わせる宮永ほじ川遺跡(08120)、東南方には富樫系武士団押野家善の居館である押野館跡(16035)、南北朝期以降守護所が置かれたとされる富樫氏本拠の富樫館跡(16039)が見られる。

II 調査の経緯

御経塚町周辺の野々市町北部一帯は国道8号線の開通後、昭和50年代に入るとに徐々に開発が進み、金沢市近郊地域における都市計画道路の整備や住宅地の供給を目的とし、野々市町稲荷町、野代町、押野町をはじめ金沢市の八日市町などで土地区画整理事業が相次いで着工している。また8号線東側における御経塚第一土地区画整理事業完成後の昭和57年には、御経塚町全域及び長池町、二日市町の一部を含むJR北陸本線北側の地域について土地区画整理事業施行の機運が高まり、地元では区画整理準備委員会が発足し準備作業が進められた。その後昭和59年(1984年)には区画整理事業認可が決定的な状況となった。事業区域内には周知の御経塚遺跡、御経塚経塚、御経塚C遺跡が分布することや、新たな埋蔵文化財の存在が想定される地域であることから、区画整理準備委員会、野々市町都市整備課、野々市町教育委員会の三者により事前に協議が行われ、事業施行予定全域について埋蔵文化財の分布確認調査を実施することが決められた。この間の昭和59年(1984年)11月30日付けで60.1haにおよぶ面

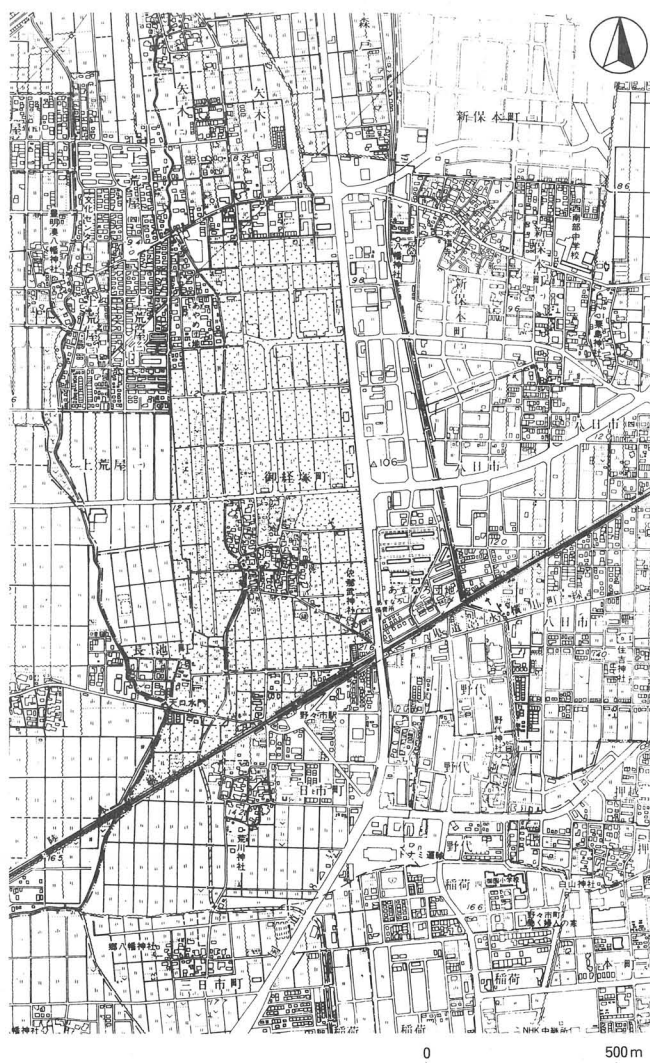


第2図 周辺の遺跡 (1/30,000)「石川県遺跡地図」1992より

遺 跡 地 図 凡 例

〔石川県遺跡地図〕石川県教育委員会1992より

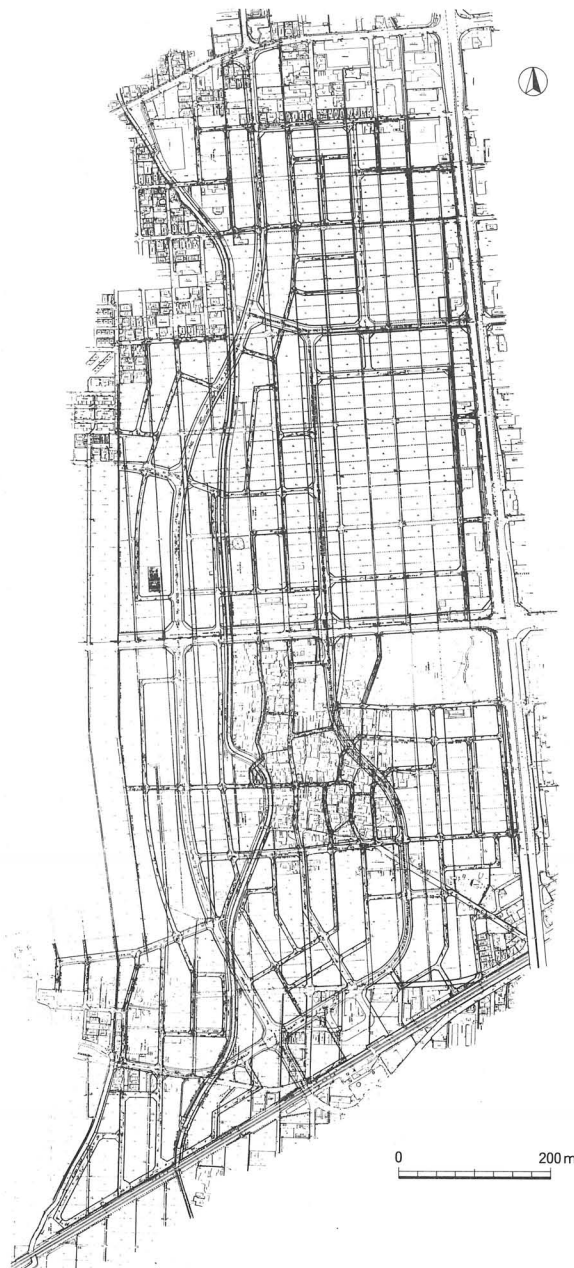
野々市町			
16006	下新庄アラチ遺跡(奈)	01050	中屋遺跡(縄)
16008	栗田遺跡(縄・奈・平)	01051	下福増遺跡(縄～古)
16009	末松 A 遺跡(縄・平)	01052	中屋サワ遺跡(縄・中)
16010	末松 B 遺跡(弥)	01053	上荒屋遺跡(縄～平)
16011	末松福正寺遺跡(古・平)	01055	上荒屋住宅遺跡(弥)
16012	末松古墳(古)	01056	矢木マツノキダ遺跡(弥・古)
16013	末松廃寺(奈・平)	01057	矢木ヒガシウラ遺跡(弥・古)
16014	末松 C 遺跡(奈・平)	01058	上安原陸橋遺跡(弥・古)
16016	福正寺跡(平)	01059	矢木ジワリ遺跡(弥・古)
16018	末松ダイカン遺跡(奈～中)	01060	森戸バイパス遺跡(古)
16020	古元堂館跡(?)	01061	森戸本町遺跡(縄)
11021	末松信濃館跡(中)	01062	森戸住宅遺跡(縄)
16022	清金アガウ遺跡(平～中)	01063	新保本町西遺跡(弥・古)
16023	三林館跡(安)	01064	新保本町チカモリ遺跡(縄)
16024	二日市イシバチ遺跡(縄・弥・中・近)	01065	新保本町東遺跡(縄・古)
16025	長池キタバシ遺跡(縄・弥・中・近)	01066	新保本町ツカダ遺跡(弥)
16026	長池ニシタンボ遺跡(縄・弥・中・近)	01067	新保本町南遺跡(中)
16027	御経塚遺跡(縄・弥・古・奈・中・近)	01068	八日市 B 遺跡(縄・奈・平)
16029	御経塚経塚(?)	01069	八日市サカイマツ遺跡(縄・奈・平)
16030	御経塚シンデン遺跡(縄・弥・古・中・)	01070	八日市ヤスマル遺跡(弥・奈・平)
16031	御経塚シンデン古墳群(古)	01072	押野西遺跡(縄・弥・奈・平)
16032	御経塚オッソ遺跡(縄・弥・中)	01073	押野大塚古墳(古)
16033	野代遺跡(縄)	01074	西金沢新町遺跡(古)
16034	上宮寺跡(室)	01075	日本たばこ金沢工場遺跡(奈・平)
16035	押野館跡(室)	01076	保古町遺跡(奈・平)
16036	押野タチナカ遺跡(縄・弥)	01077	黒田 B 遺跡(平)
16037	押野ウマワリ遺跡(弥)	01078	古府遺跡(縄)
16038	押野大塚遺跡(縄・弥)	01079	黒田町三角点遺跡(古)
16039	富樫館跡(中)	01080	黒田町遺跡(平)
16040	高橋ウバガタ遺跡(弥)	01081	松島ナカオサ遺跡(平～中)
16043	扇が丘ハワイゴク遺跡(縄～中)	01082	高島遺跡(弥・古)
金 沢 市		01084	古府クルビ遺跡(弥～平)
01039	下安原遺跡(縄・古・中・近)	01085	おまる塚古墳(古)
01040	安原工業団地 B 遺跡(弥～平)	01086	宇佐神社古墳(古)
01041	安原工業団地 A 遺跡(弥・平)	01087	北塚古墳群(古)
01042	緑団地下水処理場遺跡(弥)	01088	北塚遺跡(縄・弥・平・中)
01043	緑団地公園遺跡(古・平)	01120	大額キョウデン遺跡(?)
01044	上安原緑団地遺跡(弥・古)	01121	扇台遺跡(弥・平)
01045	南塚遺跡(縄・古)	01125	米泉遺跡(縄・弥・平)
01046	びわ塚古墳(古)	01400	馬替遺跡(縄)
01047	上安原遺跡(古～平)	松 任 市	
01048	中屋ヘシタ遺跡(奈～中)	08033	三浦常在光寺跡(鎌)
01049	福増遺跡(?)	08034	三浦遺跡(古・奈～中)
		08035	若林長門館跡(室・安)
		08036	倉光館跡(鎌)
		08037	幸明経塚(安)
		08038	西方寺跡(安)
		08039	幸明遺跡(奈・平)
		08041	橋爪ガンノアナ遺跡(奈・平)
		08042	橋爪松の木遺跡(中)
		08043	橋爪遺跡(縄・弥・中・近)
		08044	長竹遺跡(縄～古・中)
		08045	乾町遺跡(縄～近)
		08046	専福寺遺跡(中)
		08047	高田遺跡(縄・平)
		08048	田中ノダ遺跡(弥・古)
		08111	五歩市遺跡(?)
		08112	あさひ荘遺跡(奈・平)
		08113	福増遺跡(縄・弥)
		08114	寝上市左工門館跡(室)
		08115	福増東川遺跡(?)
		08117	坊の森遺跡(弥・古・中)
		08118	宮永市境田遺跡(奈・平)
		08119	宮永雁堀遺跡(縄)
		08121	宮永遺跡(古)
		08122	宮永 B 遺跡(縄・古・中)
		08123	旭小学校遺跡(弥・古)
		08124	一塚オオミナクチ遺跡(弥)
		08125	一塚遺跡(縄・弥・中)
		08126	一塚墳墓・古墳群(弥・古)
		08127	八田小鮎遺跡(弥)
		08128	八田中遺跡(縄～古)
		08129	八田中中村遺跡(近)
		08130	八田中ヒエモンダ遺跡(縄・弥)
		08131	八田中アレチ遺跡(縄・弥)
		08132	中新保遺跡(?)
		08133	下福増遺跡(縄・弥・奈・平)
		08134	横江荘々家跡(平)
		08135	横江荘遺跡(奈・平)
		08136	横江ゴクラク寺遺跡(縄・中)
		08137	横江館跡(中)
		08138	横江 A 遺跡(縄・弥)
		08139	横江 B 遺跡(平)
		08140	横江 C 遺跡(古)
		08141	横江 D 遺跡(?)
		08142	横江古屋敷遺跡(弥)



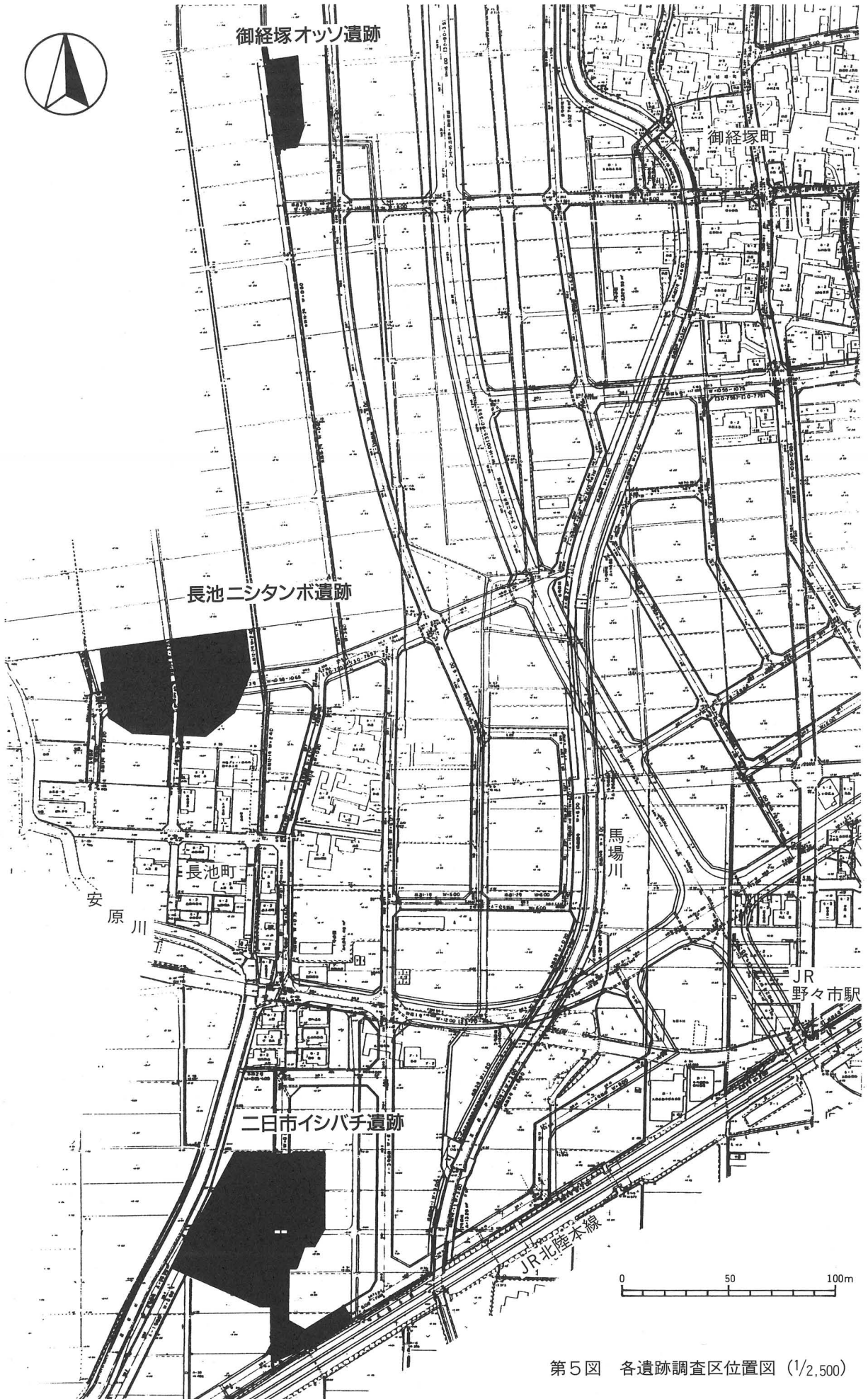
第3図 土地区画整理事業位置図 (1/20,000)

積が市街化区域に編入されている (第3図)。分布調査は同59年12月～翌60年3月の冬場にかけて実施する急なものであり、調査は小型掘削機及び人力により試掘し有無を確認した。この調査により新たに、御経塚シンデン遺跡、御経塚オツソ遺跡、長池キタバシ遺跡、長池ニシタンボ遺跡、二日市イシバチ遺跡が発見された。また御経塚C遺跡については旧河道上及び低湿地であり遺跡が存在しないことを確認した。この結果について野々市町都市整備課へ報告し、昭和60年7月12日から再度三者により工事計画 (第4図) と発掘調査の対応について協議を開始した。この協議により埋蔵文化財は記録保存を目的とする発掘調査とし、今後住宅及び店舗等が建設必至の街区についても調査の範囲に含め、野々市町教育委員会が受託事業として実施することとなった。この協議に基づく協定が昭和61年6月20日に野々市町御経塚第二土地区画整理組合設立準備委員会と野々市町教育委員会の間に取り交わされ、早くも同年(1986年)7月より御経塚シンデン遺跡の調査を実施し、以後平成8年(1996年)12月まで11年の長きにわたり発掘調査が続いた。

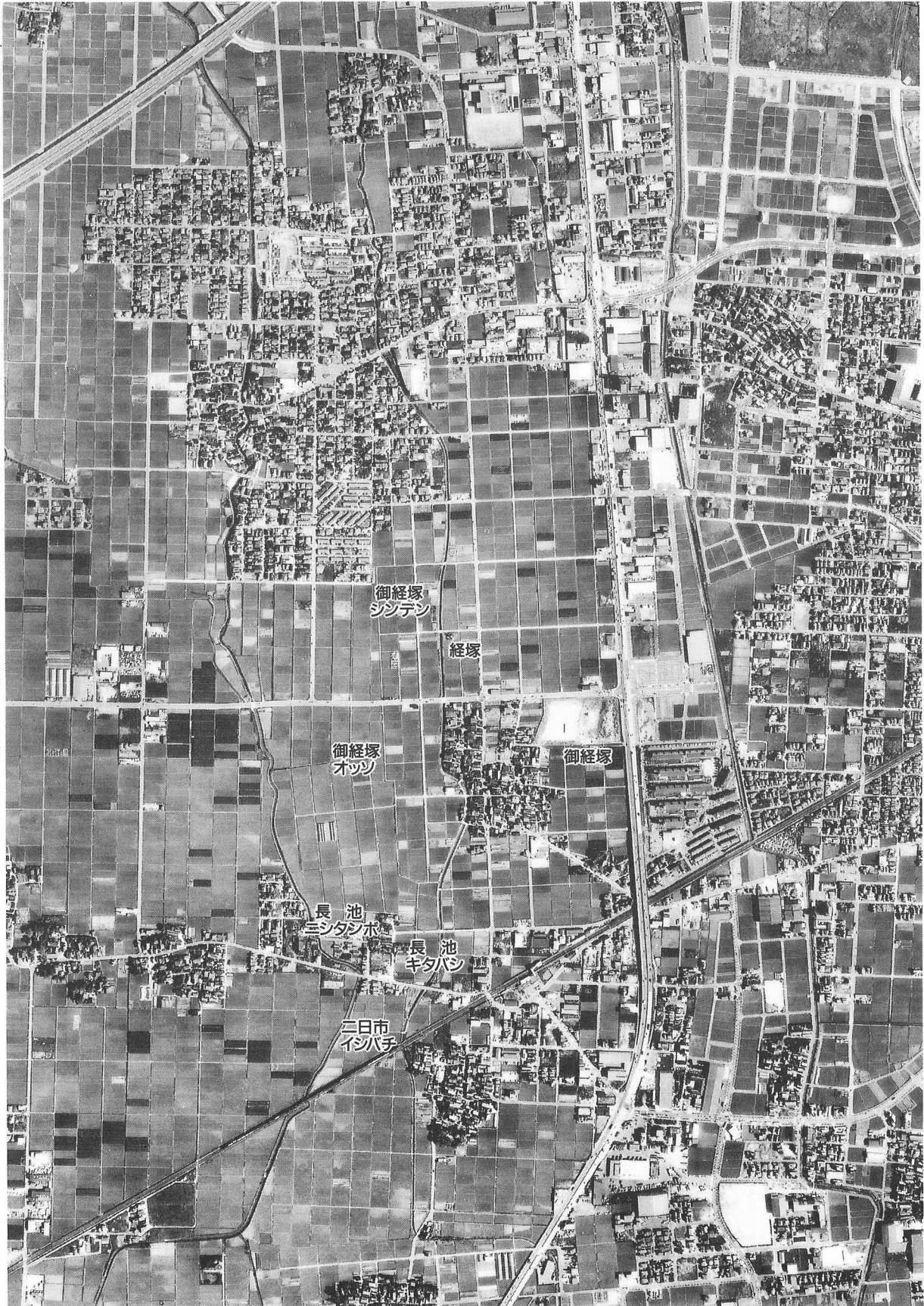
本書において報告する長池ニシタンボ、二日市イシバチ、御経塚オツソ遺跡はこの御経塚第二土地区画整理事業に伴い実施した緊急発掘調査の一つであり、事業区域の南半部に位置する (第5図)。



第4図 御経塚第二土地区画整理事業設計図 (1/10,000)



第5図 各遺跡調査区位置図 (1/2,500)



周辺航空写真と遺跡の位置（1982年撮影）

長池ニシタンボ遺跡

III 長池ニシタンボ遺跡

1 調査の経過と概要

遺跡は微高地と北西方向の低湿地へ向かう1/140ほどのゆるい傾斜地に立地している。西調査区の遺構検出面地山は北方に向かい粘性を強めるようで雨水の浸透性は悪く、梅雨時にはたびたびプールの状態となった。秋には大型の台風19号が日本海を北上して石川県に近接し大きな被害をもたらしたが、調査現場は小屋及び器材の飛散もなく大丈夫であった。調査は西調査区北側より検出作業を始め、東調査区へ漸次移動した。当初、円形の周溝をもつ平地式建物SI01を確認したが、その後方形に溝が廻ると考えられる遺構を3基検出し、これらも同様のものではと判断した。竪穴建物は西調査区南半に2棟、東調査区ほぼ中央に1棟を検出している。掘立柱建物としたものは6棟検出しており、西調査区で3棟、うち1棟は布堀方式である。東調査区においては3棟検出している。他土坑を含め以上が本遺跡の主要時期である弥生時代後期後半、月影式期の遺構である。他では縄文時代土坑1基と中世期と思われる掘立柱建物1棟と土坑、近世期の溝などを検出している。

遺跡の調査は平成3年(1991年)6月5日より10月30日にかけて実施し、吉田が担当した。調査面積は2500㎡である。出土品の整理作業は平成7年度から8年度にかけて実施した。

調査では下記の方々に御協力をいただいた。

現場作業

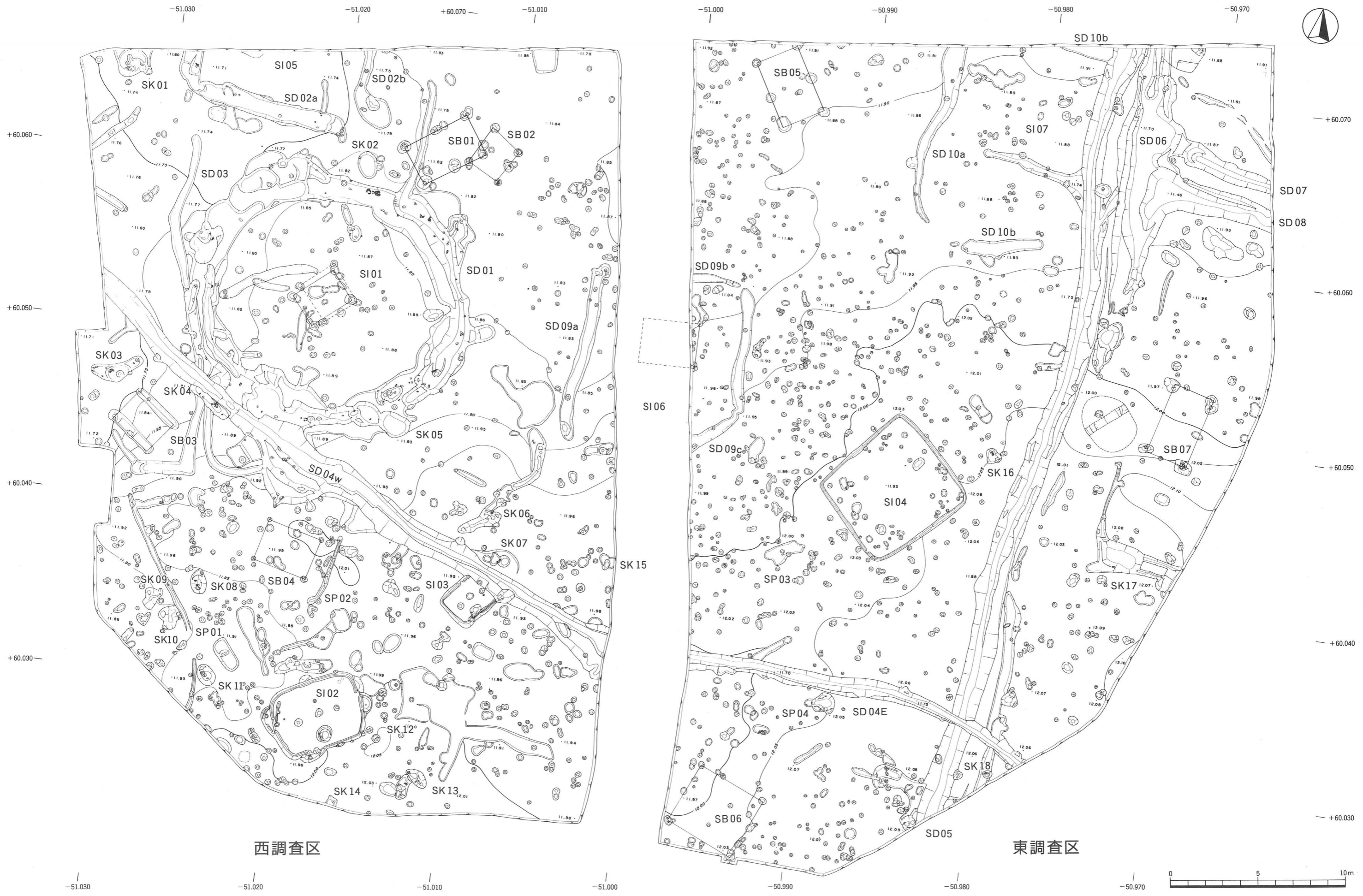
市村美知栄 尾崎 義雄 小松 義一 庄田トキ子 高出マチ子 谷口 珠江 塚本 房子
塚本千代子 塚本 友江 長谷川啓子 浜野 光蔵 半村美紀子 本田喜代美 宮野 渡

整理作業

市村美知栄 大杉 幸江 長谷川啓子



発掘調査風景



西調査区

東調査区

第1図 長池ニシタゴ遺跡遺構平面図 (1/200) 座標系第七系

2 弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) 周溝をも持つ平地式建物

概要でも述べたが、確実に建物と確認したものはSI01(周溝SD01)だけであるが、方形状に溝が廻ると考えられるSI05(周溝SD02)、SI06(周溝SD09)、SI07(周溝SD10)については可能性を有することからここに含め報告したい。いずれも出土土器より弥生時代後期後半の時期が与えられる。

SI01 (第2・3・6～10図)

西調査区北側において検出し、SI05とSI06の間に位置する。周溝SD01が廻るが南西の一部はSD04によって切られている。建物は方形4本構造が2棟重複し時間関係はSI01a→SI01bとなり双方の北西軸は(N38°W)であり、検出面は標高11.9mである。SI01aの主柱P1～P4の掘り方は径ほぼ40cm、深さは検出面より32～38cmである。柱間は短辺P1～P2が2.3m、P3～P4は2.2m、長辺P1～P3は2.5m、P2～P4は2.6mを測る。SI01bの主柱P5～P8の掘り方は径ほぼ50cm、深さは検出面より35～45cmである。柱間は長辺P5～P6が2.8m、P7～P8は2.7m、短辺のP5～P7、P6～P8は2.1mを測る。ほぼ円形の周溝SD01は、幅1.3m～2mで全周すると考えられる。建物2棟から周溝も2時期が想定され、境の不明瞭な部分が多いが土層により外側溝(新)内径約13m、と内側溝(古)内径約12mとした(第4図)。溝底高は外側溝が標高11.6～7m、内側溝は総じて10cmほど浅い。建物北西軸を延長した周溝東南では深さが10cmと浅くなる幅1.5mの箇所があり開口部とも考えられる。この箇所はSK05に切られ不鮮明である。周溝東北部から北に向かい溝が6.5m延びるが排水溝と捉えている。また、雨水は地山レベルより北西方向に流れることから、SI05と同時に存在したとすればSI05開口部を意識し影響を与えない排水機能を持たせたものであろうか。

遺物の殆どは周溝からの出土であるが、当初周溝検出においては内側、外側の区別は意識しておらず、整理段階で出土位置を外側a～c、内側a～cと設定したので(第3図)、土器の混在は免れない。また主なものは第2図の遺構図に遺物番号で載せ出土位置を表示した。1の鉢は柱穴P1・P2より、3はP6、4はP7から出土した。他はすべて周溝からであり、比較的遺存度の高い土器は外側a北部で集中して出土している。

SI05 (SD02) (第2・3・10図)

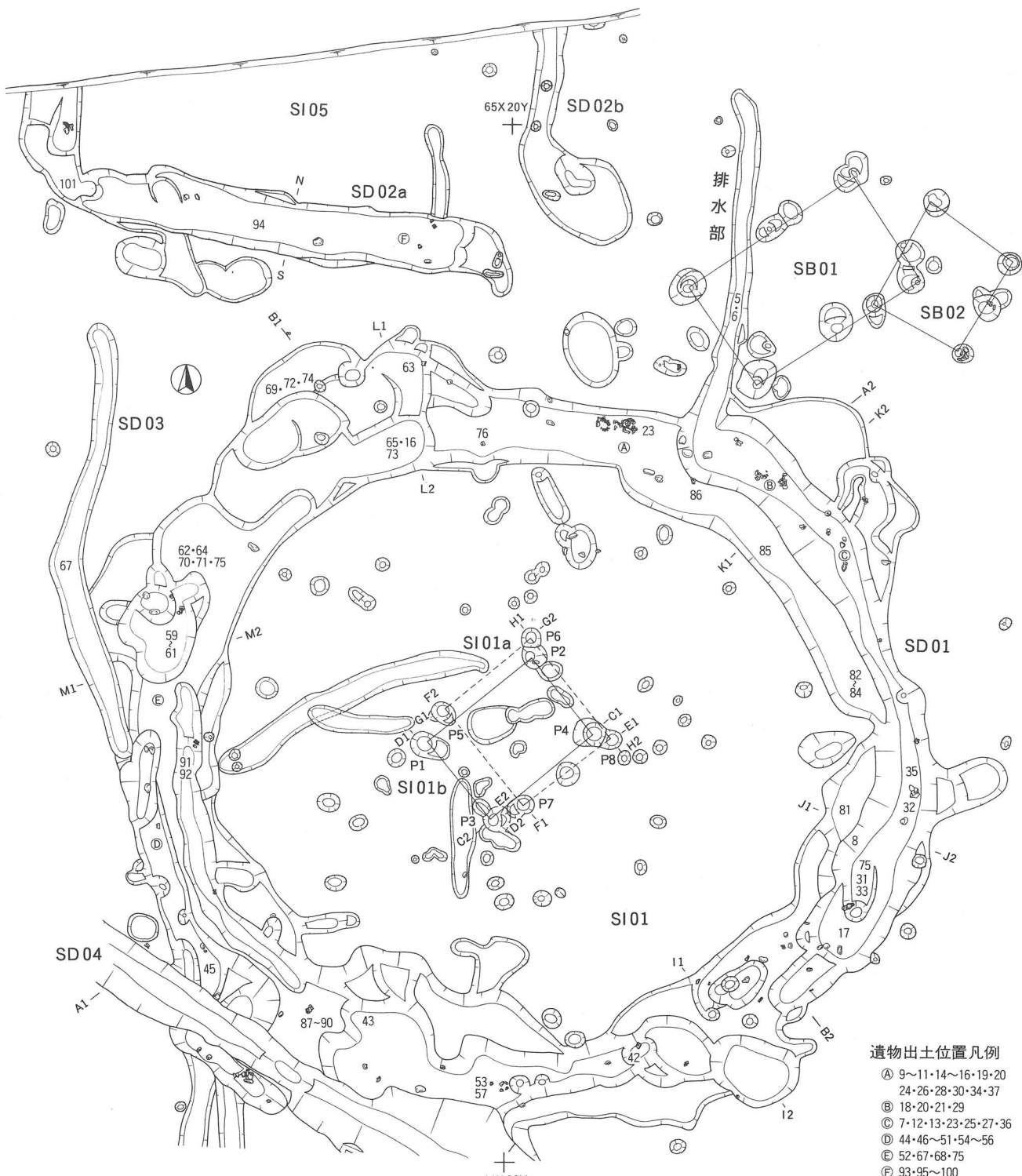
西調査区SI01の北に位置し、過半は調査区外であり全形の1/3程度の検出か。周溝は方形状に廻るものと考えられ、幅は広いところで1.2m、狭い個所は50cm、深さは10～20cm、検出面は標高11.75mである。柱穴は不明である。南東部に幅1mの開口部を有し、南側の一辺はほぼ9mである。遺物は細片が多く開口部西側のSD02aで出土した。

SI06 (SD09) (第5・10図)

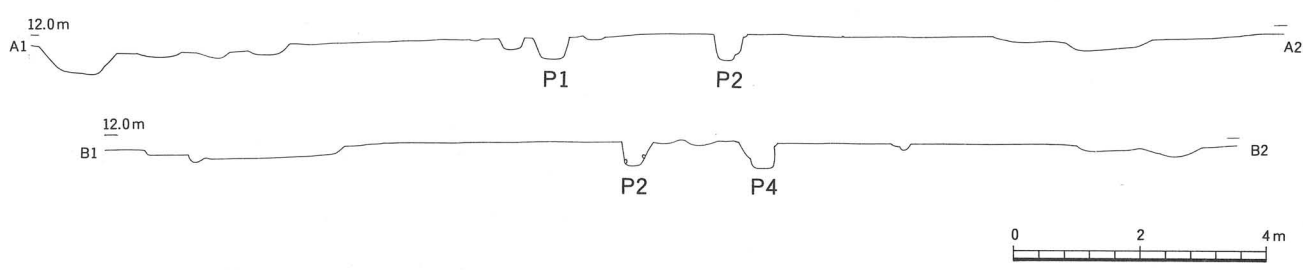
調査区中央に位置し、西調査区と東調査区にまたがる。周溝は不整な台形状で廻るが、三方の隅では繋がらない。規模は周溝内側で東西8.2m、南北は短部7.3m、長部9.5mである。幅は50～80cm、深さはほぼ10cm、検出面は標高11.85～11.95mである。間隔2.1m、深さ22cmのP1・P2を柱穴とし方形4本構造と推察する。遺物は細片で1点のみ図示した。

SI07 (SD10) (第5・10図)

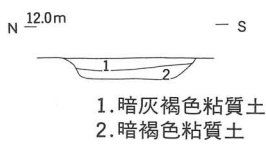
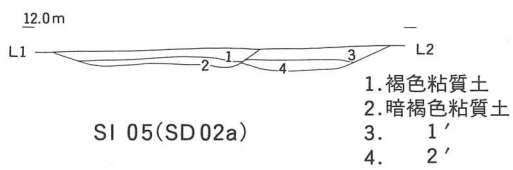
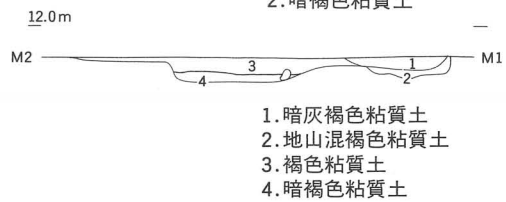
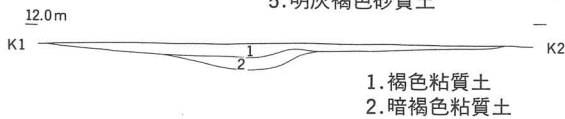
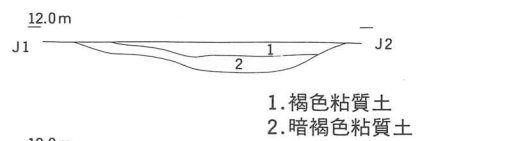
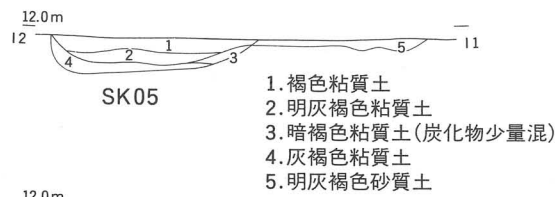
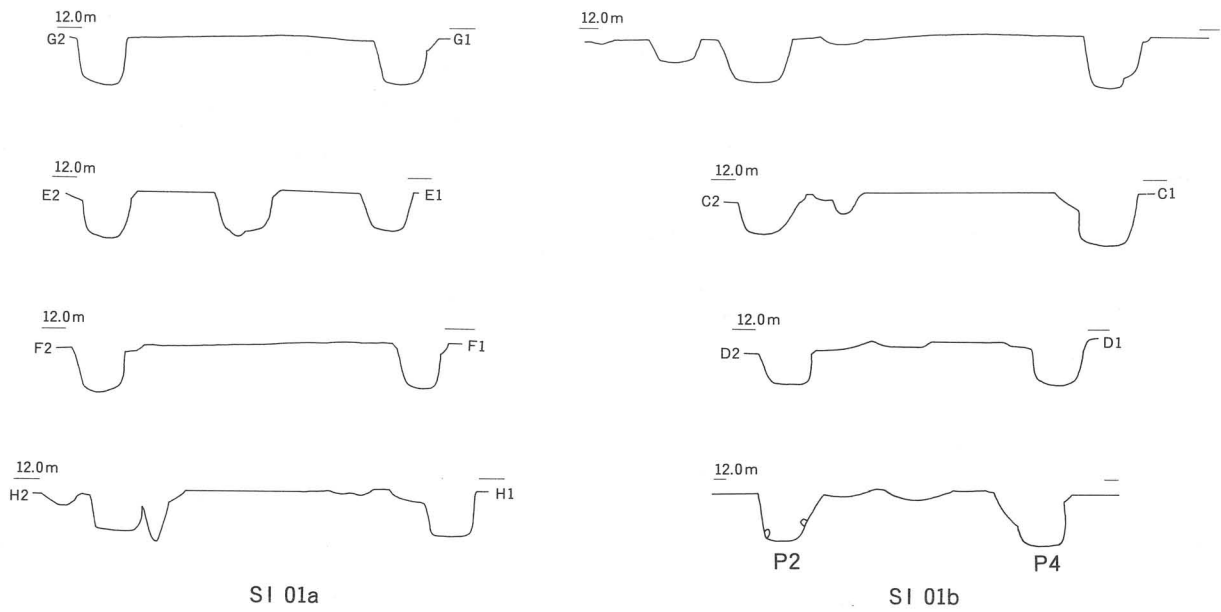
東調査区北端に位置し、周溝は隅丸の方形状で南側両隅は繋がらず、近世以降の用水溝SD08に切られ不明瞭である。規模は10～11m四方である。周溝の幅は30cm～1.2mとまちまちで、深さも5～10cm、検出面の標高11.90mである。建物の柱穴は不明である。



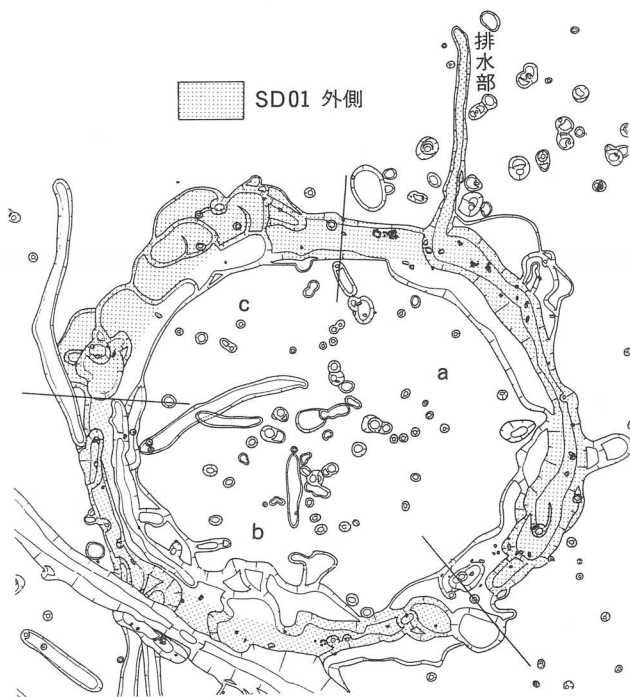
- 遺物出土位置凡例
- Ⓐ 9~11・14~16・19・20
24・26・28・30・34・37
 - Ⓑ 18・20・21・29
 - Ⓒ 7・12・13・23・25・27・36
 - Ⓓ 44・46~51・54~56
 - Ⓔ 52・67・68・75
 - Ⓕ 93・95~100



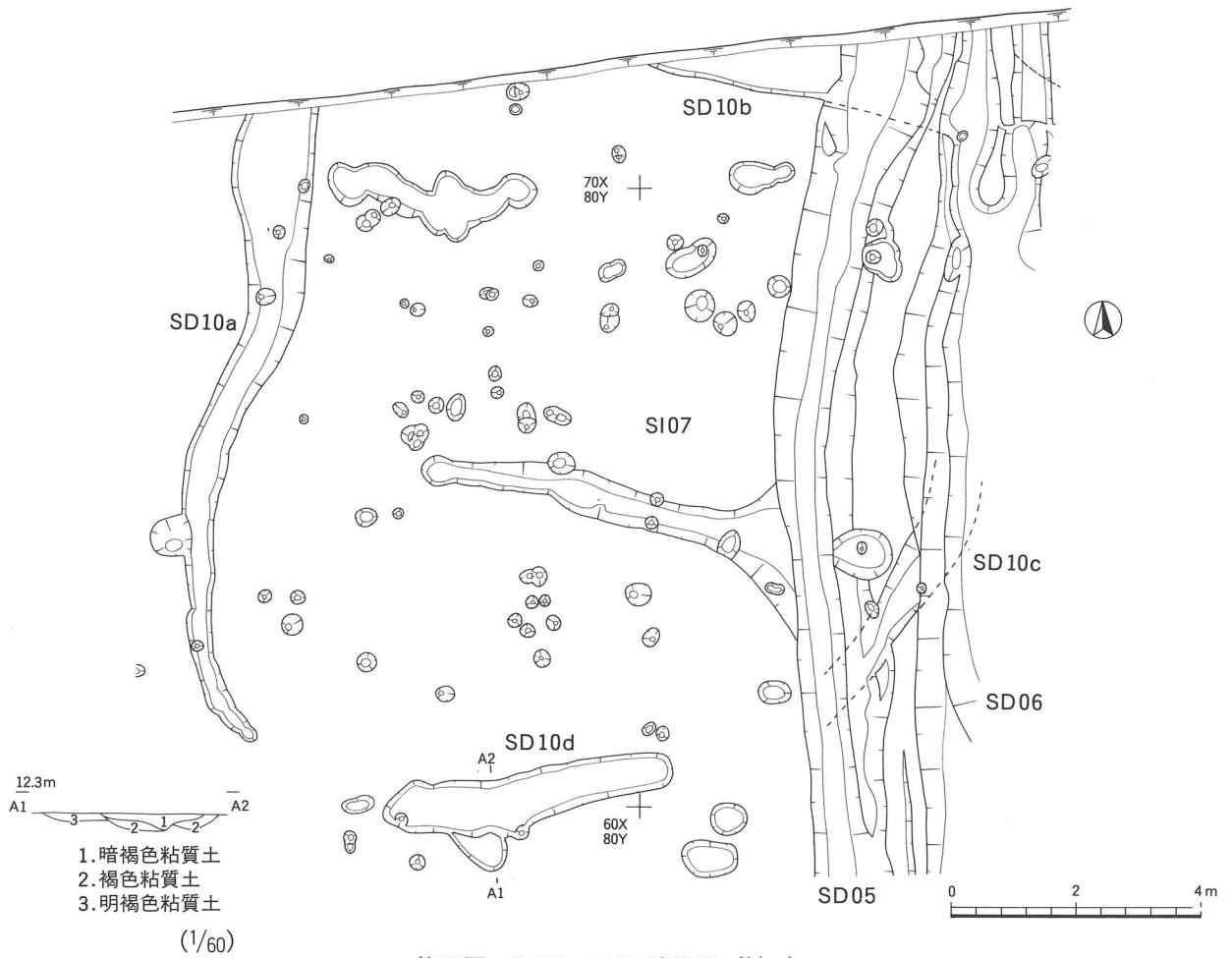
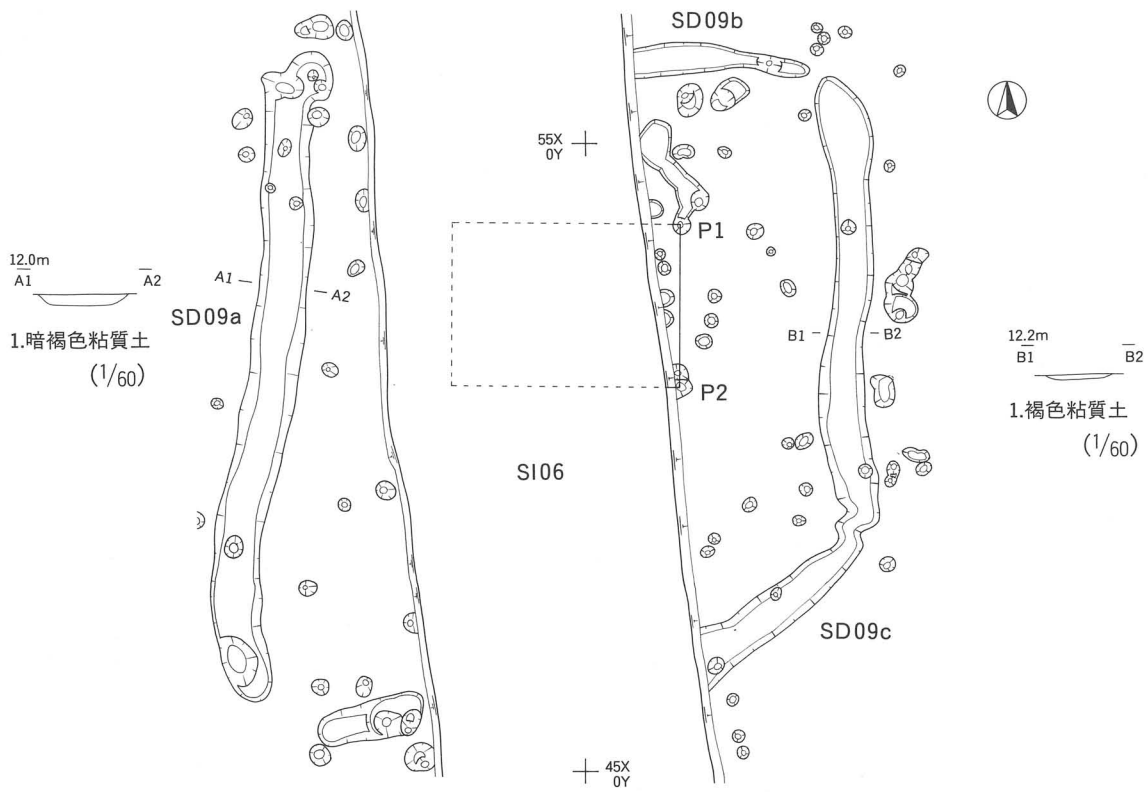
第2図 SI01・SI05 遺構図1 (1/120)



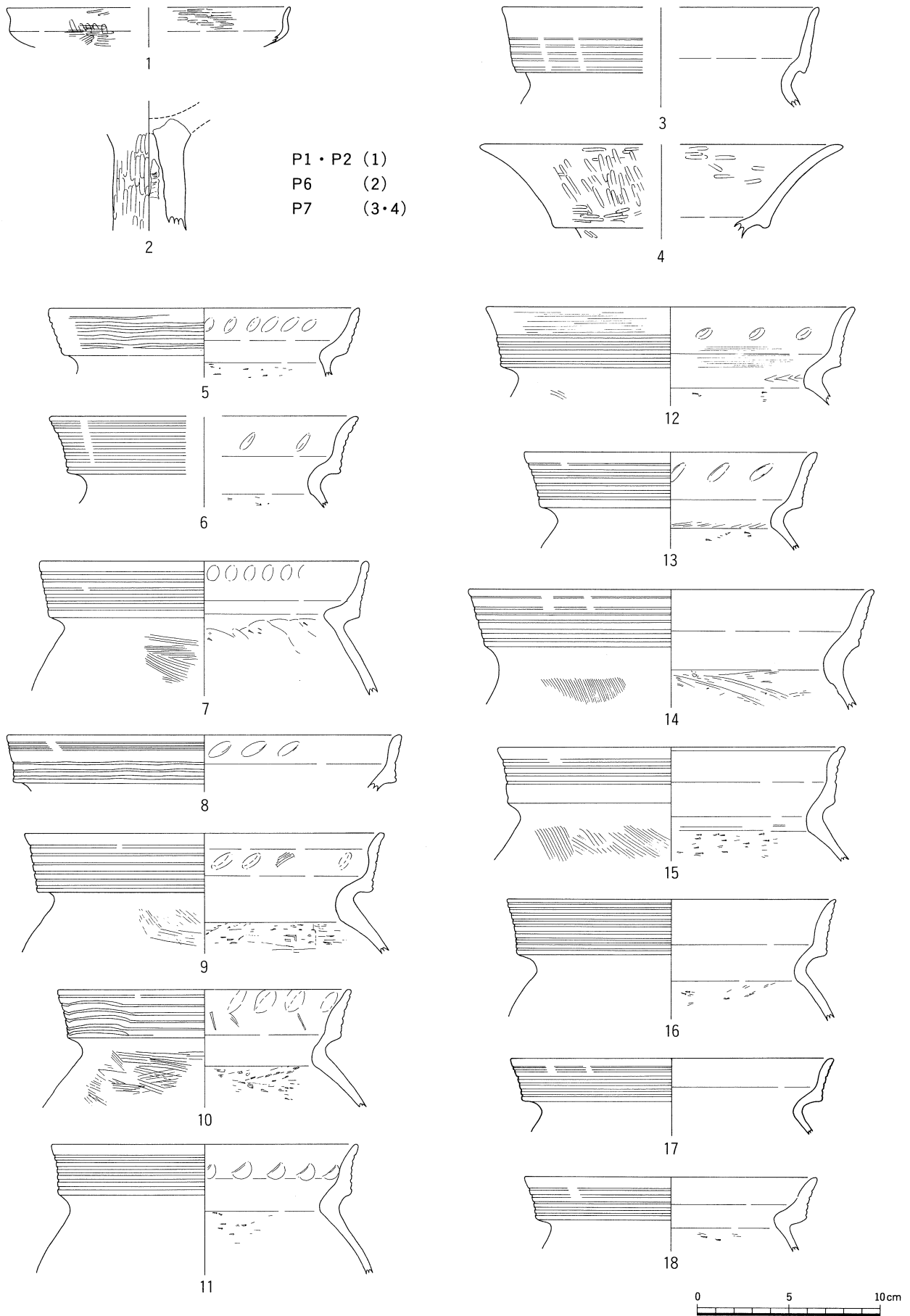
第3図 SI 01・SI 05 遺構図2 (1/60)



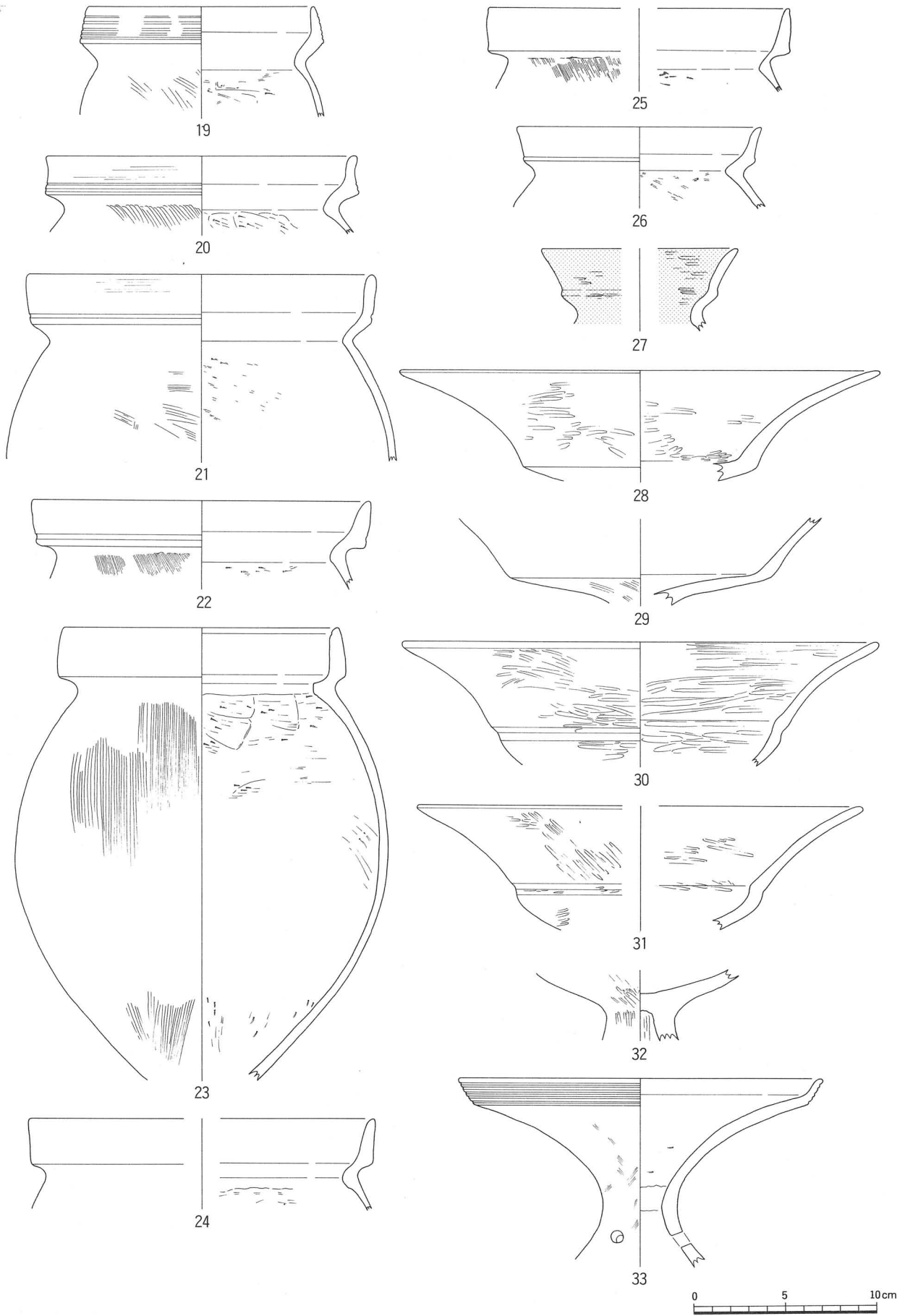
第4図 SD01 遺物出土区 (1/250)



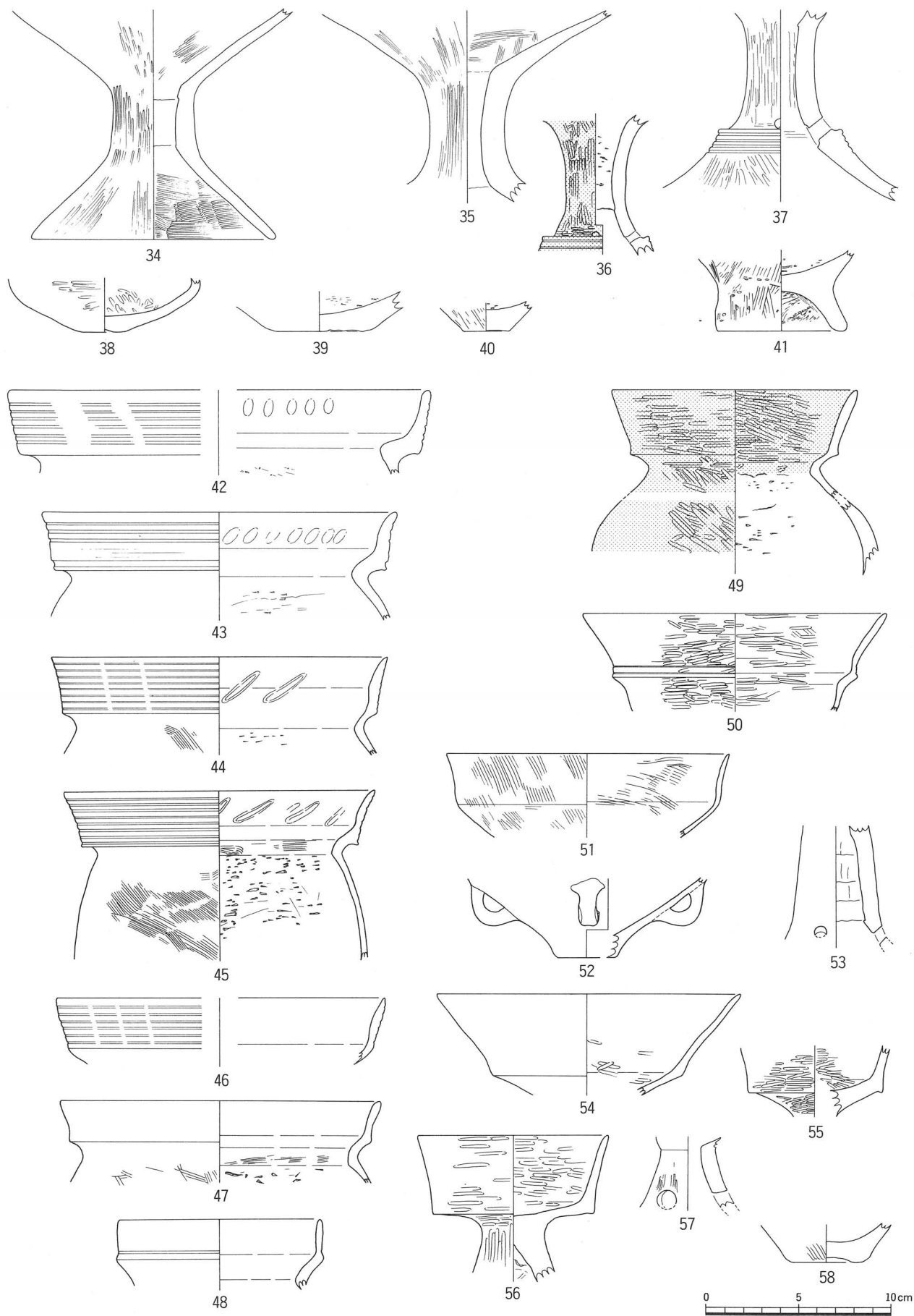
第5図 SI06・SI07 遺構図 (1/120)



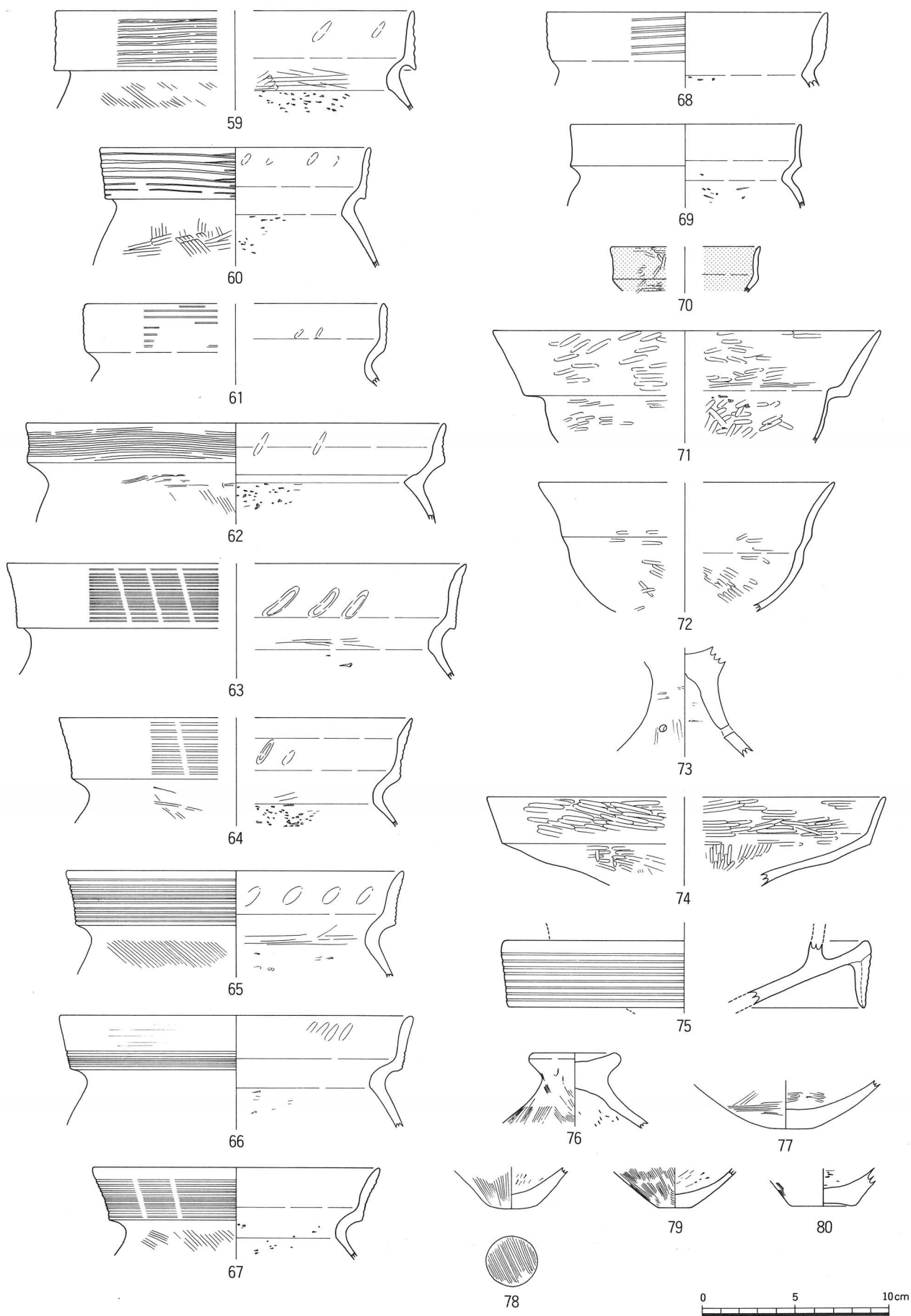
第6図 SI01ピット(1~4)・SI01構SD01排水部(5・6)・外側a(7~18)出土遺物 (1/3)



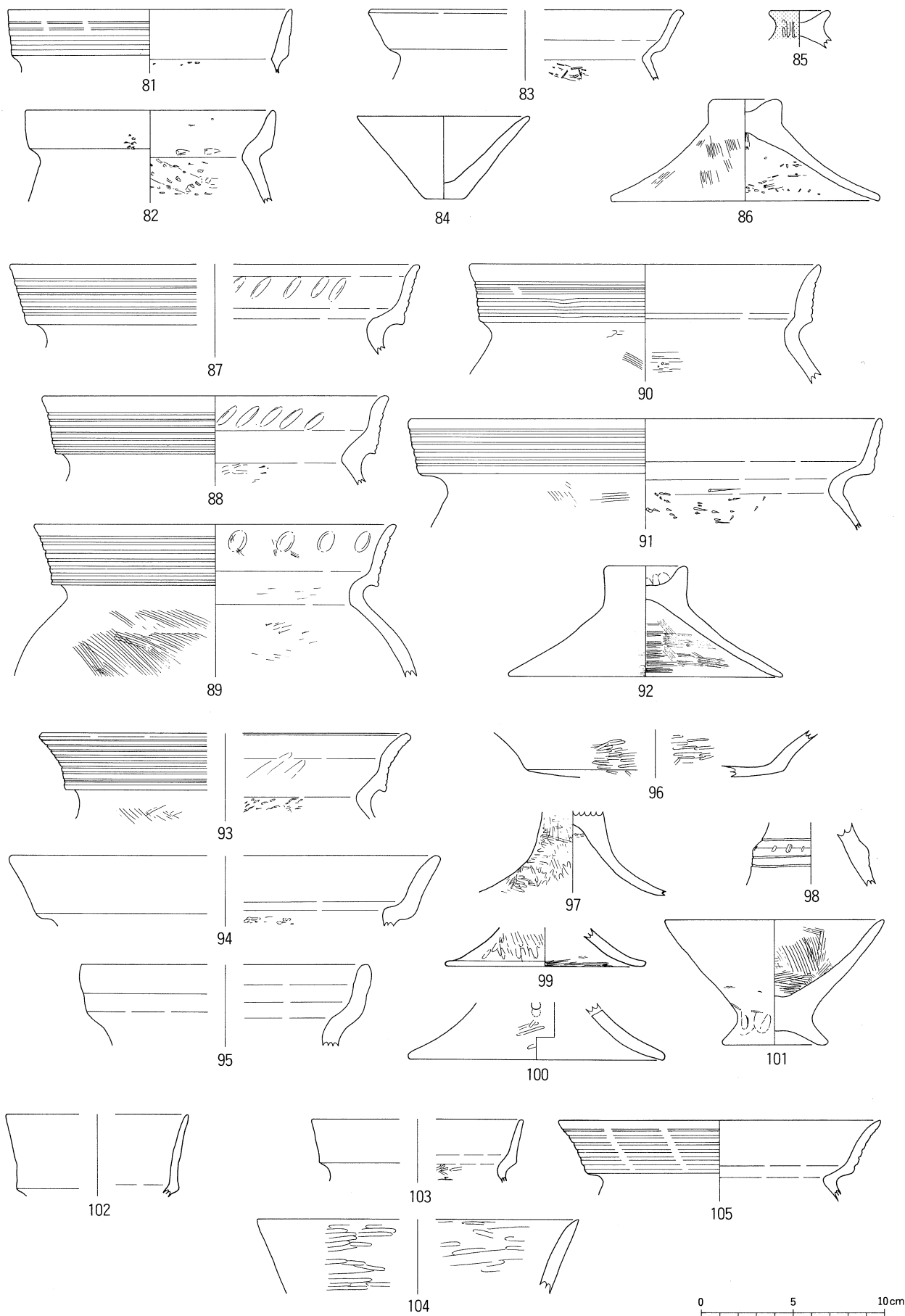
第7図 SI01溝 SD01外側a出土遺物 (1/3)



第8図 SI01溝SD01外側a(34~41)・外側b(42~58)出土遺物 (1/3)

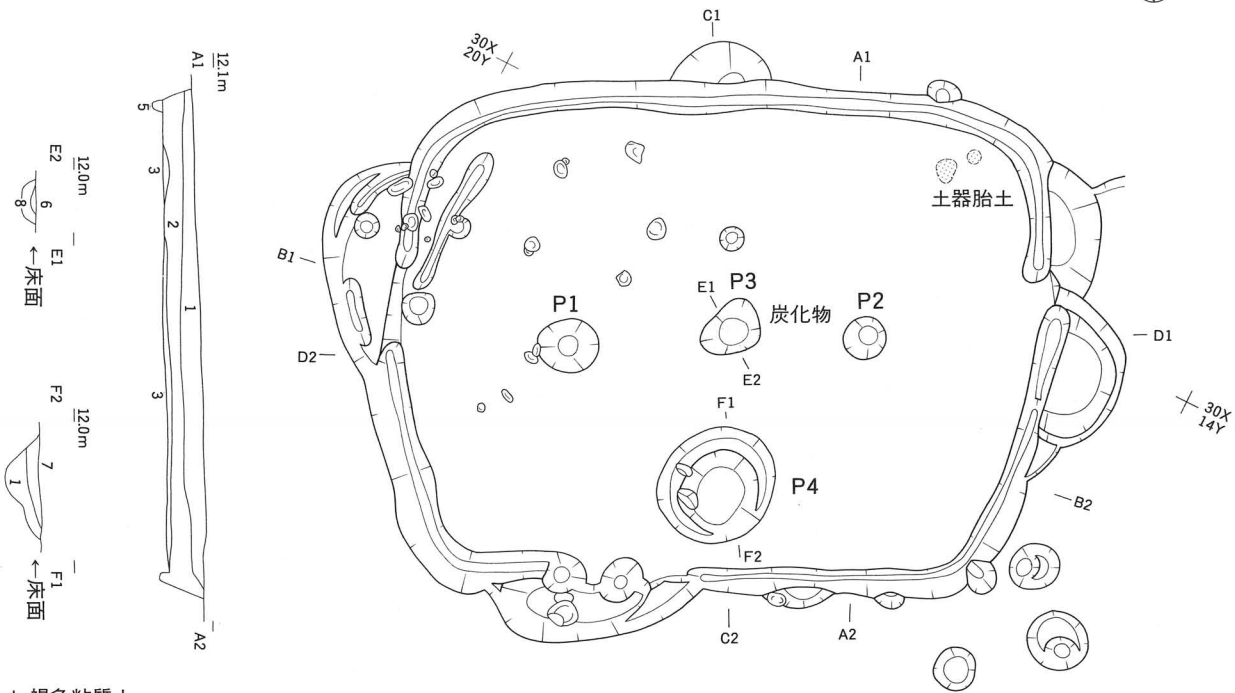


第9図 SI01溝SD01外側c出土遺物 (1/3)

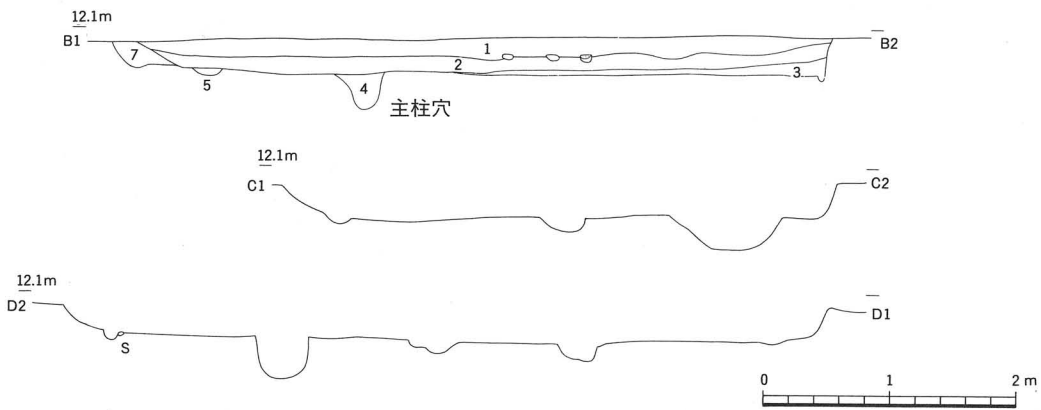


第10図 SD01内側a(81~86) 内側b(87~92)・SI05溝SD02a(93~101)・SI06溝SD09c(102)・SI07溝SD10a(103・103) SD10b(105) 出土遺物 (1/3)

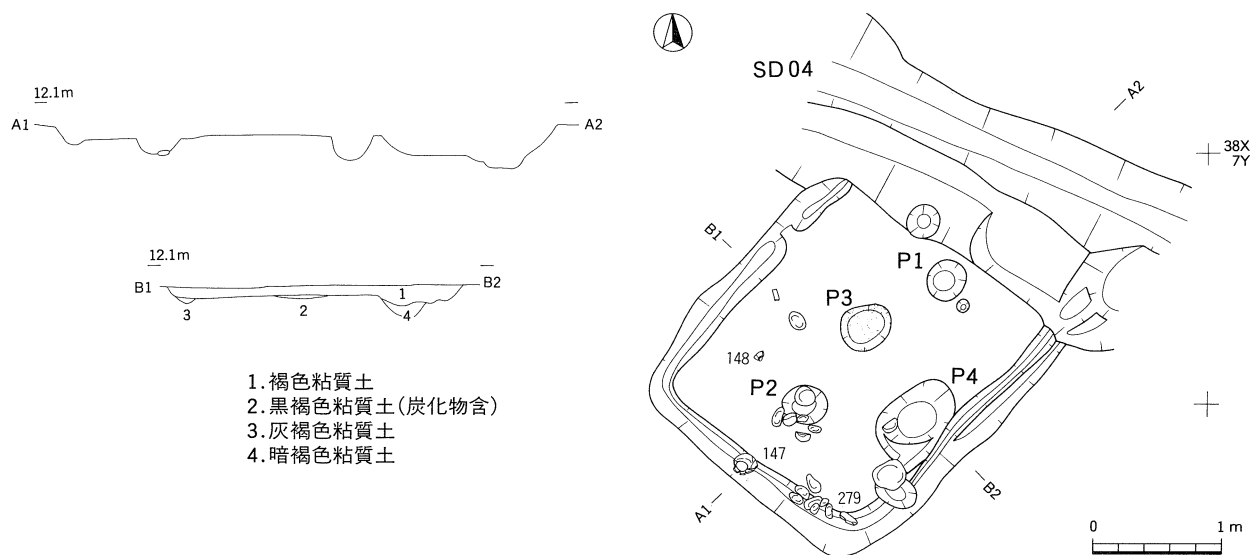
SI02 遺物出土状況



1. 褐色粘質土
2. 明褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗灰褐色粘質土
5. 灰褐色砂質土
6. 灰褐色粘質土
7. 明灰褐色粘質土
8. 黒褐色粘質土 (炭化物含)



第11図 SI02 遺構図 (1/60)



第12図 SI03 遺構図 (1/60)

(2) 竪穴建物

SI02 (第11・14・15図)

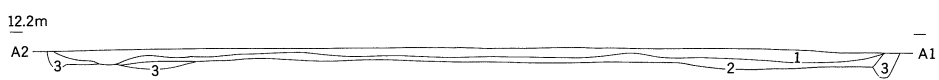
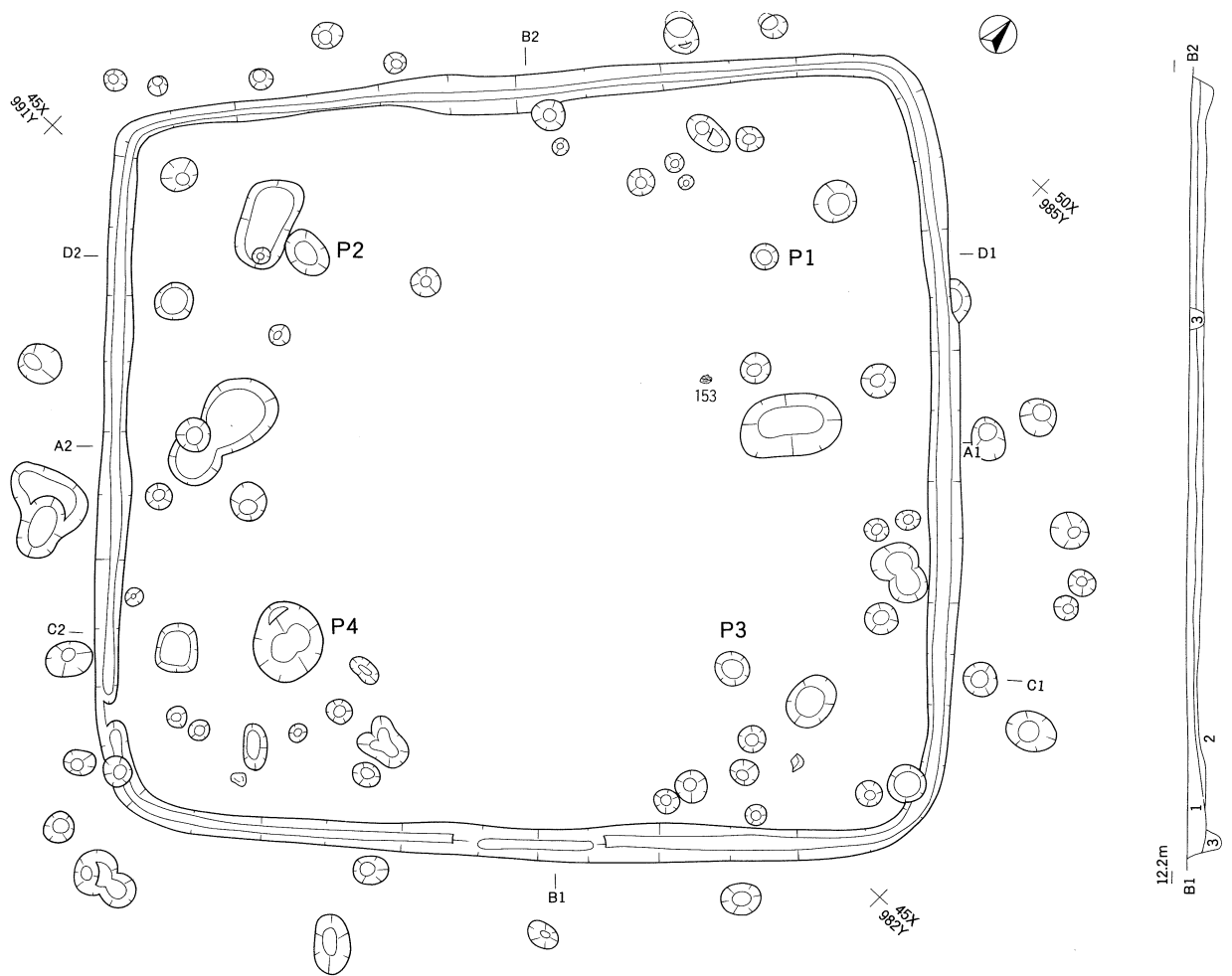
西調査区南端に位置し、平面形隅丸長方形の2本主柱構造であり、長辺5.50m、短辺4.07m、床面積約17.8㎡を測り、壁高は30cmである。壁溝は幅15~20cm、深さ5~10cmで途切れる箇所もあるが廻る。南西辺と東南辺外側に一部痕跡を留める遺構は前段階の竪穴の可能性を持つ。柱穴のP1は深さ33cm、P2は16cmと浅く、柱穴間は2.4mでこの線上中央に炭化物が堆積していた深さ13cmの灰穴炉P3、この東南に壁溝より20cm離れ長軸98cm、短軸87cmの楕円形状を呈する二段掘の貯蔵穴P4を有する。床面標高はほぼ11.7mである。

北の隅では土器胎土と考えられる粘土が床面より出土している。覆土は基本的に上層の1褐色粘質土、下層の2明褐色粘質土であるが、土器の殆どは上層からの出土で、下層からは少なく床面からは皆無である。113~120は古墳時代前期前半、山陰系の甕で上層からある程度集中して出土おり、現場ではわからなかったがこの時期の土坑が覆土上に存在したものと考えている。またこの時期のものとしての字口縁121~123が該当するものであろうか。他は弥生時代後期後半の土器が出土している。下層からは玉造関係の緑色凝灰岩の剥片が若干出土した。

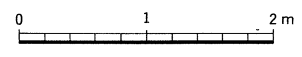
SI03 (第12・16図)

SI02の北東7mに位置する小型の竪穴で、北東部1/5ほどが溝SD04により切られている。平面形隅丸長方形の2本主柱構造である。長辺推定3.1m、短辺2.4m、床面積は推定約5㎡であろう。壁高は15cm前後である。壁溝は幅15~30cm、深さ5~10cmで廻る。主柱穴P1、P2は径ほぼ35cmで深さは18cm、16cm、柱間は1.5mである。竪穴中央には炭化物が深部で3cm堆積していた地床炉P3を持つ。東南辺中央よりやや南では壁溝に接し長軸70cm短軸45cmの一部二段掘の貯蔵穴P4を有する。床面標高は11.83m前後である。

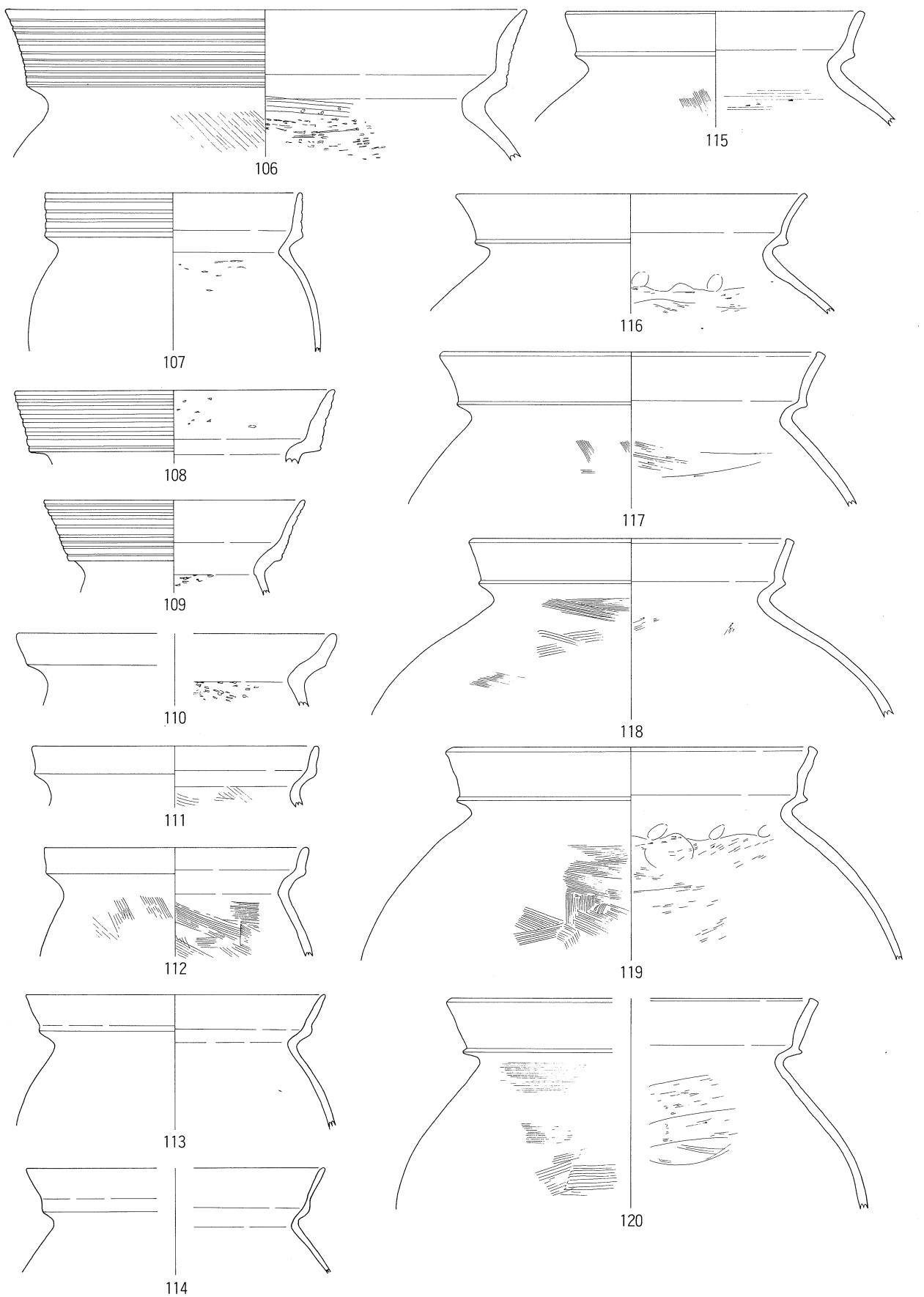
遺物の量は少なく、出土レベルは床面より10cmほど浮いた状態であり、弥生時代後期後半の時期である147高環などの他、276打製石斧基部、279砥石は壁溝上からの出土である。



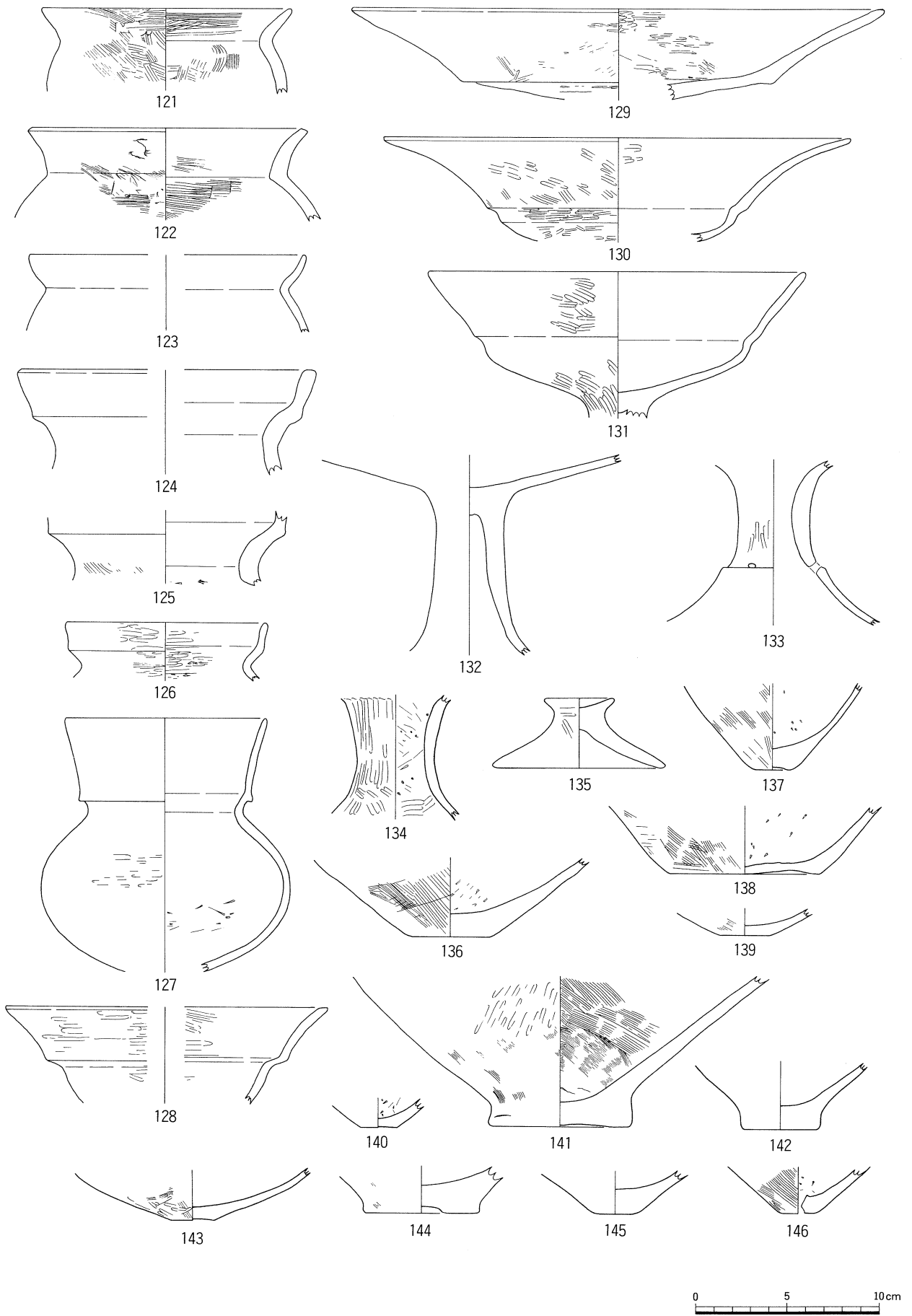
- 1. 褐色粘質土
- 2. 明褐色粘質土
- 3. 暗色粘質土



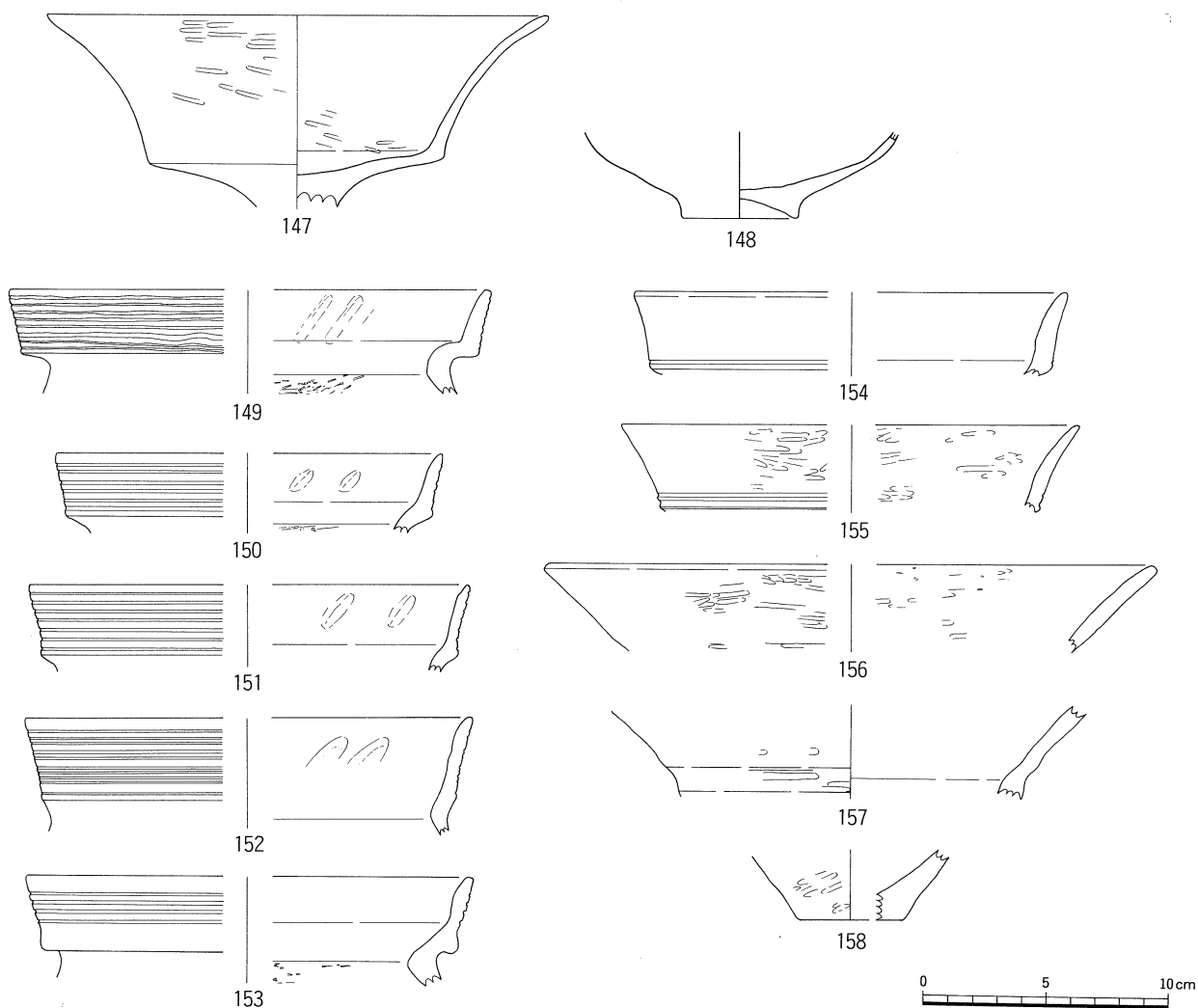
第13図 SI04 遺構図 (1/60)



第14図 SI02 出土遺物 (1/3)



第15圖 SI02 出土遺物 (1/3)



第16図 SI03(147・148)・SI04(149~158) 出土遺物 (1/3)

SI 04 (第14・16図)

東調査区中央やや南に位置し、平面形隅丸方形の4本主柱構造であるが、長辺6.7m、短辺5.7~6.35mの台形状で、床面積約38.5㎡を測る。壁高はほぼ15cm、壁溝は幅20cm前後、深さ4~10cmで廻る。主柱穴はP1~P4がほぼ方形に配置され、柱間はP1~P2、3.6m、P3~P4、3.55m、P1~P3、3.3m、P2~P4、3.2mを測る。主柱穴の径は22~50cm、深さも18~25cmと不揃いであり、貯蔵穴、炉は確認されなかった。竪穴外に各辺と平行ぎみにピットを検出しているが関係は不明である。床面標高は11.93m前後である。

遺物は弥生時代後期後半の土器細片が少量みられ、床面からの出土は無い。

(3) 掘立柱建物

6棟の掘立柱建物を検出しているが、高床倉庫と想定されるものはSB01・02・03・05の4棟であるが、SB04・06は構造や柱穴の深さにより他の性格の建物であろう。これらは出土土器より弥生時代後期後半と考えられよう。

SB 01 (第17・20図)

西調査区北側やや東に位置し、SB02を切る。梁行1間2.4m、桁行2間4.1m (P1~P3)、3.9m (P4~P6)、床面積は約9.6m²、主軸は(N55°E)である。柱穴は楕円状で大きさはばらつきが見られ、長軸55~90cm、短軸42~65cm、段構造であり深部は深さ40~45cm、段部は10cmほど高い。この深部が柱の位置と考えられる。

遺物は土器159~161がP1より出土した。

SB 02 (第17・20図)

西調査区北側東寄りに位置し、SB01に切られる小型建物である。梁行1間1.95m、桁行2間2.4m (P1~P3)、2.15m (P4~P6)、床面積は約4.4m²、主軸は(N29°E)である。柱穴はほぼ円形で径45~55cm、深さはP1、P3、P6が50~53cm、P4は43cm、P2、P5は37~40cmと浅く、四隅に位置する柱穴が深い傾向にある。

遺物は土器細片162がP3より出土した。

SB 03 (第18・20図)

西調査区西端ほぼ中央に位置する布掘溝方式の小型建物である。溝底に存在する柱穴より、梁行1間2.2m、桁行2間2.7m、床面積約5.9m²、主軸は(N53°W)である。布掘溝は幅50~65cm、深さ35~45cm、柱穴は深さ60~70cmを測るが3穴だけ検出した。P2、P3は溝幅より小さく、外側に片寄る。この建物の南西面から北東面を囲むように幅30~70cm、深さ7~10cmの溝を検出しているが(第1図参照)、雨水を防ぐ溝であろうか。

遺物は土器が少数出土しており、北溝から細片163、南溝からは164である。

SB 04 (第18・20図)

西調査区中央南に位置する構造1間四方の建物で、長辺3.15m、短辺2.4m、面積約7.5m²、主軸は(N74°W)である。柱穴の径は25~35cmと小さく、深さも24~32cmと浅い。短辺P2~P4ラインの東1mに、長さ4.5m、幅17~30cm、深さ10~15cmを測るJ状の溝が存在する。竪穴建物の壁溝の位置と類似するが、雨水を防ぐ溝であろうか。

遺物は甕165がP2より出土している。

SB 05 (第19図)

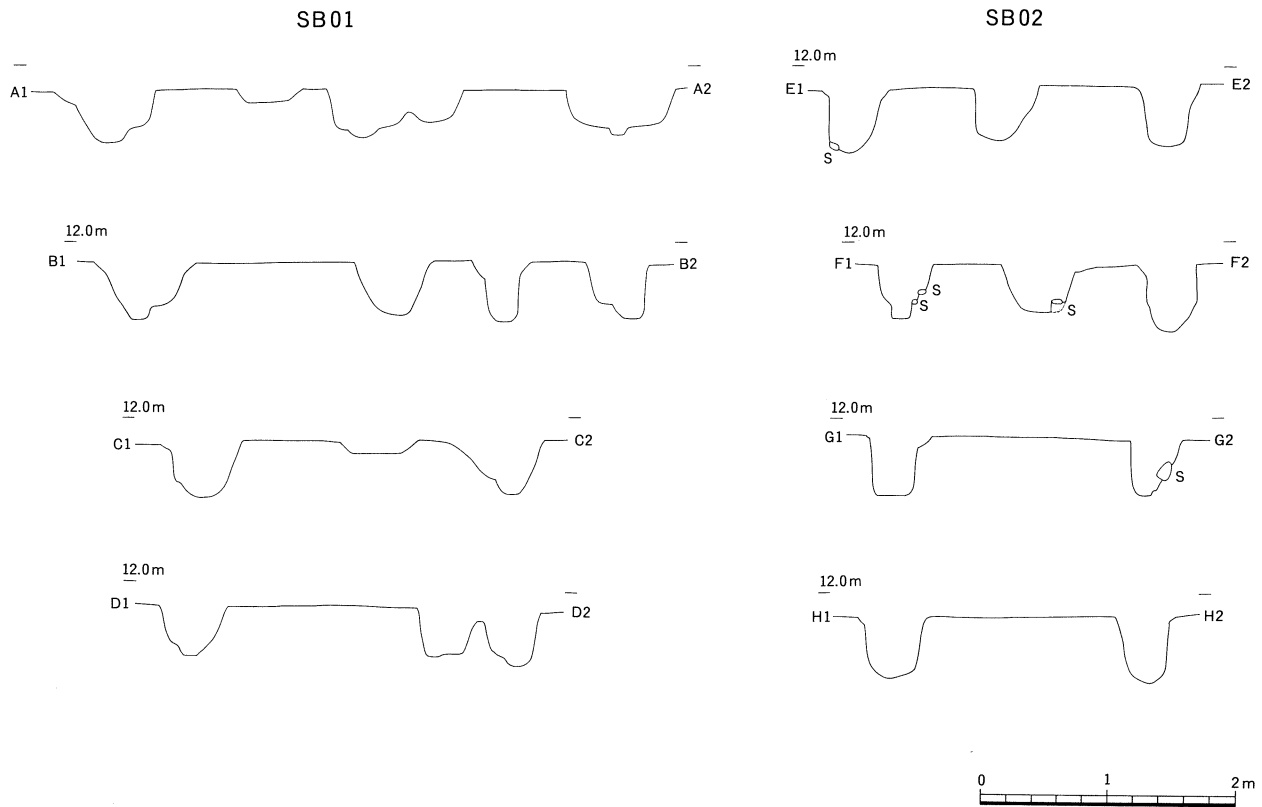
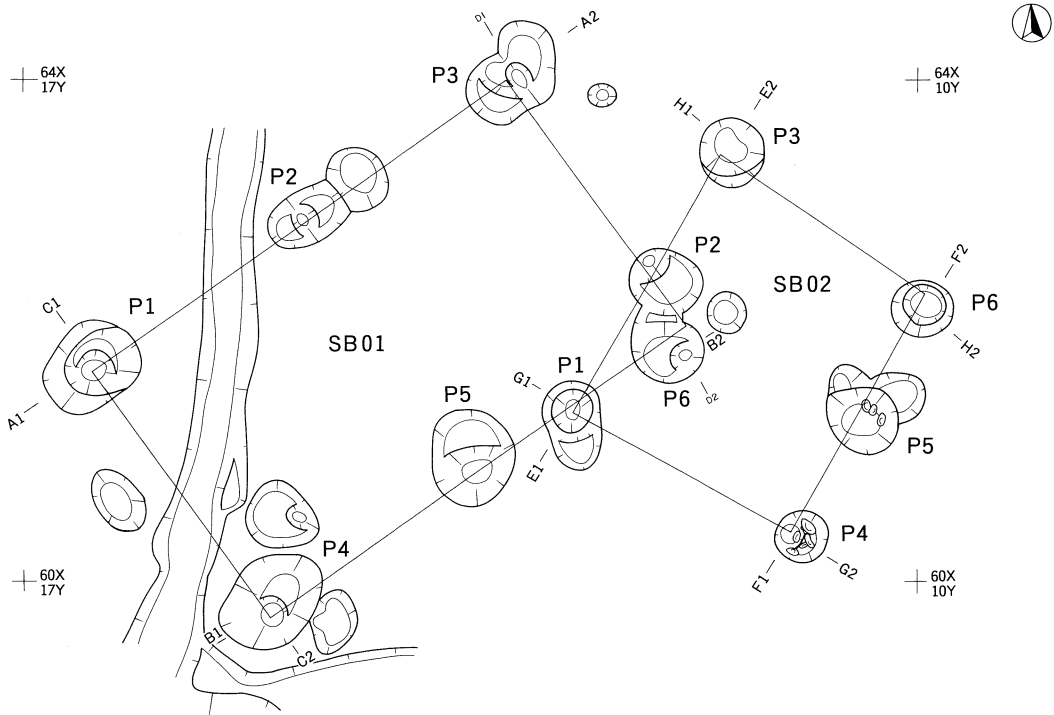
東調査区北端西に位置し、梁行1間2.6m、桁行2間4.0m、床面積約10.4m²、主軸は(N30°W)である。柱穴は径45~60cmの円形のものと同楕円状があり、P1は長軸1m短軸70cmと最も大きく、深さはP1、P2、P5がほぼ60cm、P3、P4、P6は35~40cmと二つに分かれるが不揃いである。

遺物は弥生時代後期後半の土器口縁部片が出土しているが、小片のため図示していない。

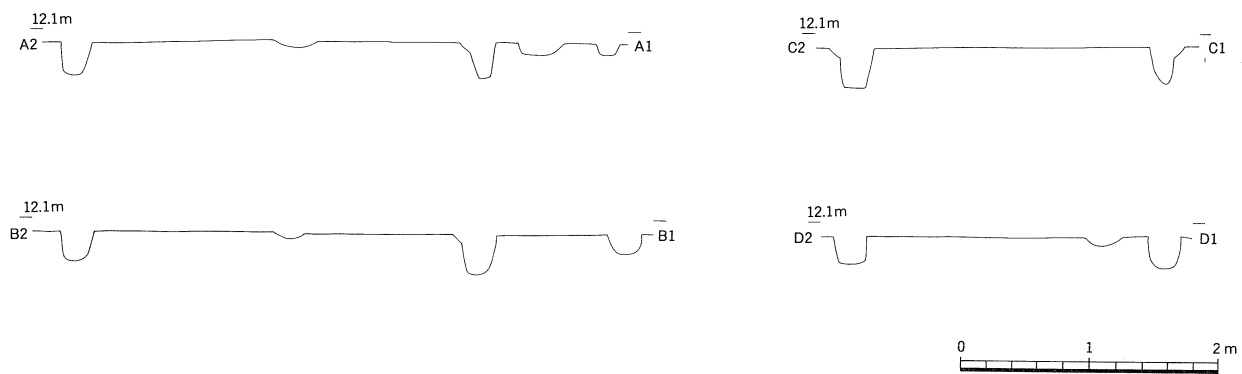
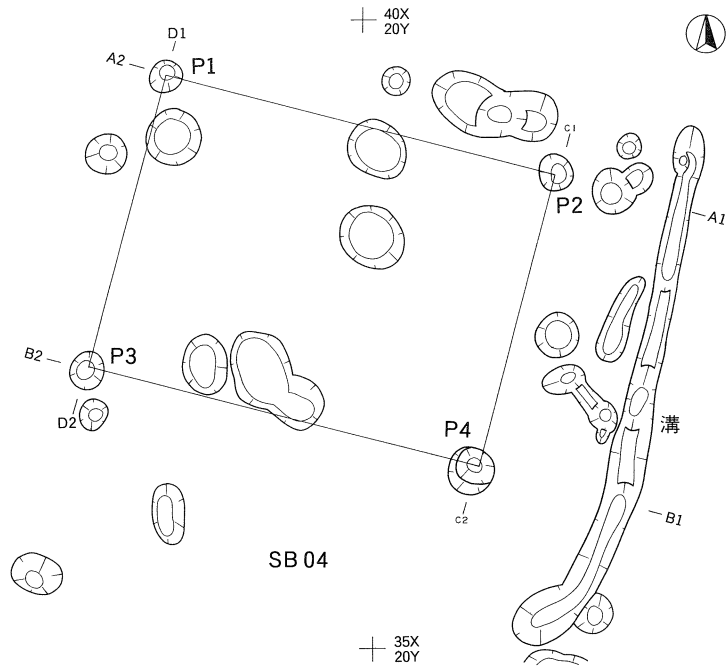
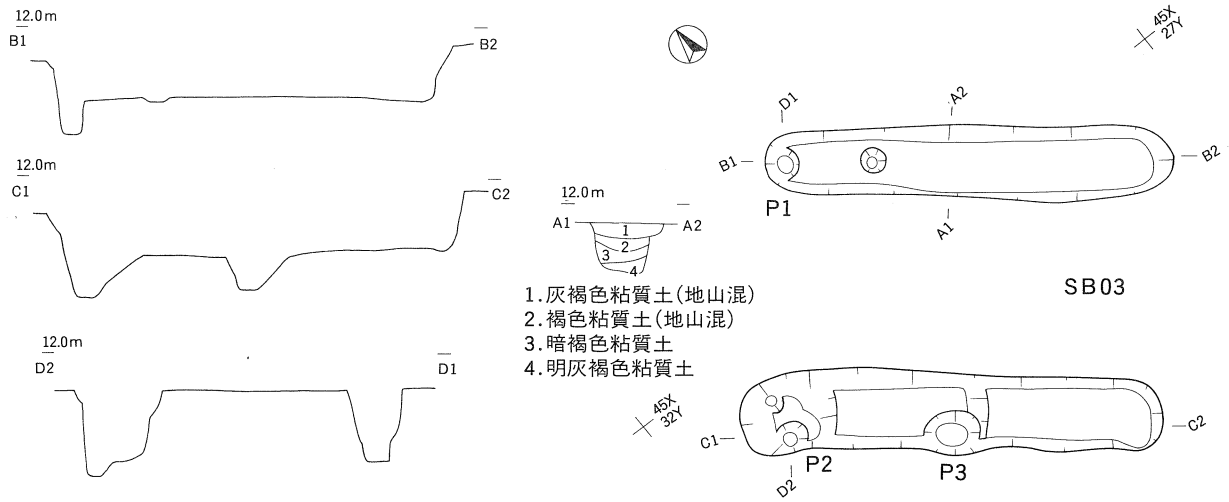
SB 06 (第19・20図)

東調査区南西端に位置し、梁行1間4.1mを測るが、桁行は検出した2間3.7mのものかこれ以上の規模であるかは不明。床面積は1間×2間の場合約15.1m²、主軸は(N24°E)である。柱穴はほぼ円形で径35~50cm、深さは35~40cmである。

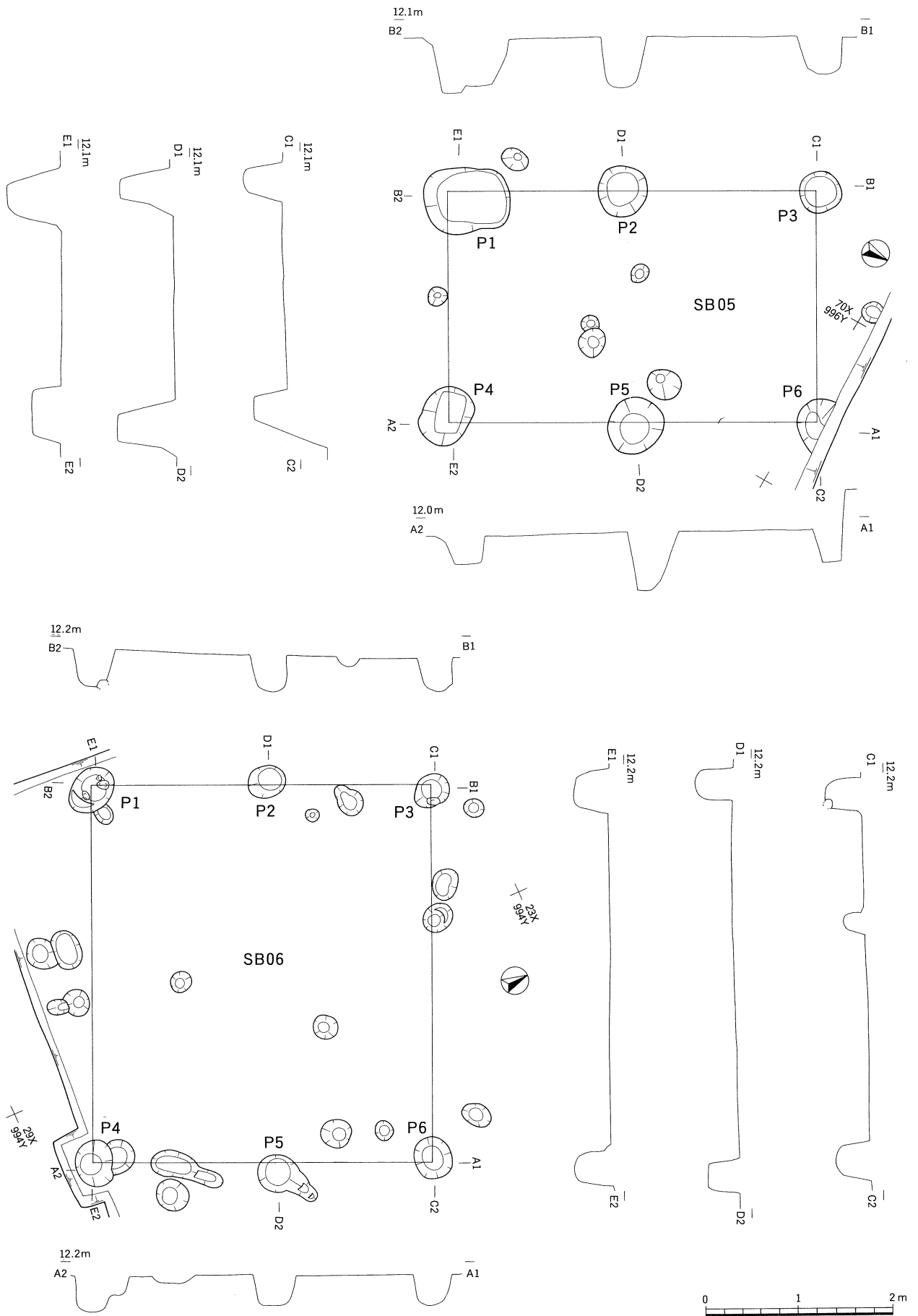
遺物は土器166がP1より出土している。



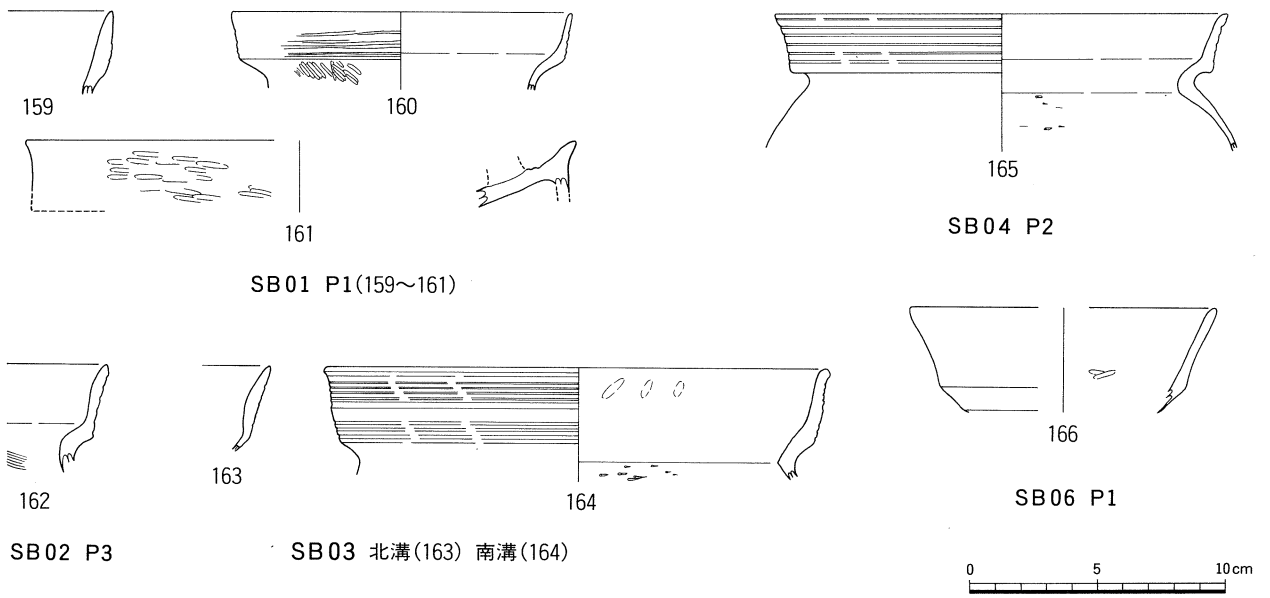
第17図 SB01・SB02 遺構図 (1/60)



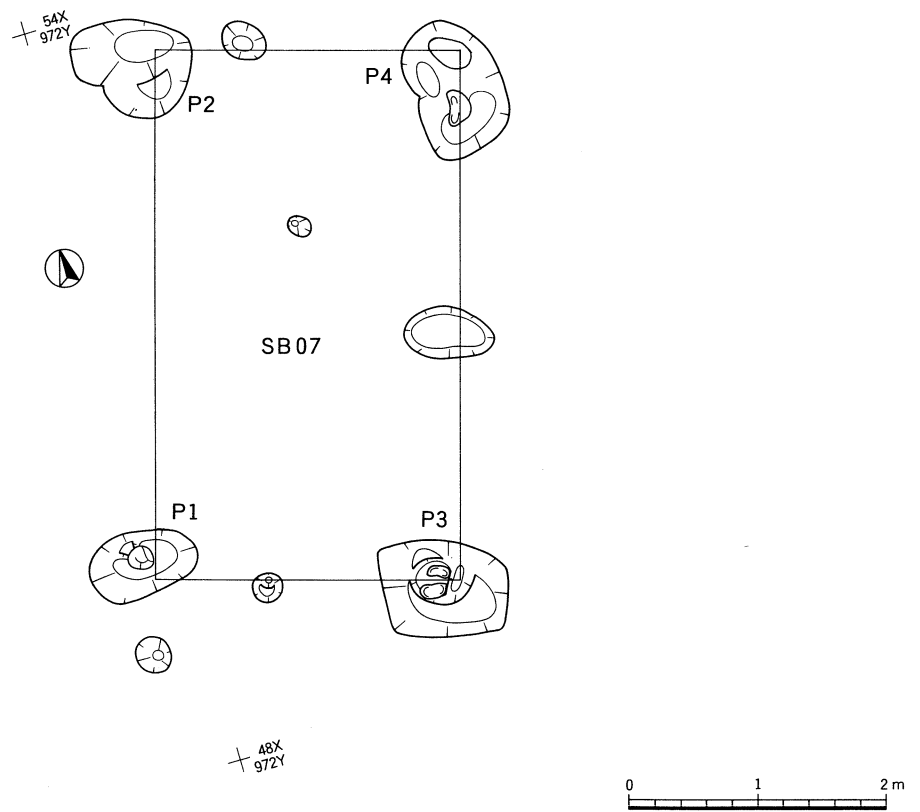
第18図 SB03・SB04 遺構図 (1/60)



第19図 SB05・SB06 遺構図 (1/60)



第20図 SB 出土遺物 (1/3)



第21図 SB07 遺構図 (1/60)

(4) 土 坑

弥生・古墳時代の土坑としてここではSK01～06・08～18の16基を報告する。出土土器により弥生時代後期後半はSK01～06・08・10・13・14・16～18であり、古墳時代前期はSK11・12・15である。

SK 01 (第22・24図)

西調査区北東隅、SI05の西で検出した。平面楕円状で長径1.8m、短径1.5mを測る。底面は不整で段部を有する。深さは段部10cm、深部は20cmである。

SK 02 (第22・24図)

西調査区北側中央、SB01の西で検出した。平面楕円状で長径1.55m、短径1.08m、深さ5cmと浅い。

SK 03 (第22・24図)

西調査区西端中央、SB03の北西で検出した。土坑が2基重複したものとも考えられるが不明である。全形は長さ3.0mの逆く字形であり、中央に長径1.4m短径0.95mで一段落ち込み、深さ20cmを測る。この箇所より土器178が出土している。東側の段部は幅60cm深さ13cm、西側の段部は最大幅80cm深さ10cmほどで、この箇所より土器177・178・181が出土した。

SK 04 (第22・24図)

西調査区西端中央、SB03の北東に位置し、SD04に切られる。平面長楕円状で長さ推定2.8m、幅推定70cm、坑底は長さ2.0m、幅40cm前後を測る。土坑墓か。182～185が出土し、182は自然礫下で検出した。

SK 05 (第22・25図)

西調査区中央東よりSD01東南端と重複し、これを切る。平面不整な楕円状で長径1.8m短径1.35m、深さ30cmを測る。出土遺物は186の1点である。

SK 06 (第22図)

西調査区中央東側、SK05の南東で検出した。平面長楕円状で長さ2.6m幅60cm、中央は一段低く深さ28cm、両側の段部は15cmである。出土遺物は土器は細片であるが、時期は古墳時代前期であろう。

SK 08 (第22・25図)

西調査区南西隅に位置し、SI02の北東で検出した。SK08～11が集中する地点である。平面楕円状で長径1.25m、短径1.1m、深さ20cmを測る。最も出土土器の多い土坑であり、遺存度も高い。

SK 09 (第22図)

西調査区南西隅において検出した。平面は楕円形状と考えられ、長径1.2m短径60cm、深さ18cmを測る。出土遺物は弥生時代後期後半の土器細片が少量見られる。

SK 10 (第22・25図)

西調査区南西隅において検出し、接する溝に切られる。平面は楕円形状で、長径1.35m短径80cm、深さ27cmを測る。出土遺物は土器細片で194を図示した。

SK 11 (第22・25図)

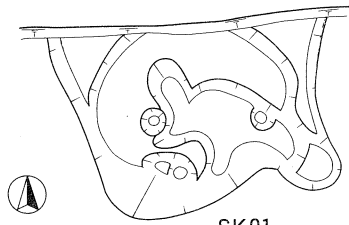
西調査区南西隅において検出した。平面は楕円形状で、長径1.25m短径90cm、深さ22cmを測る。出土遺物は土器細片若干で195・196を図示した。195は山陰系甕口縁部で古墳時代前期の所産である。

SK 12 (第22・25図)

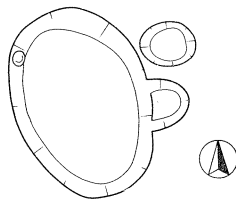
西調査区南側、竪穴建物SI 02の東で検出した。平面は方形状で推定長1.7m、幅1mほどか。深さは4cmと浅く、土坑ではなく落ち込みであろう。197は小型高坏の脚部で古墳時代前期の所産か。

SK 13 (第22・25図)

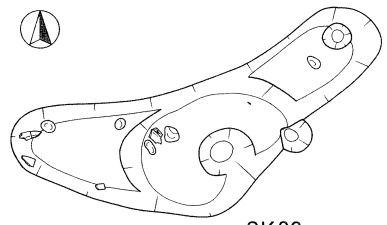
西調査区南端やや東で検出した。平面は長楕円形状で、長さ1.45m、最大幅75cmを測る。坑底は不整



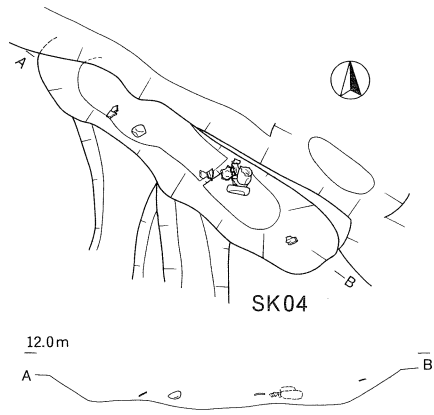
SK01



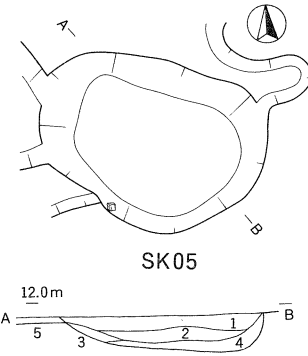
SK02



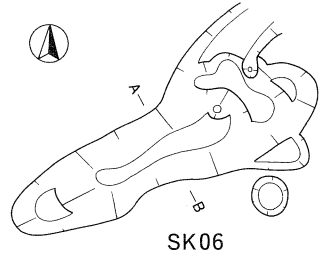
SK03



SK04



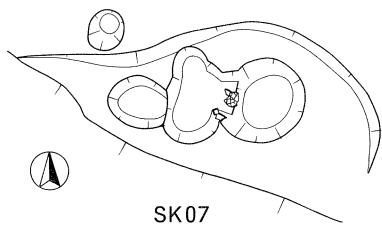
SK05



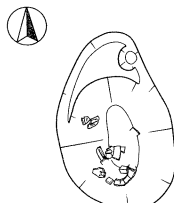
SK06

1. 褐色粘質土
2. 明灰褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土(炭化物少量混)
4. 灰褐色粘質土
5. 明灰褐色砂質土

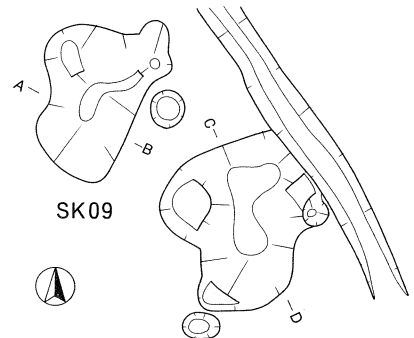
1. 暗褐色粘質土
2. 暗灰褐色粘質土



SK07



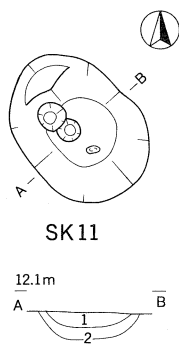
SK08



SK09

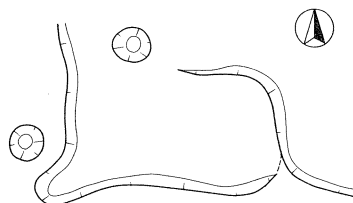
1. 暗褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土

1. 褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土

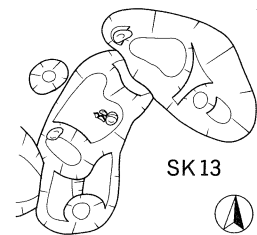


SK11

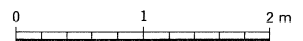
1. 褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土



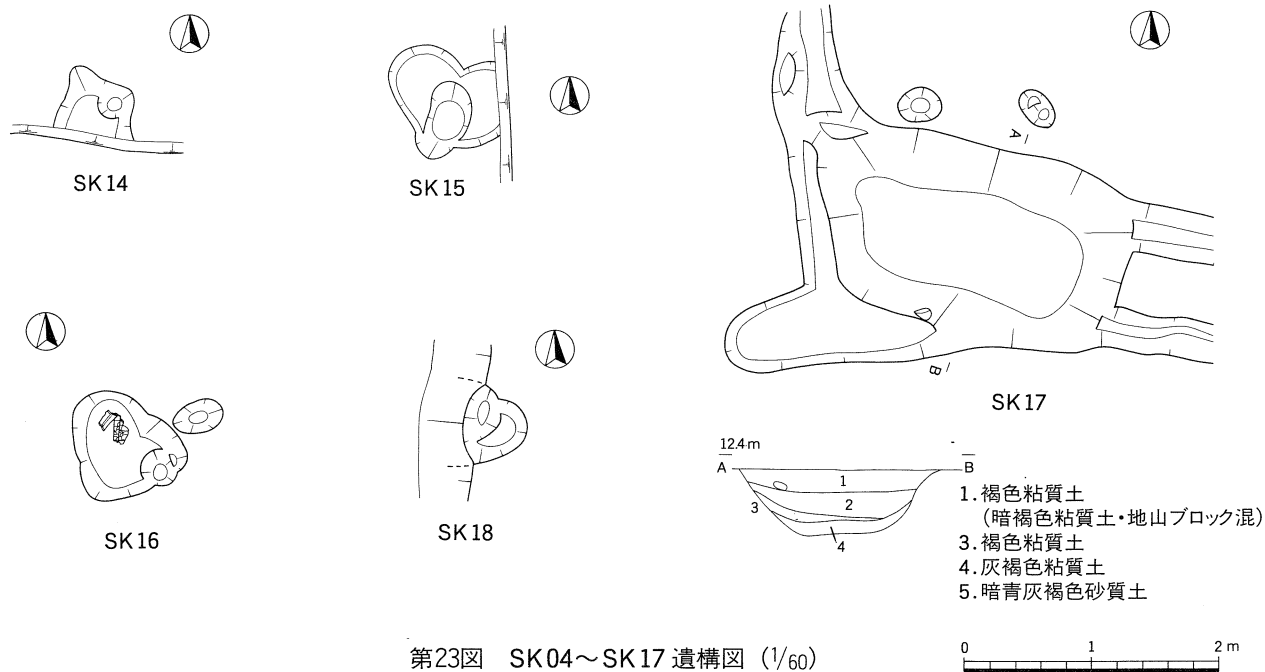
SK12



SK13



第22図 SK01~SK13 遺構図 (1/60)



第23図 SK04～SK17 遺構図 (1/60)

であり、深さは深部30cm、浅部15cmである。出土遺物は土器細片で198～201を図示した。

SK 14 (第23・25図)

西調査区南端中央で検出したが、過半は調査区外であり全体は不明。幅60cm、深さ16cmを測る。出土遺物は土器細片で202を図示した。

SK 15 (第23・25図)

西調査区東端中央やや南で検出したが、一部調査区外。ピットは別遺構であり、平面楕円形状の土坑2基が重なったものか不明である。推定規模は長径1m短径70cmほどか。遺物は203の古墳時代前期の布留式甕が調査区壁際より出土した。

SK 16 (第23・26図)

東調査区ほぼ中央、竪穴建物SI04の東北に位置する。ピットと重複するが、平面は楕円形状で、長径88cm、短径60cm、深さ10cmを測る。土器は204～207が坑底付近より出土した。

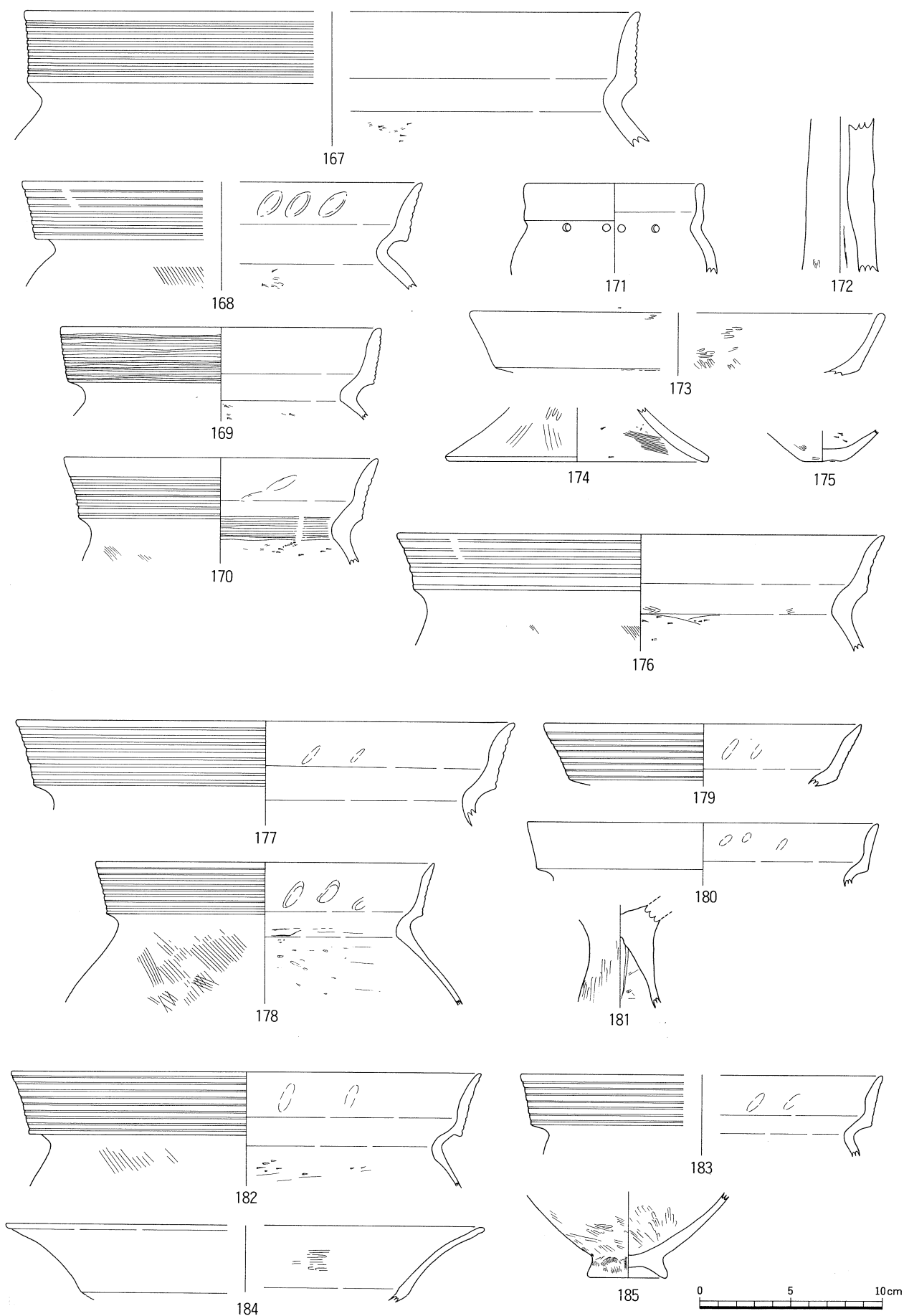
SK 18 (第23・26図)

東調査区南端やや東、SD05に過半を切られる。平面楕円形と推定し、深さは10cmであり、ピットは別遺構と考えられる。有段口縁で擬凹線をもたない208が出土している。

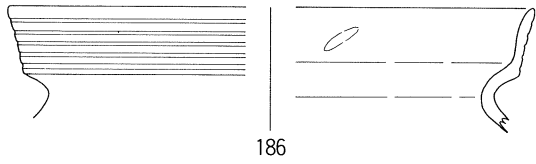
(5) ピット・溝

各ピットは他遺構との関係は不明であるが、図示可能な遺物の出土をみたものを取り上げる。SP01は西調査区西南端に位置し、SP02も同調査区西南部に位置しておりSB04東側溝南端と重なる。SP03は東調査区SI 04の西南に位置し、SP04は同調査区南側SB06の北東に位置する。SP01～03からは弥生時代後期後半の土器が出土している(第26図)。SP04からは勾玉281が出土したが、半環状形の4面が平らな断面形状であり、弥生時代のものであろうか(第30図)。

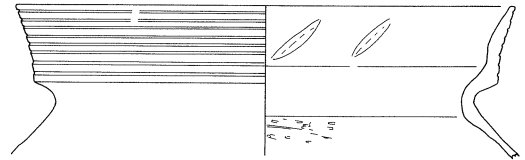
SD03(第2・27図)とした溝は西調査区北西に位置する。南北方向にくの字状を呈し長さ9m、幅45～60cm、深さ10cmを測る。弥生時代後期後半の214・215が出土した。SD04は後述するがこの時期の土器が混入したものである。



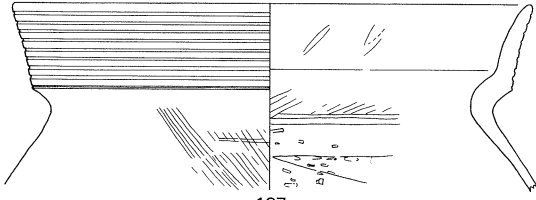
第24図 SK01(167~175)・SK02(176)・SK03(177~181)・SK04(182~185) 出土遺物 (1/3)



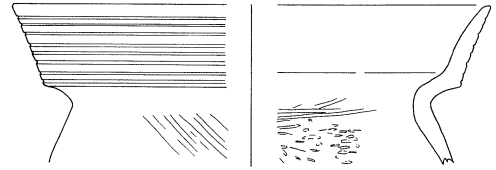
186



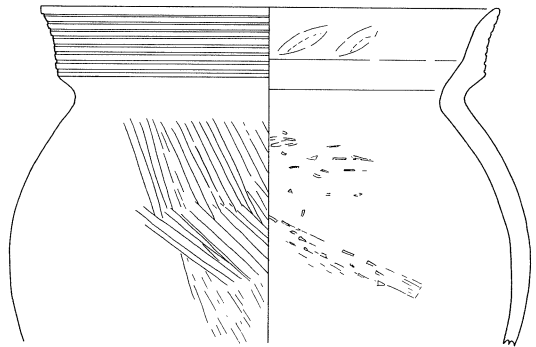
189



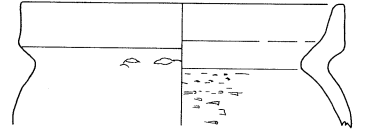
187



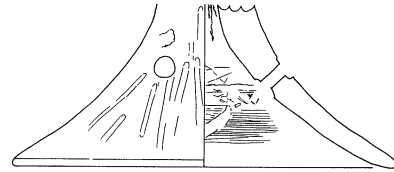
190



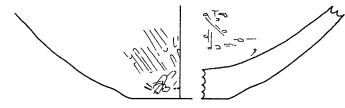
188



191



192



193



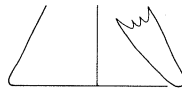
194



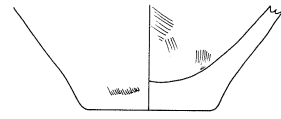
195



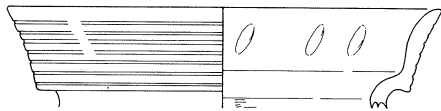
196



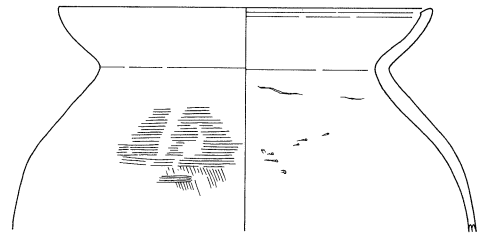
197



202



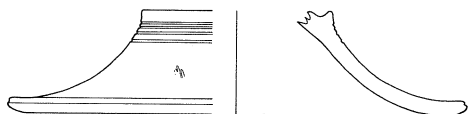
198



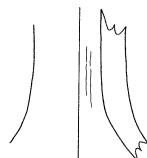
203



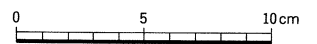
199



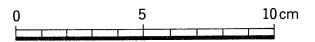
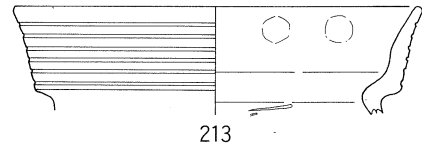
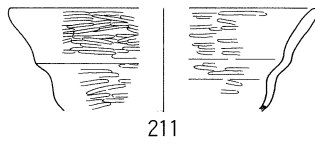
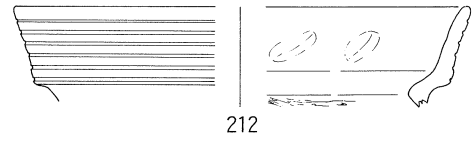
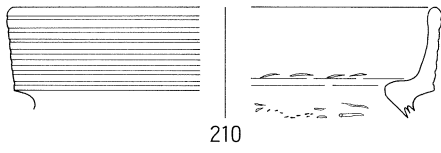
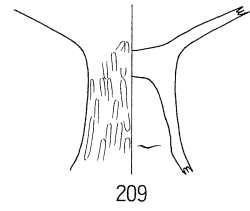
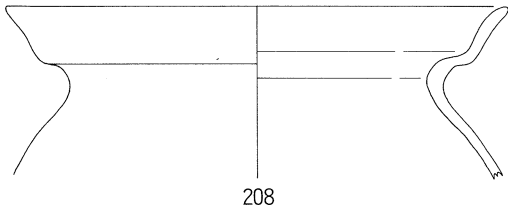
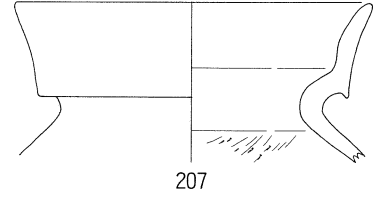
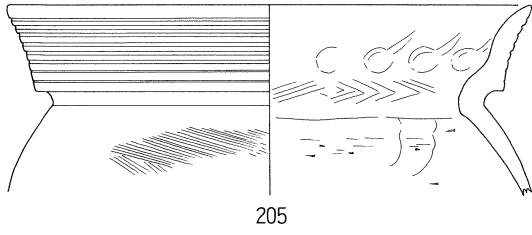
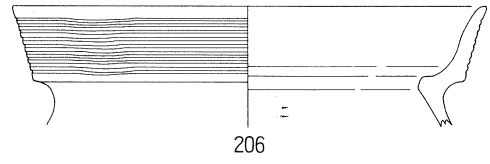
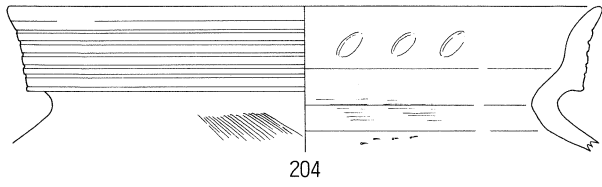
200



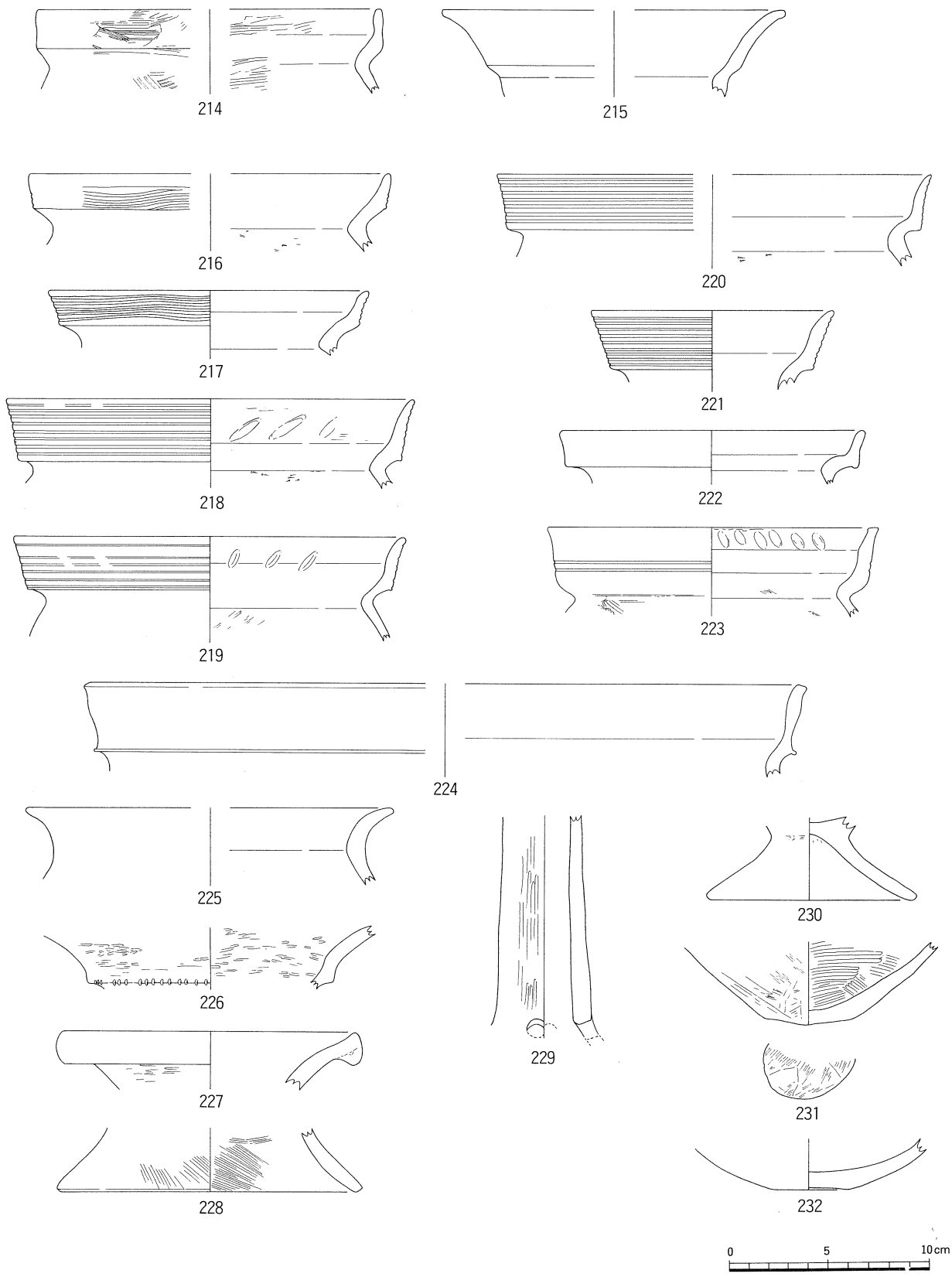
201



第25図 SK05(186)・SK08(187~193)・SK10(194)・SK11(195・196)・SK12(197)・SK13(198~201)・SK14(202)・SK15(203) 出土遺物 (1/3)



第26図 SK16(204~207)・SK18(208)・SP01(209)・
SP02(210・211)・SP03(212・213) 出土遺物 (1/3)



第27図 SD03(214・215)・SD04E(216)・SD04W(217~232) 出土遺物 (1/3)

3 その他の時代の遺構と遺物

本遺跡の主体である弥生時代後期後半～古墳時代前期を除いた、縄文時代及び中世期以降と考えられる遺構と遺物について報告する。

縄文時代の遺構としてはSK07(第22・28図)があり、西調査区南東側SD04を挟みSI03の北東において検出した。楕円形状の土坑が2基重なったものかは不明であるが、それぞれ長径70cm幅60cm前後であり、深さは13cmと8cmを測る。この浅い部分より横位条痕文の深鉢233・234が出土した。同一個体であり晩期末の所産か。235はSD05への混入で後期中葉か。236はSD01への混入で後期後葉八日市新保式である。237は指頭沈線の弥生時代前期の土器片か(第28図)。

SB07(第21図)は東調査区東端中央に位置する。ピット4個が1間四方に配置することから掘立柱建物とした。長辺4.2m、短辺2.4m、面積約10㎡を測る。柱穴は不整な楕円形状で、長径1m前後、短径50～75cm、深さ25～30cmを測る。覆土は明らかに弥生時代の遺構とは異なり、後述するSK17同様暗褐色土に地山が混ざる攪乱的なものであり、中世期以降の遺跡でよく見られる。時期は中世期か。

SK17(第23図)は東調査区東端やや南に位置する。平面長方形で長さ2.5m、幅1.5m、深さ50cmを測る。覆土は明らかに弥生時代の遺構とは異なり、暗褐色土と地山が混ざる攪乱的なものである。土師質土器の細片が見られ、中世期の遺構か。

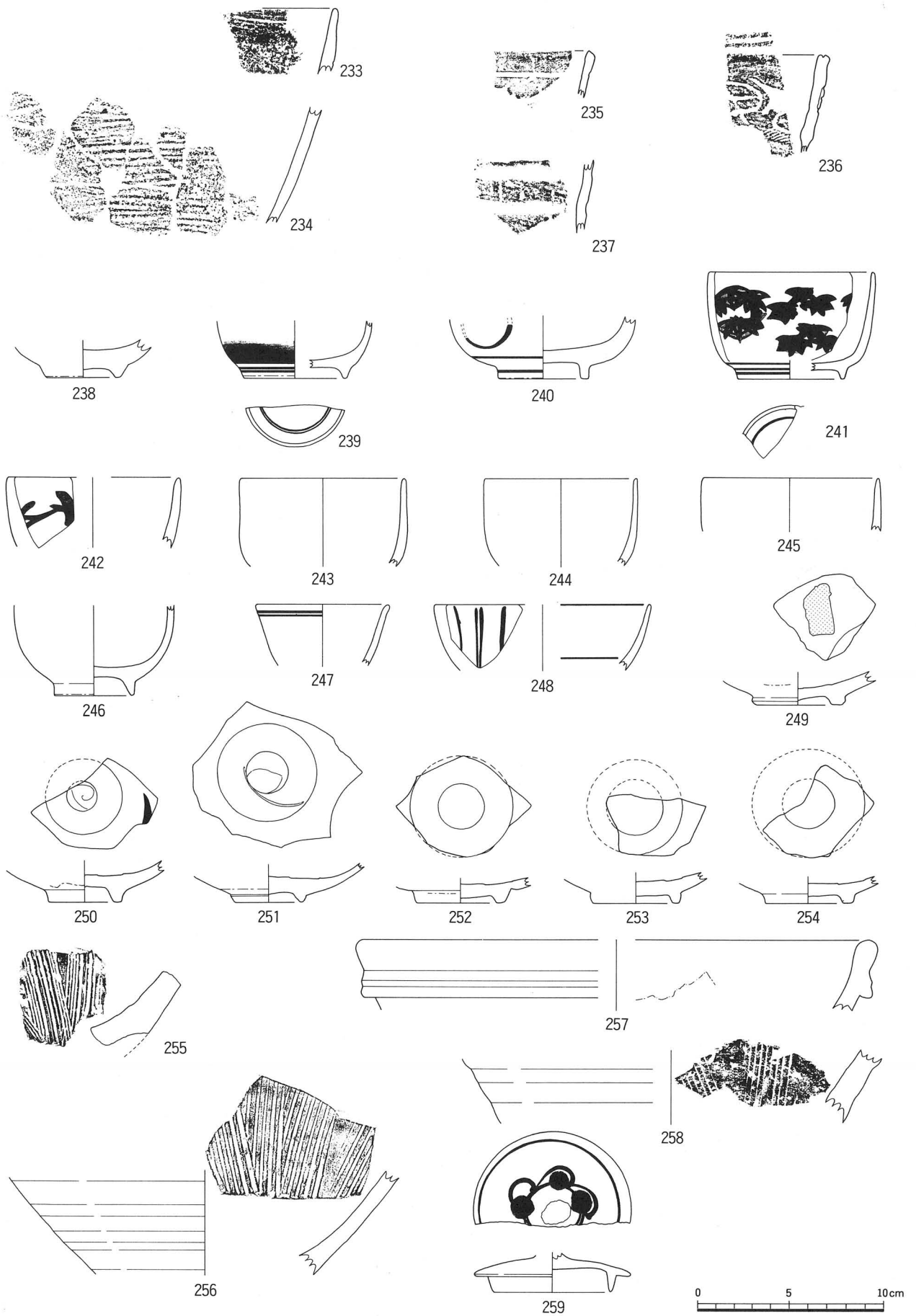
SD04(第1図参照・第27図)は東南から北西へ東西両調査区南側を貫き調査区外へ延びる。SI01南の位置で階段状の構造を持つ。溝幅は70cm～1m、深さは東南部の40cmから北西部70cmと徐々に深くなり、溝底のレベル差は56cmである。覆土は上層が灰色細粒砂、下層が濁灰色粗粒砂であり、弥生時代～中世期?遺物包含層の暗褐色粘質土上より掘削されている。また後述するSD05には切られている。近世の溝であろうか。弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器216～232が混入し出土している。

SD05(第1図参照・第28図)は東調査区の南北を貫き北流する溝で、明治末～大正期に行われた耕地整理まで機能していた溝であろう。幅1～1.5m、深さ20～25cmである。238～259、283・284・286が出土した。17世紀前半から明治期の陶磁器が見られる。

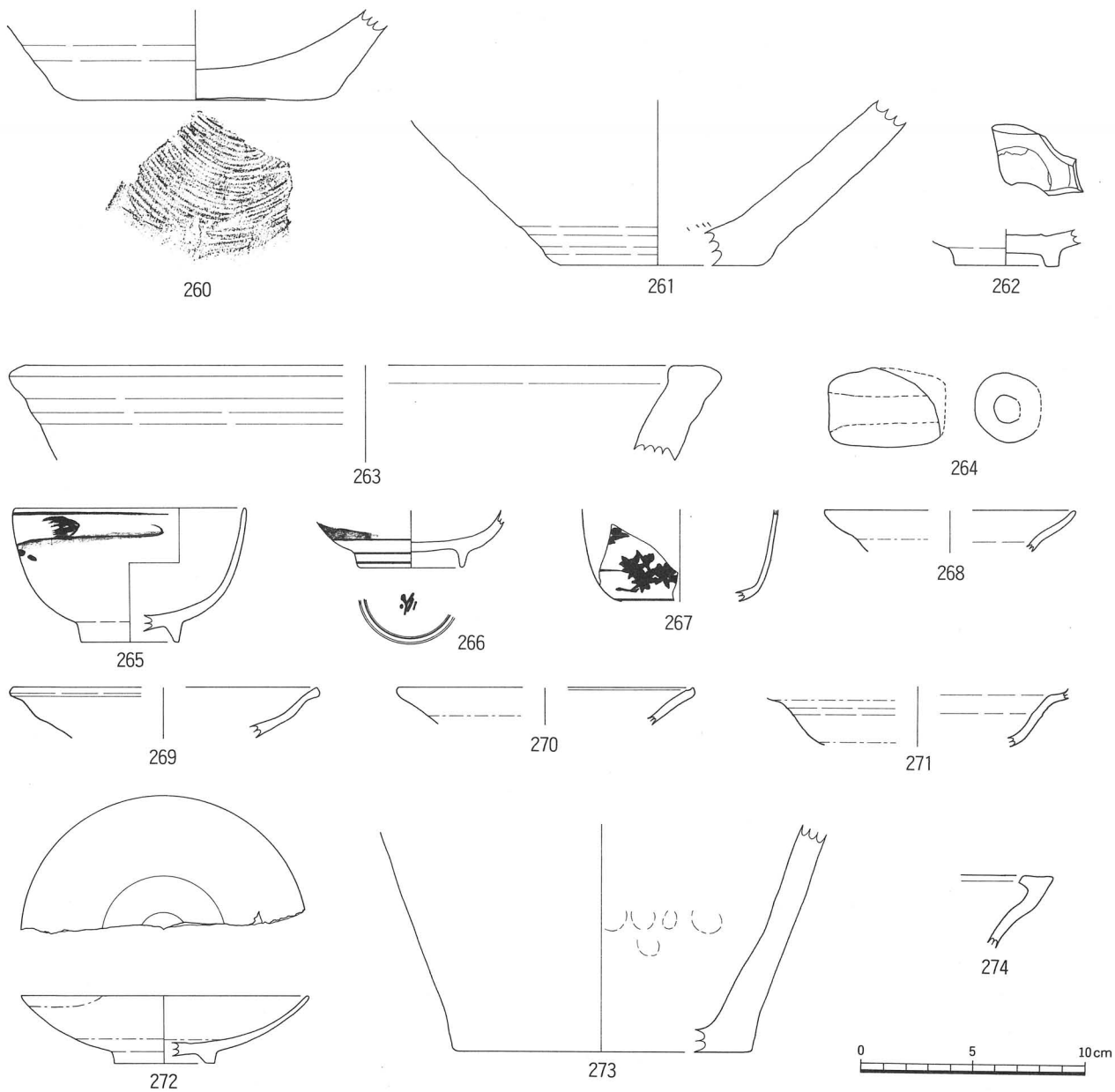
SD06・SD07・SD08(第1図参照・第29図)は東調査区北東に位置する。SD06とSD08はほぼ直交し繋がる。SD07はSD08と平行するがSD06直前に段部を有し連結していない。SD06は最大幅2.8m、深さ10～30cm、北側で2条に分かれる。SD07は幅70cm～1.5m深さほぼ25cm、SD08は幅1.5～2m、深さ40cmを測る。出土遺物はSD07より260～262、SD08からは263～273が出土した。中世期のものが僅かに混ざるが17～18世紀の陶磁器が出土している。SD06の遺物は図示しなかったが、同様の時期のものが出土した。これらの溝はSD05より古い時期で、近世の水田耕作に関連するものであろう。

4 石器・石製品・金属器

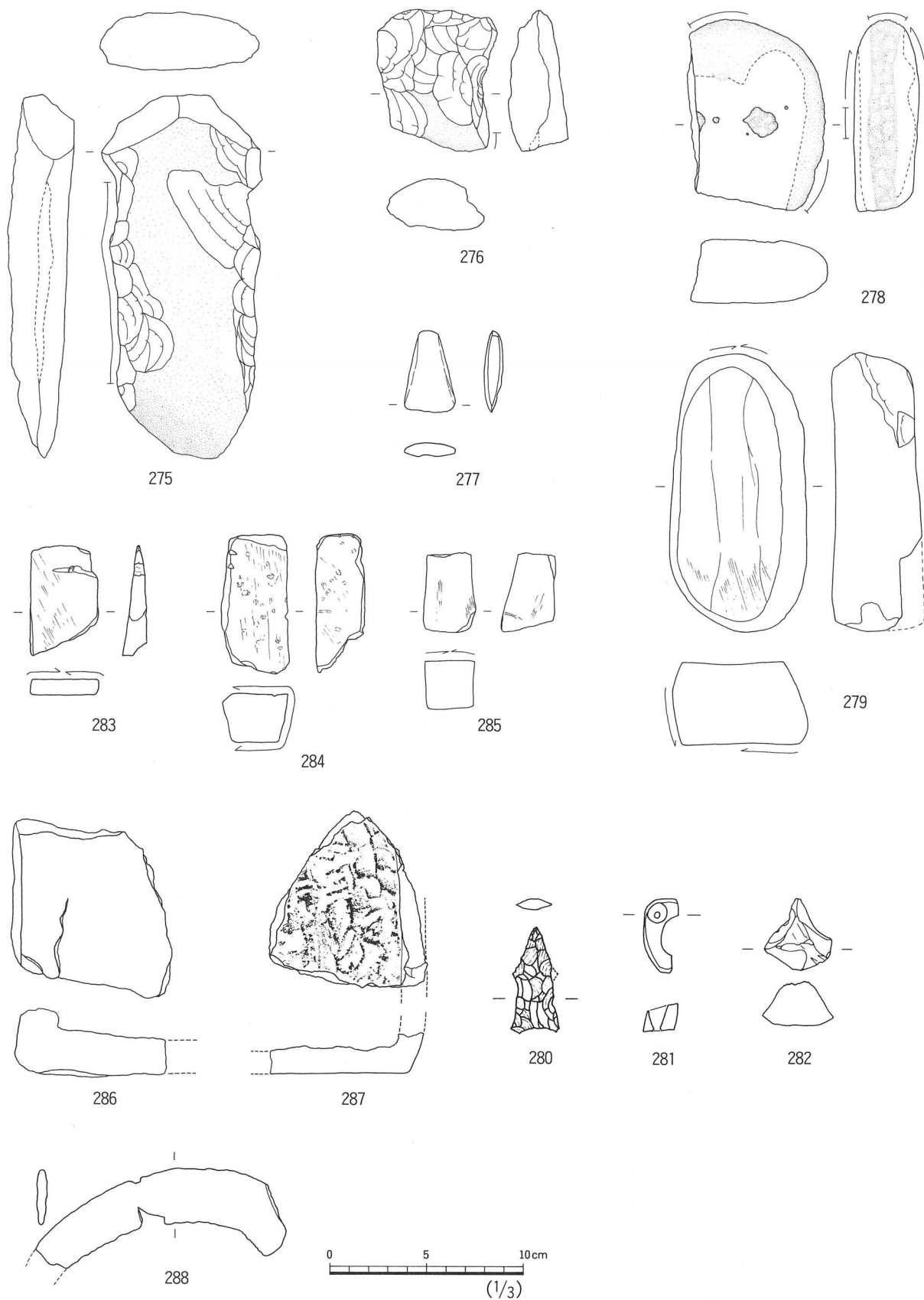
第30図にまとめた。個別遺構で述べたものもあるが出土地点等は観察表を参照していただきたい。SI01周溝SD01出土の打製石斧1は、基部を破損しており形態は短冊形に近いが、両側の加工は基部下部まで行ない、最後に若干抉りを入れている。SI03壁溝上より出土の279の砥石は両端と底の一部除く全面を使用している。また敲石として使われ、両端は欠損し敲打痕が残る。283～285の砥石は石質が凝灰岩の中砥石であり、中世期以降のものか。286は用途不明の石製品である。287の行火は上方に開口するD字形の底部片か。



第28図 SK07(233・234)他縄文土器・SD05 出土遺物 (1/3)



第29図 SD07(260~262)・SD08(263~273)他 出土遺物 (1/3)



第30図 石器・石製品・金属器 出土遺物 (1/3 275~279・288)・(1/2 280・282)・(1/1 281)

5 ま と め

長池ニシタンボ遺跡は、微高地が漸次的に低湿地へと変化する標高12m前後の緩い傾斜地に立地する。弥生時代後期後半の集落を主体とし縄文時代・古墳時代初頭・中世・近世にわたる複合遺跡である。ここでは時代毎に遺構及び遺物を概観しまとめとしたい。

縄文時代の遺構は、粗製の条痕文土器を出土し土坑としたSK07であり、他はごく僅かの土器の散布がみられるのみで状況は不明である。遺物の時期は縄文時代後期から晩期にあたる。

弥生時代後期後半月影式期の段階で集落が形成され、検出した主要な遺構は周溝を有する平地式建物4棟、竪穴建物3棟、掘立柱建物6棟や土坑などである。

周溝を有する平地式建物SI 01は、唯一全形が窺われるもので円形周溝の内径12m～13mを測り県内の検出例では中規模の部類に入っている⁽¹⁾。柱穴は方形配置で柱間は2～3mの範囲内に収まり、時期はやや降るが金沢市新保本町西遺跡、同市上荒屋遺跡に類例がみられる。周溝から出土した土器は廃棄行為と推察され遺存度はあまり高くはないが、量及び種類は比較的まとまっている。擬凹線をもつ有段口縁の甕は、擬凹線帯のやや狭いものや内傾するものがみられ、指頭圧痕を有するものも間隔がやや狭く上位に施されるものが多い。また頸部内面は「くの字」状を呈するものが殆どで、月影式甕とされるハケ調整の面をもつものも少量あるが幅は狭い。口縁無文の有段口縁の甕はやや厚手のつくりが多く、擬凹線甕のように口縁が外反するものは少ない。高坏では口縁部が外反し坏部がやや偏平となる28の「竹生野型式」⁽²⁾のものと、いわゆる有段鉢形の「高座型式」30・31があり、口縁部の外反が緩く立ちぎみとなり坏部の深い「ツカダ型式」はみられない。器台の33は擬凹線の有無の違いはあるが金沢市南新保三枚田遺跡沼状から出土のものが類例としてあげられよう。建物部の1回建て替えと対応し周溝について外側（新）、内側（古）としたが、土器による時間差は判断できない。以上のことからSI01は月影I式期⁽³⁾、西念・南新保編年⁽⁴⁾4期前半に位置づけられよう。

周溝内の平面形が方形で角も丸くならないSI05の南辺内側は9mであるが全容は不明である。該期での類例はなく、上げて上げるとすれば古墳時代宮地式頃の金沢市沖町遺跡SD02であるが、規模は16.6×15.4mと大きい。時期は月影I式期であろう。SI06・07は土器の出土量も少ないが月影I式期か。

竪穴建物SI02は床面積約17.8㎡、SI03は推定床面積5㎡の2畳にも満たない小さいもので、どちらも2本支柱構造をとる小型のものである。施設も中央に灰穴炉、東南辺壁際に二段堀の貯蔵穴を同様に配置する。これに対しSI04は4本支柱構造で床面積約38.5㎡の中型建物であるが、炉跡・貯蔵穴は不明であり、方形配置の柱穴はやや壁に近い印象を受ける。

SI02の土器は、複合する土坑？からと思われる古墳時代前期前半の山陰系の甕など113～123を除くと、擬凹線甕や高坏の様相からSI01と同時期の月影I式であろう。SI03の高坏147は口径20cm坏部は深い傾向でSI01周溝出土のものより小型であり、SI04の擬凹線甕は細片ではあるが指頭圧痕の割合が高くどちらもSI01及びSI02より新しい様相であろうか。

2においてすでに述べたが、検出した掘立柱建物6棟のうち1×2間構造で梁行が3m以下の柱穴が深くしっかり掘られるSB01・02・05と布掘溝のSB03の4棟は高床の倉庫とすることが妥当である。しかし、1×1間構造で柱穴径が小さくかつ浅めのSB04は平地式の住居、梁行が4.1mと広いSB06は平地式建物との性格が想定できよう⁽⁵⁾。

それでは集落構造について若干の推察を試みる。まず建物の軸及び方位のほぼ一致するもの

は以下の4グループが見いだされる。

- ① SI 01a・b、SB03、SB01 (SB02を切る)、SI 02、SB02?、SB05?
- ② SI 05、SI 06、SI 07、SD01排水溝 (SI 01)
- ③ SI 03、SI 04、SB05?
- ④ SB04、SB06

遺構の切り合いがあまりなく、各グループが同時併存する可能性もあり集落構造の変遷については断定できないが、分布状況も吟味に入れると上記グループの①・②→③・④への移行が考えられるのではないか。

周溝を有する平地式建物は地山の粘性が強く低湿である調査区の北半に4基、竪穴建物はシルト質の地山をもつ調査区南半に3棟検出している。土器の様相より周溝を有する平地式建物SI01と竪穴建物SI02は同時期に併存した可能性が高く、竪穴建物とするには不適な場所において前者の方式を採り入れたものであろう⁽⁶⁾。

古墳時代に入ると確認できる遺構は土坑であり、集落が遺跡内に場所を変えたものか、周辺に移動したものかは不明である。近年北加賀における集落は水系を単位とするブロックが設定されており、本集落は上荒屋・御経塚ブロックに属している。弥生時代後半から集落が増加し、御経塚シンデン遺跡での前方後方墳を含む古墳群の展開など集落の消長が注目される地域である⁽⁶⁾。

中世期の遺構としてSB07・SK17があり集落の一部と推察されるが遺物は僅少で、この時期も詳細は不明である。しかし、近世期の溝への混入遺物により15世紀頃の年代が考えられるのではないだろうか。近世以降の遺構では溝が検出されているが17世紀前半から明治期にかけての遺物がみられ、遺跡地は水田としての利用が今日まで続いたことが窺われる。

以上遺跡の変遷について簡単に述べたが、取留のないまとめとなってしまったことを御容赦願いたい。

註・参考文献

- (1) 久田 正弘 1992年「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」『石川県埋蔵文化財保存協会年報3』
久保有希子 1995年「周溝を有する建物について」『上荒屋遺跡I (第1分冊)』 金沢市教育委員会
- (2) 北野 博司 1991年「大型土坑について」『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- (3) 谷内尾晋司 1983年「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学I』石川考古学研究会
- (4) 楠 正勝 1996年『金沢市西念・南新保遺跡IV』金沢市教育委員会
- (5) 浜崎 悟司 1995年『平面梯川遺跡I』石川県埋蔵文化財保存協会
- (6) 楠 正勝 1989年『金沢市西念・南新保遺跡II』 金沢市教育委員会
木田 清 1991年『松任市法仏遺跡第7次発掘調査報告』松任市教育委員会

- 楠 正勝 1985年『金沢市新保本町東遺跡・西遺跡、近岡カンタンボ遺跡』 金沢市教育委員会
- 田嶋 明人 1993年「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 出越茂和ほか 1995年『上荒屋遺跡I (第2分冊)』 金沢市教育委員会
- 栃木 英道 1986年『近岡遺跡』 石川県埋蔵文化財センター
- 南 久和 1992年『金沢市沖町遺跡』 金沢市教育委員会
- 安 英樹・浜崎悟司 1993年「北陸南西部、集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 吉岡 康暢 1991年『日本海域の土器・陶磁 [古代編]』 六興出版

出土遺物一覽表 (1)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
1	SI01 P1・P2	鉢	口径(154)	1/14	暗褐色	
2	SI01 P6	高坏		1/2	淡橙褐色	
3	SI01 P7	甕	口径(172)	1/10	淡褐色	
4	SI01 P7	高坏	口径(198)	1/8	淡橙褐色	
5	SD01 外a	甕	口径(168)	1/11	淡褐色 淡黄褐色	外面スス付着
6	SD01 外a	甕	口径(170)	1/8	橙褐色 淡橙褐色	
7	SD01 外a	甕	口径 180	全周	橙褐色 淡茶褐色	
8	SD01外a	甕	口径(215)	1/8	淡橙褐色	
9	SD01外a	甕	口径 195	1/4	淡黄褐色	
10	SD01外a	甕	口径 160	1/3	褐色	
11	SD01 外a	甕	口径 168	1/4	橙褐色 淡褐色	
12	SD01外a	甕	口径 202	1/6	淡褐色	
13	SD01外a	甕	口径 160	1/6	淡褐色	外面スス付着
14	SD01 外a	甕	口径 222	1/3	褐色 淡褐色	外面スス付着
15	SD01 外a	甕	口径 190	1/6	淡褐色 灰褐色	
16	SD01 外a	甕	口径 180	1/6	淡褐色 灰褐色	外面スス付着
17	SD01外a	甕	口径 178	1/6	淡黄褐色	
18	SD01 外a	甕	口径 160	1/4	淡橙褐色 淡褐色	外面一部 スス付着
19	SD01 外a	甕	口径 124	1/6	淡褐色 暗褐色	
20	SD01外a	甕	口径 170	1/4	淡茶褐色	外面スス付着
21	SD01 外a	甕	口径 192	1/3	暗褐色 淡褐色	外面スス付着
22	SD01 外a	甕	口径 186	1/5	橙褐色 淡橙褐色	
23	SD01 外a	甕	口径 150 胴径 203	全周	褐色 暗褐色	外面スス付着
24	SD01 外a	甕	口径(190)	1/9	淡橙褐色 淡褐色	
25	SD01外a	甕	口径(164)	1/8	淡橙褐色	
26	SD01外a	甕	口径 134	1/7	暗赤褐色	
27	SD01外a	壺	口径(108)	1/10	赤彩	
28	SD01外a	高坏	口径 263	1/8	淡褐色	
29	SD01 外a	高坏		1/5	淡橙褐色 淡黄褐色	

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
30	SD01外a	高坏	口径 261	1/6	橙褐色	
31	SD01 外a	高坏	口径(234)	1/10	橙褐色 淡橙褐色	
32	SD01外a	高坏		1/2	淡橙褐色	
33	SD01 外a	器台	口径 200	1/3	褐色 暗褐色	
34	SD01外a	器台	裾径 134	全周	淡褐色	
35	SD01外a	器台		全周	淡褐色	
36	SD01 外a	器台		全周	赤彩 赤彩・褐色	
37	SD01外a	器台		全周	淡褐色	
38	SD01外a	底部	底径 25	全周	暗灰色	
39	SD01 外a	底部	底径 54	1/4	赤褐色 褐色	
40	SD01外a	底部	底径 24	全周	淡黄褐色	
41	SD01外a	底部	底径 69	全周	淡黄褐色	
42	SD01 外b	甕	口径(230)	1/12	淡茶褐色 茶褐色	
43	SD01 外b	甕	口径 192	1/6	暗褐色 淡褐色	
44	SD01外b	甕	口径 182	1/4	淡黄褐色	
45	SD01 外b	甕	口径 169 胴径 160	1/6	淡褐色 褐色	
46	SD01外b	甕	口径(178)	1/8	橙褐色	
47	SD01 外b	甕	口径 174	1/4	淡茶褐色 橙褐色	
48	SD01 外b	壺	口径 110	1/3	赤褐色・黒褐色 褐色	
49	SD01外b	壺	口径 132	1/7	赤彩	図上復元
50	SD01外b	鉢	口径 164	1/7	淡橙褐色	
51	SD01 外b	鉢	口径 154	1/8	淡褐色 淡橙褐色	
52	SD01外b	鉢	底径(32)	1/4	淡橙褐色	
53	SD01外b	高坏		全周	淡橙褐色	
54	SD01 外b	高坏		1/3	淡橙褐色 橙褐色	図上復元
55	SD01 外b	高坏		1/2	橙褐・淡橙褐色 淡橙褐色	
56	SD01外b	高坏	口径 104	1/2	淡橙褐色	
57	SD01外b	器台		全周	淡橙褐色	
58	SD01外b	底部	底径 43	全周	茶褐色	
59	SD01 外c	甕	口径(194)	1/7	淡黄褐色 淡褐色	
60	SD01 外c	甕	口径 146	1/4	暗褐色 淡橙褐色	

出土遺物一覽表 (2)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外内	備考
6 1	SD 0 1外c	甕	口径(162)	1/9	橙褐色	
6 2	SD 0 1外c	甕	口径 227	1/7	淡橙褐色 橙褐色	
6 3	SD 0 1外c	甕	口径(250)	1/8	淡黄褐色	
6 4	SD 0 1外c	甕	口径(192)	1/8	淡黄褐色	
6 5	SD 0 1外c	甕	口径 184	1/6	淡黄褐色	
6 6	SD 0 1外c	甕	口径 193	1/5	褐色 淡黄褐色	外面 スス付着
6 7	SD 0 1外c	甕	口径 156	1/4	淡黄褐色	
6 8	SD 0 1外c	甕	口径 144	1/7	暗赤褐色	
6 9	SD 0 1外c	甕	口径 125	1/6	暗褐色	
7 0	SD 0 1外c	小型壺	口径(74)	1/9	赤彩 暗赤褐色	
7 1	SD 0 1外c	鉢	口径 210	1/8	淡褐色	
7 2	SD 0 1外c	鉢	口径(146)	1/7	淡橙褐色	
7 3	SD 0 1外c	高坏		全周	淡褐色	
7 4	SD 0 1外c	器台	口径(216)	1/9	橙褐色	
7 5	SD 0 1外c	器台		3/4	黒褐色・淡褐色 淡褐色	
7 6	SD 0 1外c	蓋	鈕径 45	全周	淡黄褐色	
7 7	SD 0 1外c	底部	底径 28	全周	橙褐色	
7 8	SD 0 1外c	底部	底径 14	全周	暗褐色 淡褐色	外面 スス付着
7 9	SD 0 1外c	底部	底径 18	全周	淡茶褐色 褐色	
8 0	SD 0 1外c	底部	底径 33	2/3	暗褐色	
8 1	SD 0 1内a	甕	口径 155	全周	淡褐色	
8 2	SD 0 1内a	甕	口径 136	1/5	暗褐色	
8 3	SD 0 1内a	甕	口径(172)	1/9	暗褐色 淡褐色	
8 4	SD 0 1内a	鉢	口径 96 底径 22 器高 46	1/2	暗褐色	
8 5	SD 0 1内a	蓋	鈕径 32	全周	赤彩 黒褐色	
8 6	SD 0 1内b	蓋	口径 36 器高 55	1/2	淡褐色	
8 7	SD 0 1内b	甕	口径(223)	1/9	暗褐色 淡褐色	外面 スス付着
8 8	SD 0 1内b	甕	口径 190	1/8	淡橙褐色	外面スス付着
8 9	SD 0 1内b	甕	口径 198	1/6	褐色 灰褐色	
9 0	SD 0 1内b	甕	口径 192	1/8	褐色 淡褐色	外面 スス付着
9 1	SD 0 1内b	甕	口径 252	1/7	淡褐色	

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外内	備考
9 2	SD 0 1内b	蓋	鈕径 45 口径 149	1/3	淡褐色 淡橙褐色	
9 3	SD 0 2 a	甕	口径(200)	1/10	褐色	
9 4	SD 0 2 a	甕	口径 232	1/12	淡黄褐色	
9 5	SD 0 2 a	壺	口径(158)	1/9	淡黄褐色	
9 6	SD 0 2 a	高坏		1/8	淡褐色 褐色	
9 7	SD 0 2 a	高坏脚		全周	褐色 暗褐色	黒班あり
9 8	SD 0 2 a	器台		1/4	淡橙褐色	
9 9	SD 0 2 a	高坏	裾径 109	2/3	淡橙褐色 淡褐色	
1 0 0	SD 0 2 a	高坏	裾径 138	1/4	淡橙褐色	
1 0 1	SD 0 2 a	台付鉢	口径 200 底径 54 器高 69	全周	橙褐色	
1 0 2	SD 0 9 c	壺	口径(99)	1/9	淡褐色	
1 0 3	SD 1 0 a	壺	口径(115)	1/10	暗褐色 褐色	
1 0 4	SD 1 0 a	壺	口径(176)	1/8	淡橙褐色	
1 0 5	SD 1 0 b	甕	口径 176	1/4	橙褐色	
1 0 6	SI 0 2上層	甕	口径 280	1/2	淡橙褐色	
1 0 7	SI 0 2上層	甕	口径 137	1/5	淡橙褐色	
1 0 8	SI 0 2上層	甕	口径 171	1/5	淡褐色	
1 0 9	SI 0 2上層・下層	甕	口径 140	1/5	淡褐色	
1 1 0	SI 0 2上層	甕	口径(170)	1/7	褐色・暗褐色混 褐色	
1 1 1	SI 0 2上層	甕	口径 153	1/6	褐色	
1 1 2	SI 0 2上層	甕	口径 172	1/4	淡橙褐色	
1 1 3	SI 0 2上層	甕	口径 160	1/7	橙褐色 暗赤褐色	
1 1 4	SI 0 2上層	甕	口径(160)	少片	暗赤褐色	
1 1 5	SI 0 2上層	甕	口径 160	1/4	淡褐色	
1 1 6	SI 0 2上層	甕	口径(188)	1/8	褐色	
1 1 7	SI 0 2上層・下層	甕	口径 207	1/4	褐色 淡褐色	
1 1 8	SI 0 2上層	甕	口径 174	1/5	淡褐色	
1 1 9	SI 0 2上層	甕	口径 200	1/6	暗褐色 淡褐色	

出土遺物一覽表 (3)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
120	SI02 上層	甕	口径(200)	1/9	淡褐色	
121	SI02 上層	甕	口径 138	1/4	橙褐色	
122	SI02 上層	甕	口径 145	1/4	淡橙褐色	
123	SI02 上層・下層	甕	口径(150)	少片	橙褐色	
124	SI02 上層・下層	壺	口径(160)	1/12	淡橙褐色 暗褐色~淡橙褐色	
125	SI02 上層	壺		1/5	褐色 暗褐色	
126	SI02 下層	壺	口径 108	1/6	橙褐色	
127	SI02 上層・下層	壺	口径 108 頸径 84 胴径 135	1/3	淡褐色 淡褐色	黒斑
128	SI02 上層	鉢	口径(17.6)	1/6	淡褐色	
129	SI02 上層	高坏	口径 288	1/4	淡黄褐色・一部黒褐色 淡黄褐色	
130	SI02 上層	高坏	口径 254	1/3	褐色	
131	SI02 上層	高坏	口径(204)	1/3	暗褐色	
132	SI02 上層	高坏		全周	橙褐色	
133	SI02 上層	器台		全周	淡橙褐色	透かし孔3穴
134	SI02 上層	器台		1/2	淡褐色	
135	SI02 上層・下層	蓋	鈕径 38 口径 94 器高 39	1/2	淡橙褐色	
136	SI02 上層	底部	底径 44	全周	淡黄褐色・一部黒褐色 淡黄褐色	
137	SI02 上層	底部	底径 19	全周	淡茶褐色 淡褐色	スス附着
138	SI02 上層	底部	底径 82	1/4	暗褐色・黒褐色 淡褐色	
139	SI02 上層	底部	底径 28	2/3	淡橙褐色	
140	SI02 上層	底部	底径 20	全周	淡褐色 淡橙褐色	
141	SI02 上層	底部	底径 72	全周	淡橙褐色 淡褐色	
142	SI02 下層	底部	底径 40	全周	淡褐色 褐色	
143	SI02 上層・下層	底部	底径 22	2/3	淡褐色 褐色	
144	SI02 上層	底部	底径 62	2/3	褐色 黒褐色	

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
145	SI02 上層	底部	底径 18	全周	淡橙褐色 淡褐色	
146	SI02 上層	底部	底径 18	2/3	褐色・暗褐色 褐色	
147	SI03	高坏	口径 204	2/3	淡橙褐色	
148	SI03	底部	底径 46	1/3	淡橙褐色 淡褐色	
149	SI04	甕	口径(194)	1/9	淡褐色	
150	SI04	甕	口径(157)	1/14	褐色	
151	SI04	甕	口径(170)	1/9	淡黄褐色	
152	SI04	甕	口径(182)	1/9	褐色	
153	SI04	甕	口径(180)	1/9	褐色	
154	SI04	甕	口径(174)	1/9	淡褐色	
155	SI04	甕	口径 184	1/8	褐色 淡橙褐色	
156	SI04 壁溝	高坏	口径 270	1/12	淡橙褐色 淡橙褐色・黒斑	
157	SI04	高坏		小片	淡褐色	
158	SI04	底部	底径 42	1/5	淡褐色	
159	SB01 P1	甕		少片	暗褐色	
160	SB01 P1	壺	口径 132	1/6	淡橙褐色	
161	SB01 P1	器台	口径 215	1/8	淡橙褐色	
162	SB02 P3	甕		少片	橙褐色	外面スス附着
163	SB03 北溝	甕		少片	橙褐色	
164	SB03 南溝	甕	口径 196	1/7	淡茶褐色	
165	SB04	甕	口径 177	1/6	淡茶褐色	外面スス附着
166	SB06 P1	壺	口径(119)	少片	淡褐色	
167	SK01	甕	口径(337)	1/8	淡褐色	
168	SK01	甕	口径(220)	1/10	淡褐色 暗褐色	外面スス附着
169	SK01	甕	口径 176	1/4	淡褐色	外面一部スス
170	SK01	甕	口径 172	1/5	淡橙褐色	
171	SK01	壺	口径 98	1/2	淡褐色 黒褐色	
172	SK01	高坏		全周	淡褐色	
173	SK01	器台	口径(227)	1/16	淡茶褐色 橙褐色	
174	SK01	高坏	裾径 144	1/6	淡橙褐色	

出土遺物一覽表 (4)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外内	備考
175	SK01	底部	底径 23	全周	淡橙褐色 淡褐色	
176	SK02	甕	口径 267	1/8	淡橙褐色	
177	SK03	甕	口径 274	1/7	暗褐色 淡橙褐色	
178	SK03	甕	口径 186	1/9	暗褐色・橙褐色 淡褐色・橙褐色	
179	SK03	甕	口径 174	1/7	淡黄褐色	
180	SK03	甕	口径 192	1/7	淡褐色 淡黄褐色	
181	SK03	高坏		全周	淡褐色・黒褐色 淡褐色	
182	SK04	甕	口径 358	1/2	淡橙褐色・暗褐色 淡黄褐色	
183	SK04	甕	口径(197)	1/9	淡茶褐色 淡黄褐色	
184	SK04	高坏	口径(264)	1/14	淡橙褐色	
185	SK04	台付鉢	底径 42	1/3	淡橙褐色 褐色	
186	SK05	甕	口径(205)	少片	橙褐色	
187	SK08	甕	口径 202	全周	淡褐色	一部スス附着
188	SK08	甕	口径 180 胴径 204	1/3	淡黄褐色(赤褐色混) 淡黄褐色	
189	SK08	甕	口径 195	1/3	淡褐色	
190	SK08	甕	口径(187)	1/8	淡黄褐色	
191	SK08	甕	口径 124	1/2	淡橙褐色	
192	SK08	高坏	裾径 150	1/3	淡橙褐色	
193	SK08	底部	裾径 32	1/4	淡橙褐色	
194	SK10	甕	口径(178)	1/9	橙褐色	
195	SK11	甕		少片	橙褐色	
196	SK11	底部	底径 46	1/2	暗褐色	
197	SK12	高坏	底径 76	1/5	橙褐色	
198	SK13	甕	口径 171	1/8	淡褐色	
199	SK13	甕	口径(166)	1/11	橙褐色	
200	SK13	器台	裾径(182)	1/9	赤彩 淡褐色	
201	SK13	高坏		1/3	褐色	
202	SK14	底部	底径 52	全周	淡褐色 灰褐色	
203	SK15	甕	口径 146	1/3	淡橙褐色	
204	SK16	甕	口径 233	1/6	暗褐色 淡褐色	
205	SK16	甕	口径 206	1/2	暗褐色 淡褐色	外面 スス附着
206	SK16	甕	口径 185	1/6	橙褐色	外面スス附着

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外内	備考
207	SK16	甕	口径 140	1/7	淡褐色	黒班あり
208	SK18	甕	口径 197	1/2	淡黄褐色 灰褐色	スス痕跡あり
209	SP01	高坏		全周	淡橙褐色	
210	SP02	甕	口径(166)	少片	暗褐色 淡橙褐色	スス附着
211	SP02	鉢	口径(120)	少片	淡橙褐色	
212	SP03	甕	口径(178)	1/8	褐色	
213	SP03	甕	口径 158	1/4	橙褐色	
214	SD03	甕	口径(174)	1/10	淡褐色	
215	SD03	鉢	口径(174)	1/10	橙褐色	
216	SD04E	甕	口径(183)	1/9	淡褐色	
217	SD04W	甕	口径 163	1/8	淡橙褐色	
218	SD04W	甕	口径 207	1/8	淡褐色	
219	SD04W	甕	口径 200	1/8	淡褐色	
220	SD04W	甕	口径(220)	1/15	淡褐色	
221	SD04W	壺	口径 124	1/6	淡橙褐色	
222	SD04W	甕	口径(156)	1/10	橙褐色	
223	SD04W	甕	口径 168	1/6	褐色 淡橙褐色	
224	SD04W	甕	口径(367)	小片	淡茶褐色 淡橙褐色	
225	SD04W	甕	口径(187)	1/10	淡橙褐色	
226	SD04W	壺		1/6	淡褐色	
227	SD04W	壺	口径 148	1/4	橙褐色	摩耗著しい
228	SD04W	高坏	裾径 155	1/6	橙褐色	
229	SD04W	高坏		全周	淡褐色	透かし穴 4穴(径9mm)
230	SD04W	高坏	口径 101	1/4	橙褐色	
231	SD04W	底部	底径 120	1/3	暗褐色	
232	SD04W	底部	底径 38	1/8	褐色 淡橙褐色	摩耗著しい
233	SK07	深鉢		少片	茶褐色	縄文土器
234	SK07	深鉢		少片	茶褐色	縄文土器
235	SD05	深鉢		少片	灰褐色	縄文土器
236	SD01	深鉢		少片	茶褐色	縄文土器
237	SI01ピット	深鉢		少片	灰褐色	縄文土器

出土遺物一覽表 (5)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	産地	備考 (時期等)
238	SD05	碗	底径 42	肥前	磁器・離れ砂 17世紀前半
239	SD05	碗	底径 56	肥前	染付磁、17世紀末
240	SD05	碗	底径 50	肥前	陶胎染付 18世紀前半
241	SD05	碗	口径 90	肥前	染付磁 コンニャク印判 18世紀前半
242	SD05	碗	口径(93)	肥前	染付磁 18世紀前半か
243	SD05	碗	口径 90	肥前	透明釉陶・呉器手 17世紀後半か
244	SD05	碗	口径 82	肥前	白磁 17世紀末～18世紀初頭
245	SD05	碗	口径 95	肥前	白磁、18世紀前半か
246	SD05	碗	底径 45	肥前	透明釉陶 17世紀後半
247	SD05	小盃	口径 73	肥前	染付磁 18世紀前半
248	SD05	碗	口径(118)	不明	色絵・明治期
249	SD05	皿	底径 46	肥前	砂目陶・灰釉 17世紀前半
250	SD05	皿	底径 40	肥前	染付磁 蛇の目釉剥ぎ 18世紀前半か
251	SD05	皿	底径 39	肥前	白磁 蛇の目釉剥ぎ 18世紀前半
252	SD05	皿	底径 48	肥前	銅緑釉陶 蛇の目釉剥ぎ 17世紀末～18世紀前半
253	SD05	皿	底径 48	肥前	銅緑釉陶 蛇の目釉剥ぎ 17世紀末～18世紀前半
254	SD05	皿	底径 47	肥前	銅緑釉陶 蛇の目釉剥ぎ 17世紀末～18世紀前半
255	SD05	播鉢		肥前	
256	SD05	播鉢		肥前	
257	SD05	播鉢	口径(283)	肥前	鉄釉陶 18世紀末～19世紀前半
258	SD05	播鉢		越前	
259	SD05	蓋	口径 64	不明	陶器 鉄絵・緑釉・貫入
260	SD07	鉢	口径 107	不明	
261	SD07	播鉢	底径 86	越前	塗り土
262	SD07	皿	底径 47	肥前	銅緑釉陶 蛇の目釉剥ぎ 17世紀末～18世紀前半
263	SD08	壺	口径(300)	越前	室町期か 63

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	産地	備考 (時期等)
264	SD08	土錘	直径 31 長さ 49	在地	30.8g
265	SD08	碗	口径 103 底径 44 器高 60	肥前	染付磁 高台内無釉 17世紀中頃
266	SD08	碗	底径 46	肥前	染付磁 17世紀後半
267	SD08	碗		肥前	染付磁 コンニャク印判 17世紀末～18世紀前半
268	SD08	皿	口径(112)	肥前	砂目陶・灰釉 17世紀前半
269	SD08	皿	口径(136)	肥前	砂目陶・溝縁 灰釉・油煤痕 17世紀前半
270	SD08	皿	口径(132)	肥前	砂目陶・溝縁 灰釉 17世紀前半
271	SD08	皿		肥前	砂目陶・溝縁 灰釉 17世紀前半
272	SD08	皿	口径 128 底径 45 器高 30	肥前	銅緑釉陶 蛇の目釉剥ぎ 17世紀末～18世紀前半
273	SD08	底部	底径 113	加賀	
274	E区包含層	播鉢		肥前	陶・鉄釉 17世紀前半

図番号	出土地点	器種	法量(mm, g) ()は欠部				石質等備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
275	SD01	石斧	(189)	82	31	(670)	安山岩質凝灰岩
276	SI03	石斧	(74)	(62)	29	(147)	砂岩
277	SD08	磨製石斧	42	27	9	155	流紋岩
278	SD01	磨石	(100)	(70)	34	(394)	砂岩
279	SI03	砥石	145	71	147	(711)	泥岩
280	SD02a	石鏃	35.9	17.0	3.9	2	輝石安山岩
281	SP04	勾玉	12.8	5.3	3.8	4	翡翠?
282	SI02 下層	剥片	24.6	23.4	15.5	5.5	緑色凝灰岩
283	SD05	砥石	(56)	35	12	(26.1)	凝灰岩
284	SD05	砥石	(72)	34	25	(88.9)	凝灰岩
285	包含層	砥石	(41)	(28)	(28)	(41)	凝灰岩
286	SD05	不明				(274)	砂岩
287	SD08	行火				(110)	ノミ巾1.4cm 軽石凝灰岩(在地)
288	SD05	鎌	(130)	29	5	(25.9)	



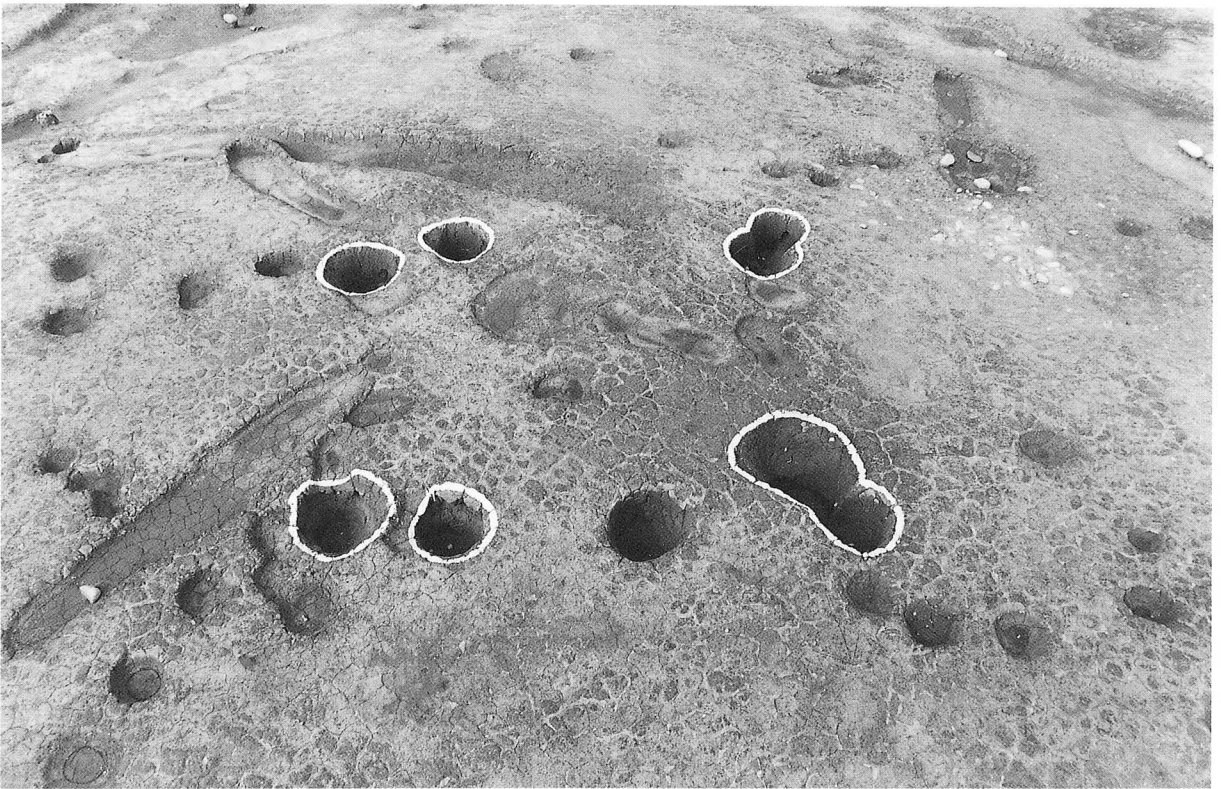
東
調
査
区

西
調
査
区

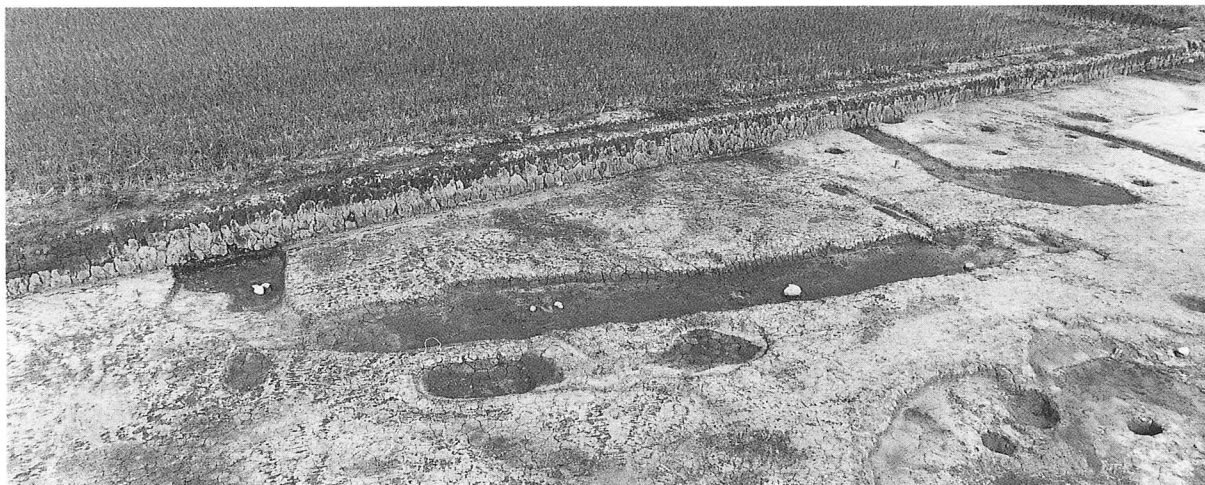
調査区空中写真(←北)



SI 01・SD01 (西より)



SI 01 柱穴部 (南東より)



SI 05 (SD 02) (南西より)



SI 07 (SD 10) (南西より)



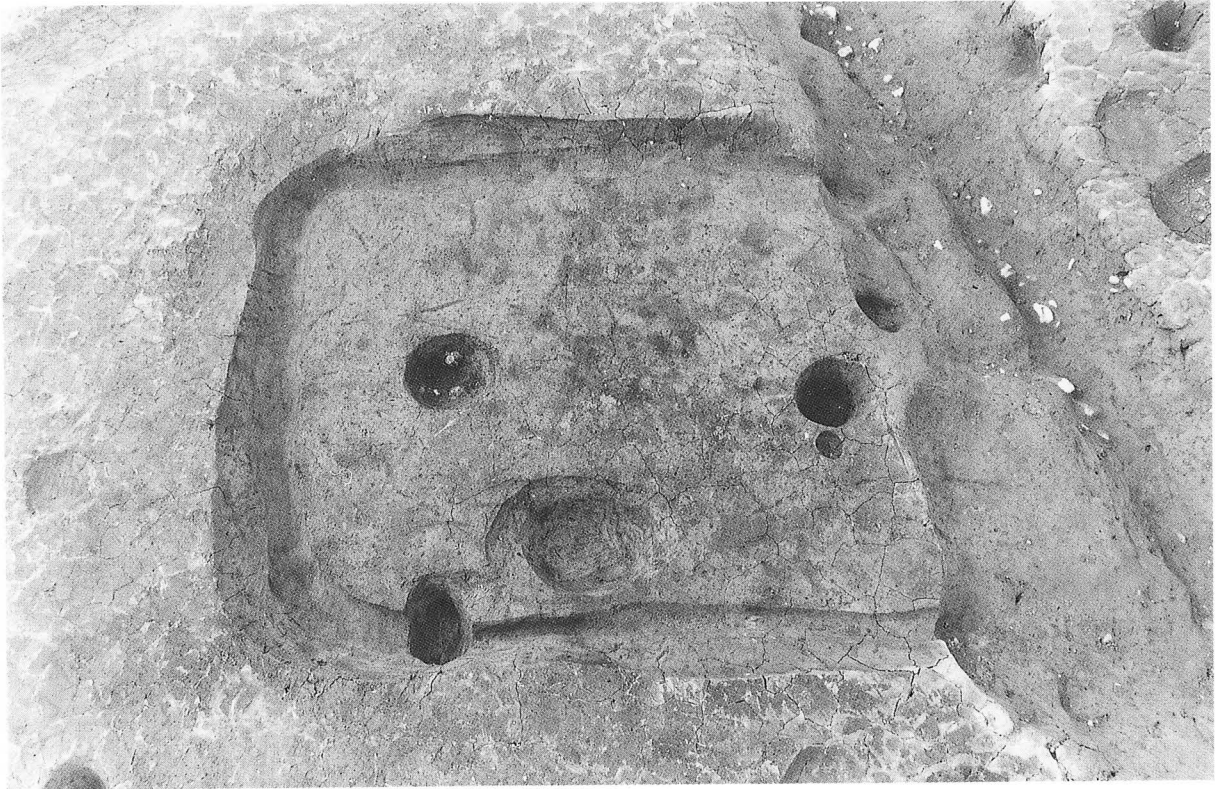
SI 06 (SD 09) (東より)



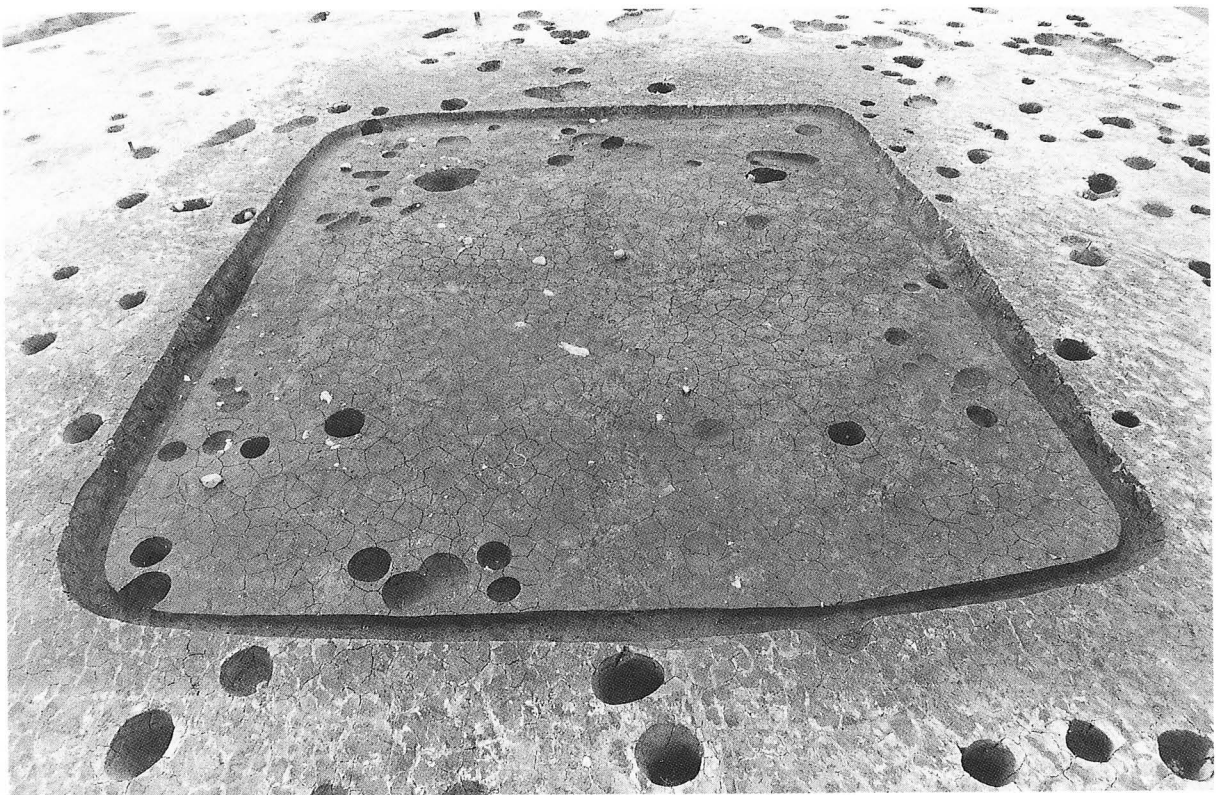
SI 02 土器出土状況



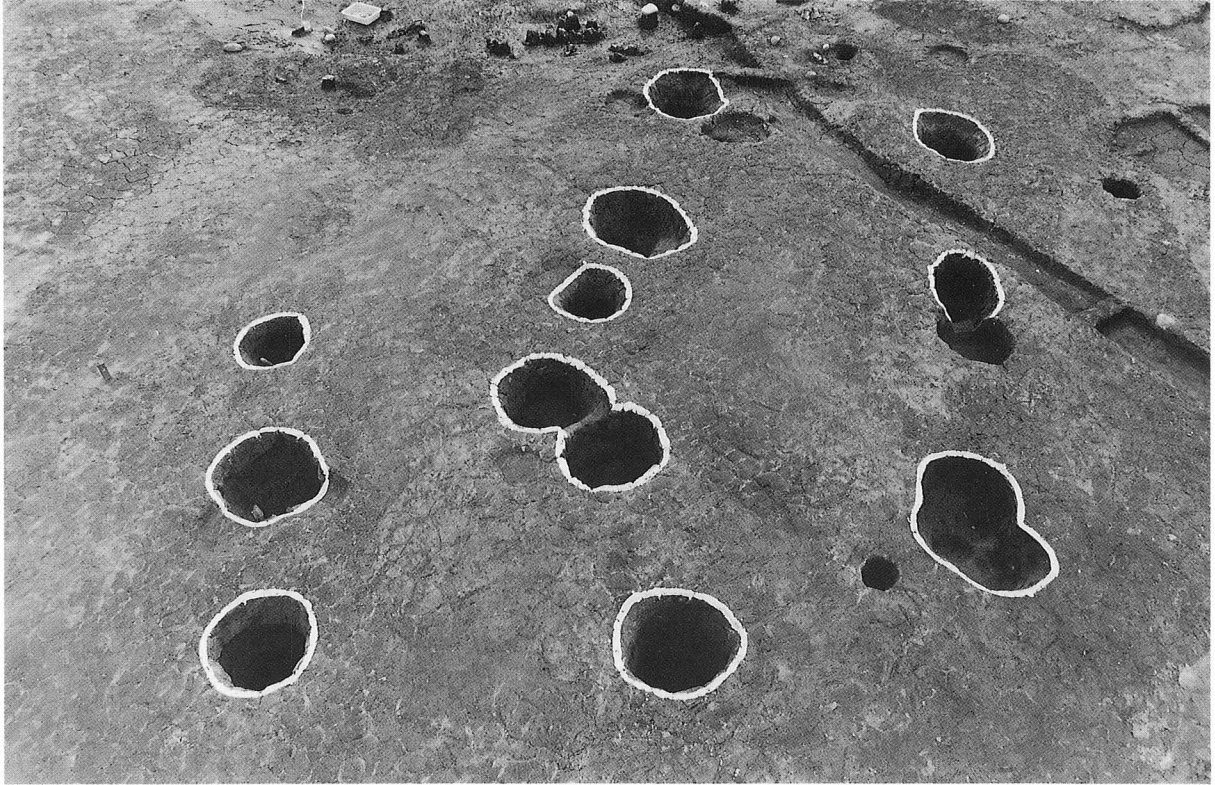
SI 02 (南より)



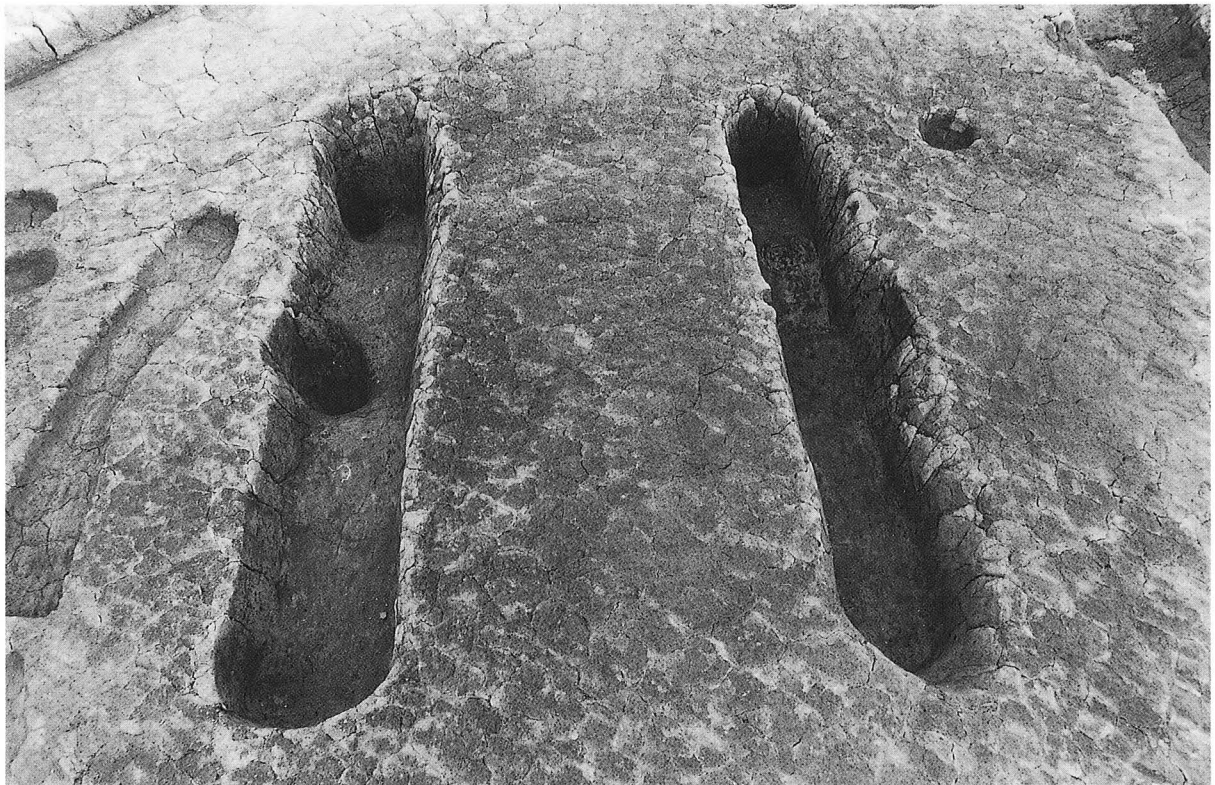
SI 03 (東より)



SI 04 (北東より)



SB02(左)・SB01(北東より)



SB03(南東より)



SB04 (南より)



SB05 (南東より)



SB06 (北東より)



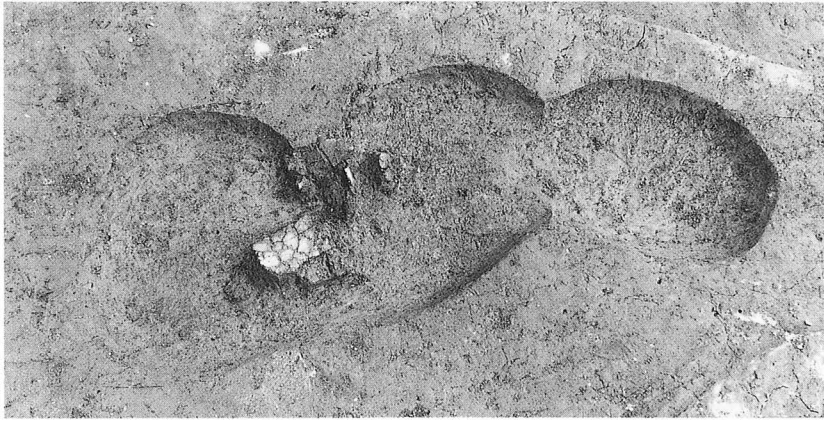
SK 03



SK 04



SK 06



SK 07

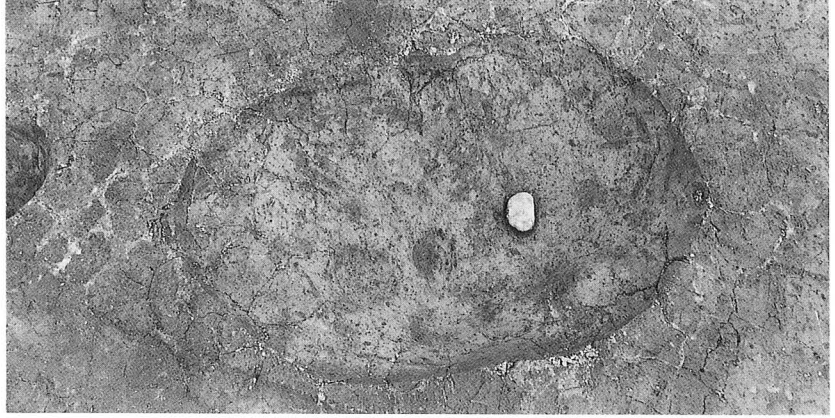


SK 08

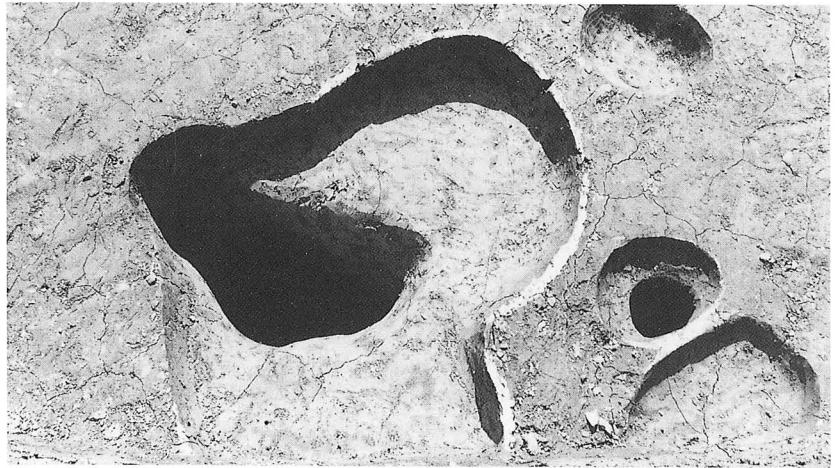


SK 10 · SK 09

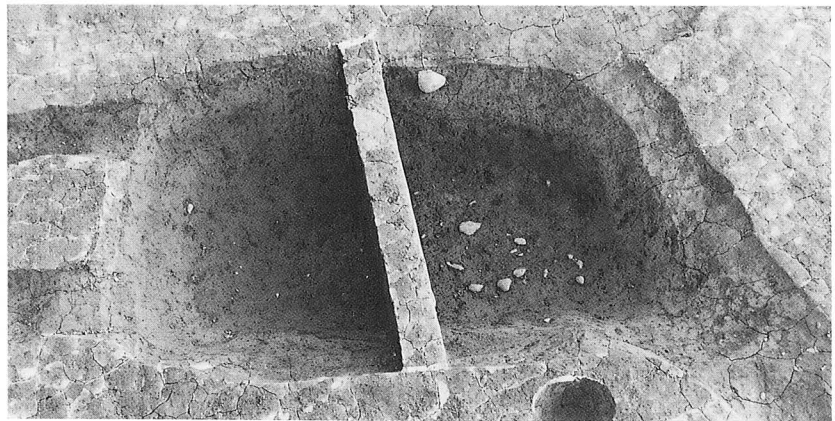
SK 11



SK 15

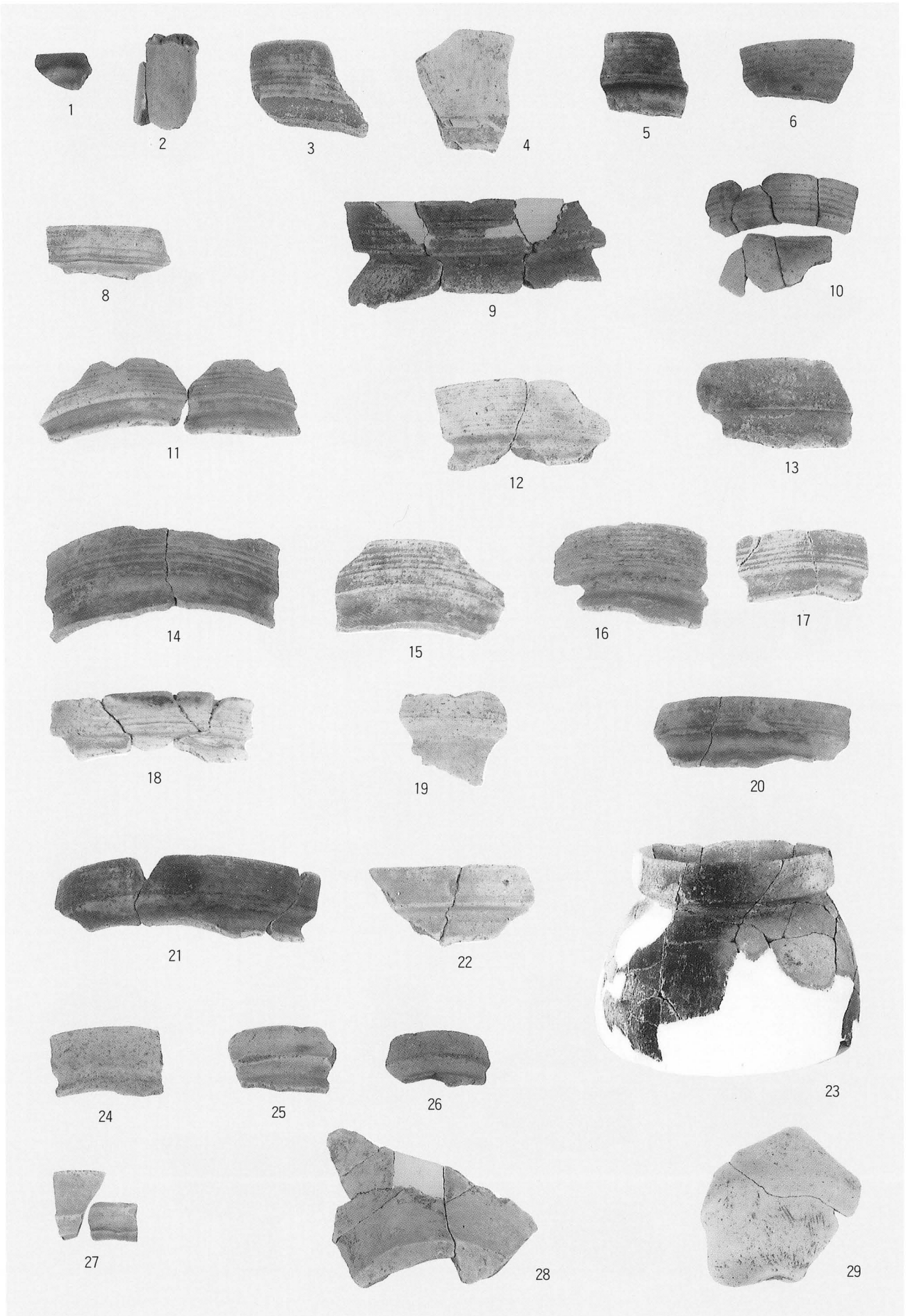


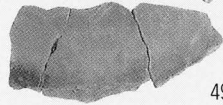
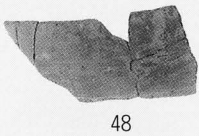
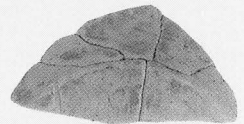
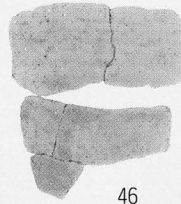
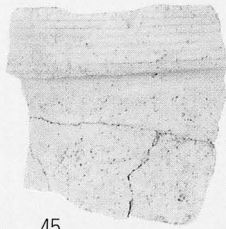
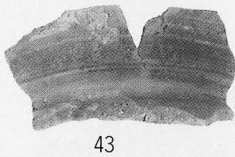
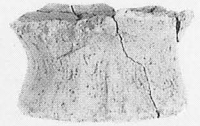
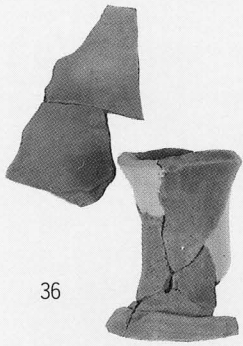
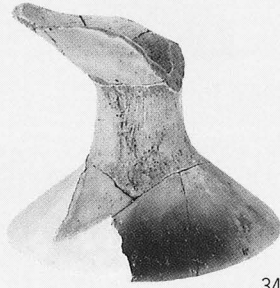
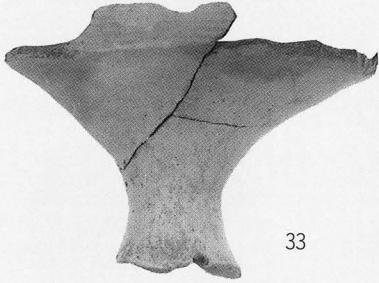
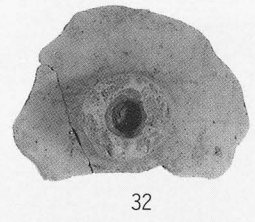
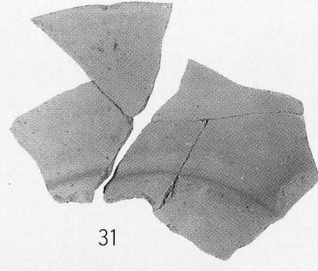
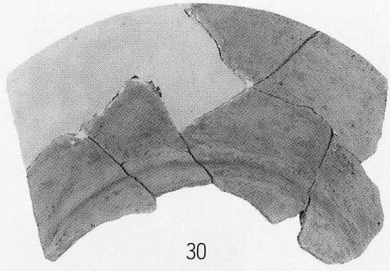
SK 17



SK 16



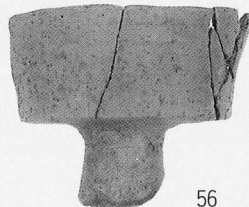
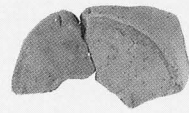
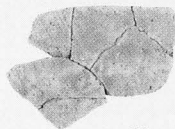


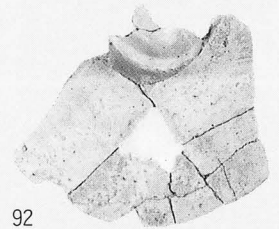
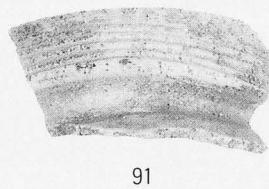
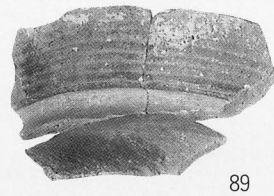
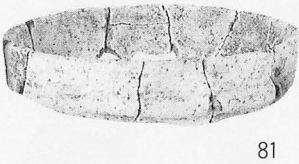
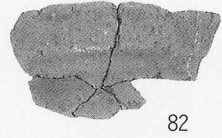
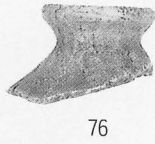
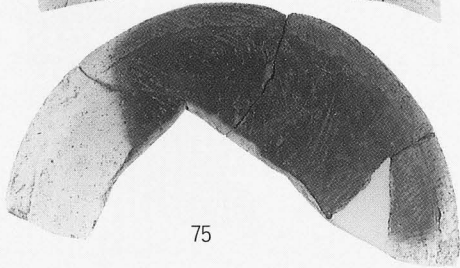
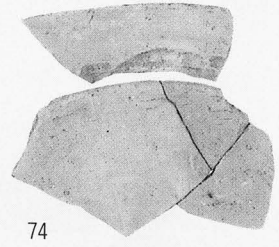
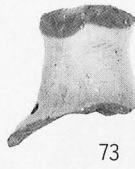
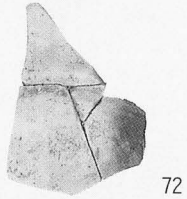
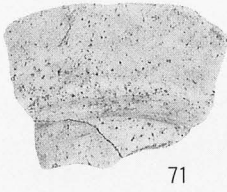
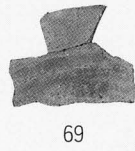
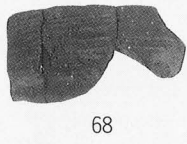
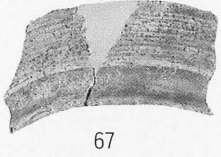
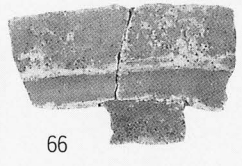
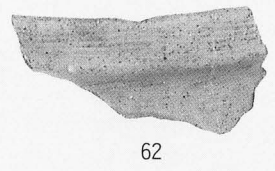
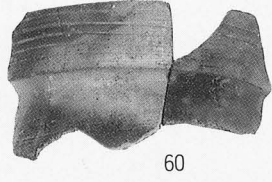
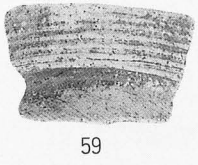


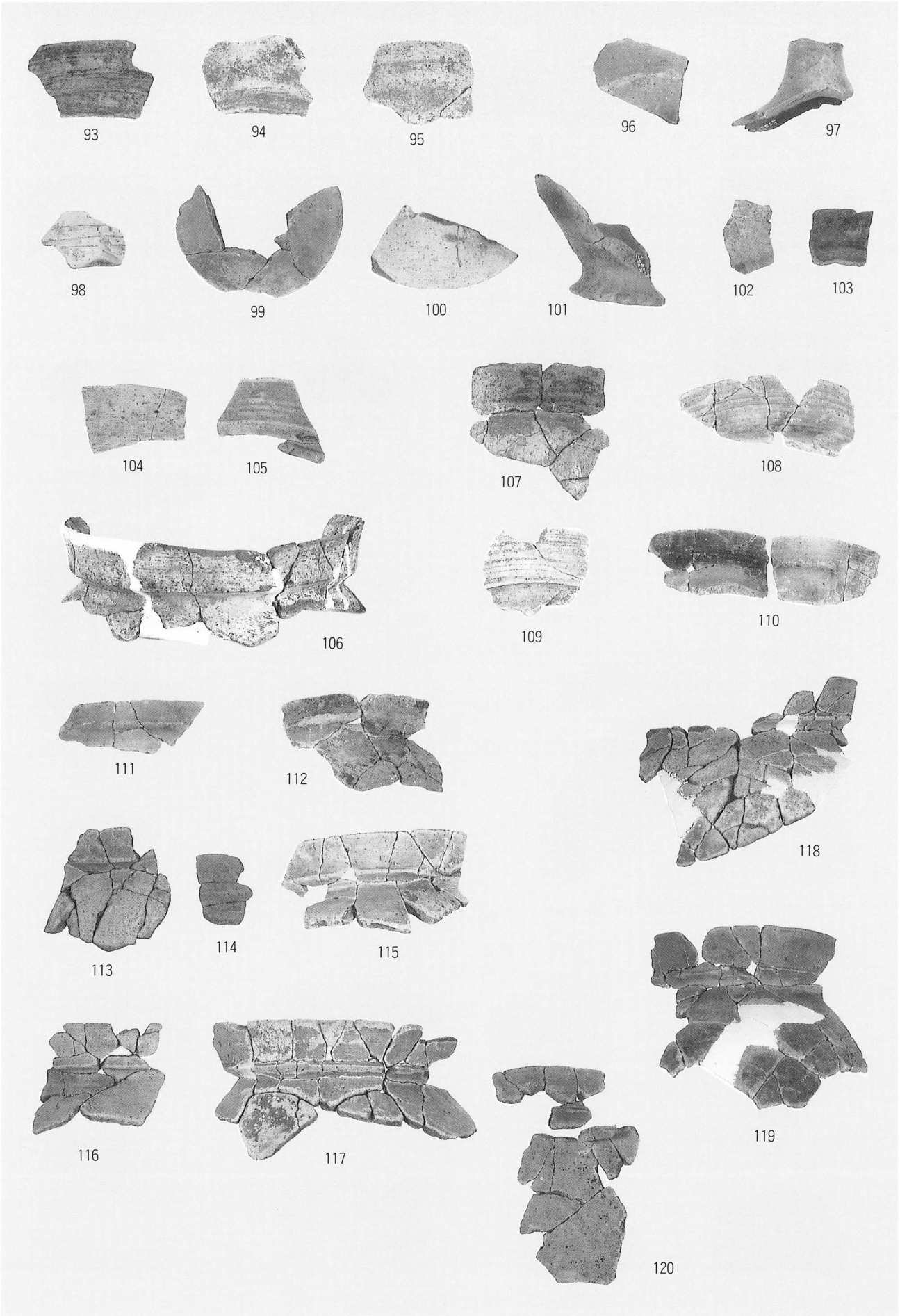
52

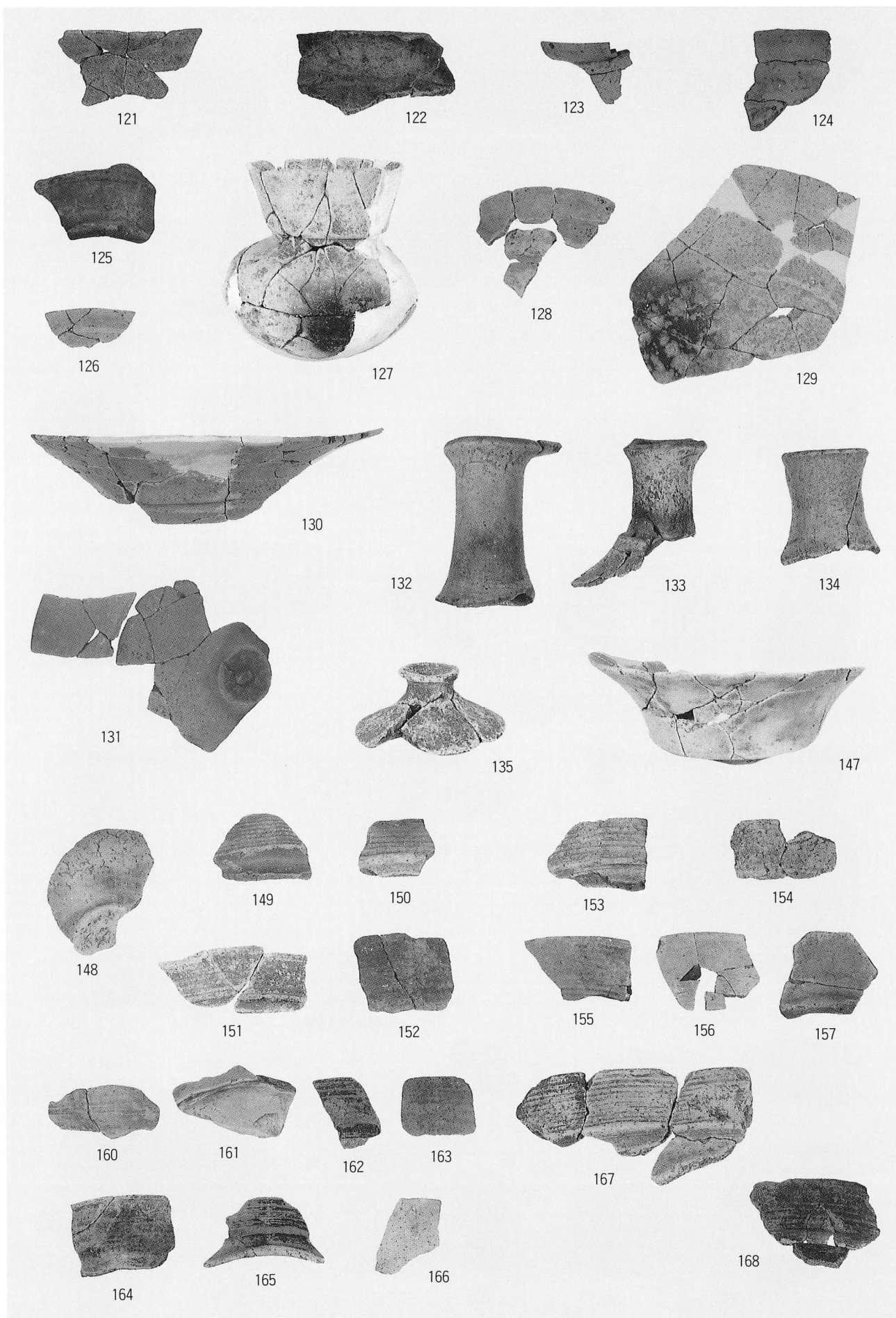
53

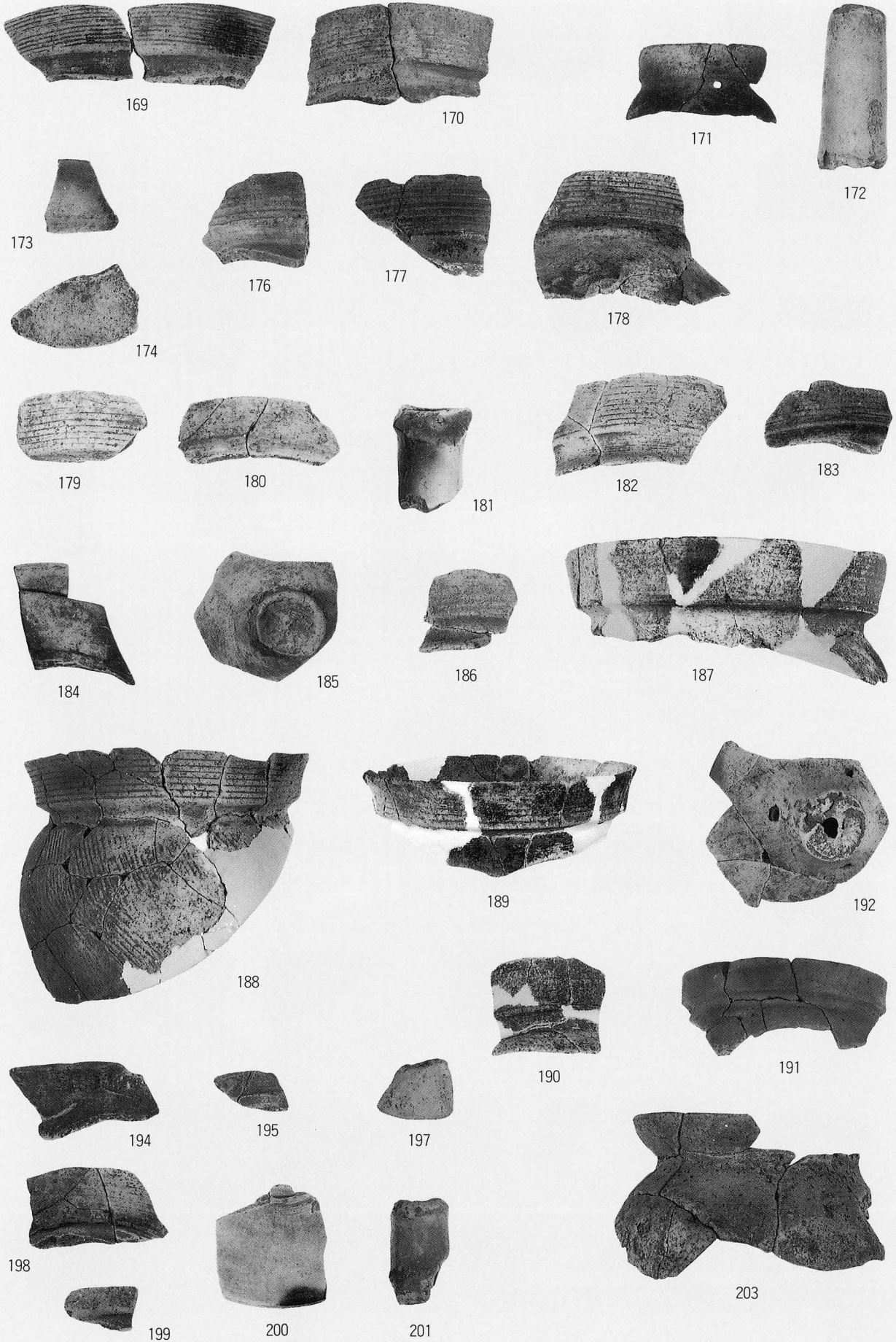
54

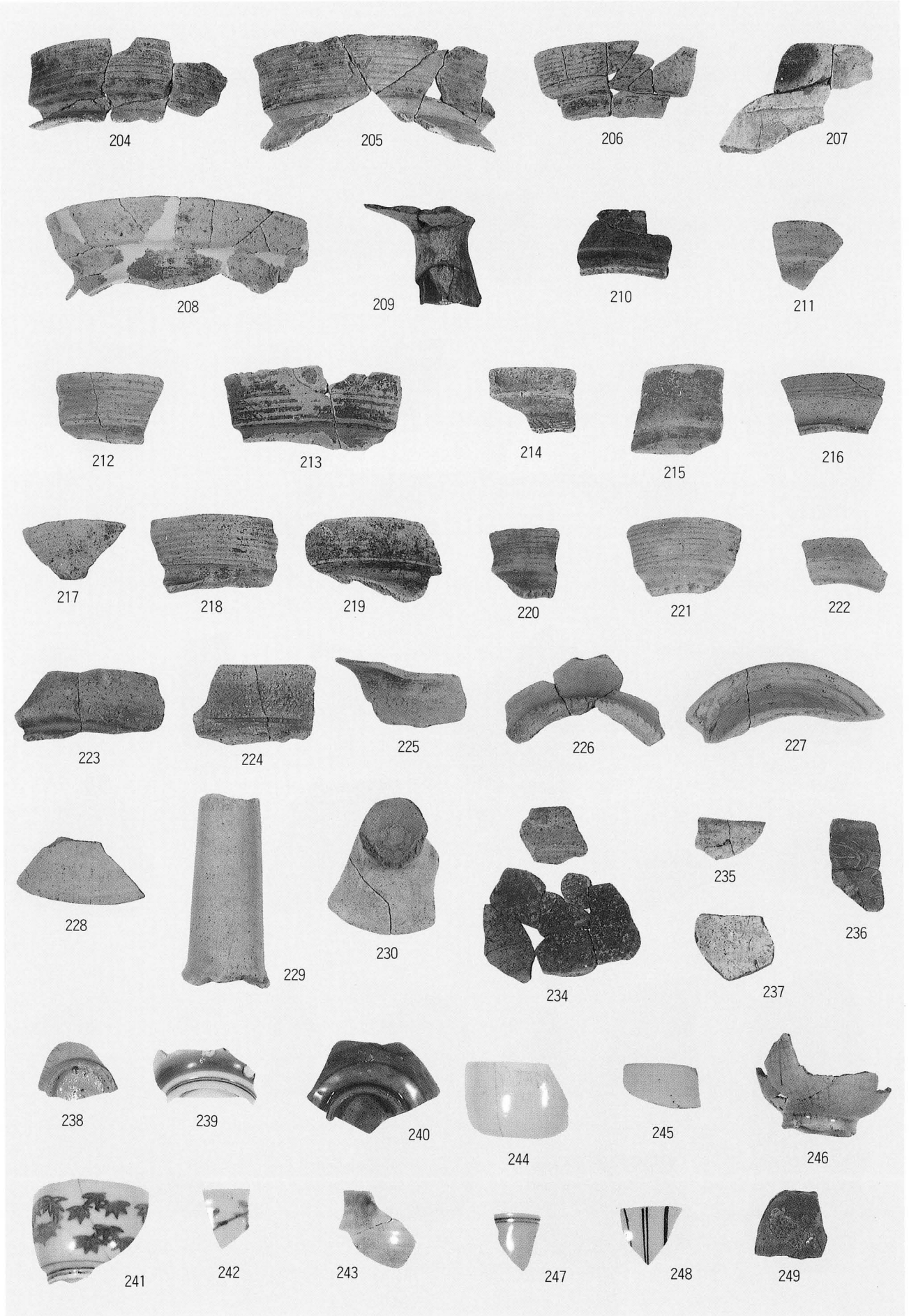


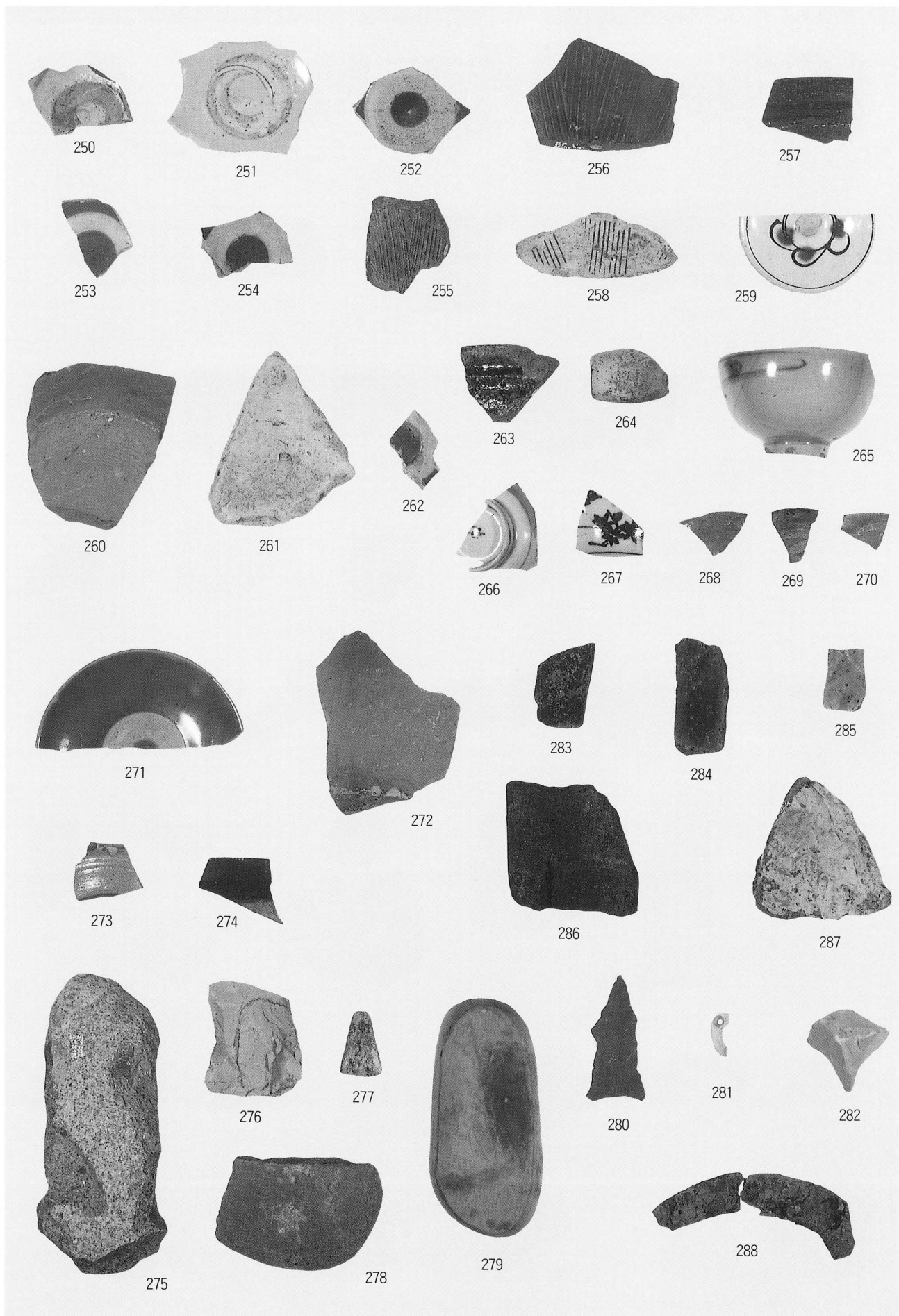










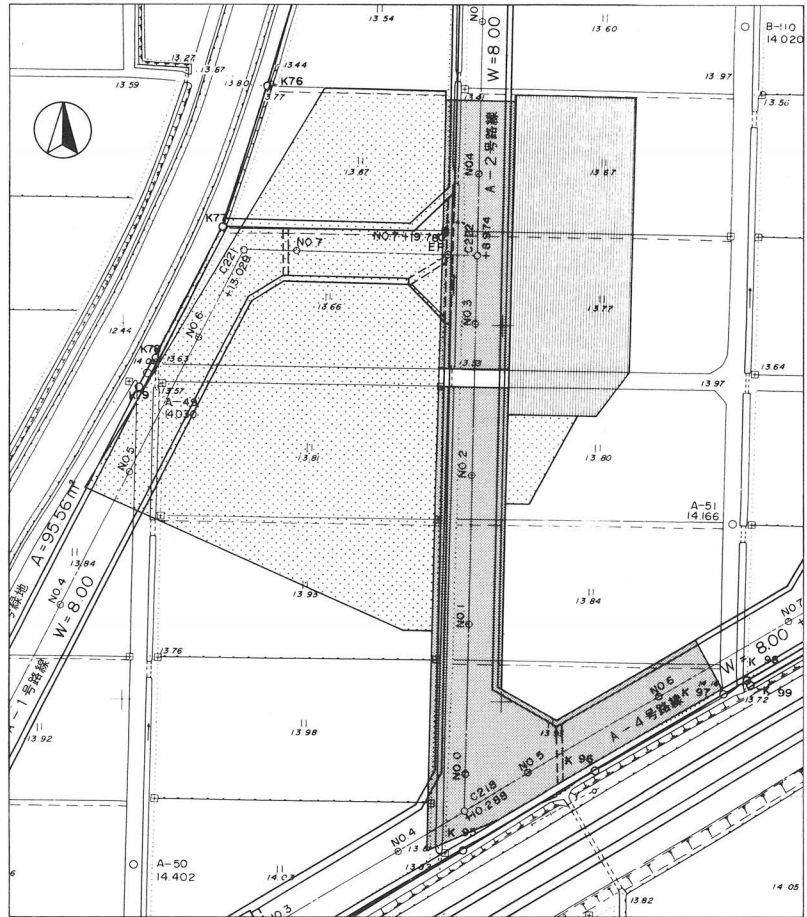


二日市イシバチ遺跡

IV 二日市イシバチ遺跡

1 調査の経過と概要

土地区画整理事業の工事計画に対応すべく平成4年度(1992年)の第1次調査は遺跡の中央を南北に設計される道路部分について実施することとなり、11月4日より開始し12月21日に終了した。調査区の北では弥生時代後期後半法仏式期の竪穴建物2棟SI01・02、南では中世期14世紀頃の竪穴状遺構SX02や井戸、土坑を検出し、本遺跡の主たる時期を把握できた。また北東方向へ流れる旧河道を南側で確認している。調査面積は1200㎡である。開発計画としてこの地区は準工業地域としての土地利用計画がなされており、第1次調査終了後この東側に自動車整備工場の進出が決定した。この為翌5年度(1993年)は6月3日より7月7日にかけて面積700㎡の第2次調査を実施した。前回



第1図 二日市イシバチ遺跡調査図 (1/1,000)

- 平成4年(1992年)調査区
- ▨ 平成5年(1993年)調査区
- ▤ 平成6年(1994年)調査区

未検出部分の残る竪穴建物SI02の検出と併せ新たに1棟SI03を検出した。中世期では井戸、土坑を検出している。地山は東の旧河道へ向かい緩く傾斜しシルト質土から粘質土へ変化していく。平成6年度の第3次調査は第1次調査の西側に当たる区域の道路築造に伴うものであり、街区内を含めた安原川までの区域2050㎡の発掘調査を4月22日から9月14日にかけて実施した。弥生時代後期後半では竪穴建物SI04と掘立柱建物SB01を検出し、中世期では竪穴状遺構SX01、井戸、掘立柱建物、土坑などを確認した。調査は吉田が担当し、平成6年度においては一部徳野裕子が補佐した。調査面積は合計3950㎡である。出土品の整理作業は平成7～8年度に実施した。

調査では下記の方々に御協力いただいた。

現場作業

浅田 恵子	市村美知栄	大瀬戸武夫	尾倉 利男	北川 弘子	小松 義一	庄田トキ子
高出マチ子	谷口 珠江	高田 作次	塚本 房子	塚本千代子	塚本 友江	中橋 都
西 幸次	長谷川啓子	浜田 五郎	浜野 光蔵	早崎 長三	半村美紀子	東 猛
古矢 朋子	本田 典子	松原 敏夫	宮田 文雄	宮田 澄子	山崎 友子	

整理作業

市村美知栄 大杉 幸江 長谷川啓子



第2図 二日市イシバチ遺跡遺構平面図 (1/200) 座標系 第七系

1 弥生時代以前の遺構と遺物

(1) 竪穴建物

SI01 (第3・8～10図)

調査区北端中央に位置し、他の竪穴建物と併に一群を構成する。平面形は円形ぎみの隅丸五角形を呈し、同心円上に一度規模を拡大し建て替えを図っており、それぞれSI01新、SI01古とする。SI01新の規模は北東～南東軸9.1mこれに直交して9.15m、各一辺は5～5.5m、床面積約62.5㎡を測る大型の竪穴建物である。構造は主柱円形8本と考えられ、主柱穴P1～P6を検出しているが残り2個はSD01に切られたものであろう。主柱穴は壁から1.1～1.2m離れて配置され、柱穴間はP5～P6が3.1mとやや広く、他は2.8mないし2.5mである。径はP1が75cm前後と大きい、他はほぼ50cmであり深さは40～60cmである。壁溝は幅20～30cm、深さ5～9cmで廻る。中央には深さ7cm前後の浅い掘り込みと集石がみられ、深さ15cmのP12、深さ43cmのP13、深さ50cmのP14が存在する。炉跡は不明である。

SI01古はSI01新の床面レベル、標高ほぼ13.05mで壁溝及び柱穴を確認した。規模は北東～南東軸6.9mこれに直交して推定6.7m、各辺は北東2辺が3.5m、他は4.2～4.8m、床面積約36㎡を測る。構造は主柱五角形5本であり、平面形の角に対応してほぼ1m離れて配置され、柱穴間はP7～P8が2.4mと狭く、他は2.9～3.3mである。径はほぼ60cm前後であり深さは30～60cmと不揃いである。壁溝は幅15～30cm、深さ6～10cmで廻る。炉跡は不明である。

遺物はSI01新の覆土からの出土である。床面からは、柱穴ラインの内側より1・8が、13・17・18・25は壁際または壁溝上より出土しており、位置を遺構図に示した。時期は弥生時代後期後半の法仏式期である。

SI02 (第4・10・11・17図)

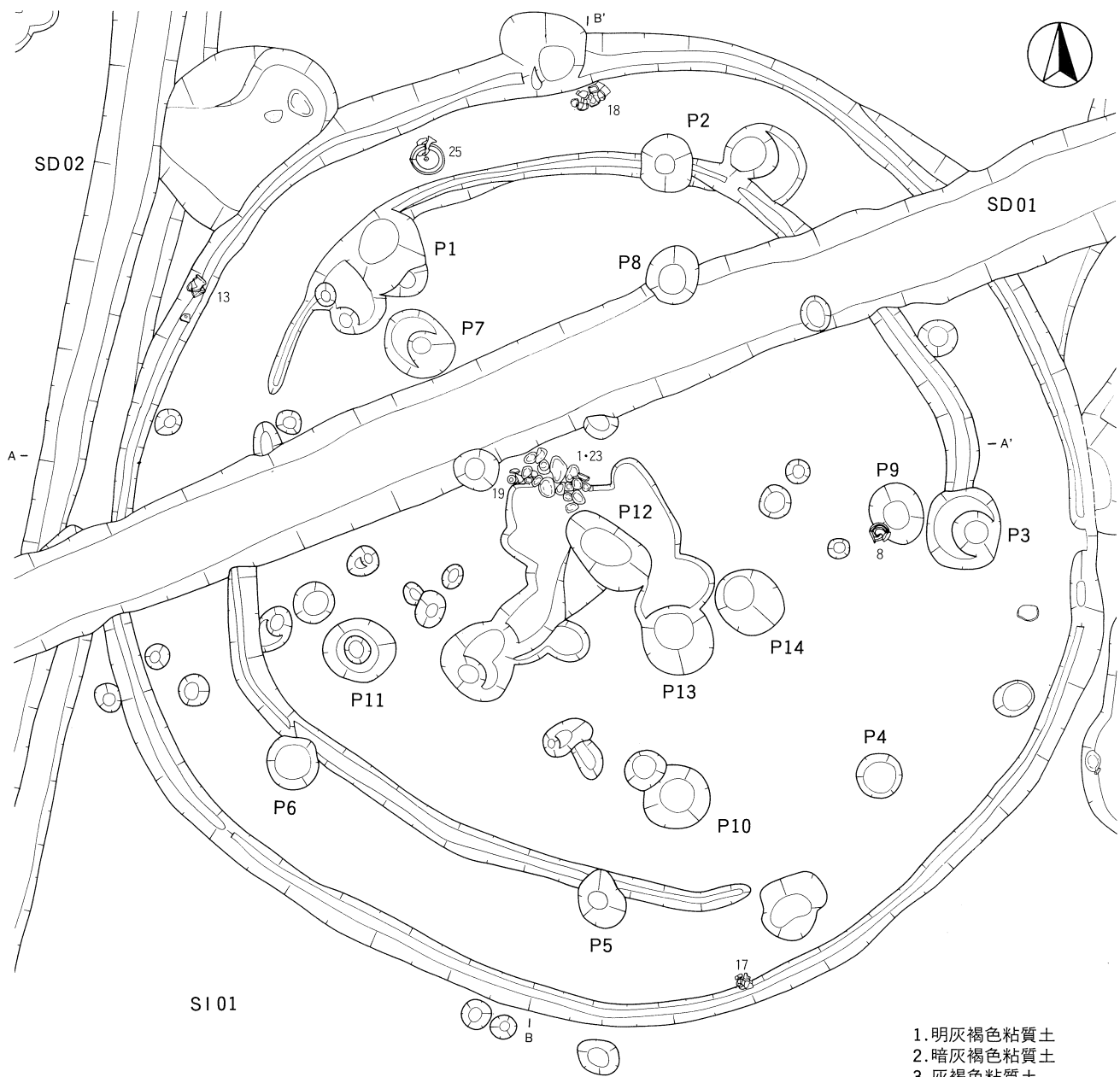
SI01の南東に2m離れ位置する。平面形はやや胴の張る隅丸長方形を呈し、二度の建て替えが考えられる。南東辺に残る段状部分が最初の竪穴であり、深さはほぼ10cmで標高は13.2m、柱穴や規模は不明である。北東辺外側から南東辺にかけて残る壁溝部分が次の段階の竪穴掘り方である。2本主柱構造をもち、主柱穴のP5・P6の間隔は2.8m、径は50と40cm、深さ50と60cmを測る。床面規模や他の遺構は不明である。

最終段階の竪穴は4本主柱構造となり、長辺推定6.9m、短辺5.2m、床面積約29.2㎡を測り、壁高は30cmである。壁溝は幅15～20cm、深さ5～10cmで途切れる箇所もあるが廻る。主柱穴はP1～P4がほぼ方形に3.2m×3.1mの規模で北西よりに配置され、主柱穴の径は50～70cm、深さは35～40cmと前段階より浅い。東南辺壁際に径1m深さ10cmのP7を有し、このすぐ横の床面に炭化物の分布が見られた。地床炉か。床面標高はほぼ13.0mである。

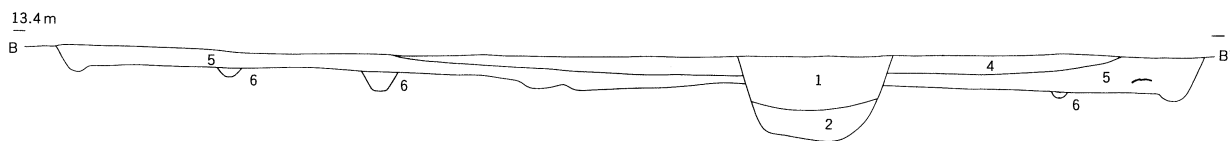
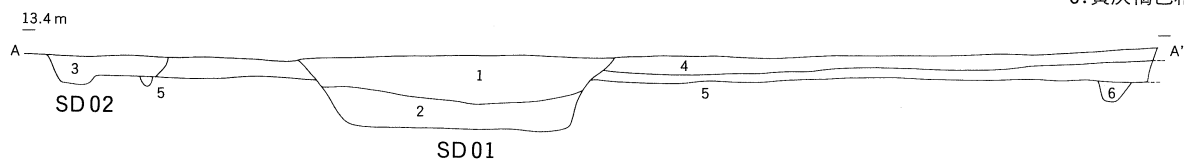
遺物は47・52がP7より、また付近の上層から50・60、下層から40・55、また凝灰岩製の砥石167が下層より出土している。時期は弥生時代後期後半の法仏式期である。

SI03 (第5・11～13・17図)

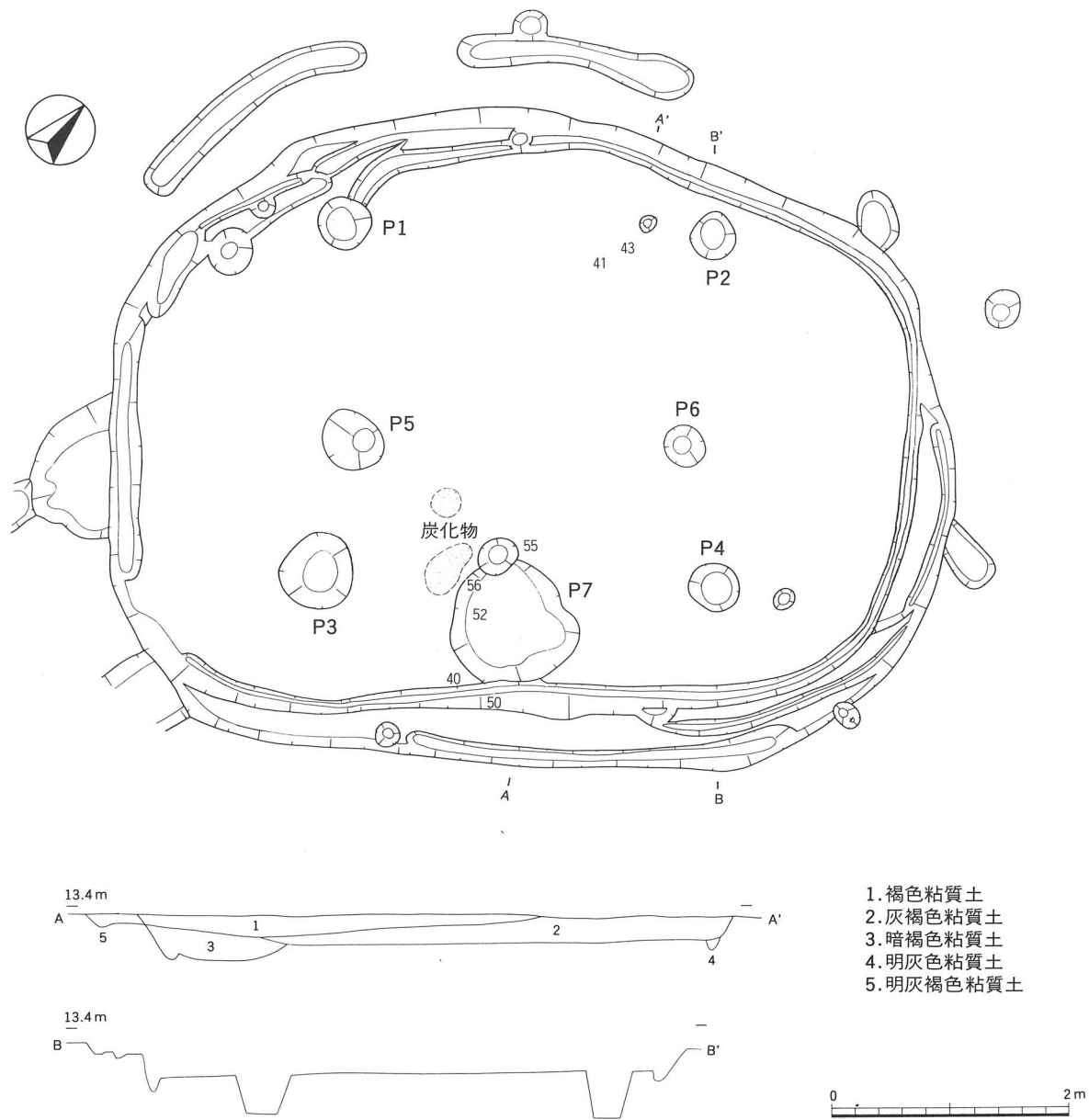
調査区北東端部に位置し、SI02とは2.7mの距離をおく。平面形隅丸六角形を呈し、対角間最大長8.8m、対辺間8.4m、床面積は約53㎡である。また壁高は15～20cm、床面標高はほぼ13.13mである。六角形の6本主柱構造をとり、主柱穴P1～P6は壁から1.0～1.2m離れて配置され、柱穴間は3.3mまたは3.1mである。径は70cm前後及び40cm前後、深さは43～63cmである。壁溝は幅15～25cm、深さ5cmで廻る。中央には長軸2.2m、短軸1.2m深さ6cmの浅い掘り込みと自然石がみられ、この中にP7・P8が存在する。P7は竪穴の中心に位置し径40cm深さ25cm、P8は径ほぼ60cm深さ50cmである。SI01同様浅い



- 1. 明灰褐色粘質土
- 2. 暗灰褐色粘質土
- 3. 灰褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘質土
- 5. 褐色粘質土
- 6. 黄灰褐色粘質土



第3図 SI01 遺構図 (1/60)



第4図 SI02 遺構図 (1/60)

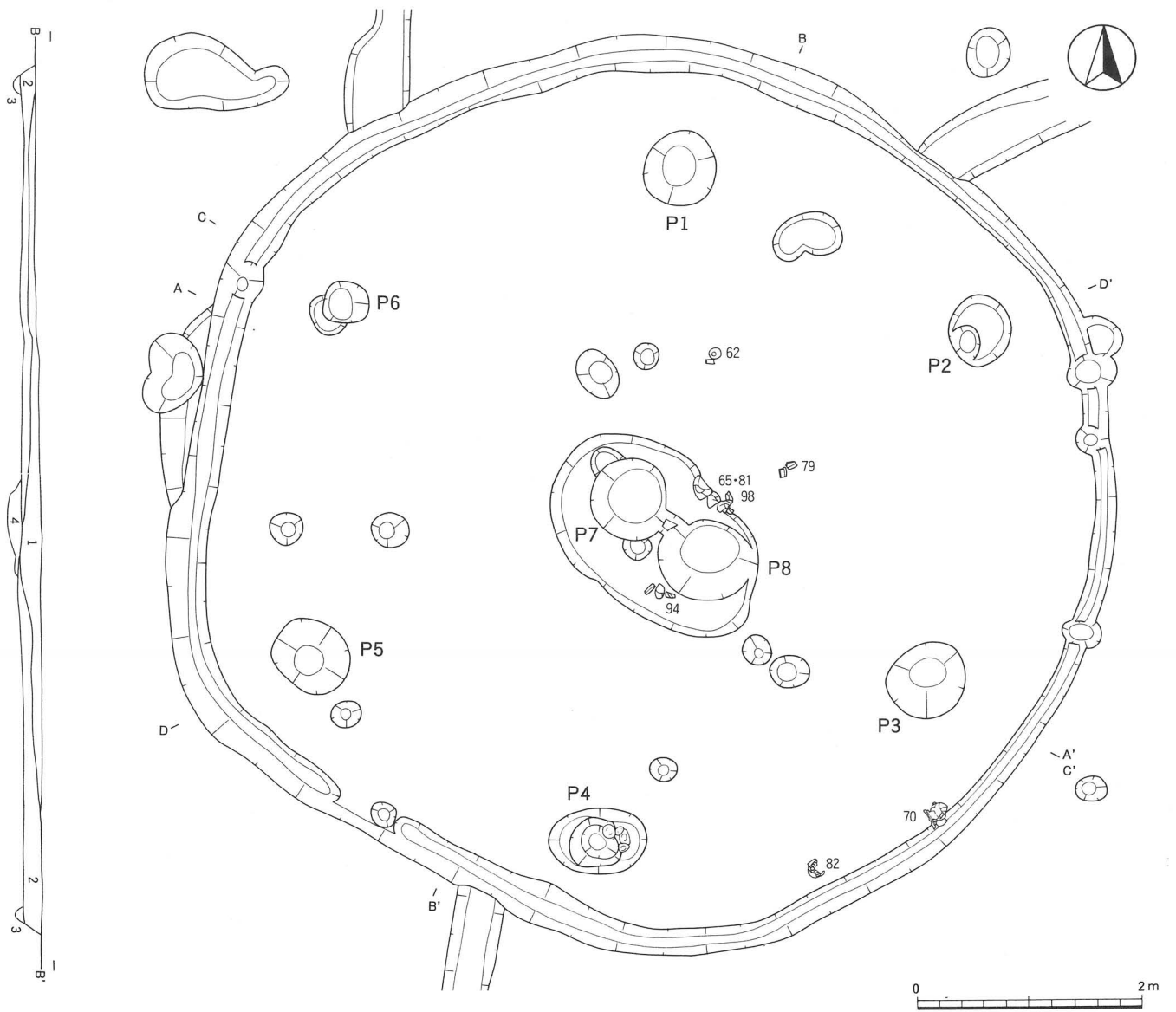
ピットと深いピットが対になる。炉跡は不明である。

遺物は床面東南壁際より70・80、94は中央浅い掘り込みより、91はP8から、62・65・81・98は床より5cm浮き出土している。刃部を欠損する石英安山岩質の打製石斧160はP8より、また下層より綠色珪質凝灰岩の剝片164・165が出土し玉造りが想定される。時期は弥生時代後期後半法仏式期である。

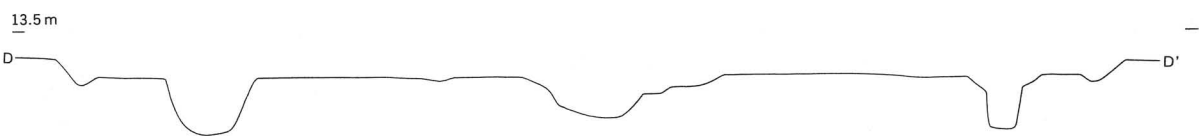
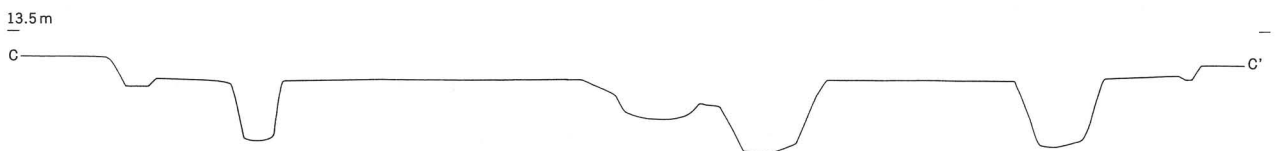
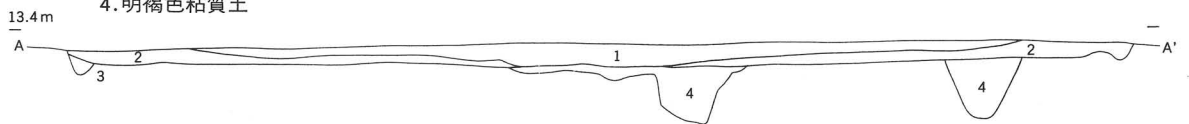
SI04 (第6・13・17図)

調査区北西SI01の南西7mに位置する。平面形隅丸方形の4本支柱構造であり、長辺推定6.6m、短辺6.4mで、床面積推定約36㎡を測る。壁高はほぼ25cm、壁溝は幅20cm前後、深さ5~10cmで廻る。支柱穴はP1~P4がほぼ3.3mの間隔をおいて正方形に配置され、径は60~70cm、深さは46~56cmである。中央には1.5m四方の深さ10cmの浅い掘り込みと、深さ44cmのP5がみられ、この隣に深さ35cmのP6が存在する。深さはいずれも標高ほぼ13.0mの床面を基準とする。炉跡は確認されなかった。西辺中央には小さく方形に張り出す部分、南辺中央には段状になる部分を有するが出口であるかは不明である。

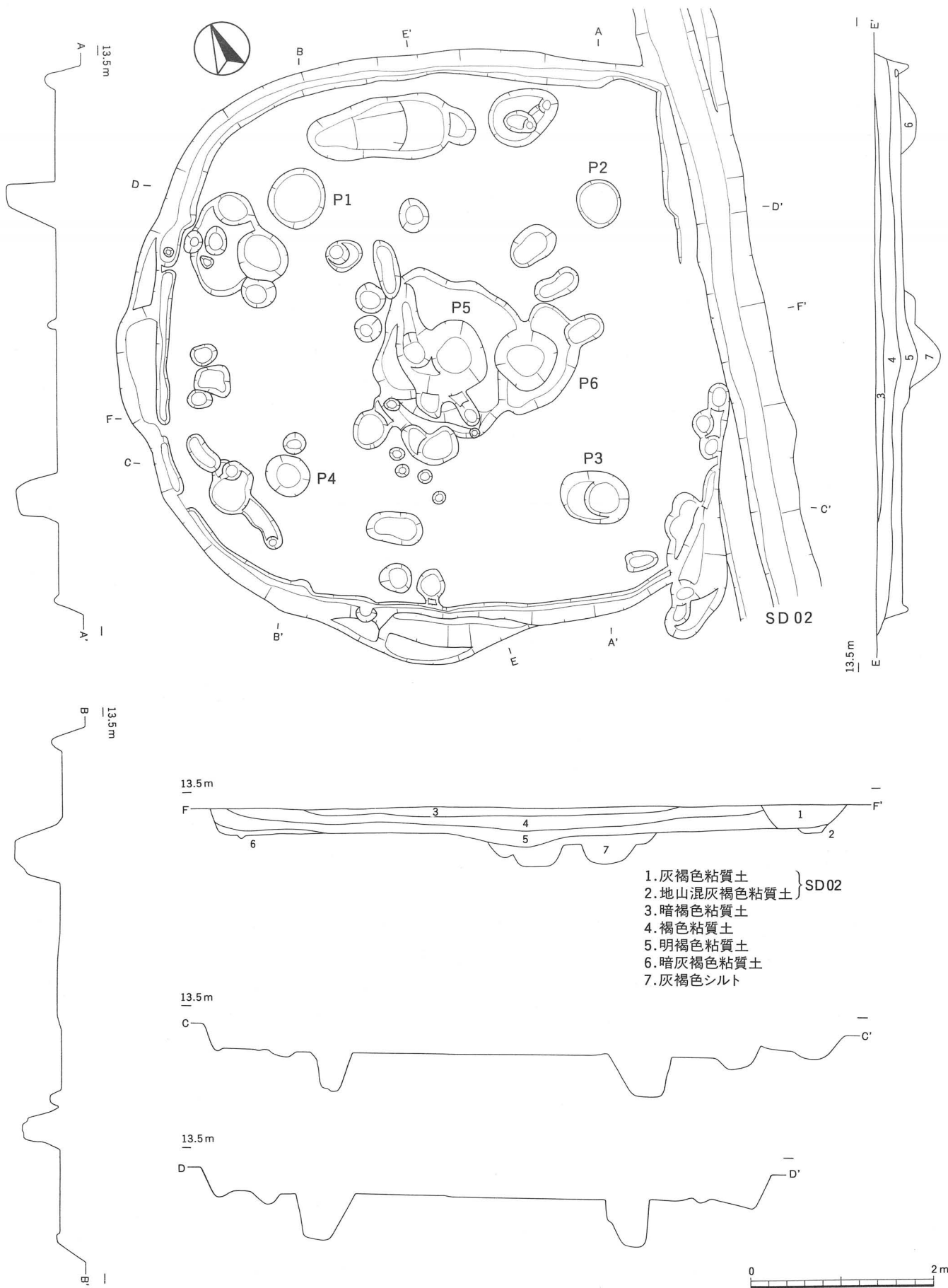
遺物は120と凝灰岩製の砥石破片166が上層より、168は片面が磨られており砥石とした細粒砂岩質のもので床面より出土した。116は覆土上層下位の床面から10cm浮いた状態で壁際より出土している。時期は弥生時代後期後半法仏式期である。



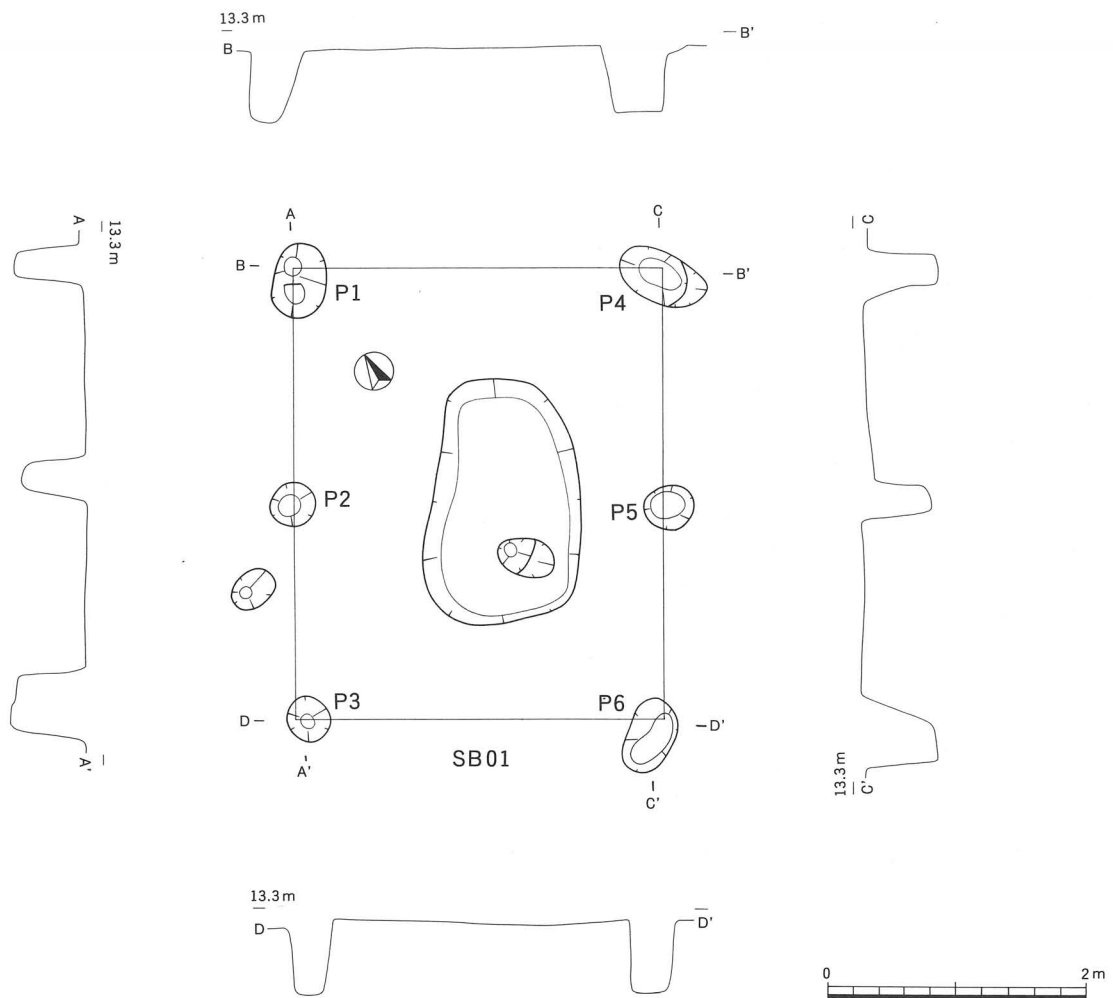
- 1. 暗褐色粘質土
- 2. 灰褐色粘質土
- 3. 明灰褐色粘質土
- 4. 明褐色粘質土



第5図 SI03 遺構図 (1/60)



第6図 SI04 遺構図 (1/60)

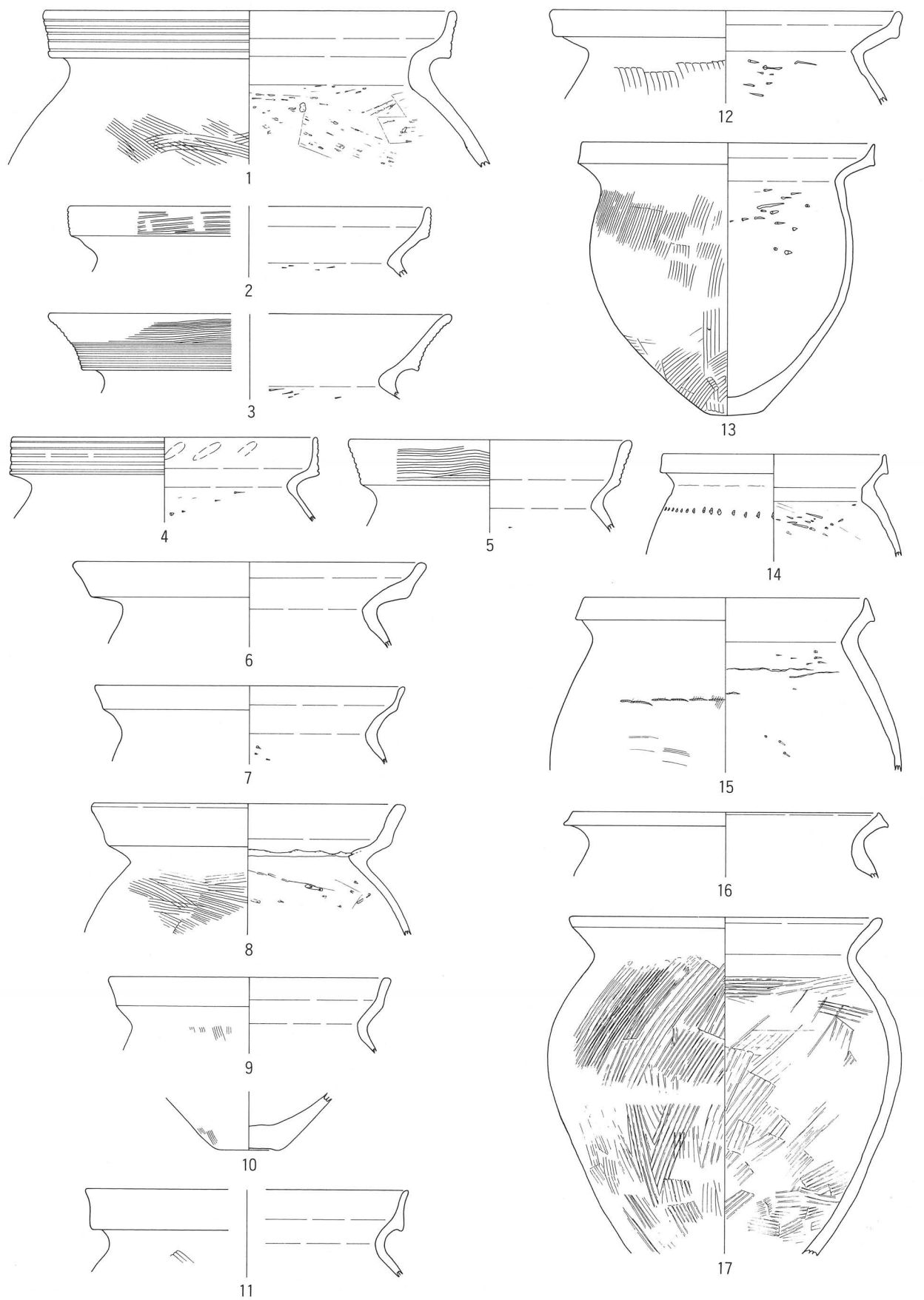


第7図 SB01 遺構図 (1/60)

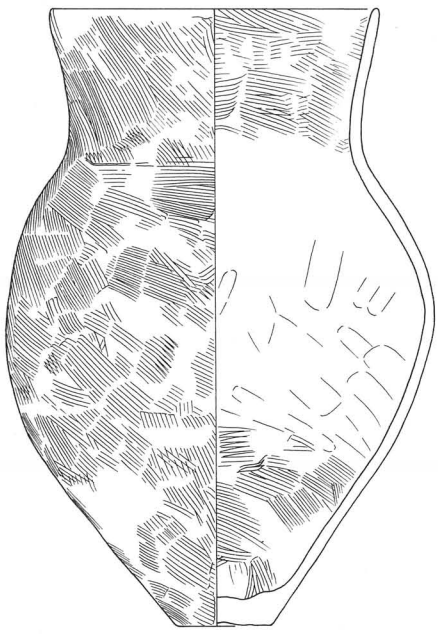
(2) 掘立柱建物

SB01 (第7図)

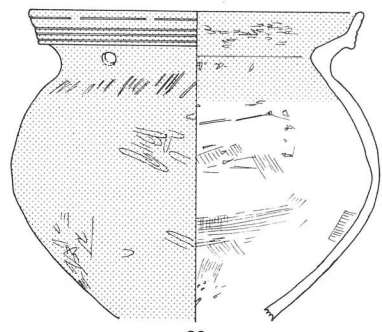
調査区北西隅に位置し、SI01とは西へ12m離れる。梁行1間2.8m、桁行2間3.6m、床面積は約10㎡、主軸は(N29°E)である。柱穴の平面形は円形や楕円状で大きさはばらつきが見られ、径35~40cmのものと、50~60cm×40cmのもの、深さは50~58cmを測る。遺物はP1より縄文土器154が出土しているが、建物の時期は柱穴覆土が竪穴建物と同じ暗褐色粘質土であり、同時期の弥生時代後期後半が考えらる。高床倉庫と想定されよう。



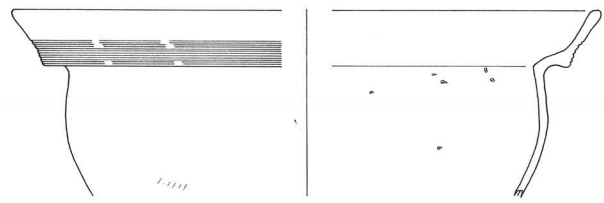
第8図 SI 01(1~17)出土遺物 (1/3)



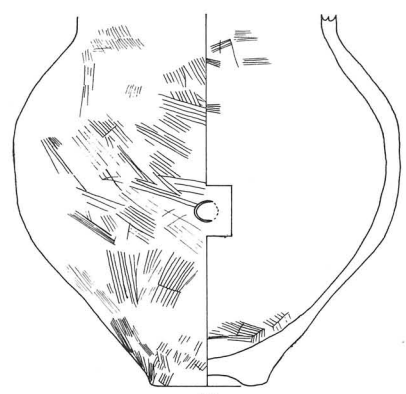
18



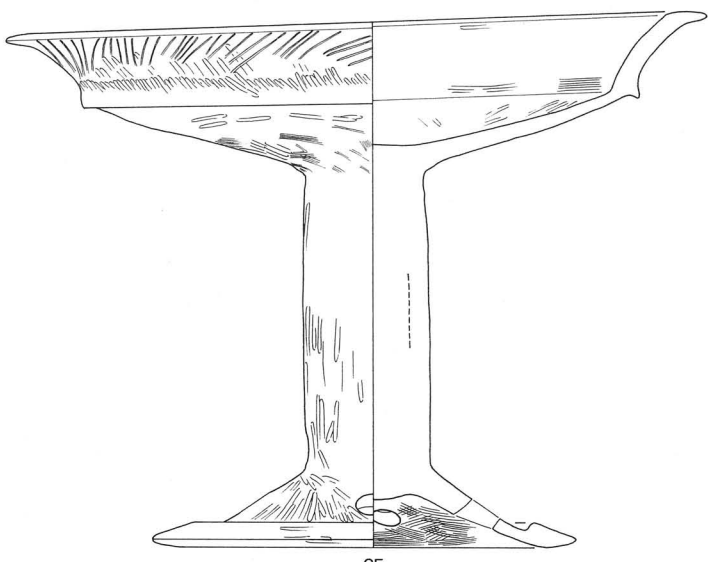
23



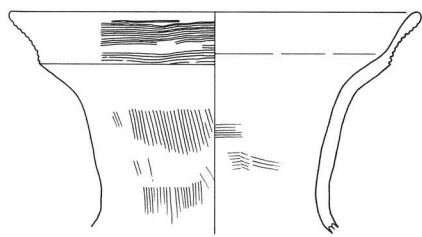
24



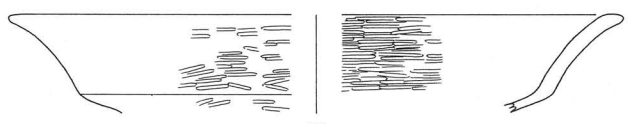
19



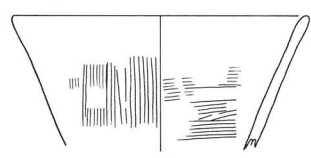
25



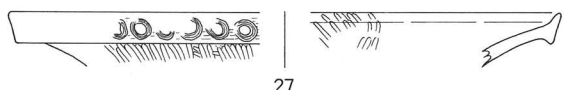
20



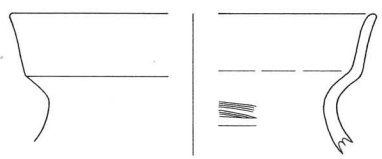
26



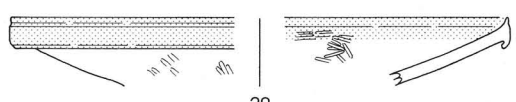
21



27



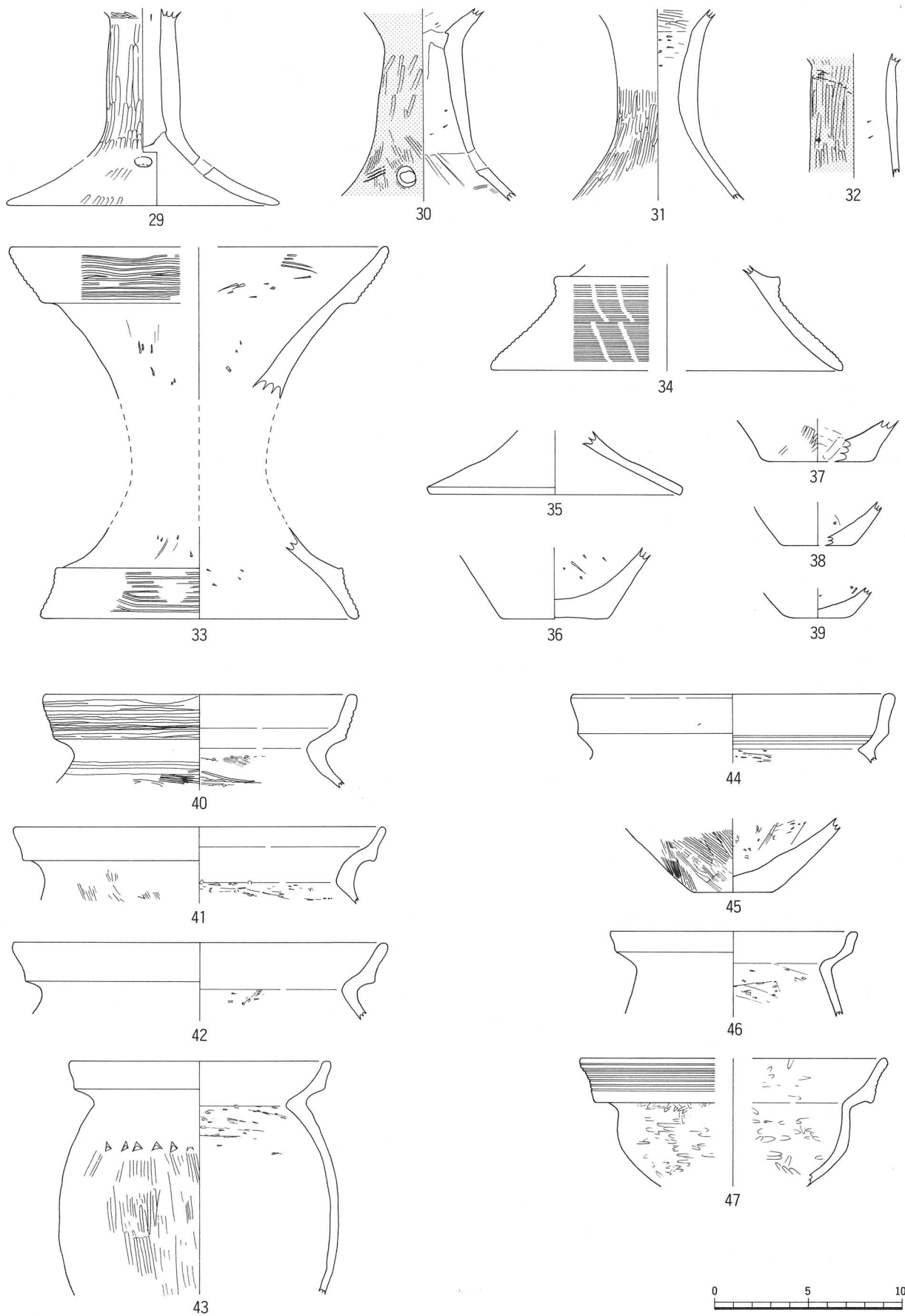
22



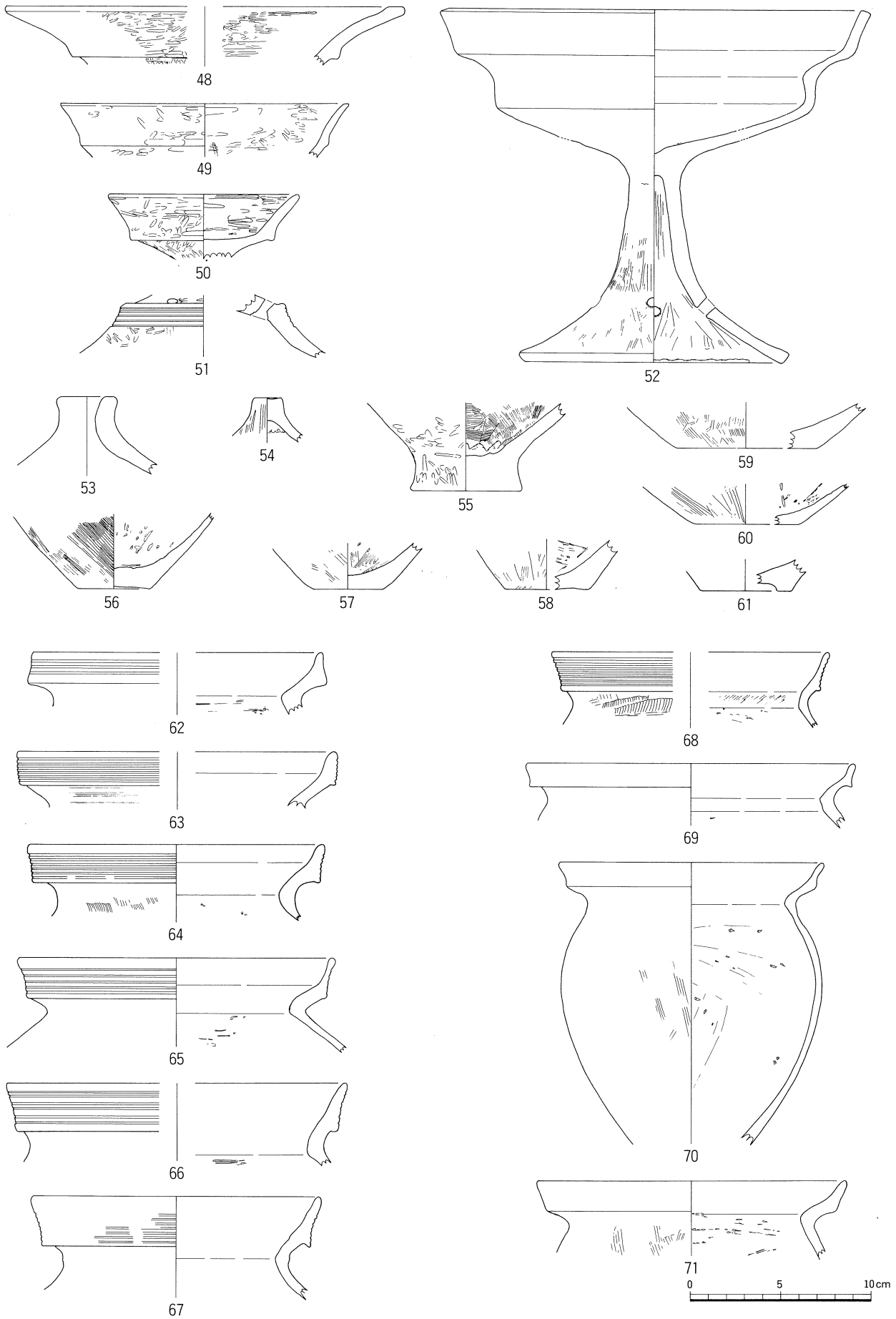
28



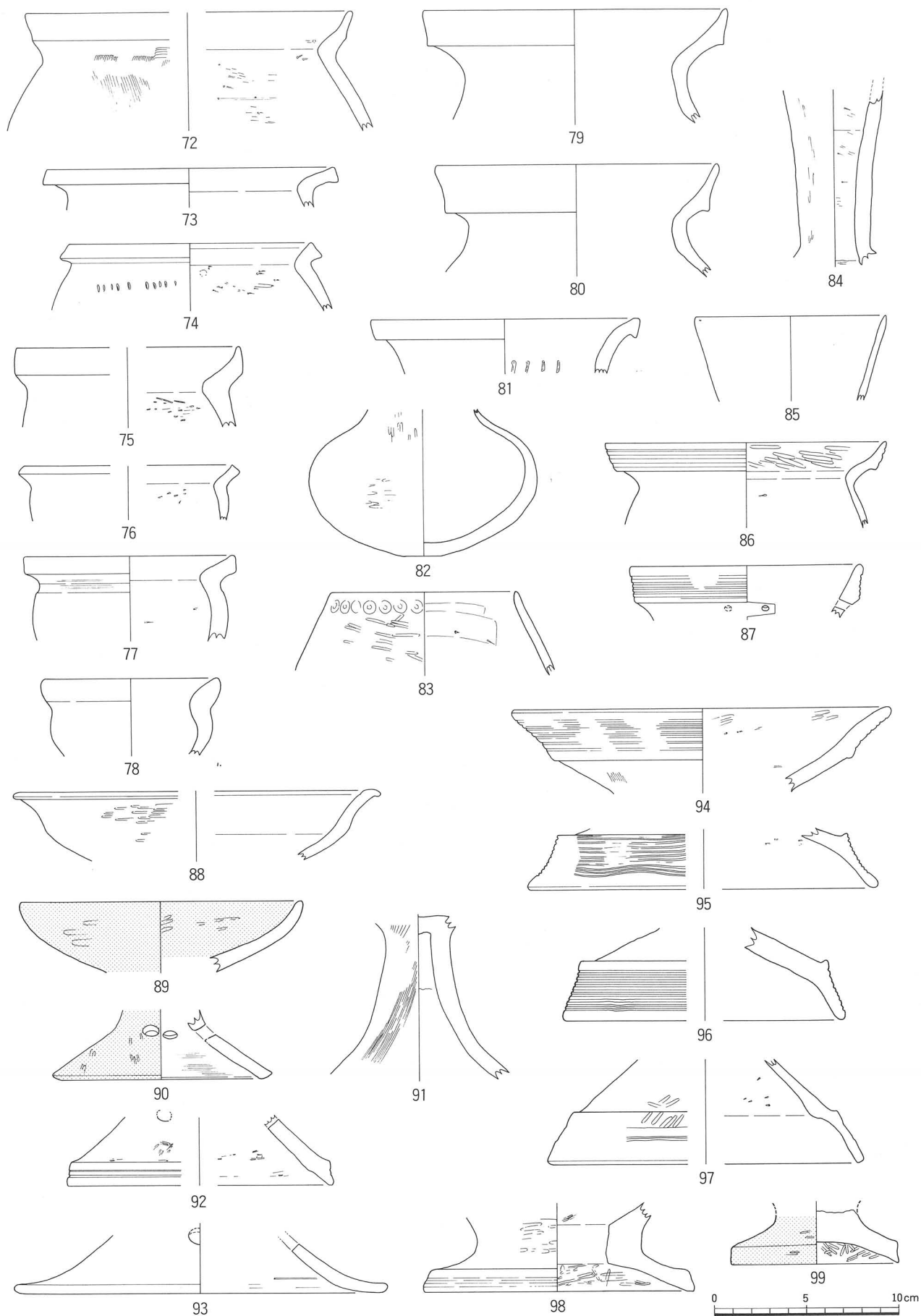
第9図 SI 01(18~28)出土遺物 (1/3)



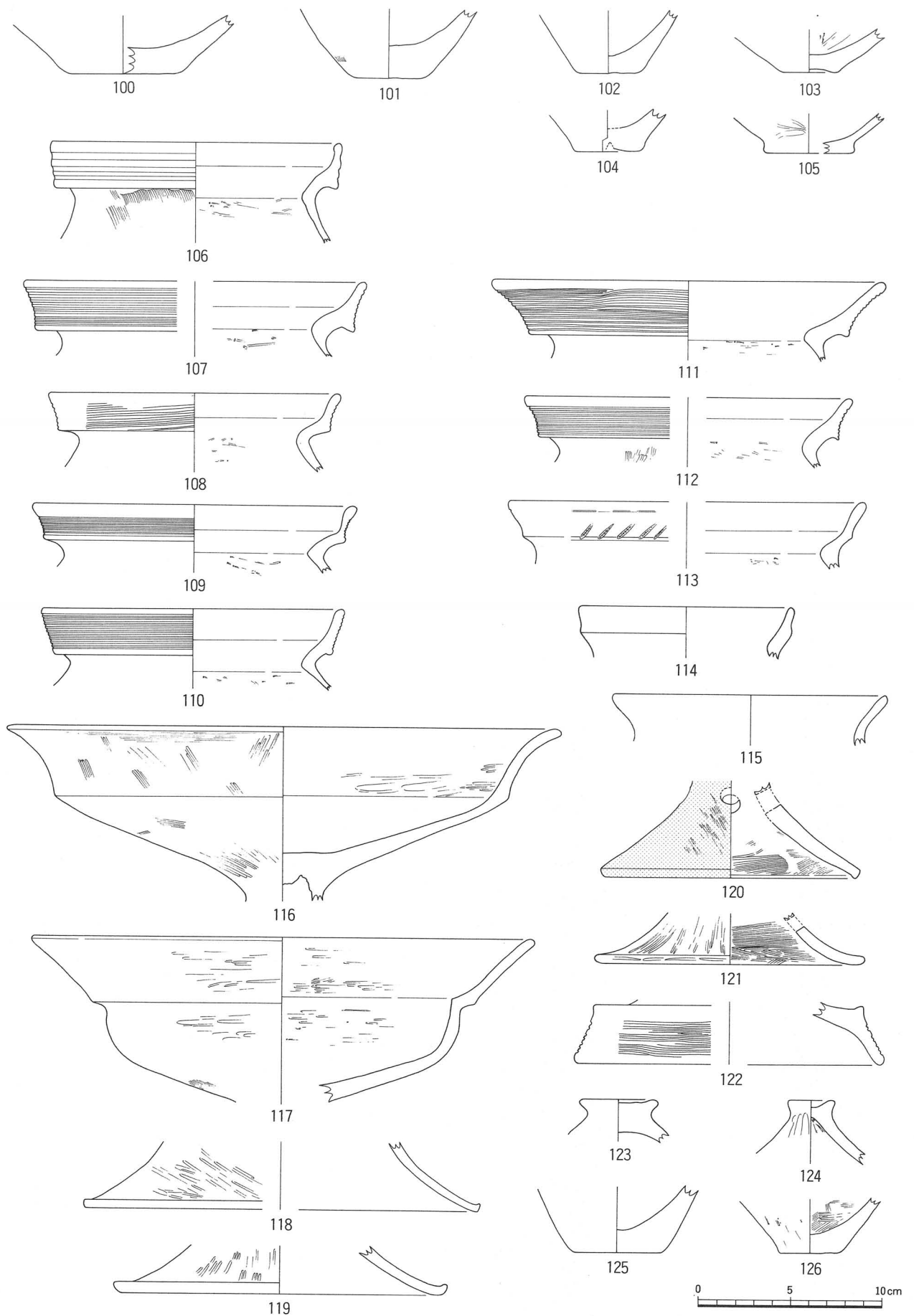
第10図 SI 01(29~39)・SI 02(40~47) 出土遺物 (1/3)



第11図 SI 02(48~61)・SI 03(62~71) 出土遺物 (1/3)



第12图 SI 03(72~99)出土遺物 (1/3)



第13図 SI 03(100~105)・SI 04(106~126) 出土遺物 (1/3)

(3) 土 坑

弥生時代以前の土坑としてここでは、縄文時代の土坑SK10・25の2基、弥生時代はSK01～06・26・27の8基を報告する。出土土器により縄文時代は後～晩期、弥生時代は後期後半法仏式期である。

SK01 (第14・15図)

調査区北側SI01の東南に接するように検出した。平面楕円状で長径1.8m、短径1.05mを測る。底面は平坦で、深さは10cmを測る。127の台付甕が出土した。

SK02 (第14・15図)

調査区北側SI02の西で検出した。土坑状遺構がいくつか連なったものの一つで、平面形状で長辺90cm、短辺70cmである。深さは10cmを測る。128・129が出土した。

SK03 (第14・15・17図)

調査区北側SI02の南西で検出した。平面楕円形状で長さ1m、幅50cm～60cm、深さは16cmを測る。土器130～135及び過半が損失する用途不明の石169が出土した。火山礫凝灰岩の169は実測図の上面を除き火熱を受け黒っぽく変色し底面はひび割れている(スクリーントーンの範囲)。敲打され欠けるが他の痕跡は無い。

SK04 (第14・15図)

調査区北側SI02の南西、SK03の東1mに位置する。平面楕円形状で浅いピットと重複する。長さ1.2m、幅66cm、深さは23cmを測る。136～141が出土した。

SK05 (第14・15図)

調査区北側SI02の南東に位置する。土坑状遺構がいくつか連なったものの一つであり、平面不整な楕円形状で、長さ1.7m、幅70cm、深さは20cmを測る。142・143の高坏が出土した。

SK06 (第14・16図)

調査区北側、SI03の南東で検出した。平面長楕円状と考えられる。長さ2.6m、幅40cm、深さ6cmを測る。土坑としたが判断に迷う遺構である。144～146が出土した。

SK10 (第14図)

調査区ほぼ中央SD05北に位置し、他の遺構と重なるが平面は長楕円状と考えられる。長さ推定2m、幅1m前後、深さ18cmを測る。覆土は弥生時代の暗褐色土よりうすい色調の淡褐色土で縄文土器底部153が出土した。縄文時代後期か。

SK25 (第14図)

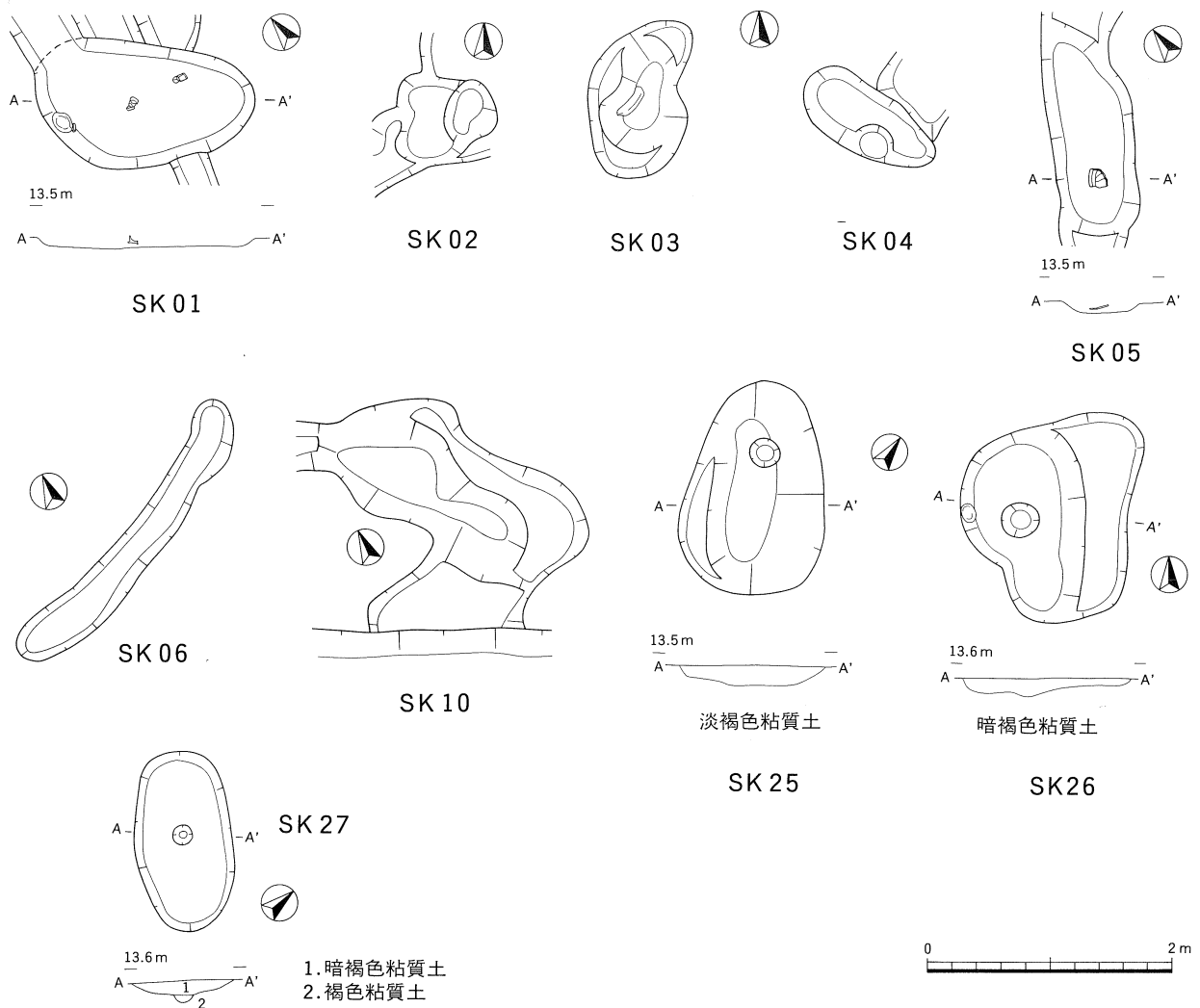
調査区南側旧河道落ち込み際において検出した。平面は楕円形状で浅い段部をもつ。長さ1.8m、幅1.2m、深さは段部10cm、底面は20cmを測る。覆土はSK10と同様の淡褐色粘質土である。条痕文を施す摩耗の著しい縄文土器細片が出土している。縄文時代晩期か。

SK26 (第14・16図)

調査区南側SK25の南西に位置する。平面は不整な形状で東側に浅い段部をもつ。南北長1.65m、幅は1.05～1.55m、深さは段部5cm、底面はほぼ15cmを測る。147～149が出土した。

SK27 (第14図)

調査区南側SK26の南に位置する。平面は楕円形状で、長さ1.5m、幅80cm、深さ10cmを測る。147～149が出土した。長径1.35m、短径80cmを測り、調査区南西隅において検出した。弥生時代後期後半と思われる土器細片が出土した。



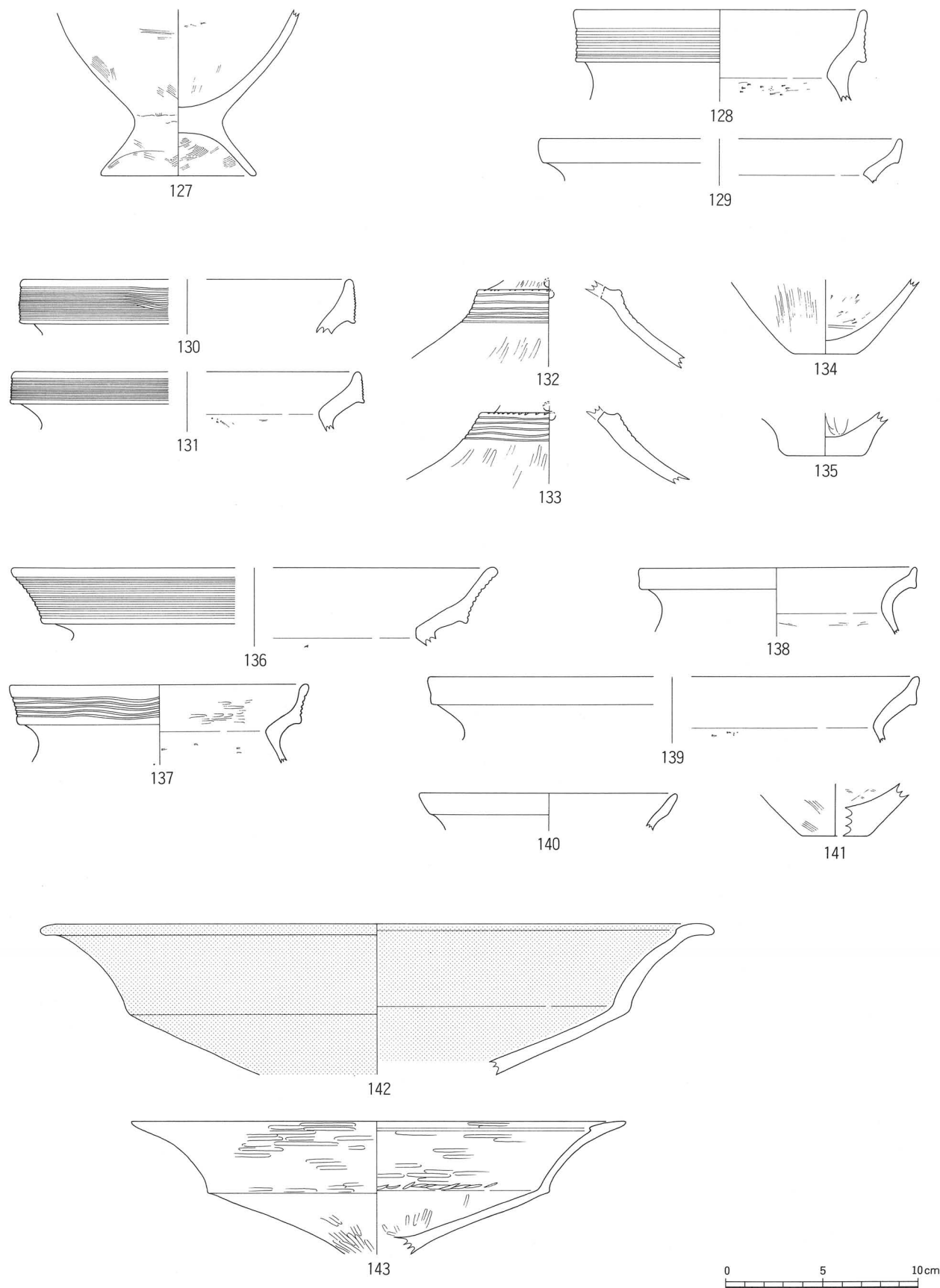
第14図 SK 01~06・10・14・25~27 遺構図 (1/60)

(4) その他の遺物 (第16・17図)

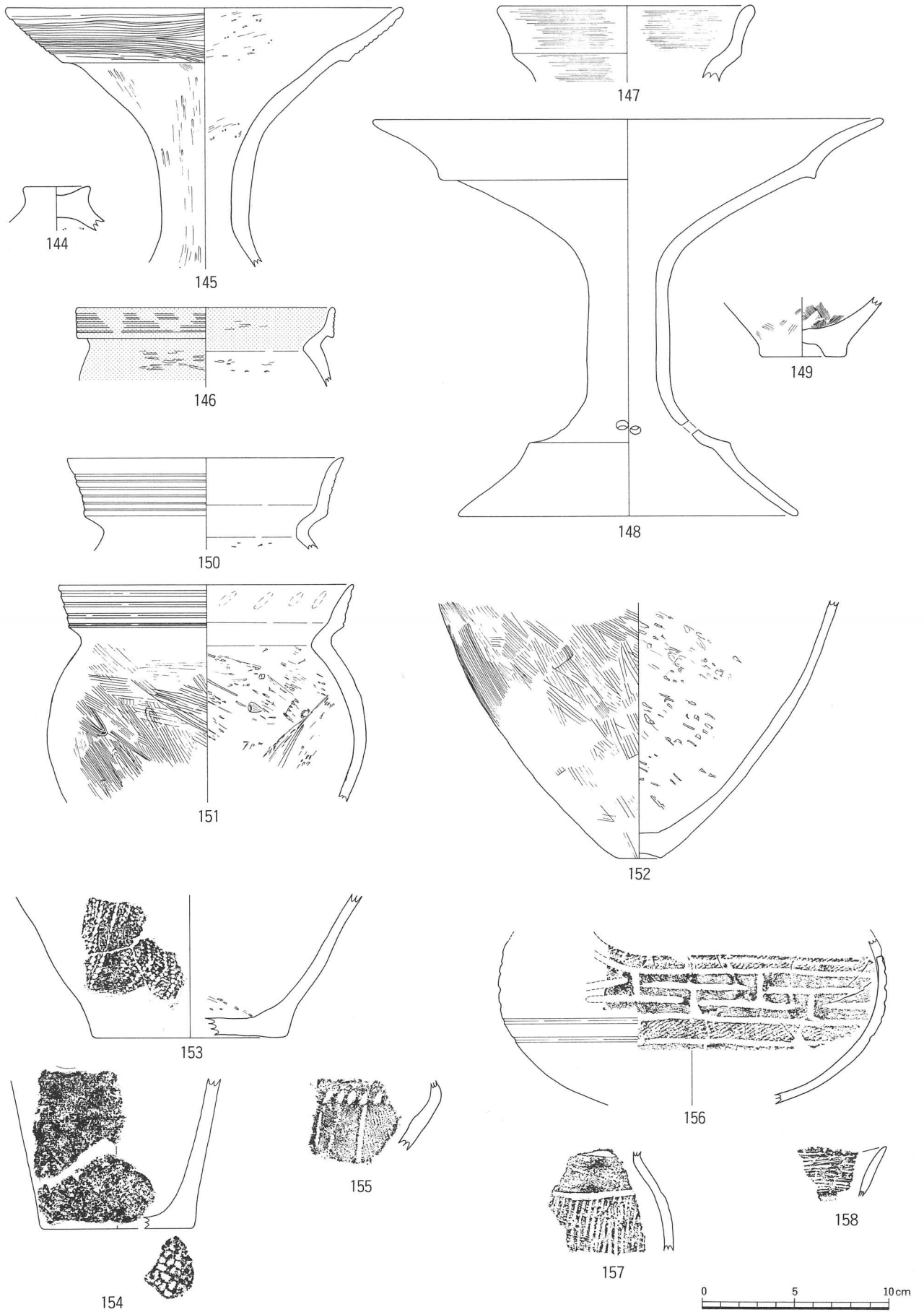
ここでは包含層出土遺物、縄文土器及び石器類を扱うこととするが個別の遺構で述べたものもある。150~152は調査区中央西側、SI04の西南西15mに位置する鞍部からの出土である。鞍部は周辺より30cmほど低くなる。弥生時代後期後半月影式の土器である

154はSB01-P1から出土した無文の縄文土器底部であり後期の所産か。155・157はSI01覆土へ混入したものである。155は刻みと縦位の磨消縄文を有し後期の所産か。157は小型の壺と考えられ2条の沈線と縦条痕文であり、SD06混入の158とともに晩期末長竹式である。156は調査区中央東端793.9X 939.8 Y地点から地山にくい込み出土した鉢で、T字形三叉文を交互に繰り返す晩期初頭御経塚式土器である。

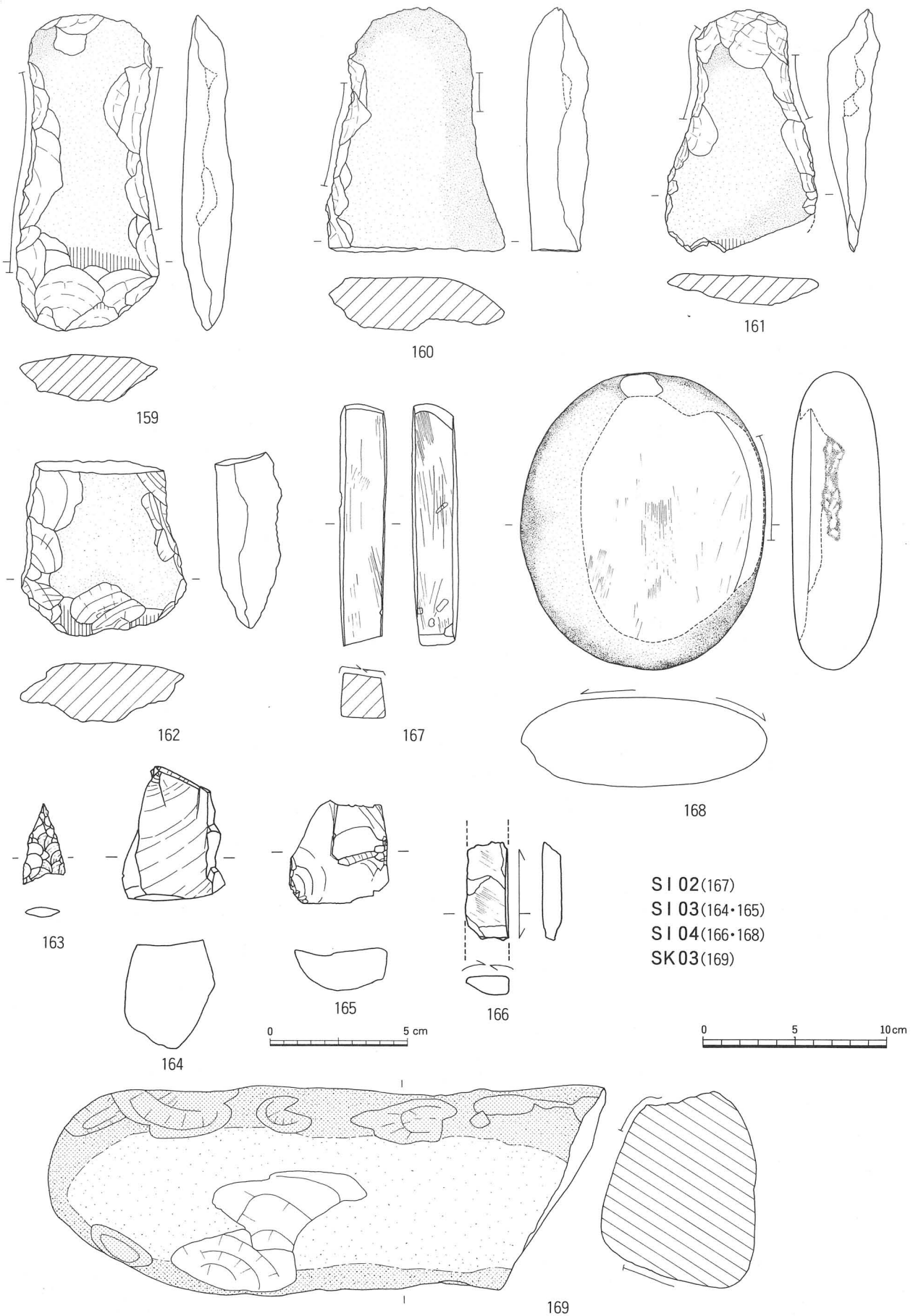
打製石斧159は780.6X 984Yのピットより出土、火山礫凝灰岩質。161はSD06混入品で石質は凝灰岩である。162は刃部であり縄文土器157の付近から出土した。石質は緑色凝灰岩。



第15図 SK01(127)・SK02(128・129)・SK03(130~135)・
SK04(136~141)・SK05(142・143) 出土遺物 (1/3)



第16図 SK 06(144~146)・SK 26(147~149)・包含層(150~152)・
出土遺物・縄文土器(153~158) (1/3)



第17図 石器等（縄文～弥生時代）(159～162・167～169) (1/3) (163～166) (1/2)

3 中世以降の遺構と遺物

(1) 竪穴状遺構

SX 01 (第18・28図)

調査区中央やや南に位置する。平面形は逆くの字状に曲がる楕円形を呈する。長さ8.9m、幅4.0～4.2m、深さ40cmの規模をもつが、掘り方の勾配は北側を除き緩い。面積は上面約38㎡、底面14㎡を測る。

覆土には焼けた石を含み自然礫が多くみられた。また、底面付近からは自然礫の集石と馬蹄状の配石がみられたが、人為的なものか廃棄かは不明である。

遺物は珠洲・加賀・越前・瀬戸がある。珠洲の壺口縁170・171はIV期、摺鉢175・176はIV期後半か。173・174はIII期、珠洲甕胴部片もIII～IV期と考えられる。177の越前壺底部は井戸SE04出土片と接合した。179はノミ調整痕の残る凝灰岩質の石製品で火熱を受け焼けている。180の囲炉裏縁石は軽石凝灰岩質で片面が火熱を受け赤橙色に変色している。181は火熱により焼かれ、煤の付着した安山岩質火山礫凝灰岩の半欠する礫である。遺構の時期は14世紀後半か。

SX 02 (第19・29図)

調査区東南側、SX01の東南15mに位置する。平面不整な長方形状を呈し、規模を縮小し造り替えが行われる。当初は台形状で大きさは西辺4.1m・東辺5.0m・北辺2.5m・南辺3.1m、面積約12.8㎡か。深さは28cm、底面に残る東側の溝3条はこの古い時期のものであり、内側のものは南で直角に曲がる。新段階の大きさは東西2.5m、南北4.6m、面積約11.5㎡を測る。これも底面に溝を有する。用途は小屋か。遺物は土師器182～184が出土しており時期は14世紀代であろう。

SK 03 (第19図)

SX02の東南2mに位置する。平面形は長方形状を呈し、長さ3.05m、幅1.77m、深さ15cmを測る。底面には短辺方向に溝を有し、南北両壁際に壁溝状の溝を土層により確認した。土坑との疑問も残るがここに含めた。出土遺物はなし。

(2) 井戸

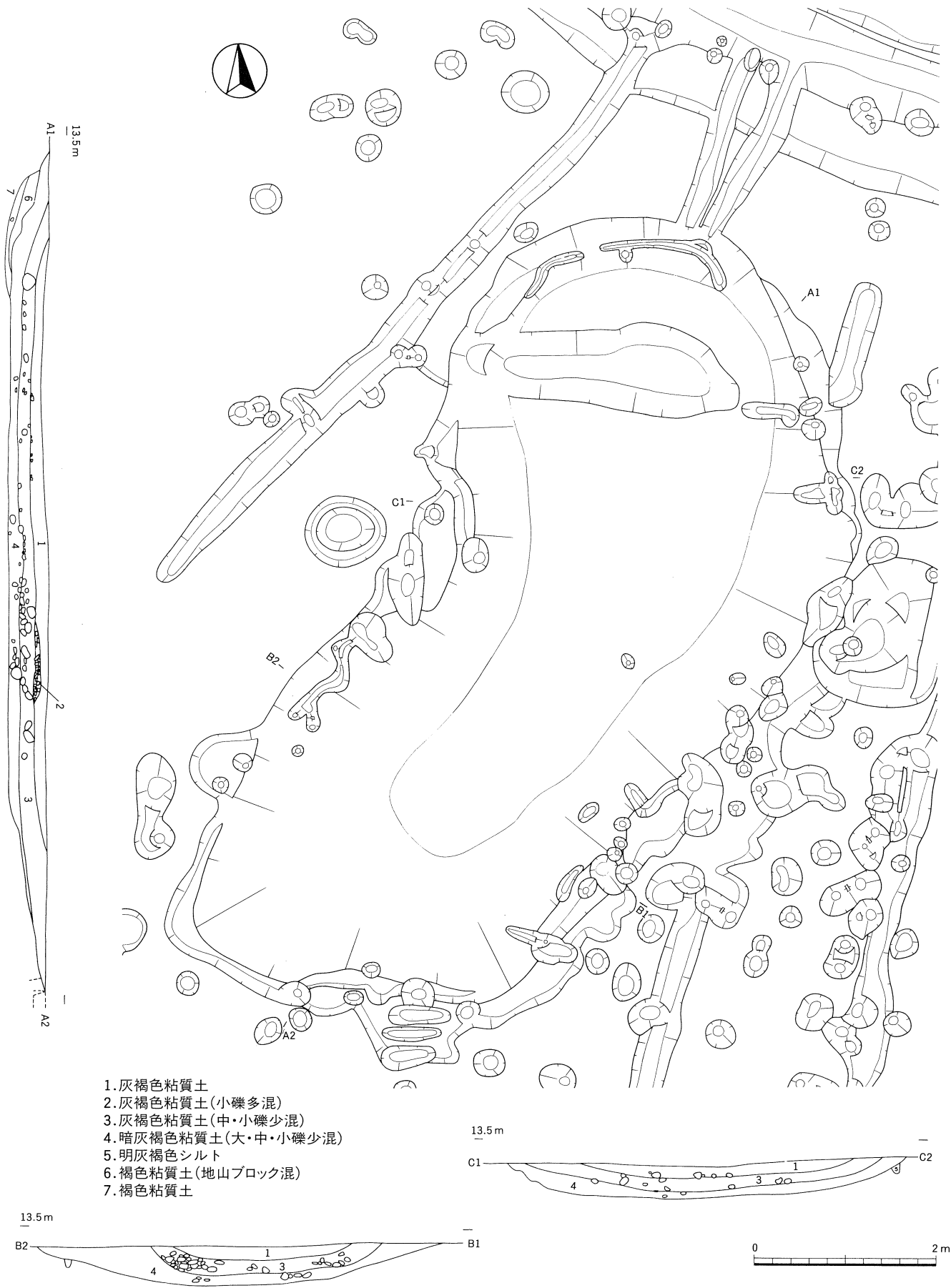
井戸は4基を検出しているが、後述する掘立柱建物の三つの群に対応し分布する。調査区中央やや北東にSE01、南東にSE04、南西にSE02・03が位置する。それぞれの距離は、SE01～SE04が25m、SE01～SE03及びSE03～SE04は37mを測る。

SE 01 (第20・29図)

調査区中央の北東側、SB05の南西6mに位置する。平面形はほぼ円形で径1.75m。危険なため深さ1.75m、下面径90cm、標高11.65mの段階で検出を中止した。珠洲摺鉢188はIII期と考えられ13世紀後半か。

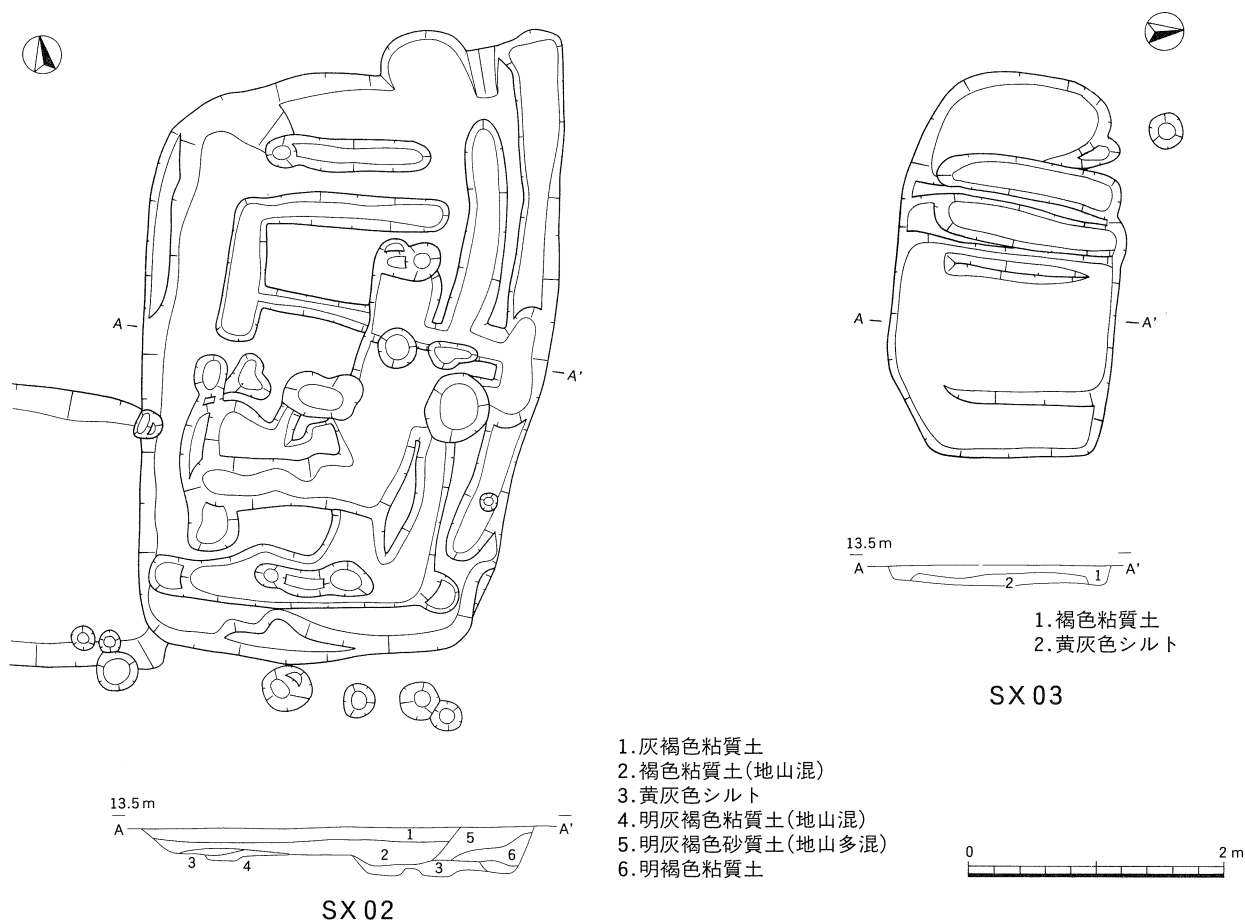
SE 02 (第20・29・30図)

調査区南西側、SB08の北6mに位置する。平面形は円形で径1.9m、深さ90cm、底面の径1.15m、標高は12.22mを測る。他の井戸より浅く土坑とも考えられる。190・191は瀬戸瓶子で同一個体。192・193は珠洲摺鉢で瓦質に近く、192は十字に切り目を入れた竹管の刻文をもつ。どちらもII2期であろう。珠洲甕194はIV2期。また囲炉裏縁石195・196が廃棄される。遺物に時期幅はあるが遺構の時期は14世紀後葉～15世紀前半か。



1. 灰褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土(小礫多混)
3. 灰褐色粘質土(中・小礫少混)
4. 暗灰褐色粘質土(大・中・小礫少混)
5. 明灰褐色シルト
6. 褐色粘質土(地山ブロック混)
7. 褐色粘質土

第18図 SX 01 遺構図 (1/60)



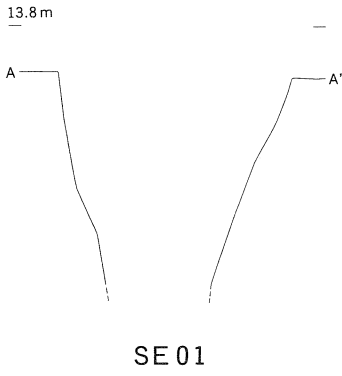
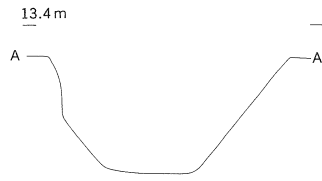
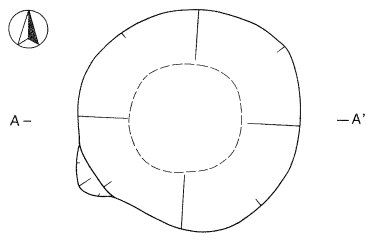
第19図 SX 02・SX 03 遺構図 (1/60)

SE 03 (第20・30~36図)

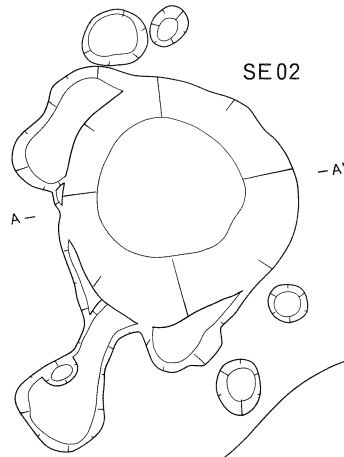
調査区南西側、SB08の北3mに位置する。平面形はほぼ円形で径3.25m、深さ2.15mの段部とこれより15cm低い径1mの掘り方がみられ、上位より筒状に大礫や囲炉裏縁石が遺棄されていた。曲物を用いた井戸側を示すものか。井戸底面の標高は10.80mを測る。土師器・瀬戸・加賀・珠洲・行火片・囲炉裏縁石がみられる。珠洲甕202はIV2期、壺201はIV期、加賀甕204はSK22出土と接合し14世紀前半頃、土師器は14世紀後半頃と考えられる。行火は前面に開口するタイプのものである。また囲炉裏縁石は211~221を図示したが多量に廃棄されている。遺物に時期幅はあるが遺構の時期は14世紀後葉~15世紀前半か。

SE 04 (第20・36図)

調査区南東側、SB04の東4mに位置する。平面形はほぼ円形で径2.1m×1.9m。危険なため深さ1.5m、下面径90cm、標高11.87mの段階で検出を中止した。遺物は222の砥石と越前・加賀の細片がみられ、越前底部片はSX01の177と接合し、加賀甕の細片がSK17出土と接合した。これにより時期は14世紀後半か。



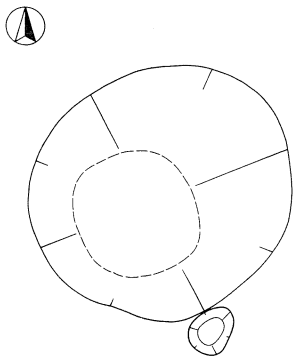
SE 01



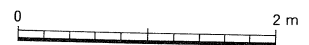
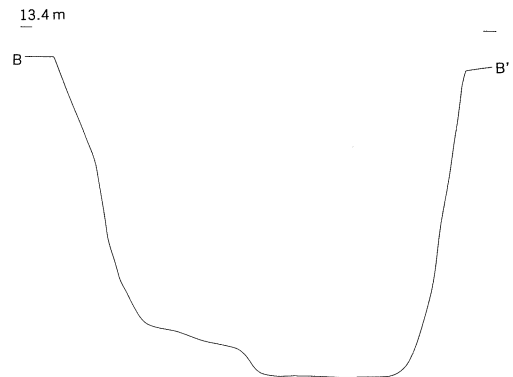
SE 02



SE 03



SE 04



第20図 SE 01・SE 02・SE 03・SE 04 遺構図 (1/60)

(3) 掘立柱建物

12棟の掘立柱建物はすべて側柱建物であり、調査区内における分布は井戸と関連し三つの建物群が想定できよう。調査区中央を横断する溝SD05を境とし北東群はSB03・05、南東群はSB02・04・06・07・13、南西群はSB08～12である。しかし、現場で確実に掘立柱建物と認識していたものはSB02の1棟だけであり、他のものは図上検討により可能と思われるものを積極的に掘立柱建物としており、疑問が生じるものや見落としもあることを了承していただきたい。ほとんどが無遺物であるが、柱穴覆土は中世期と考えられる灰褐色系の土である。

SB 02 (第21図)

南東群に位置し、梁行1間2.3m、桁行2間3.0mの東西棟である。P1～P3間は1.55m・1.45m、P4～P5は1.7m・1.3mである。面積は約6.9㎡、主軸は(N80°W)である。柱穴はほぼ円形で径35～45cm、深さ41～50cmである。出土遺物なし。

SB 03 (第21図)

北東群に位置する。図では1間×2間を想定し破線を加えたが、1間×1間とも考えられ構造や規模は不明である。P1～P3は2.3m、P1～P2は2.3m、P1～P4は2.4mである。北東軸は(N33°E)である。柱穴は円形で径30～40cm、深さ35～45cmである。出土遺物なし。

SB 04 (第21図)

南東群の一つでSB02の東隣に位置し、構造は梁行1間、桁行2間の南北棟である。柱間、柱列は不揃いであり、梁行P1～P4は1.9m、P3～P6は2.35m、桁行P1～P3は1.7m・1.3mの計3.0m、P4～P6は2.0m・1.4mの計3.4mを測る。面積は約6.4㎡、方位は(N16°E)である。柱穴は円形状の径30～40cmと楕円形状の40～60cmにわかれ、深さ37～45cmである。出土遺物なし。

SB 05 (第22図)

北東群に位置する。構造は梁行1間、桁行2間の南北棟である。柱間、柱列はやや不揃いであり、梁行P1～P4は2.65m、P3～P6は2.65mか、桁行P1～P3は1.9m・1.65mの計3.55m、P4～P6は1.85m・1.85mの計3.7mを測る。面積は約9.6㎡、方位は(N11°E)である。柱穴は円形状の径30～35cmのものと楕円形状40～50cmのP2があり、深さは30～67cmとばらつく。同じ方位の柱列SA02が西1.8m離れ存在する。また東60cmに位置するSK08は付属する土坑か。出土遺物なし。

SB 06 (第22図)

南東群北側SX01の東に位置する。構造は梁行1間、桁行4間の南北棟である。柱間、柱列はやや不揃いであり、西側柱列は他の遺構と重なり推定の域をでないが、P6・18・7～9を柱穴と考えている。梁行P1～P6は2.3m、桁行P1～P5は1.1m・0.85m・1.35m・1.35mの計4.65mを測り、P6～P9は0.95m・1.05m・1.2m・1.4mの計3.6mとなろうか。面積は約10.7㎡、方位は(N16°E)である。柱穴は円形の径25～30cmと50cm前後があり、深さは15～30cmと浅い。また東に位置するSK15・16は付属する土坑か。出土遺物なし。

SB 07 (第23図)

南東群北に位置する。構造は1間×1間で東西方向が広い。P1～P2・P3～P4は2.1m、P1～P3は1.6m、P2～P4は1.75mを測る。面積は約3.5㎡、南北軸はほぼ(N14°E)である。柱穴は円形で径30～45cm、深さ26～33cmである。重なるSK14は付属する土坑であろう。出土遺物なし。

SB 08 (第23・29図)

南西群に位置する。構造は梁行2間、桁行3間か。東西がやや広い棟であり、柱間、柱列は不揃い

ある。梁行P1・P9・P5は3.35m・1.35mの計4.7m、P4・P10・P8は3.4m・1.3mの計4.7mを測る。桁行P1～P4は1.35m・1.65m・1.2mの計4.2mを測り、P5～P8は0.95m・1.85m・1.1mの計3.9mとなる。面積は約19㎡、方位は(N17°E)である。柱穴は円形状の径25～35cmのものと楕円形状25×50cmのP2、40×70cmのP6があり、深さも7～33cmとばらつく。P9より土師器185が出土した。14世紀代か。

SB09 (第23・29図)

南西群北に位置し、構造は1間×1間である。P1～P2は3.2m・P2～P3は3.1m、面積は約9.9㎡、南北軸はほぼ真北の(N2°W)である。柱穴はほぼ円形で径30～50cm、深さ30～33cmである。北西隅の柱穴はP4の土坑状のものか、これと重なっているかは不明である。P2から越前の摺鉢片187が出土している。14世紀代か。

SB10 (第24図)

南西群に位置する。梁行3間×桁行3間、ほぼ方形に近い東西棟であろう。柱間、柱列は不揃いである。梁行P1～P3は1.6m・3.5mの計5.1m、P8～P11は1.5m・1.7m・1.25mの計4.45mを測る。桁行P1～P8は1.9m・1.55m・1.55mの計5.0mを測り、P5～P8は1.9m・2.05m・1.05mの計5.1mとなる。面積は約24.1㎡、方位は(N86°W)である。柱穴は円形状の径25～40cmのものと楕円形状40×50cmのP5、30×40cmのP6があり、深さは5～33cmとばらつく。出土遺物なし。

SB11 (第24図)

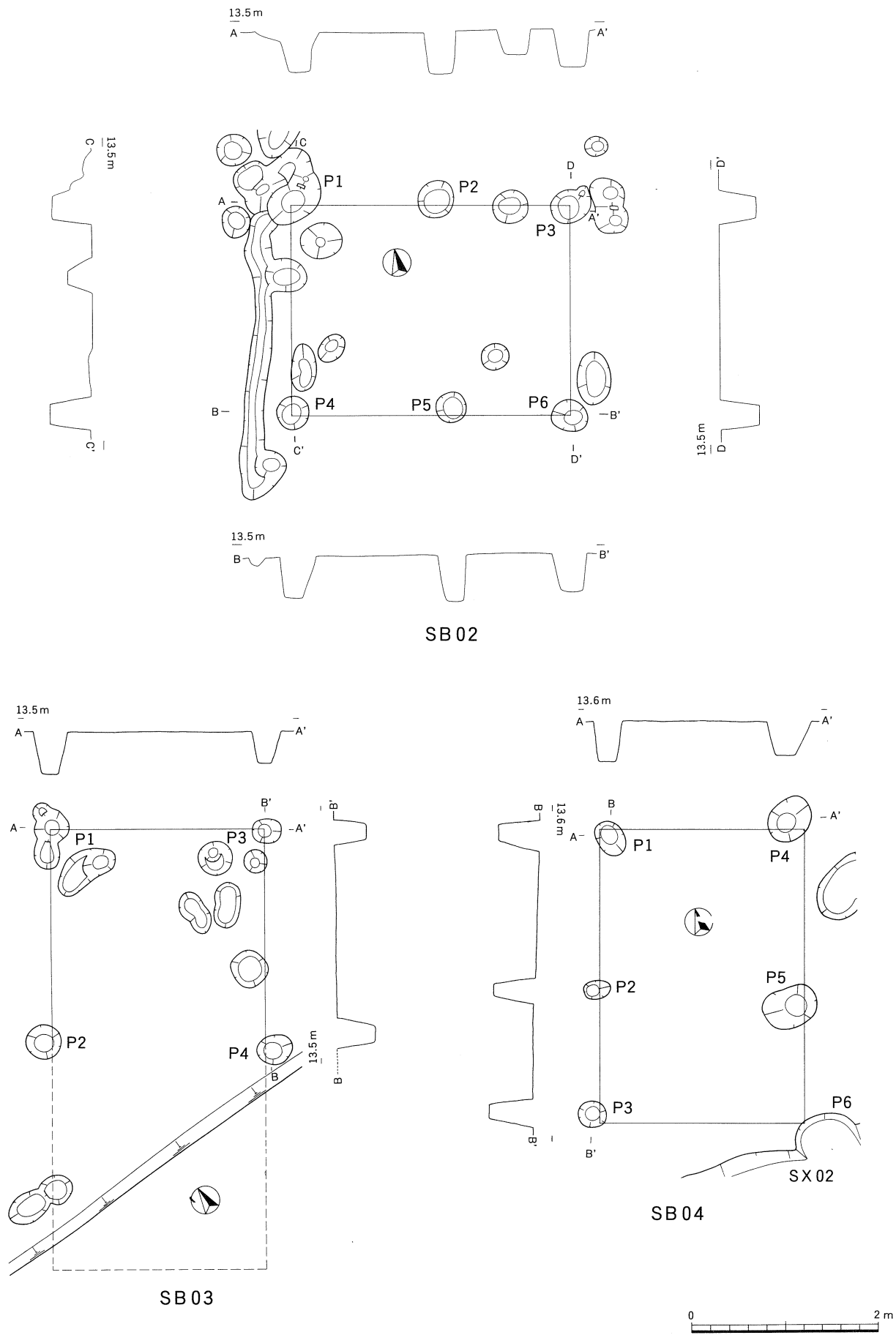
南西群の南に位置する。構造は梁行1間、桁行2間であり梁行が南北に長い。柱間、柱列はやや不揃いであり、梁行P1～P4・P3～P6は2.2m、桁行P1～P3は0.75m・0.7mの計1.45m、P4～P6は1.0m・0.6mの計1.6mを測る。面積は約3.4㎡、北東軸は(N27°E)である。柱穴は円形状の径25～30cmのものと楕円形状25～40cmがあり、深さは10～34cmとばらつく。出土遺物なし。

SB12 (第24図)

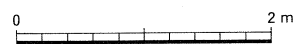
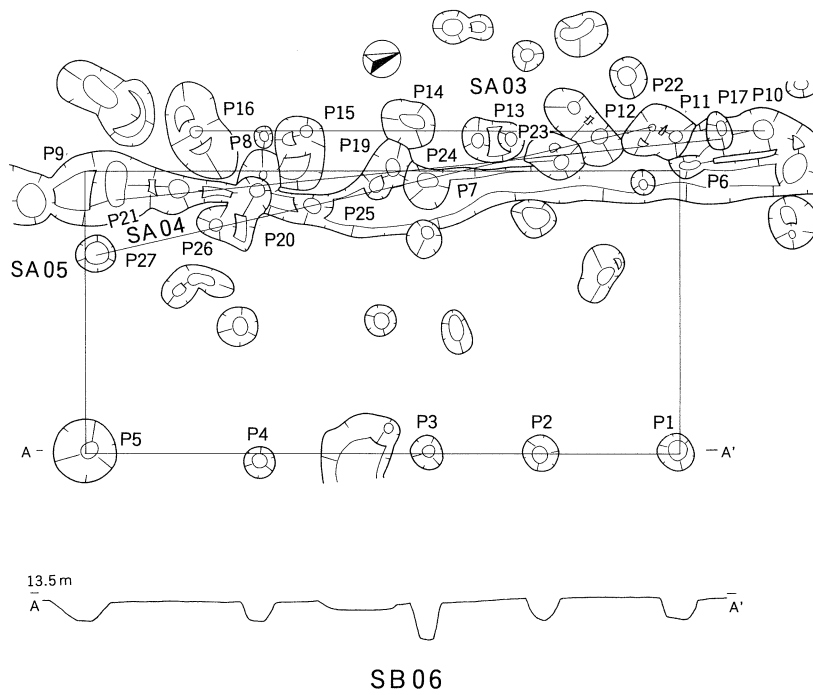
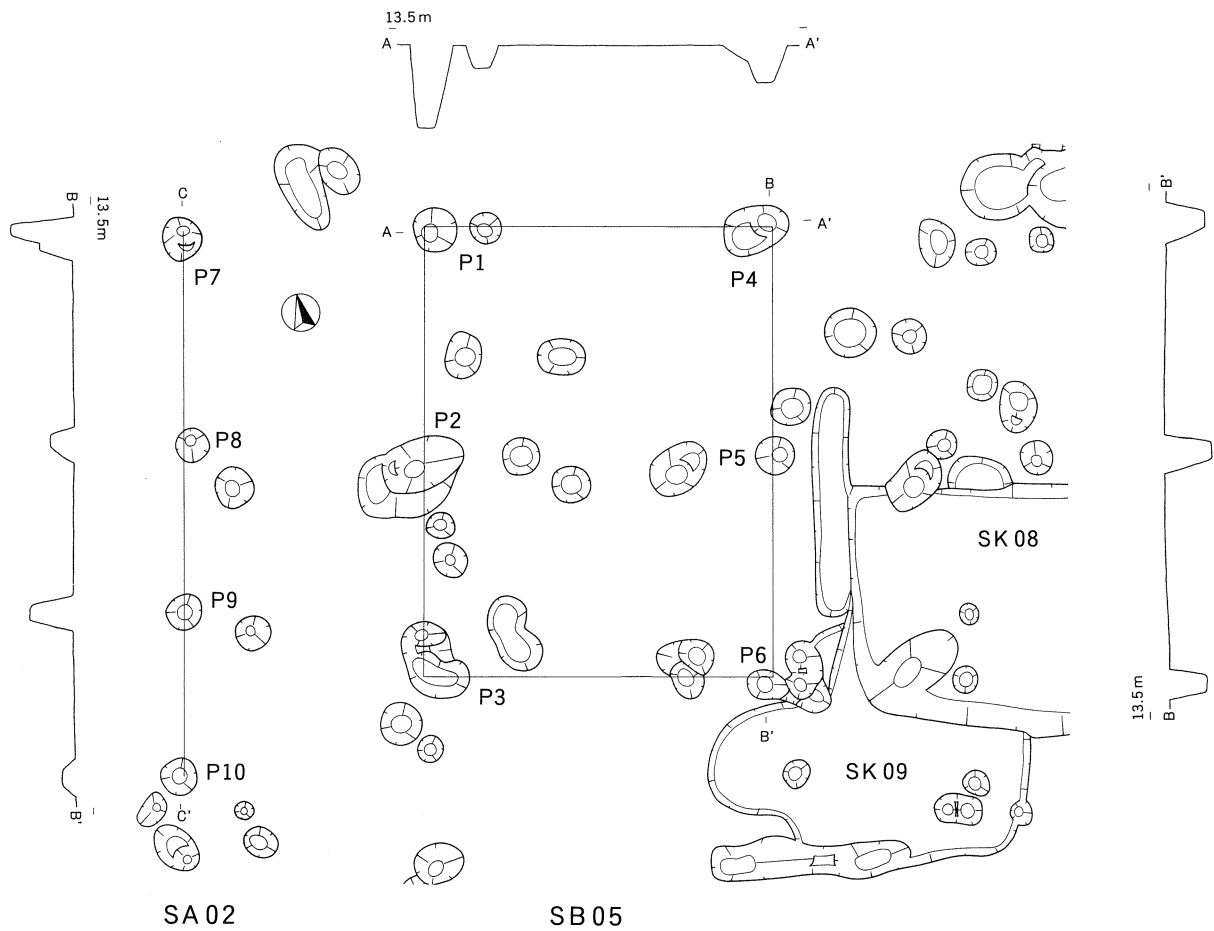
南西群の南、SB11の西1.1mに位置し、構造は1間×1間であり南北にほそ長い。P1～P3は1.05m・P2～P4は0.95m、P1～P2は2.65m・P3～P4は2.75m、面積は約2.7㎡、北東軸は(N27°E)である。柱穴はほぼ円形で径20～25cm、深さ11～33cmである。出土遺物なし。

SB13 (第25図)

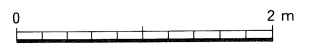
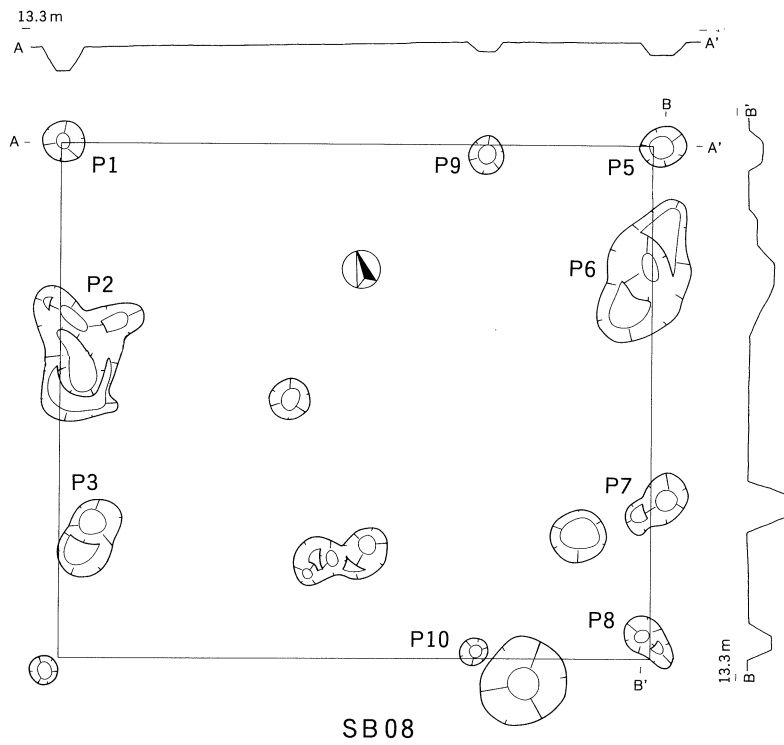
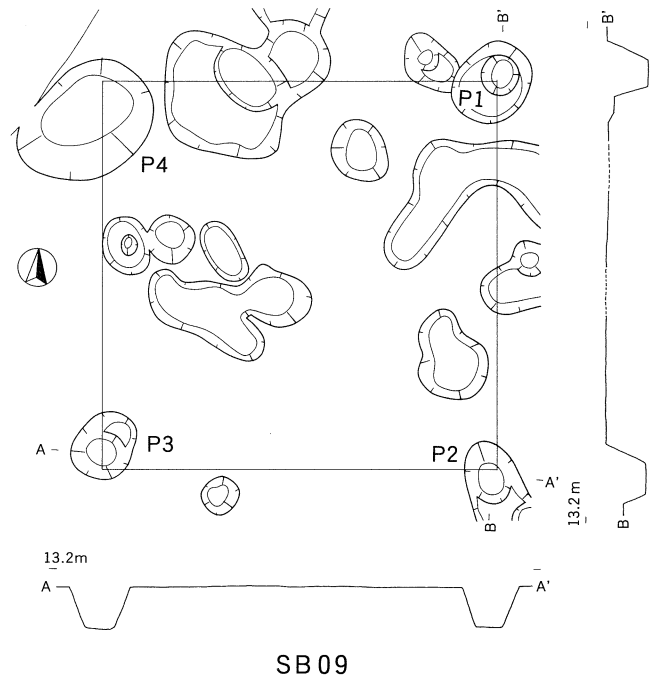
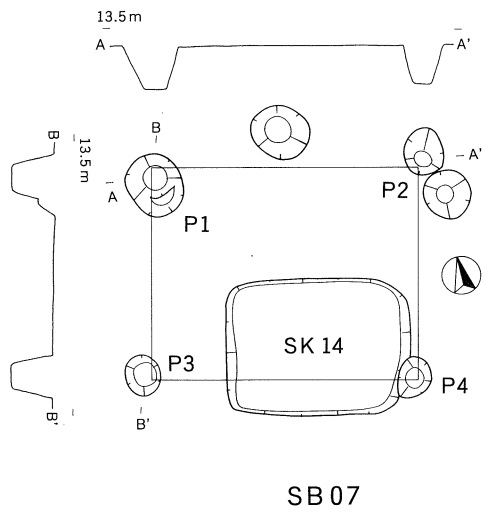
南東群に位置し竪穴状遺構SX02に切られる。構造は梁行1間、桁行3間の東西棟である。柱間はやや不揃いであり、梁行P1～P3は3.55m、桁行P3～P6は1.25m・2.25m・1.3mの計4.8m、P1～P2は1.45m・1.85mを測る。面積は約12.8㎡、方位は(N75°W)である。柱穴は円形の径ほぼ35cm、深さはP3が31cmと浅く、P1・P5は42～45cm、他は58～66cmと深い。建物内南中央に位置する一辺2.25m、深さ20cmの方形土坑は付属する施設であろう。この土坑をSK28とする。また、同じ方位をもつL字状柱列SA06が西2.2m離れ存在する。出土遺物なし。



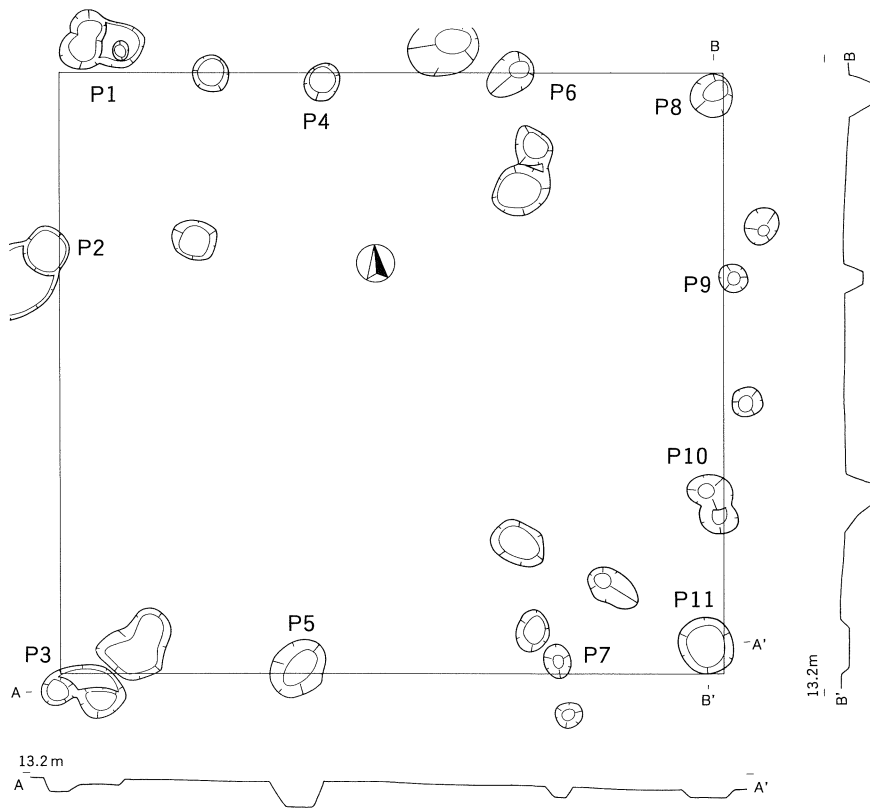
第21図 SB02・SB03・SB04 遺構図 (1/60)



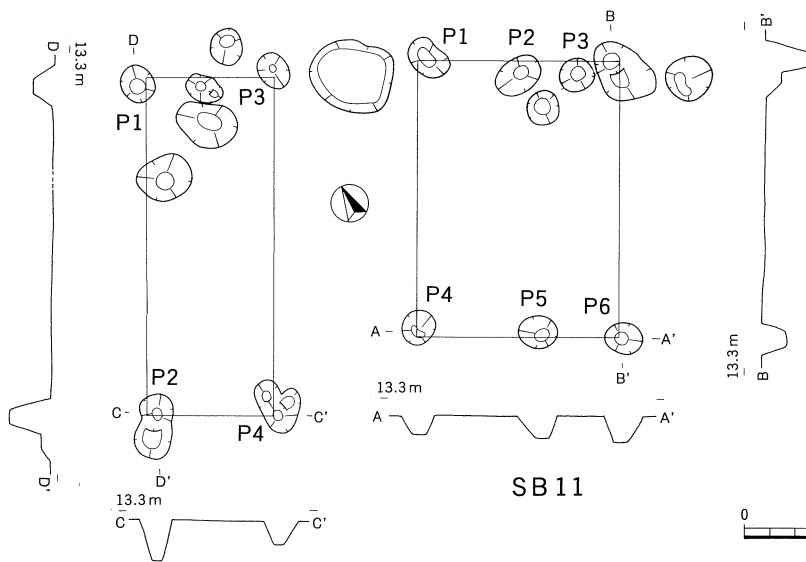
第22図 SB 05・SB 06・SA 02~SA 05 遺構図 (1/60)



第23図 SB07~SB09 遺構図 (1/60)



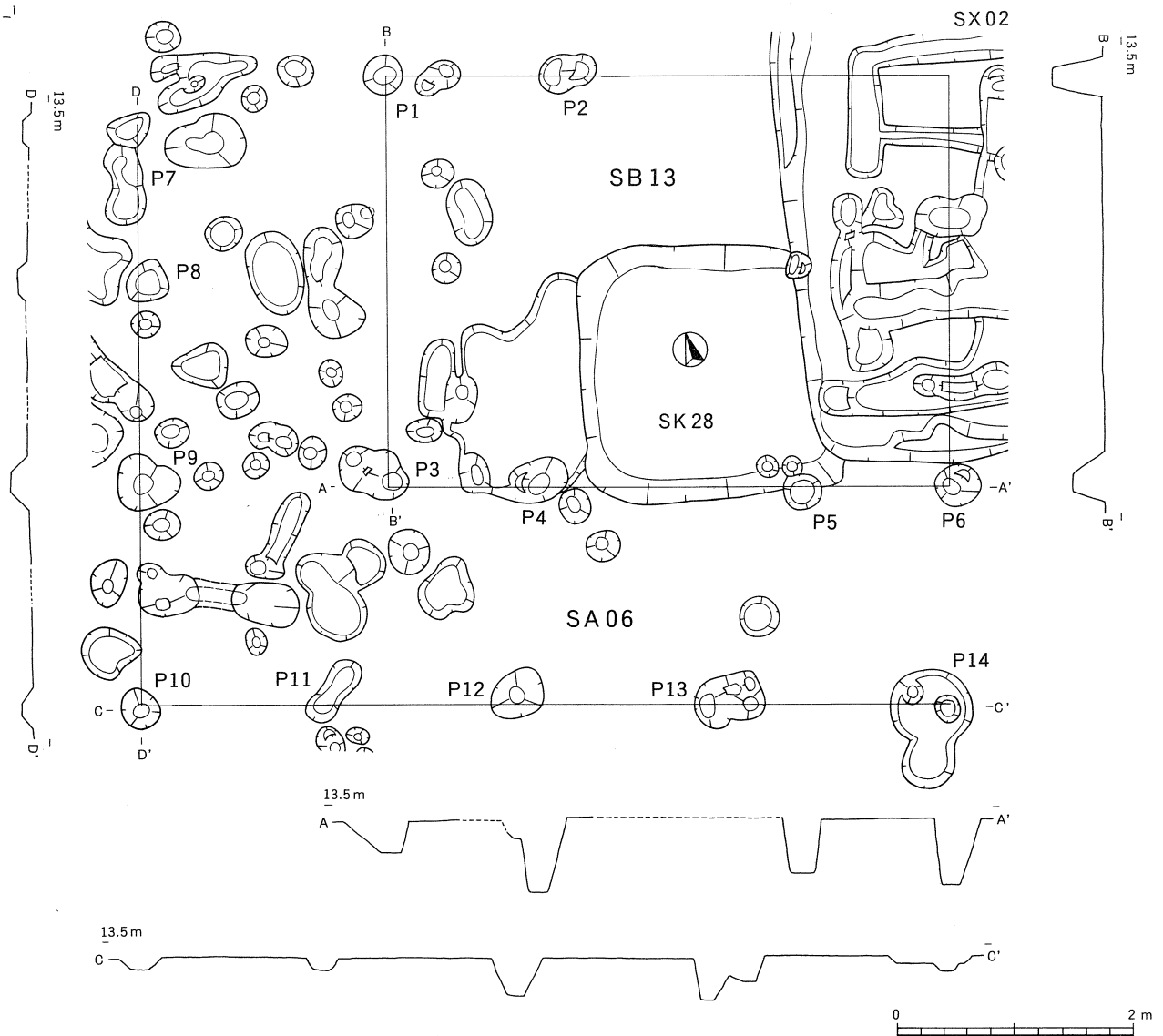
SB 10



SB 11

SB 12

第24図 SB 10~SB 12 遺構図 (1/60)



第25図 SB 13・SA 06・SK 28 遺構図 (1/60)

(4) 柱 列

6基の柱列を確認しており、掘立柱建物の北東群にSA01・02、南東群にSA03～06が所属する。

SA 01 (第26図)

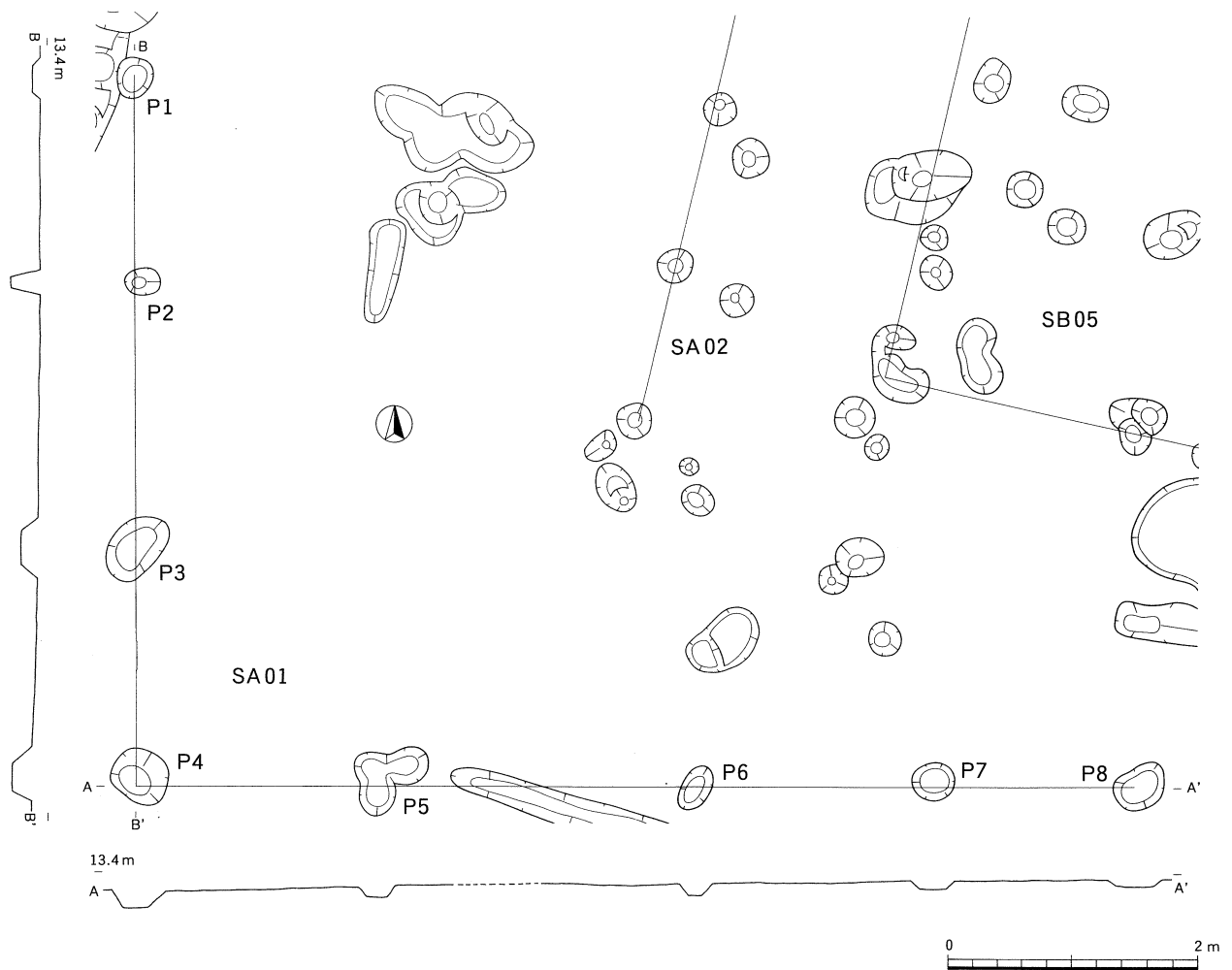
北東群SB05の南西に位置し、P1～P8が3間と4間でL字状に並ぶ。南北列P1～P4は1.65m・2.2m・1.95mの計5.8m、直角に折れる東西列のP4～P8は1.95m・2.55m・1.9m・1.7mの計8.1mとなる。南北軸の方位は(N 2° E)である。柱穴は楕円形で大きさは短軸25～40cm、長軸30～50cm、深さも5～25cmとばらつく。出土遺物なし。

SA 02 (第22図)

北東群SB05の西1.8mに位置し、方位(N 11° E)を同じくする3間の南北列である。P7～P10は1.65m・1.4m・1.3mの計4.35mを測る。柱穴はほぼ円形で径25～30cm、深さは10～40cmとばらつく。出土遺物なし。

SA 03 (第22図)

南東群SB 06の西60cmに位置し、方位(N 16° E)を同じくする5間の南北列である。P10～P16は



第26図 SA 01 遺構図 (1/60)

0.65m・0.6m・0.75m・0.8m・0.85mの計4.45mを測る。柱穴は円形の径25cmのP13のほかは楕円形の30×40cm、深さは25～37cmである。出土遺物なし。

SA 04 (第22図)

南東群SB06の西側と重なり、方位(N10°E)をとる4間の南北列である。P17～P21は1.15m・1.35m・1.05m・1.1mの計4.75mを測る。柱穴は円形で径ほほ30cm、深さは25～36cmである。出土遺物なし。

SA 05 (第22・29図)

南東群SB06の西側と重なる、方位(N5°E)をとる5間の南北列である。P22～P27は0.75m・1.05m・0.95m・0.75m・1.0mの計4.5mを測る。柱穴は円形の径25～30cm、深さは30～42cmである。P25出土の土師器186は14世紀後葉か。

SA 06 (第25図)

南東群SB13の南と西に位置し、P7～P13が3間と4間でL字状に並ぶ。南北列P7～P10は1.4m・1.75m・1.95mの計5.1m、直角に折れる東西列のP10～P14は1.55m・1.7m・1.65m・2.1mの計7.0mを測る。東西軸の方位はSB13と同じ(N75°W)である。柱穴は楕円形または円形で径30～50cm、深さはP12・P13が33～36cm、他は5～16cmと浅い。出土遺物なし。

(5) 土 坑

中世期の土坑SK07～09・11～24の16基を報告する。これらの分布も掘立柱建物群と相応し、北東群にはSK08・09、南東群にはSK14～18、南西群にはSK11～13が位置するが、南東群と南西群の間にSK19～24の南群が存在する。無遺物の土坑もあるが、覆土は中世期と考えられる灰褐色系の土である。

SK 07 (第27図)

北東群東端、SB05の東15mに位置する。ピットと重なるが平面楕円状で長さ1.0m、幅0.66m、深さ15cmを測る。底面には自然礫の集石がみられる。出土遺物なし。

SK 08 (第27図)

北東群SB05の東0.6mに位置する。平面長方形状で長辺2.5mと2.2m、短辺2.0m、深さ17cmを測る。出土遺物なし。

SK 09 (第27図)

北東群SK08と複合する。平面長方形状と考えられ、長辺不明、短辺は1.6m前後、深さ4cmを測る。出土遺物なし。

SK 11 (第27・37図)

南西群SB10の西3mに位置する。平面長方形状で長辺1.42m、短辺1.2m、深さ22cmを測る。223・224の土師器出土。223は油煤痕が付き14世紀末～15世紀前半のものか。

SK 12 (第27・37図)

南西群SK11の南に位置する。平面楕円形状で長辺1.9m、短辺1.5m、深さ42cmを測る。覆土上層と下層の境界面に自然礫がみられる。225は全面煤が付着し平坦面に一部磨痕があるが用途は不明。また加賀甕の破片出土。

SK 13 (第27図)

南西群に位置しSK11・12を切る。平面方形状で一辺1.0m、深さ10cmを測る。出土遺物なし。

SK 14 (第27図)

南東群SB07の平面と重なり、付属する土坑と考えられる。平面長方形状で長辺1.45m、短辺1.1m、深さ24cmを測る。出土遺物なし。

SK 15 (第27図)

南東群SB06の東2mに位置する。平面方形で一辺1.25m、深さ32cmを測る。出土遺物なし。

SK 16 (第27図)

南東群SK15の南に位置する。平面長方形状で長辺2.05m、短辺1.4m、深さ17cmを測る。出土遺物なし。

SK 17 (第27・37図)

南東群SB04の東に位置する。平面不整な楕円形状で幅60cm、長さは1mか。深さ5cmを測る。227の瀬戸おろし皿出土。

SK 18 (第27図)

南東群SK17にほぼ接する。平面不整な楕円形状で長さ95cm、幅50cm、深さ22cmを測る。土師器片と加賀甕片が出土した。

SK 19 (第27図)

南群北西に位置する。平面方形で一辺1.2mと1.15m、深さ7cmを測る。出土遺物なし。

SK 20 (第27図)

南群北西に位置する。平面不整な楕円形状で長さ1.6m、幅は1mか。段部があり深さ6cmと8cmを測る。出土遺物なし。

SK 21 (第27図)

南群に位置しSK20を切る。平面不整な楕円形状で長さ1.75m、幅は1.25mか。深さ15cmで南半に自然礫がみられる。越前甕片出土。

SK 22 (第27・37図)

南群中央に位置する。平面楕円状で長さ1.9m、幅1.5m、深さ42cmを測る。228の土師器は14世紀後葉～15世紀前半か。また出土した加賀甕片がSE03の204に接合した。

SK 23 (第27図)

南群中央に位置しSK22を切る。平面長方形で長辺1.25m、短辺0.95m、深さ13cmを測る。出土遺物なし。

SK 24 (第27図)

南群南西端に位置する。平面長方形で長辺1.85m、短辺1.05m、深さ8cmを測る。出土遺物は珠洲細片。

(5) 溝・ピット (第2・37図)

溝はSD01～11を扱う。中世期の溝はSD02・04～09であり、調査区を横断する西北西方向がSD05・06、縦断する北々東方向のものはSD02・04・07～09がある。近世以降の溝はSD01・03・10・11である。

まず中世期の溝から述べる。SD02は調査区中央を北々東に流路をもち、SX01付近で途切れる。SD09に繋がる方向をもつ。北半では段状となり、幅60cm、深さ25cm前後の溝と、幅は不明であるが深さ20cmの溝が重なったものか。SD09は幅40cm、深さ4cmを測る。

SD04は調査区北東に位置しSD02と17～19m隔てほぼ平行する。幅20～50cm、深さ4～6cm前後である。出土遺物はなし。

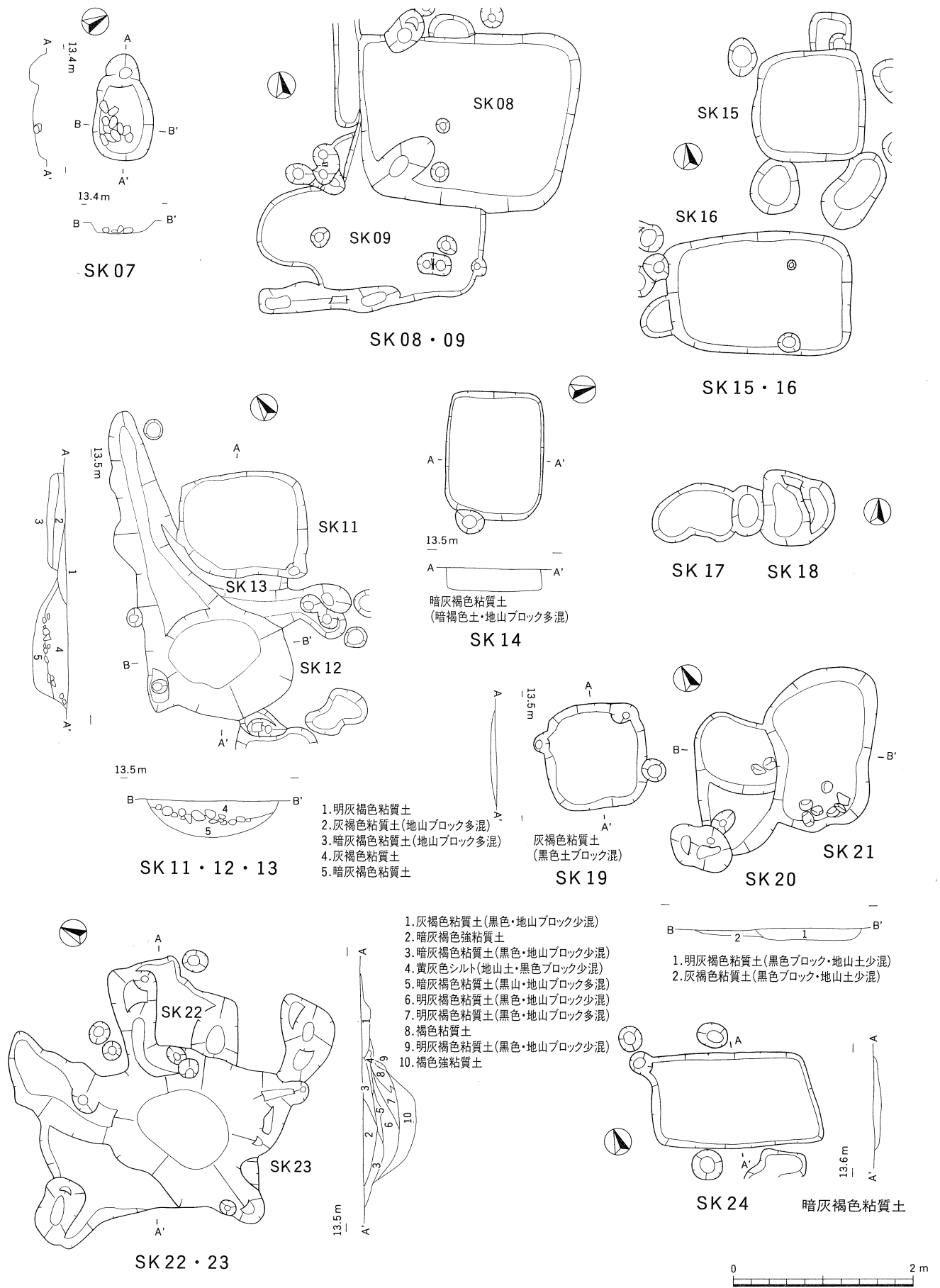
SD05は幅70～90cm、深さ50cm前後である。土師器231が出土する。SD06は幅70～90cm、深さ25cm前後であり、SD05と平行し時期はこれより新しい。遺物は瀬戸232・珠洲233～235・加賀236・越前237がみられる。234の珠洲摺鉢はV期で14世紀後葉～15世紀前半。

SD07はSX01付近でこの平面形に相応し緩く湾曲する。南側では浅くなり不鮮明となる。北側では幅30～40cm、深さ10cm前後である。出土遺物はなし。

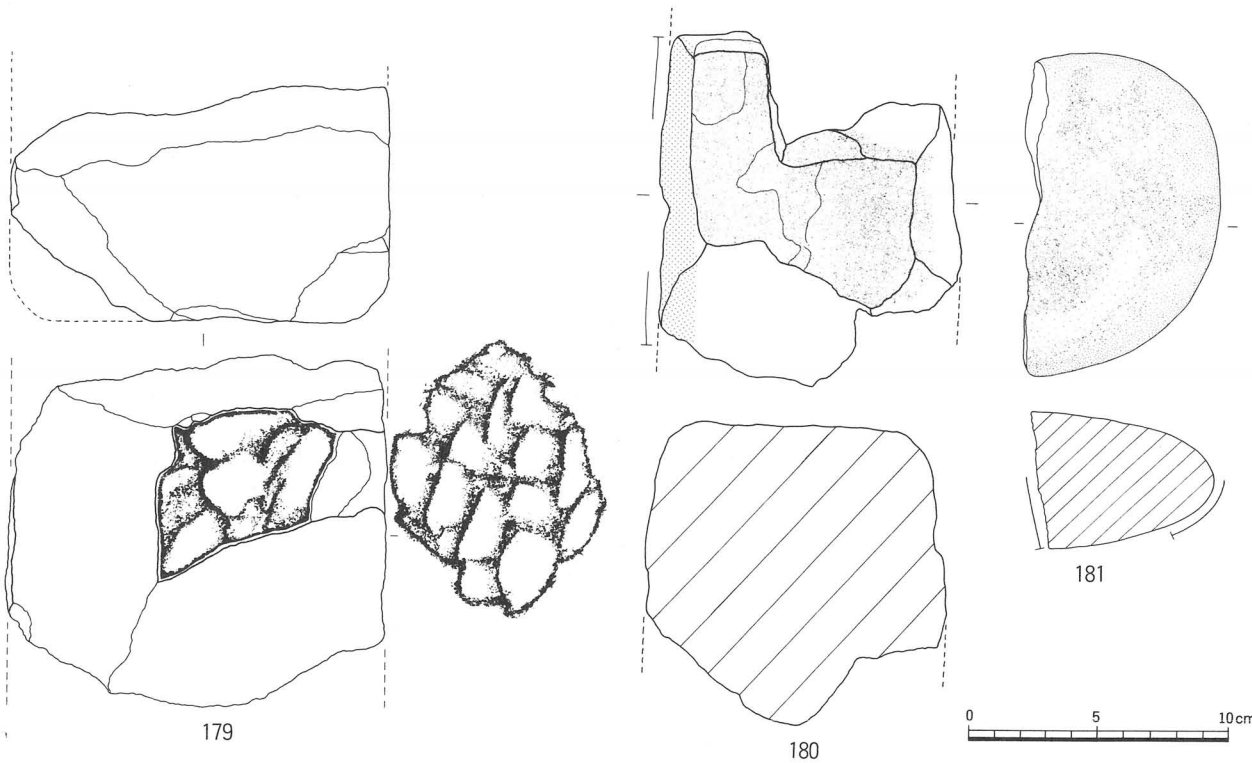
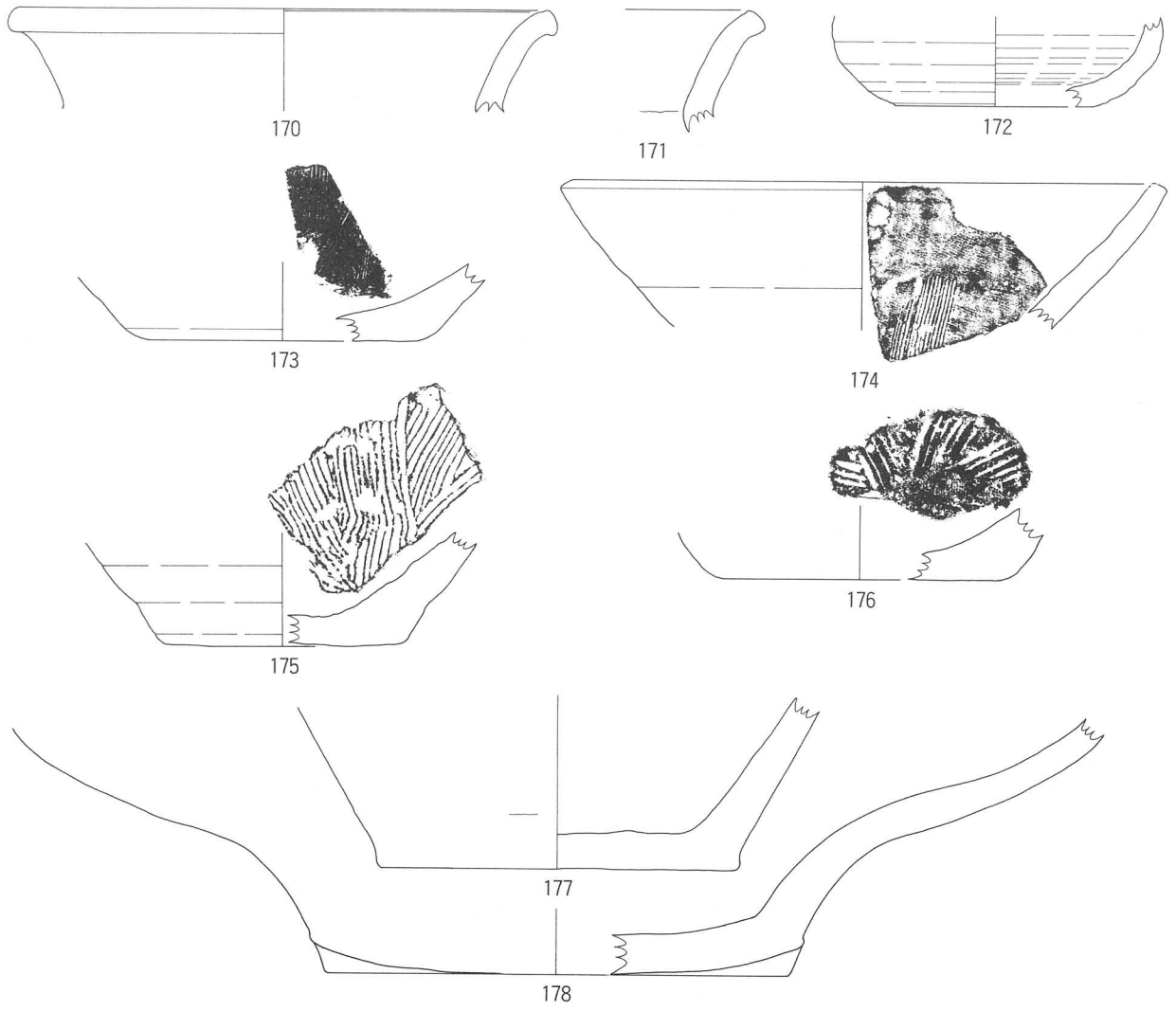
SD08はSD07の西2mに平行し、北側はSX01に切られる。幅25～40cm、深さ4～10cmで南側は残りが悪く浅い。西側のSD09とも6～7m離れほぼ平行する。

近世以降のSD01は調査区西端中央より北東へ流路をもつ。幅1.1～1.4m、深さ40～70cm。SD03はSI01東に位置し幅30～50cm、深さ5cm前後を測る。SD10・11は調査区南西端で検出した。SD10は幅60cm、深さ13cm。SD11は幅70cm、深さ7～20cm。

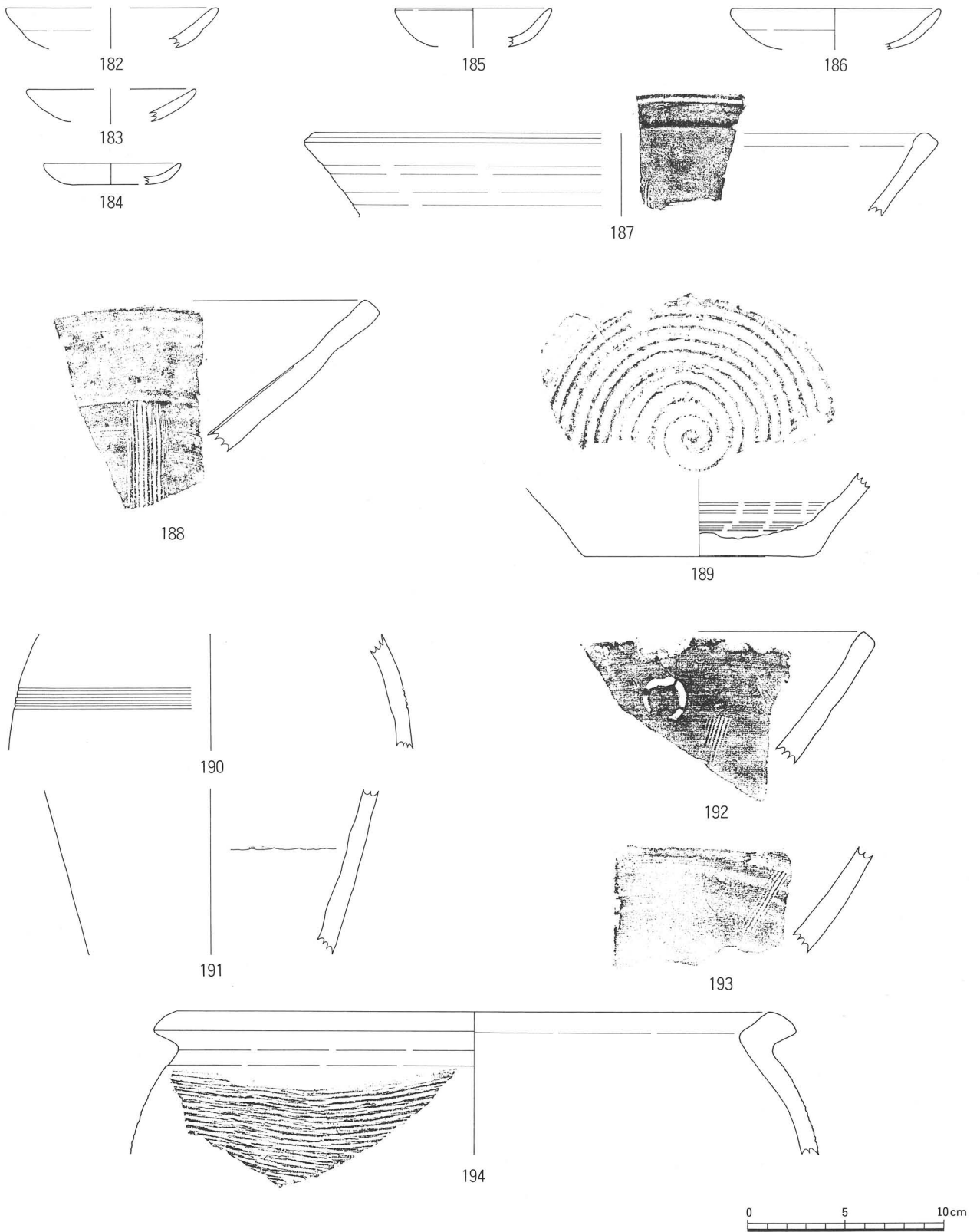
各ピットは他遺構との関係は不明であるが、図示可能な遺物の出土をみたものを取り上げる。SP01は調査区南側SB08の南5mに位置し土師器229が出土、調査区南SK24の北東4mのSP02からは肩部に円形の刻印をもつ瀬戸瓶子230が出土した。



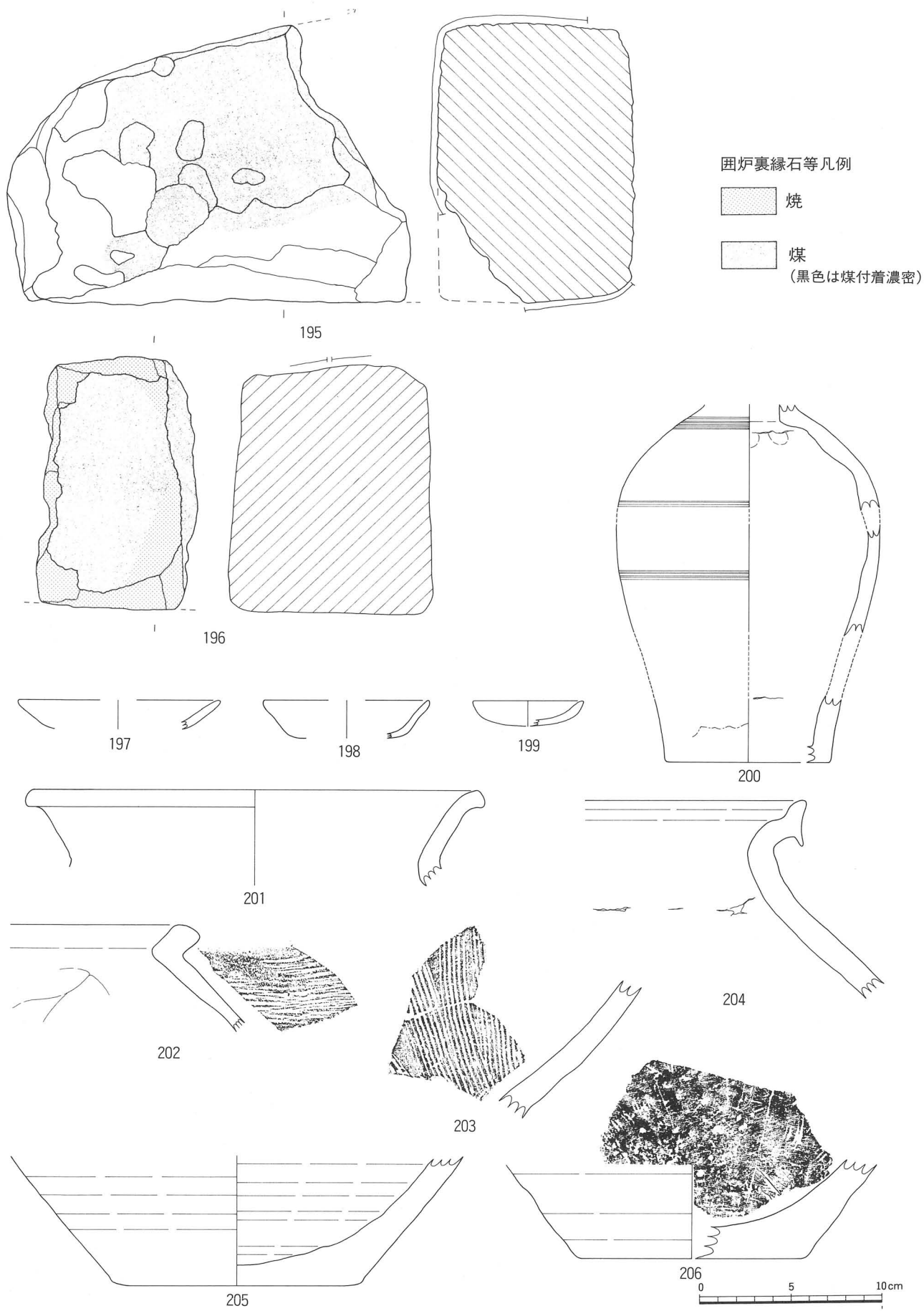
第27図 SK 07~09・SA 11~24 遺構図 (1/60)



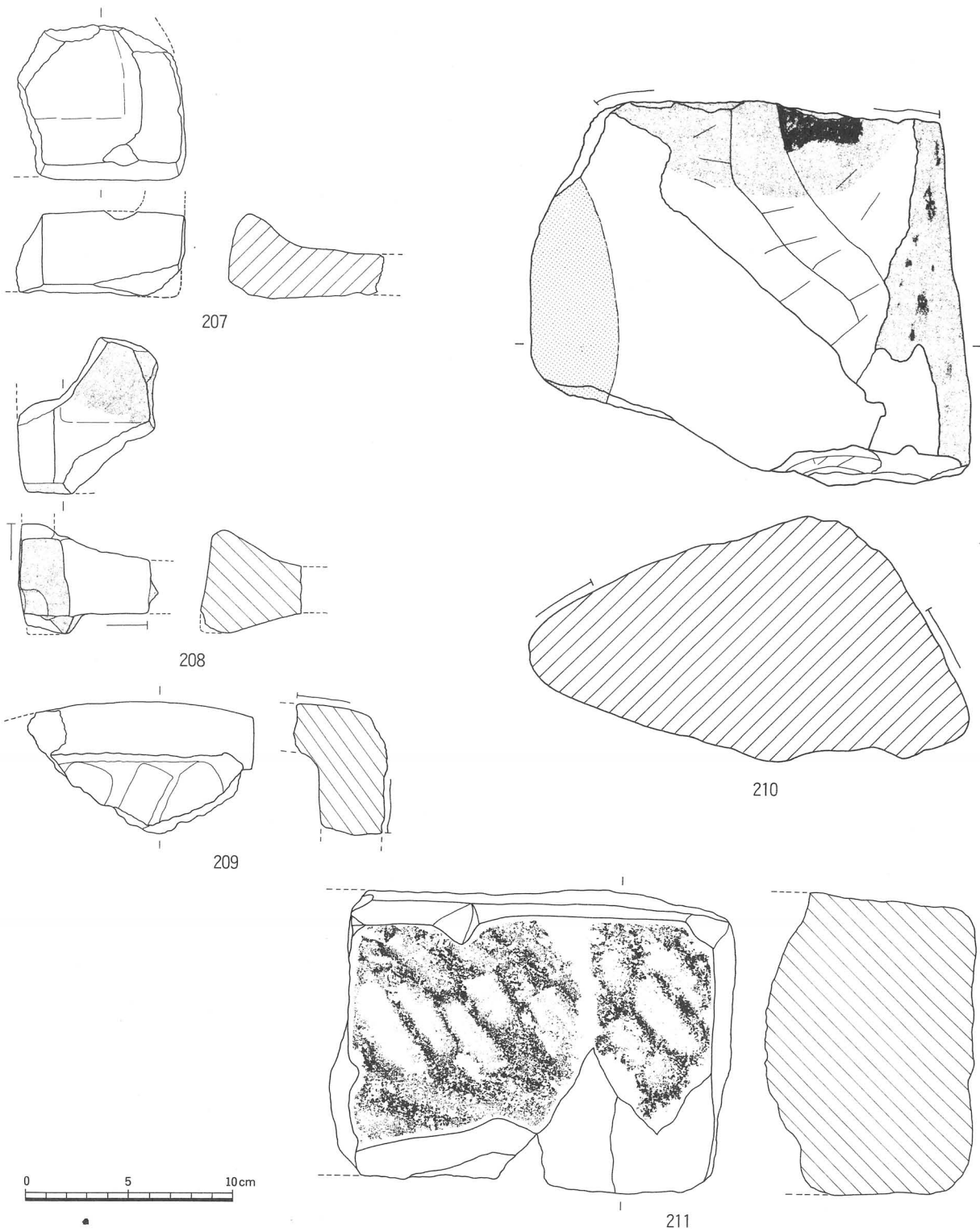
第28图 SX 01(170~181) 出土遺物 (1/3)



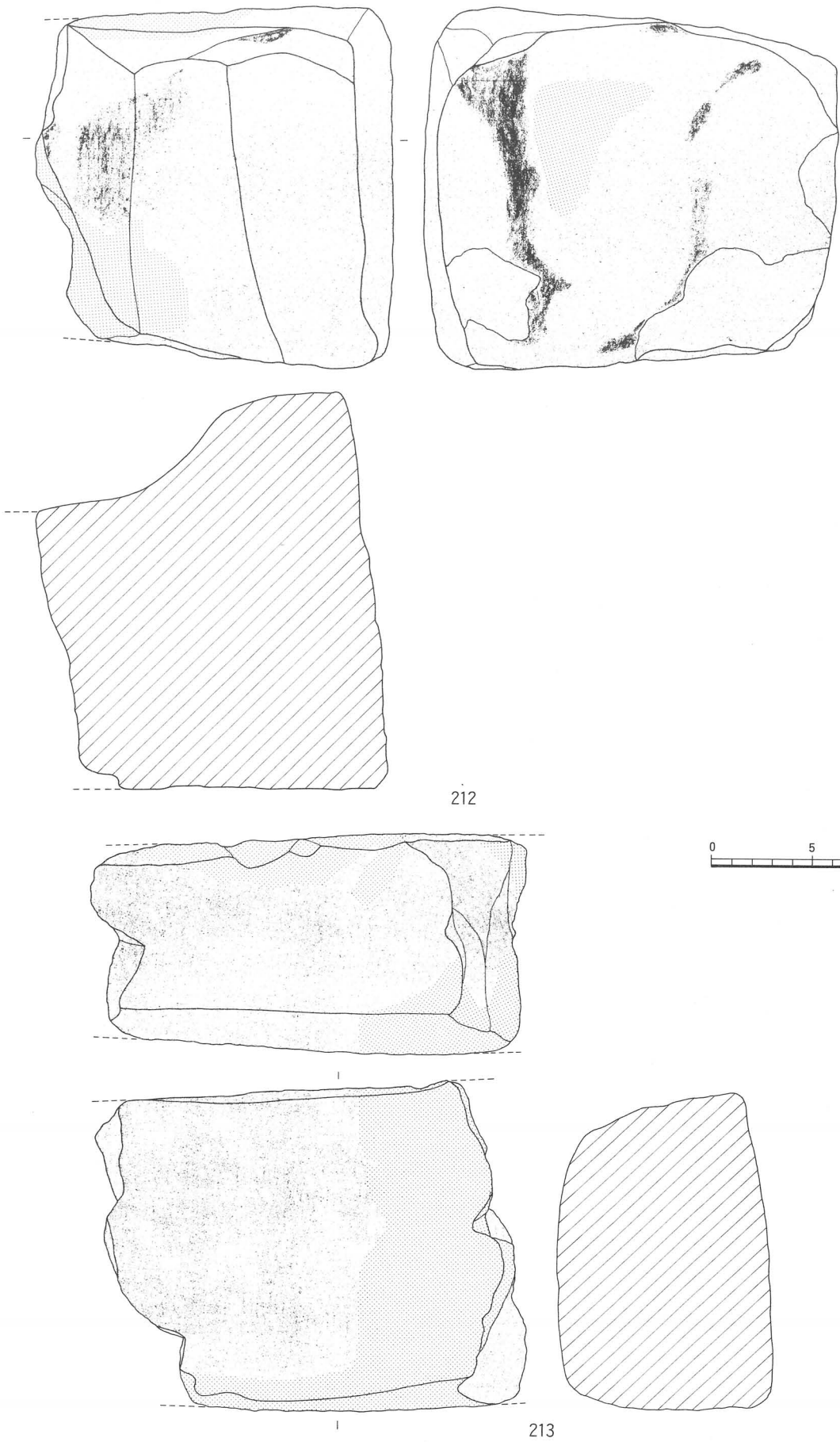
第29図 SX 02(182~184)・SB 08-P9(185)・SB 09-P2(187)
SA 05-P25(186)・SE 01(188・189)・SE 02(190~194) 出土遺物 (1/3)



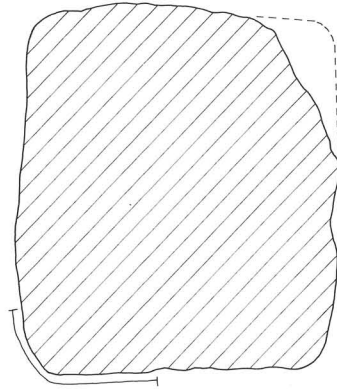
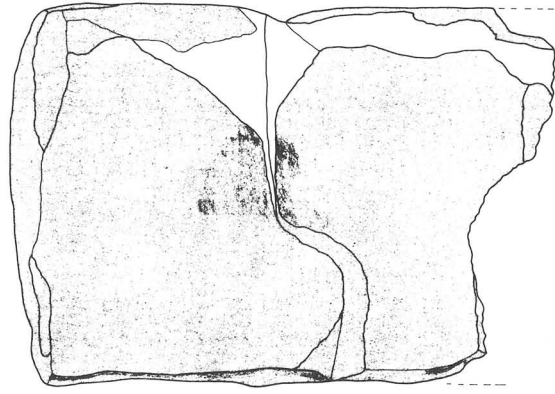
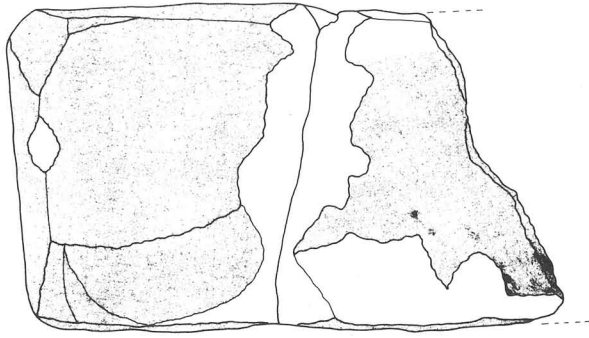
第30図 SE02(195・196)・SE 03(197~206) 出土遺物 (1/3)



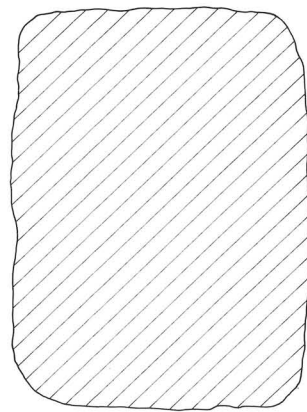
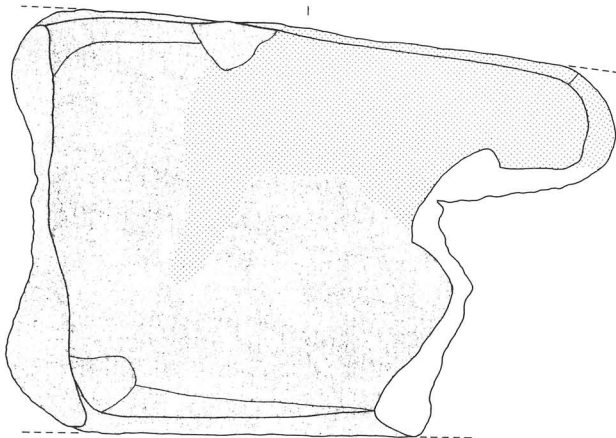
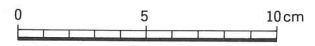
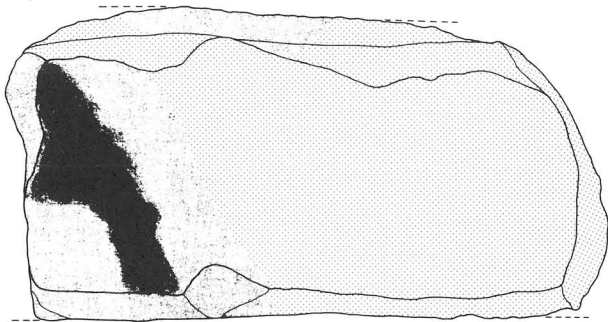
第31図 SE 03(207~211) 出土遺物 (1/3)



第32図 SE 03(212・213) 出土遺物 (1/3)

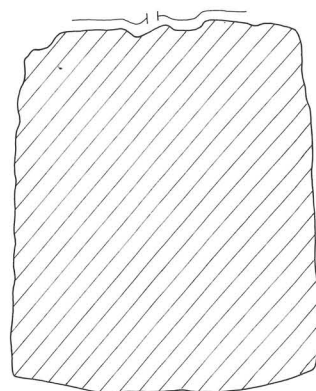
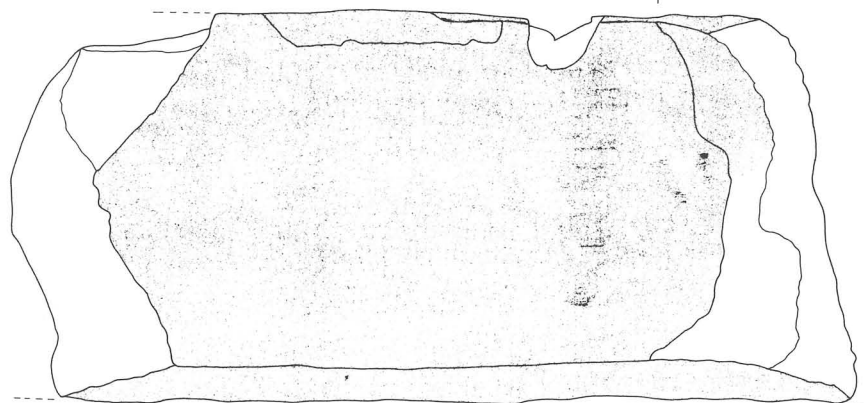
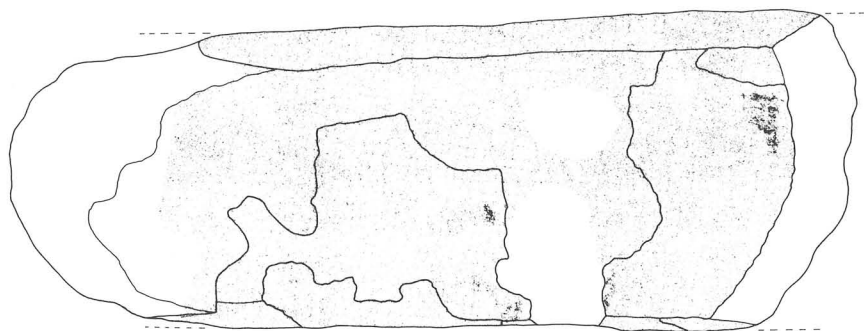


214

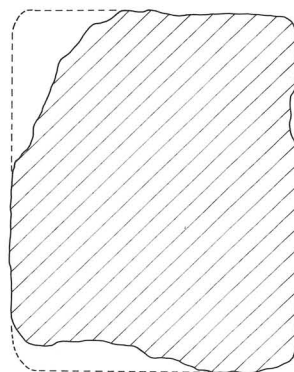
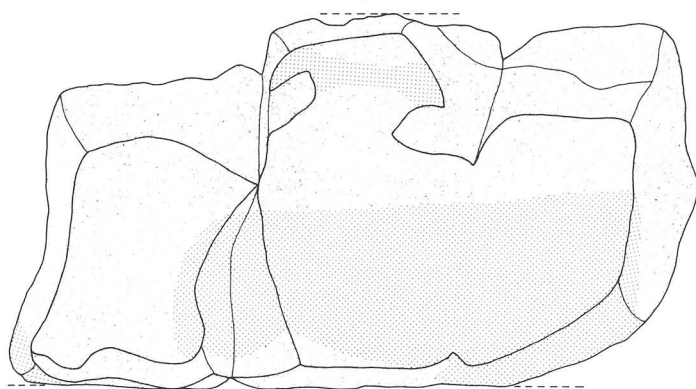
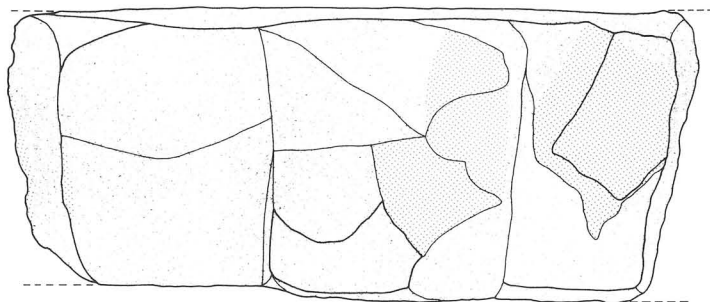


215

第33図 SE 03(214・215) 出土遺物 (1/3)



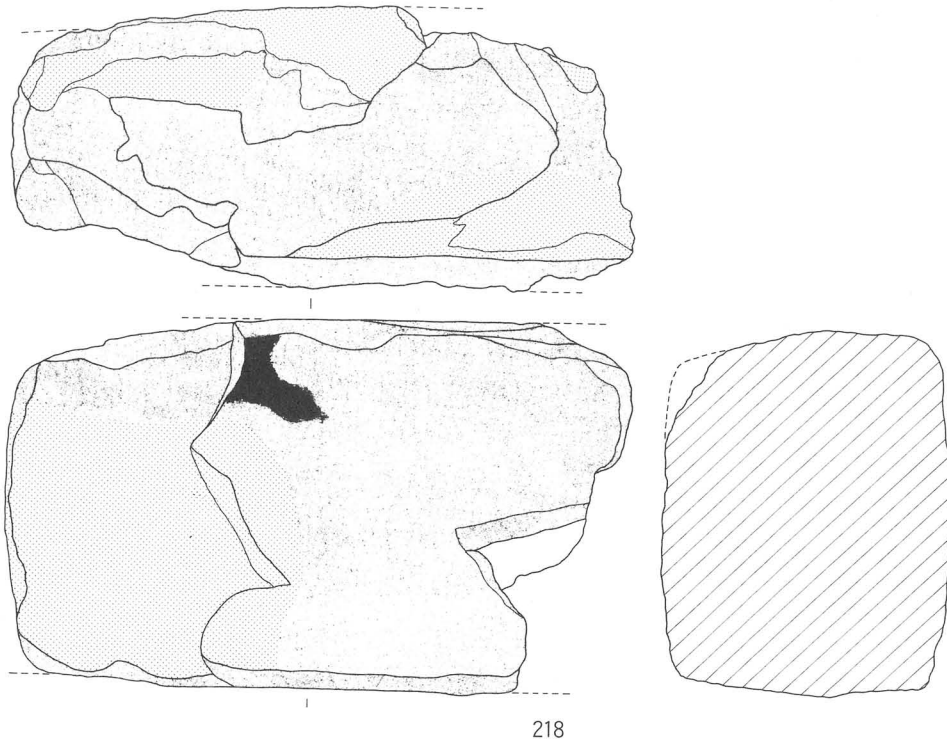
216



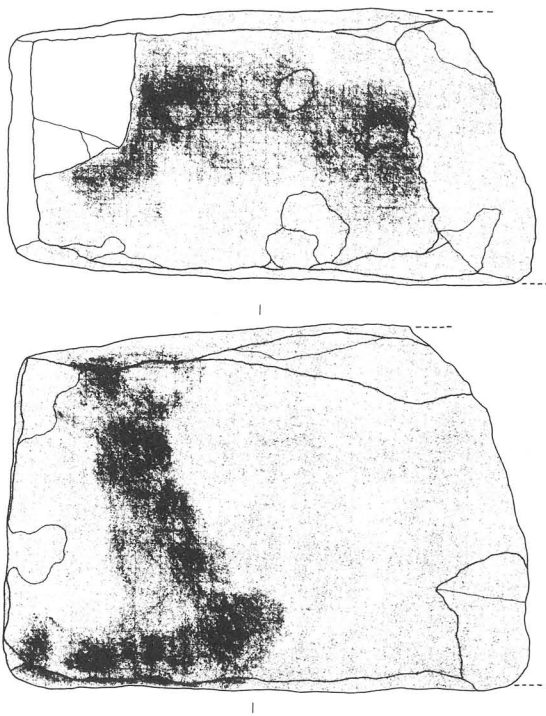
217



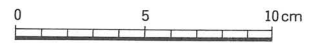
第34図 SE 03(216・217) 出土遺物 (1/3)



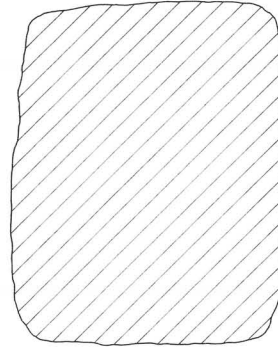
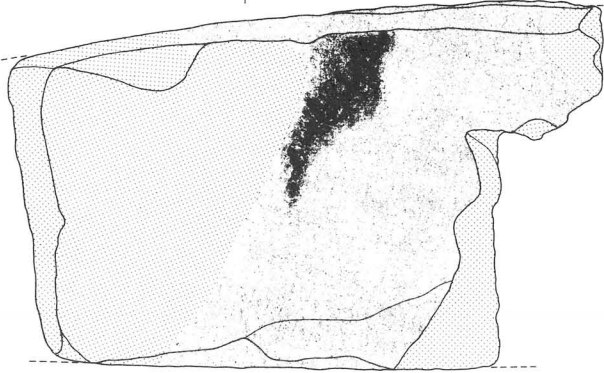
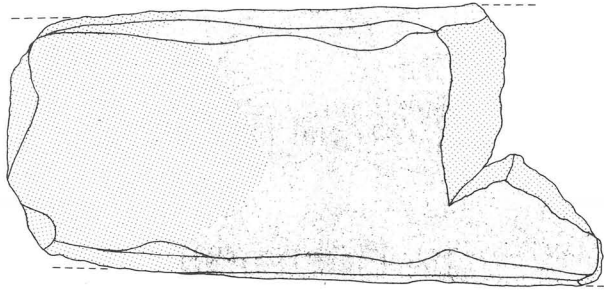
218



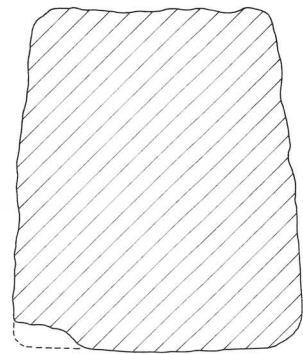
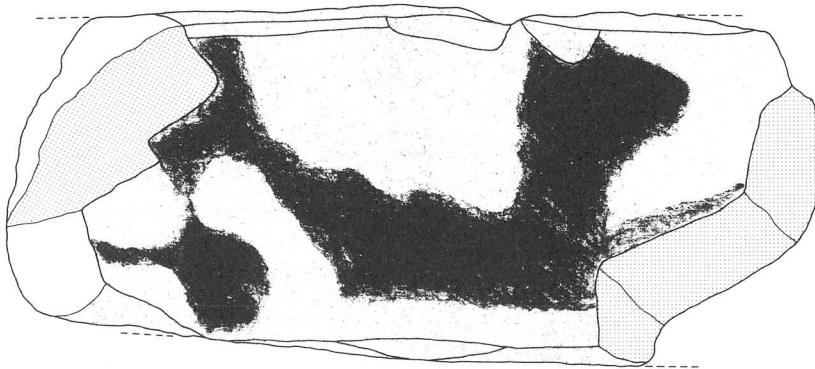
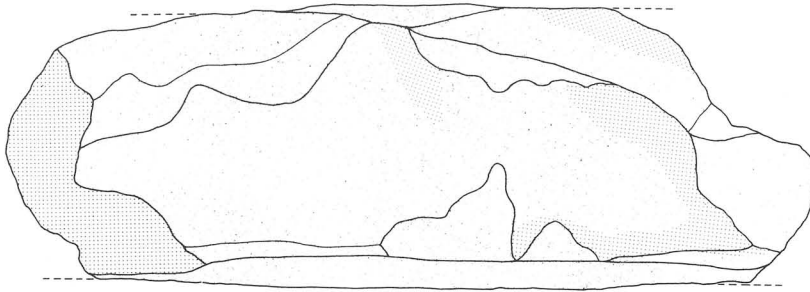
219



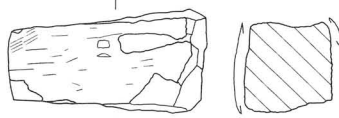
第35図 SE 03(218・219) 出土遺物 (1/3)



220



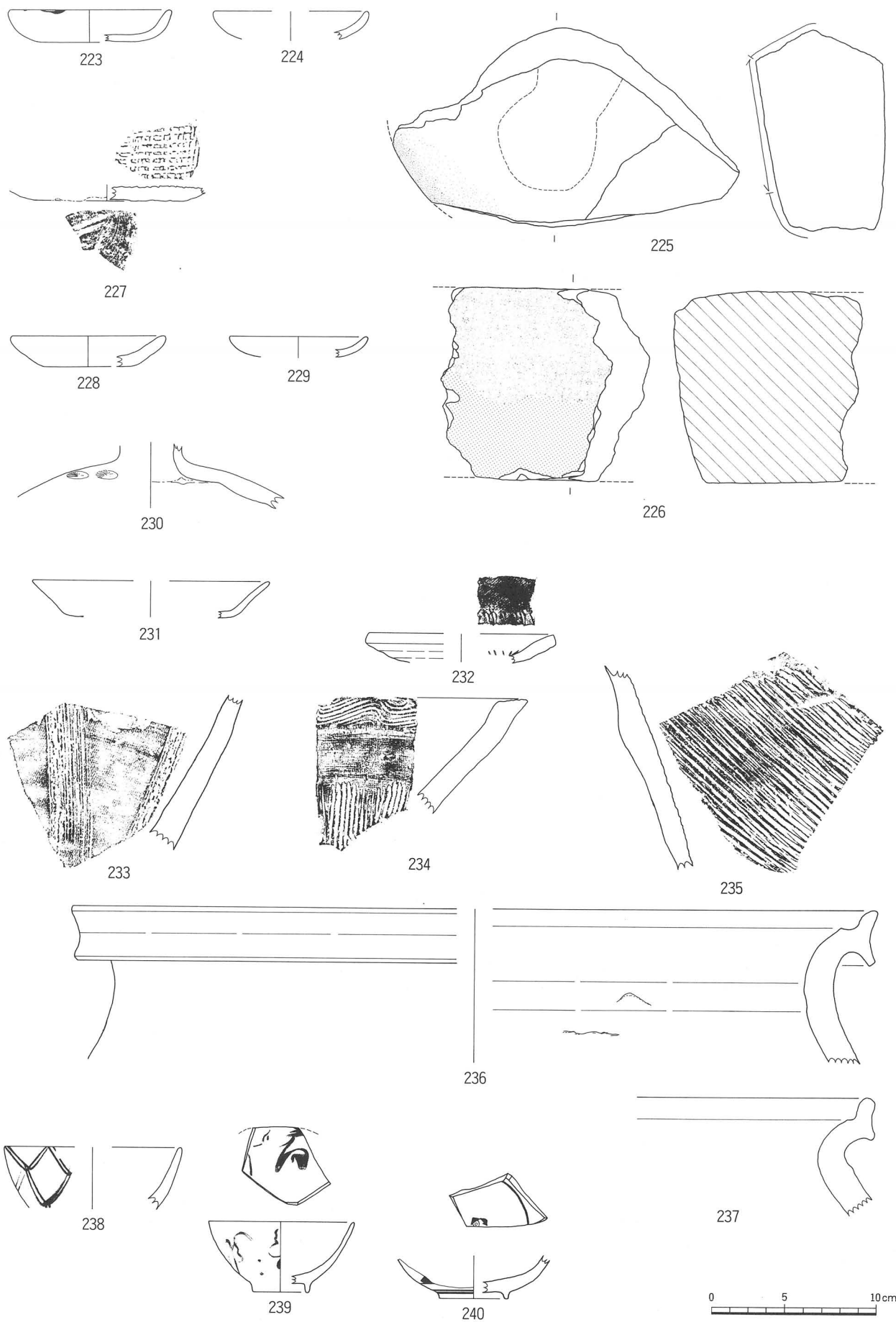
221



222



第36図 SE 03(220・221)・SE 04(222) 出土遺物 (1/3)



第37図 SK 11(223・224)・SK 12(225・226)・SK 17(227)・SK 22(228)・SP01(229)・
 SP 02(230)・SD 05(231)・SD 06(232~237)・SD 03(238・239)・SD 11(240) 出土遺物 (1/3)

3 ま と め

二日市イシバチ遺跡は北流する自然河川に挟まれた微高地上及び漸次的に低湿地へと変化する緩い傾斜地に立地し、標高は13mを測る。弥生時代後期後半法仏式期と中世期14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる集落を主体とし、若干ではあるが縄文時代と近世の時期を含む複合遺跡である。ここでは集落の変遷を概観しまとめをしたい。

縄文時代の遺構は、土坑としたSK10・25であり、他は僅かの土器の散布のみで状況は不明である。遺物は縄文時代後期中葉から晩期のものがみられ、御経塚遺跡や新保本町チカモリ遺跡など周辺では長期定着の大集落が展開する時期にあたる。

弥生時代では調査区の北部において後期後半の法仏式期の集落が営まれる。竪穴建物SI01～04の4棟が1群を形成し検出され、この群の西方12mに高床倉庫と推察する掘立柱建物SB01が位置する。各竪穴建物の遺物の検討は省略するが、時期については以下のとおりとしておきたい。2期に分けたが、連続するものと考えている。()の内容は順に規模の大別・平面形・主柱の数と配置形態・面積を示し、建て替えのある場合は最終段階のものとしている。

I 期 (法仏式古段階) SI 02 (中型・隅丸長方形・4本長方形・29.2m²)

SI 03 (大型・六角形 ・6本六角形・53m²)

II 期 (法仏式新段階) SI 01 (大型・五角形 ・8本?円形・62.5m²)

SI 04 (中型・隅丸方形 ・4本方形 ・36m²)

上記のとおり多角形主柱構造をとる大型の竪穴建物と2本または4本主柱構造をとる中型の竪穴建物が併存関係をもつものであろう。SB01についての詳細な時期は不明である。土坑の時期についても法仏式期の段階であり、新しい様相を示す土器は鞍部出土のもので月影I式期の所産であろう。本遺跡の周辺では横江古屋敷遺跡、御経塚シンデン遺跡において該期の竪穴建物が検出されている。また後続する集落遺跡として長池ニシタンボ遺跡、御経塚遺跡デト地区・ツカダ地区があげられ、集落の性格や展開の検討が今後の課題となる。

中世期にはいと再び集落が形成される。溝により十文字に区画された4地区のうち、北西区画を除く3地区に掘立柱建物・井戸・土坑がそれぞれ群を構成し分布する。各群における遺構の構成は次のとおりである。また掘立柱建物の梁行・桁行の間数と面積・方位を()に示し、掘立柱建物とセット関係が考えられる方形の土坑や竪穴状遺構及び柱列を[]とし遺構名に続けまとめてみた。

A 群 (北東群) SB03 (1×2?・?・N33°E)

SB05 (1×2・9.6m²・N15°E) [SK08・SK09?、SB02]

SE01・SA01

B 群 (南東群) SB02 (1×2・6.9m²・N20°E)

SB04 (1×2・6.4m²・N16°E) [SX02?]

SB06 (1×4・10.7m²・N16°E) [SK16・SK15?]

SB07 (1×1・3.5m²・N14°E) [SK14]

SB13 (1×3・12.8m²・N15°E) [SK28・SA06]

SE04・SX01・SX03

C 群 (南西群) SB08 (2×3・19.0m²・N17°E)

SB09 (1×1・9.9m²・N2°W)・SB10 (3×3・24.1m²・N6°E)

SB11 (1×2・3.4m²・N27°E)・SB12 (1×1・2.7m²・N27°E)

SE02・SE03

なお東西棟の建物については南北軸の方位を採用しており遺構の記述とは90°違っている。

A群とB群の掘立柱建物はすべて梁行1間の建物である。このうち桁行2間以上の建物では7m²級のSB02・04は土坑の付属は無く、10m²級のSB05・06・13には土坑が付属する。これは建物の時期差か機能差によるものかは不明であり、また面積も小さいものであるが、住居の機能を与えておきたい。他の建物は付属屋となろう。A群のL字状柱列SA01は南北3間、東西4間の規模をもち建物の可能性も否定できない。またSB05と同じ方位をとり1.8m離れる柱列SA02は下屋を支えるものであろうか。

B群においては遺構の切り合いにより2回の建て直しが確認でき、遺構の新旧は溝も含めてSB13・06?・SD08→SB04・SD07→SB02の移行を推定している。SB13とSA06についてもA群SB05・SA02と同様に下屋となるものとも考えられる。

C群では住居機能と考えられるSB08・10と付属屋のSB09・10・11がみられる。SB10・09はセット関係か。SB08・10は梁行が2間や3間となり面積は20m²級と大きく土坑は付属しない。また柱のとおりも大雑把で柱穴の多くは浅いなど、A・B群の住居とした建物とは違いが見られる。

遺物は13世紀代や14世紀後半から15世紀前半のものが混在して出土する。また量も少なく細片が多いため遺構の時期判断には問題も残るものであるが推察を試みると、A群?→B群→C群となろうか。C群では構成遺構となる井戸SE02・SE03からの出土遺物に瀬戸の瓶子がみられることからC群はA・B群より若干新しい時期で、掘立柱建物の違いは時期差か。しかしA・B・C群の併存を否定するものではない。13世紀代の遺構については不明であるが、本集落は14世紀後半～15世紀前半の散居村の風景が目にかぶ農村としておきたい。

以上簡単ではあるが気のついたことを述べまとめとしたが、参考とした文献や各遺物の編年資料については筆者の力量と理解不足のため、遺物や遺構の年代について齟齬を生じているかも知れない。お詫びするとともに、今後の課題としたい。御批判・御叱正を願うものである。

参考文献

- 金山 弘明 1995年『松任市横江古屋敷II』松任市教育委員会
楠 正勝 1996年『金沢市西念・南新保遺跡IV』金沢市教育委員会
田嶋 明人 1993年「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
高橋 由知 1993年『松任市横江古屋敷I』松任市教育委員会
安 英樹ほか1992年『松任市竹松遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
安 英樹・浜崎悟司 1993年「北陸南西部、集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
谷内尾晋司 1983年「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学I』石川考古学研究会
吉岡 康暢 1991年『日本海域の土器・陶磁 [古代編]』六興出版
前田 清彦 1995年『旭遺跡群』松任市教育委員会

藤田 邦雄 1997年「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸』北陸中世研究会
垣内光次郎 1997年「加賀国の陶磁器流通」『中・近世の北陸』北陸中世研究会
田嶋 正和 1997年「遺構からみた加賀国」『中・近世の北陸』北陸中世研究会
前川 要 1996年「中世の家族と住居」『家族と住まい』考古学による日本歴史15 雄山閣出版
吉岡 康暢 1994年『中世須恵器の研究』吉川弘文館
北陸中世土器研究会 1993年『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』
助瀬戸市埋蔵文化財センター 1997年『研究紀要第5輯』
富山県文化振興財団 1994年『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告 (遺構編)』

出土遺物一覽表 (1)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
1	SI01 床面	甕	口径 220	1/3	淡黄褐色	
2	SI01	甕	口径(192)	1/8	淡橙褐色 橙褐色	
3	SI01	甕	口径(205)	1/8	淡茶褐色 橙褐色	
4	SI01	甕	口径 162	1/6	暗褐色	外面スス付着
5	SI01	甕	口径 150	1/6	暗褐色	
6	SI01	甕	口径 190	1/5	淡黄褐色 褐色	
7	SI01	甕	口径 165	1/8	橙褐色 暗褐色	
8	SI01 床面	甕	口径 166	全周	褐色	
9	SI01	甕	口径 150	1/4	橙褐色	10と同一固体
10	SI01	甕	底径 32	全周	橙褐色	
11	SI01	甕	口径(172)	1/9	淡茶褐色 淡橙褐色	外面スス付着
12	SI01	甕	口径 186	1/5	淡橙褐色	
13	SI01 床面壁溝上	甕	口径 156 胴径 140 器高 147	ほぼ 完形	淡茶褐色・暗褐色 淡茶褐色	
14	SI01	甕	口径 119	1/3	赤褐色・淡茶褐色	
15	SI01	甕	口径 150	1/6	淡橙褐色 淡褐色	
16	SI01	甕	口径 164	1/6	赤褐色 橙褐色	
17	SI01 壁溝上	甕	口径 167 胴径 189	1/3	淡茶褐色 (黒斑あり)	
18	SI01 床面	壺	口径 128 頸径 115 胴径 168 器高 247 底径 37	ほぼ 完形	淡黄褐色・褐色 淡黄褐色・褐色・黒褐色	
19	SI01 床面	甕	底径 45 胴径 152	1/2	淡茶褐色 暗褐色	図上復元 体部中央 1穴
20	SI01	壺	口径 162	1/6	淡橙褐色	
21	SI01 壁溝	壺	口径 116	1/5	淡橙褐色	
22	SI01	甕	口径(144)	1/10	淡橙褐色 黒褐色・赤褐色	
23	SI01 床面	壺	口径 131 胴径 145	1/2	淡茶褐色・黒斑 淡茶褐色	
24	SI01	鉢	口径(232)	1/8	赤褐色	
25	SI01	高坏	口径 277 器高 209 裾径 166	完形	赤褐色 淡茶褐色・黒褐色	赤彩痕 あり
26	SI01	高坏	口径(244)	1/9	淡褐色 褐色	
27	SI01	高坏	口径(218)	1/9	褐色 暗褐色	

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
28	SI01	高坏	口径(196)	1/10	褐色 淡橙褐色	赤彩痕あり
29	SI01	器台	裾径 138	1/5	橙褐色	図上復元
30	SI01	器台		全周	淡橙褐色	赤彩痕あり
31	SI01	器台		全周	暗褐色・褐色 褐色	
32	SI01	器台		全周	淡橙褐色 淡茶褐色	赤彩痕あり
33	SI01	器台	口径(200) 裾径 166	1/8	淡橙褐色 橙褐色	図上復元
34	SI01	器台	口径(186)	1/14	橙褐色	
35	SI01	裾部	裾径 134	1/4	淡褐色 褐色	
36	SI01	底部	底径 56	1/2	暗褐色	
37	SI01	底部	底径 60	1/2	淡褐色 黒褐色	
38	SI01	底部	底径 38	1/4	暗褐色 淡褐色	
39	SI01	底部	底径 36	1/2	淡褐色 褐色	
40	SI02 下層	甕	口径 166	1/6	淡茶褐色	
41	SI02 下層	甕	口径 200	1/7	淡黄褐色	
42	SI02 上層	甕	口径 200	1/4	淡黄褐色	
43	SI02 下層	甕	口径 140 胴径 149	1/2	淡茶褐色	肩部へラ先の 押圧
44	SI02 上層	甕	口径 180	1/7	赤褐色	45と同一固体
45	SI02 上層	甕	底径 42	全周	赤褐色	
46	SI02	甕	口径 132	1/6	淡黄褐色	
47	SI02 P7	鉢	口径(163)	1/9	橙褐色	外面黒斑あり
48	SI02 上層	高坏	口径(220)	1/9	黒褐色 淡褐色	
49	SI02	鉢	口径 160	1/7	淡黄褐色	
50	SI02 上層	高坏	口径 105	全周	淡黄褐色 黒褐色	
51	SI02	器台		1/3	淡黄褐色	
52	SI02 P7	高坏	口径 238 器高 196 裾径 142	1/2	淡黄褐色	
53	SI02	蓋	鈕径 30	全周		
54	SI02 上層	蓋	鈕径 16	全周	淡黄褐色	
55	SI02 下層	底部	底径 62	全周	淡黄褐色 (黒斑あり)	

出土遺物一覽表 (2)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外内	備考
56	SI02 P7	底部	底径 40	全周	茶褐色 暗褐色	
57	SI02 上層	底部	底径 38	1/3	淡橙褐色 黒褐色	
58	SI02 上層	底部	底径 46	1/5	淡茶褐色 褐色	
59	SI02 上層	底部	底径 76	1/7	褐色 淡黄褐色	
60	SI02 上層	底部	底径 58	1/7	淡茶褐色	
61	SI02 上層	底部	底径 51	1/3	淡黄褐色 褐色	
62	SI03 下層	甕	口径(161)	1/9	褐色 黒褐色	
63	SI03 上層	甕	口径(178)	1/12	淡橙褐色 橙褐色	一部スス付着
64	SI03 上層	甕	口径 164	1/8	淡橙褐色	
65	SI03 下層	甕	口径 174	7/8	淡茶褐色 淡黄褐色	
66	SI03 上層	甕	口径(188)	1/10	淡黄褐色	
67	SI03 上層・下層	甕	口径 158	1/4	橙褐色	
68	SI03	甕	口径(154)	1/9	褐色	
69	SI03	甕	口径 180	1/5	赤褐色 淡茶褐色	
70	SI03 床面	甕	口径 145 胴径 144	1/6	淡橙褐色・黒褐色 褐色	
71	SI03 下層	甕	口径 172	1/4	淡黄褐色	
72	SI03 上層	甕	口径(177)	1/9	淡褐色	
73	SI03 下層	甕	口径 156	1/7	淡黄褐色	
74	SI03 上層	甕	口径 130	1/7	橙褐色	
75	SI03 下層	甕	口径(122)	1/9	褐色	
76	SI03 下層	鉢	口径(110)	1/9	淡黄褐色	
77	SI03 上層	甕	口径 114 胴径 106	1/8	淡橙褐色 灰褐色	
78	SI03 上層	甕	口径 96 胴径 88	1/8	橙褐色	
79	SI03 下層	壺	口径 164	1/2	橙褐色 橙褐色・灰色	
80	SI03 下層	壺	口径 152	1/6	淡橙褐色	
81	SI03 下層	壺	口径 146	1/5	淡橙褐色	

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外内	備考
82	SI03 床面	壺	底径 19 胴径 124	全周	淡橙褐色・黒班あり 黒褐色	
83	SI03 下層	壺	口径 100	1/4	淡橙褐色	
84	SI03 上層	細頸壺	頸径 38	全周	淡茶褐色	
85	SI03 下層	壺	口径 104	1/5	橙褐色 淡茶褐色	
86	SI03 下層	甕	口径 152	3/4	淡茶褐色 淡褐色	
87	SI03 P8	甕	口径 126	1/7	淡茶褐色	頸部に穿孔あり (径 4mm)
88	SI03 下層	高坏	口径(200)	1/9	淡褐色・一部黒班 褐色	
89	SI03 上層	高坏	口径 154	1/4	赤彩	SK06と接合
90	SI03	高坏	裾径 120	1/2	赤彩 淡茶褐色	透かし穴 (推定4穴 径8mm)
91	SI03 P8	高坏		全周	淡褐色 淡橙褐色	
92	SI03 床面	器台	裾径(144)	1/12	淡橙褐色	透かし穴あり 数不明
93	SI03 下層	器台	裾径 203	1/7	赤彩 橙褐色	
94	SI03 下層	器台	口径 205	1/7	淡橙褐色・一部黒班 淡橙褐色	
95	SI03 下層	器台	裾径(190)	1/9	淡橙褐色	
96	SI03 上層	器台	裾径(163)	1/9	褐色	
97	SI03 下層	器台	裾径(164)	1/10	淡黄褐色	
98	SI03 下層	器台	裾径 145	1/6	褐色 裾部黒褐色・他褐色	
99	SI03	器台	裾径 90	全周	橙褐色	赤彩
100	SI03 下層	底部	底径 63	1/3	橙褐色 暗褐色	
101	SI03 下層	底部	底径 41	1/3	赤褐色 暗褐色	
102	SI03 下層	底部	底径 36	1/4	暗褐色 灰褐色	
103	SI03 上層	底部	底径 31	1/4	褐色 暗褐色	
104	SI03 下層	底部	底径 38	1/4	淡茶褐色 暗褐色	底部に穿孔の 途中
105	SI03 上層	底部	底径 50	1/4	褐色・一部黒班 淡茶褐色	
106	SI04 上層	甕	口径 160	1/3	淡橙褐色 橙褐色	外面スス付着
107	SI04 下層	甕	口径(187)	1/12	淡褐色	

出土遺物一覽表 (3)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
108	SI04 下層	甕	口径 160	1/7	淡褐色	外面スス付着
109	SI04 上層	甕	口径 178	1/8	褐色	
110	SI04 上層	甕	口径 166	1/4	淡黄褐色 暗褐色	
111	SI04 下層	鉢か	口径 216	1/8	淡茶褐色	
112	SI04 上層	甕	口径(180)	1/15	淡橙褐色	
113	SI04 下層	甕	口径(194)	1/11	灰褐色 褐色	外面スス付着
114	SI04 上層	甕	口径 118	1/8	褐色	
115	SI04 下層	甕	口径 150	1/7	淡褐色	
116	SI04 上層	高坏	口径 305	2/3	淡褐色	
117	SI04 上層	高坏	口径 276	1/3	淡褐色	
118	SI04 上層	高坏	裾径(218)	1/10	淡橙褐色 橙褐色	
119	SI04 上層	高坏	裾径 184	1/7	褐色 黒褐色	
120	SI04 床面	高坏	裾径 137	1/4	赤彩 淡褐色	
121	SI04 下層	高坏	裾径 148	1/4	淡褐色 (一部黒班)	
122	SI04 上層	器台	裾径(170)	1/9	淡褐色(一部黒班) 淡茶褐色	
123	SI04 上層	蓋	鈕径 44	全周	淡褐色	
124	SI04 下層	蓋	鈕径 26	全周	淡橙褐色	
125	SI04 下層	底部	底径 48	1/4	淡茶褐色 灰褐色	
126	SI04 下層	底部	底径 34	全周	淡褐色 黒褐色	
127	SK01	台付甕	台径 82	底部全周 胴部1/5	淡褐色	
128	SK02	甕	口径 154	1/8	淡褐色 灰褐色	外面スス付着
129	SK02	甕	口径(190)	1/13	淡橙褐色 淡褐色	外面スス付着
130	SK03	甕	口径(176)	1/10	淡茶褐色 橙褐色	
131	SK03	甕	口径(183)	1/9	淡茶褐色 淡橙褐色	
132	SK03	器台		1/4	淡褐色	透かし穴4か
133	SK03	器台		1/4	褐色 暗褐色	透かし穴4か
134	SK03	底部	底径 32	1/8	暗褐色	
135	SK03	底部	底径 42	全周	淡褐色 黒褐色	
136	SK04	鉢か	口径(255)	1/9	淡橙褐色	外面スス付着
137	SK04	甕	口径 158	1/8	淡褐色 黒褐色	
138	SK04	甕	口径 145	1/4	淡橙褐色 淡褐色	
139	SK04	甕	口径(257)	1/13	黒褐色 橙褐色	
140	SK04	壺	口径 136	1/7	橙褐色 暗褐色	
141	SK04	底部	底径 35	1/4	淡茶褐色 暗褐色	
142	SK05	高坏	口径 355	1/8	赤彩	
143	SK05	高坏	口径 261	1/3	褐色 褐色・黒褐色	
144	SK06	蓋	鈕径 37	全周	淡褐色 灰褐色	
145	SK06	器台	口径 216	口縁部1/4 柱状部全周	淡褐色	
146	SK06	短頸壺	口径 140	1/8	赤彩 (淡茶褐色)	
147	SK26	壺	口径 140	2/3	淡褐色	
148	SK26	器台	口径 276 器高 220 裾径 185	1/5	淡黄褐色 淡橙褐色	透かし穴 (4穴 径7mm)
149	SK26	底部	底径 47	全周	淡褐色 暗褐色	
150	包含層	甕	口径 150	1/6	淡黄褐色	
151	包含層	甕	口径 160 胴径 172	1/2	褐色 淡褐色	
152	包含層	底部	底径 22	全周	淡茶褐色 褐色	外面スス付着
153	SK10	底部	底径 106	1/3	橙褐色	縄文土器
154	SB01 P1	底部	底径 82	1/6	灰褐色	縄文土器
155	SI01	深鉢		小片	灰褐色	縄文土器
156	793.9X 939.8Y 包含層下	鉢	口径 200	1/3	灰褐色	縄文土器
157	SI01	壺		小片	暗褐色	縄文土器
158	SD06	深鉢		小片	黒褐色	縄文土器

出土遺物一覽表 (4)

図番号	出土地点	器種	法量(mm, g) ()は欠部				石質等備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
159	780.6X984Y ビット	打製石斧	174	77	28	510	火山礫凝灰岩
160	S I 0 3 P 8	打製石斧	(135)	97	33	(535)	石英安山岩
161	S D 0 6	打製石斧	(134)	83	26	(225)	凝灰岩
162	794X 934Y 包含層下	打製石斧	(97)	94	35	(358)	緑色凝灰岩
163	S D 0 7	石鏃	30.1	15.8	3.3	1.1	輝石安山岩
164	S I 0 3 下層	剥片	50	32	38	79.1	緑色珪質凝灰岩
165	S I 0 3	剥片	38	34	15	21.5	緑色珪質凝灰岩
166	S I 0 4 上層	砥石	(35)	16	7	(6)	凝灰岩
167	S I 0 2 下層	砥石	(133)	24	23	(126)	凝灰岩
168	S I 0 4 床面	砥石?	164	135	49	1620	細粒砂岩
169	S K 0 3	不明	(340)	115	(90)	(4571)	焼け痕、煤付着

図番号	出土地点	器種	法量(mm) () 推径または欠損部	産地	備考
170	S X 0 1	壺	口径 220	珠洲	
171	S X 0 1	壺		珠洲	
172	S X 0 1	小壺	底径 80	瀬戸?	底面一糸きり痕
173	S X 0 1	摺鉢	底径 114	珠洲	卸し目単位不明
174	S X 0 1	摺鉢	口径 (240)	珠洲	卸し目 幅 2.0cm 13条
175	S X 0 1	摺鉢	底径 102	珠洲	卸し目 幅 3.0cm 11条
176	S X 0 1	摺鉢	底径 123	珠洲	卸し目摩滅 単位不明
177	S X 0 1	壺	底径 147	越前	SE04出土と接合
178	S X 0 1	甕	底径 195	加賀	
179	S X 0 1	不明	幅 149		全体に焼痕
180	S X 0 1	緑石	厚さ? 120	在地	焼け 煤
181	S X 0 1	不明	厚さ 129		焼け 煤
182	S X 0 2	土師器	口径(109)	在地	
183	S X 0 2	土師器	口径(87)	在地	
184	S X 0 2	土師器	口径 70 底径 40 器高 11	在地	
185	S B 0 8 P 9	土師器	口径 80	在地	
186	S A 0 5 P 2 5	土師器	口径 108	在地	
187	S B 0 9 P 2	摺鉢	口径(325)	越前	卸し目

図番号	出土地点	器種	法量(mm) () 推径または欠損部	産地	備考
188	S E 0 1	摺鉢		珠洲	卸し目 幅2.0cm 10条
189	S E 0 1	底部	底径 116	珠洲	
190	S E 0 2	瓶子		瀬戸	191と同一個体
191	S E 0 2	瓶子		瀬戸	
192	S E 0 2	摺鉢		珠洲	193と同一個体 卸し目幅1.1cm 7条
193	S E 0 2	摺鉢		珠洲	
194	S E 0 2	甕	口径 308	珠洲	
195	S E 0 2	緑石	長さ 210 幅 160	在地	煤、軽石凝灰岩
196	S E 0 2	緑石	幅 141 厚さ 110	在地	全面焼け 一部煤 軽石凝灰岩
197	S E 0 3	土師器	口径 110	在地	
198	S E 0 3	土師器	口径 90	在地	
199	S E 0 3	土師器	口径 60	在地	
200	S E 0 3	瓶子		瀬戸	図上復元
201	S E 0 3	甕	口径 244	珠洲	
202	S E 0 3	甕		珠洲	内外面自然釉付着
203	S E 0 3	摺鉢		珠洲	卸し目幅2.6cm11条
204	S E 0 3	甕		加賀	SK22出土と接合
205	S E 0 3	甕	底径 136	珠洲	
206	S E 0 3	摺鉢	底径 126	珠洲	
207	S E 0 3	行火		在地	軽石凝灰岩
208	S E 0 3	行火		在地	軽石凝灰岩
209	S E 0 3	行火		在地	軽石凝灰岩
210	S E 0 3	不明	長さ(190) 幅 209 高 121	在地	
211	S E 0 3	緑石	長さ(185) 幅 145	在地	軽石凝灰岩
212	S E 0 3	緑石	長さ(200)幅180・164 厚さ 147・199	在地	軽石凝灰岩
213	S E 0 3	緑石	長さ(216)幅126・157 厚さ 98	在地	軽石凝灰岩
214	S E 0 3	緑石	長さ(208) 幅147 厚さ 130	在地	軽石凝灰岩
215	S E 0 3	緑石	長さ(235) 幅161 厚さ 118	在地	軽石凝灰岩
216	S E 0 3	緑石	長さ(323) 幅148 厚さ 125	在地	軽石凝灰岩
217	S E 0 3	緑石	長さ(270) 幅153 厚さ 115	在地	軽石凝灰岩
218	S E 0 3	緑石	長さ(244) 幅147 厚さ 112	在地	軽石凝灰岩
219	S E 0 3	緑石	長さ(209) 幅143 厚さ 106	在地	軽石凝灰岩

出土遺物一覽表 (5)

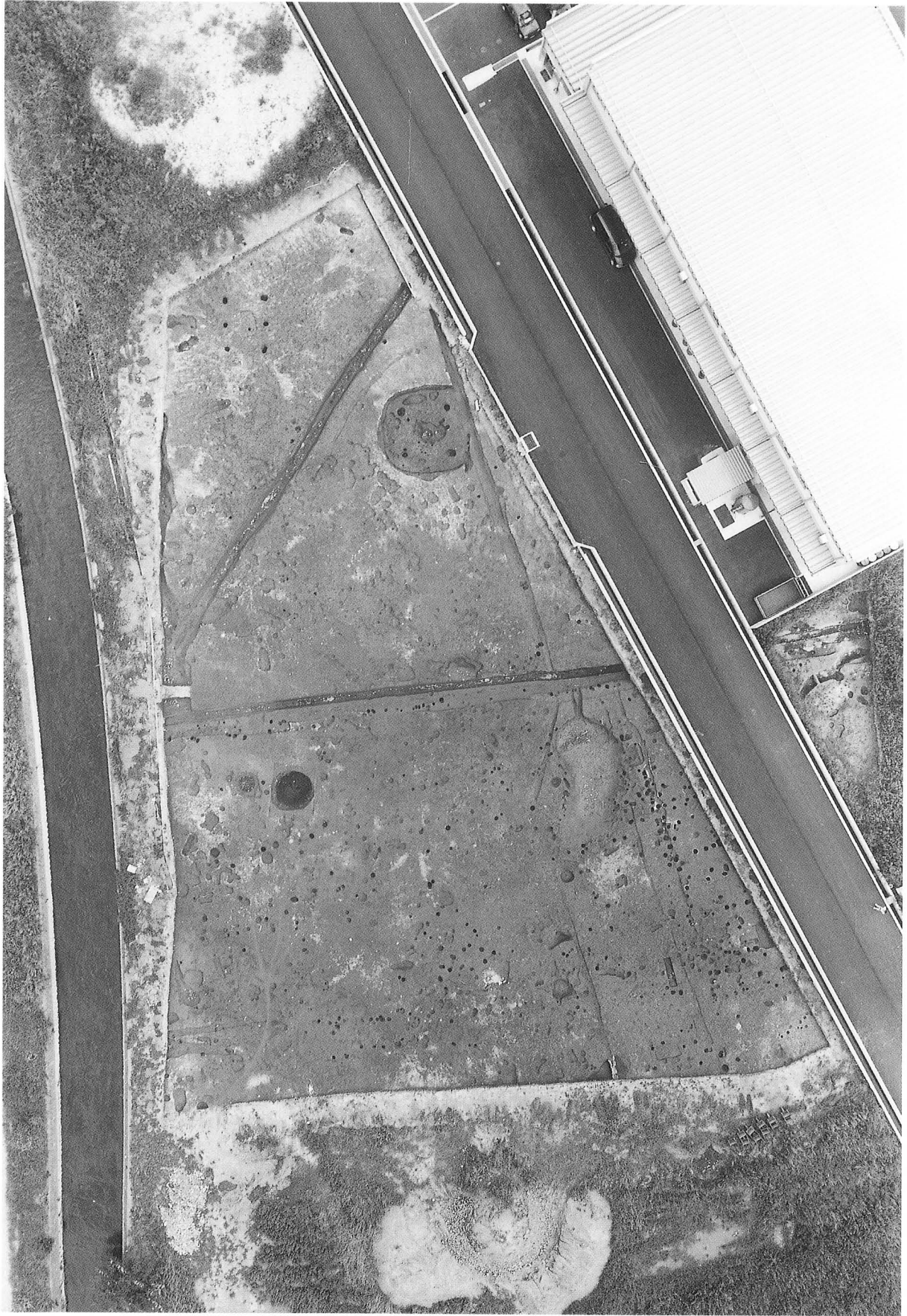
図番号	出土地点	器種	法 量 (mm) () 推定または欠損部	産地	備 考
220	SE03	緑石	長さ(233) 幅134 厚さ 110	在地	軽石凝灰岩
221	SE03	緑石	長さ(317) 幅136 厚さ 117	在地	軽石凝灰岩
222	SE04	砥石	幅 35 厚さ 33	在地	
223	SK11	土師器 土師器	口径 90 器高 18 底径 50	在地	遺存 1/5
224	SK11	土師器	口径 (84)	在地	遺存 1/9
225	SK12	不明			1735g
226	SK12	緑石	厚さ(106)	在地	軽石凝灰岩
227	SK17	おろし皿	底径 81	瀬戸	遺存 1/8 灰釉
228	SK22	土師器	口径 85 器高 17 底径 50	在地	遺存 1/8
229	SP01	土師器	口径 75	在地	遺存 1/8
230	SP02	瓶子		瀬戸	遺存 1/5
231	SD05	土師器	口径(130)	在地	
232	SD06	おろし皿	口径(102)	瀬戸	
233	SD06	摺鉢		珠洲	卸し目 2.3cm幅16条
234	SD06	摺鉢		珠洲	口縁端面波状文 卸し目 2.5cm幅10条
235	SD06	甕		珠洲	
236	SD06	甕	口径(440)	加賀	
237	SD06	甕		越前	
238	SD03	碗	口径 (98)	肥前	染付磁 18C前半か
239	SD03	小盃	口径 79 器高 39 底径 30	不明	赤上絵
240	SD11	碗	高台径 38	肥前	染付磁 18C前半か



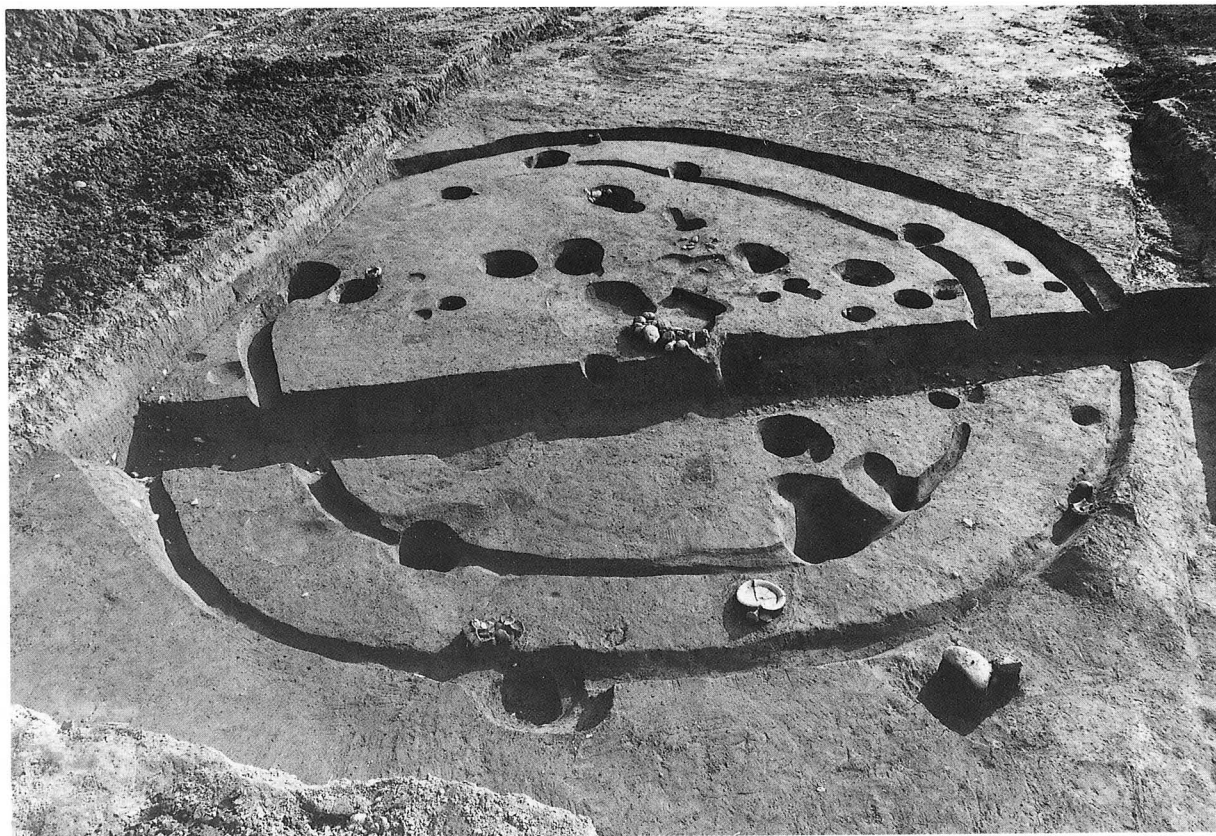
平成4年度(1992年)調査区空中写真(北→)



平成5年度(1993年)調査区(北より)



平成6年度(1994年)調査区空中写真(↑北)



SI 01 (北より)



SI 02 (1995年・南東より)



SI 03 (東より)



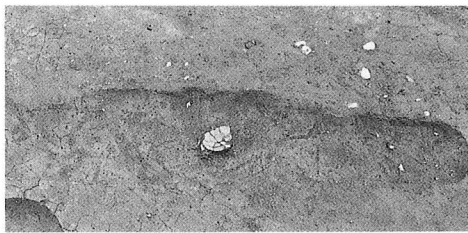
SI 04 (東より)



SB01 (南より)



SK 03



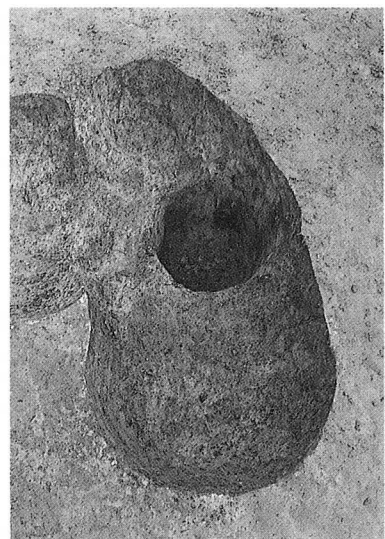
SK 05



SK 26



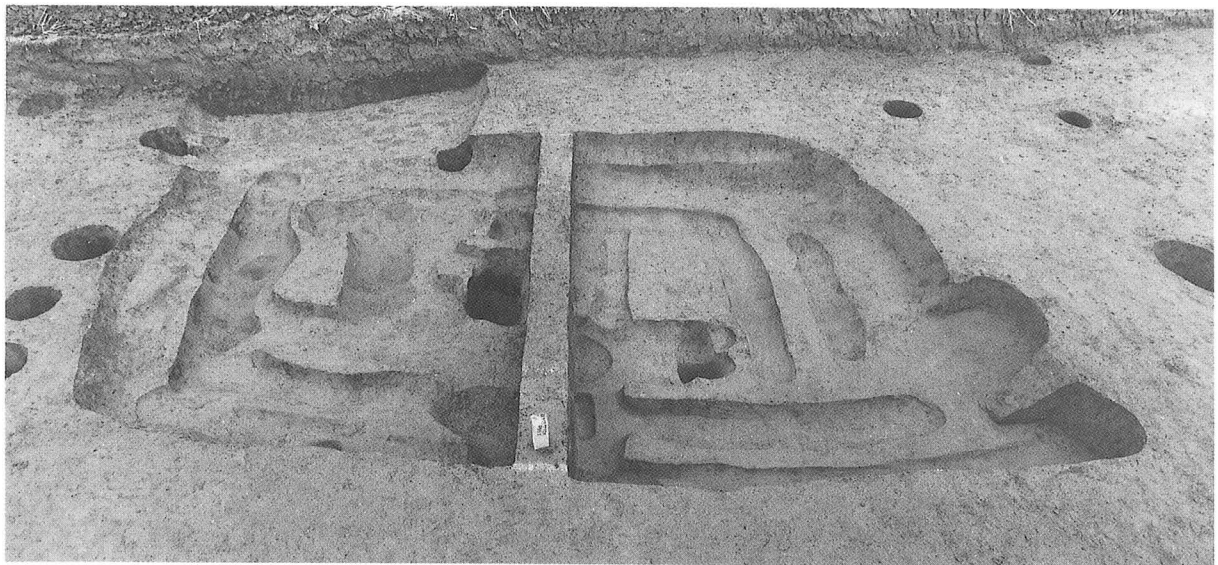
SK 25



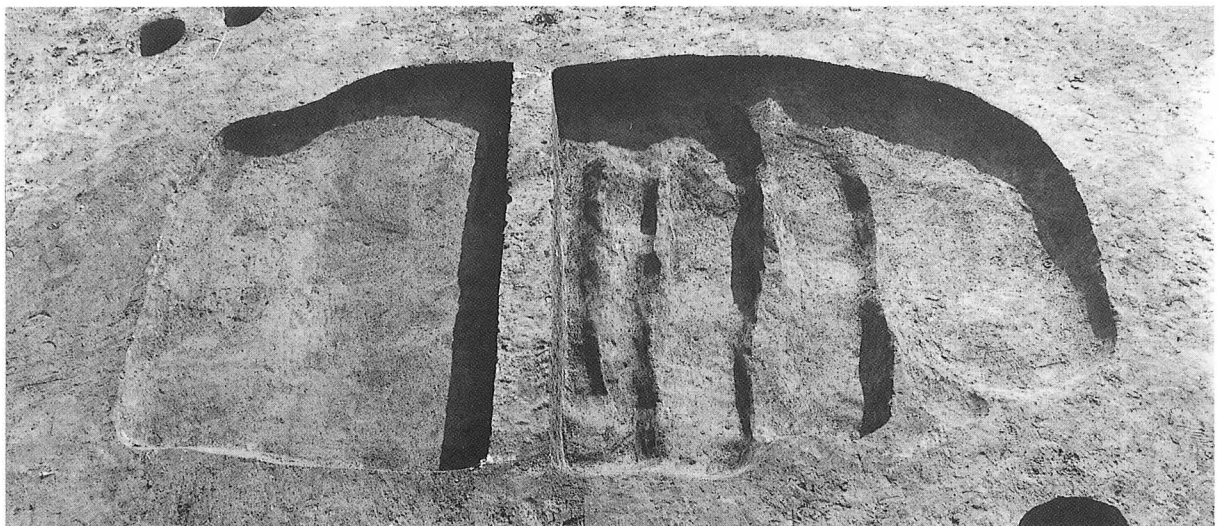
SK 04



SX 01 (東より)



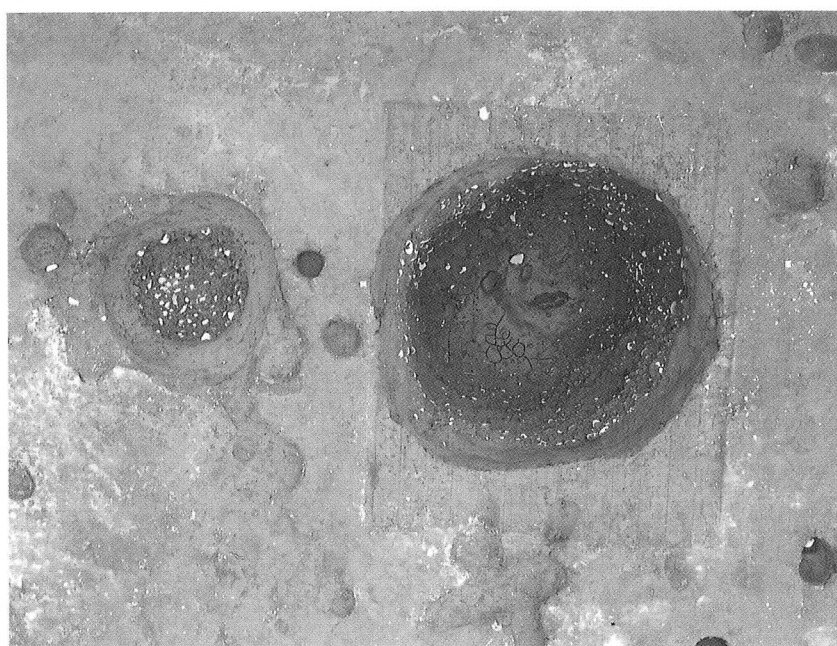
SX 02 (東より)



SX 03 (北より)



SE 01



SE 02 · SE 03



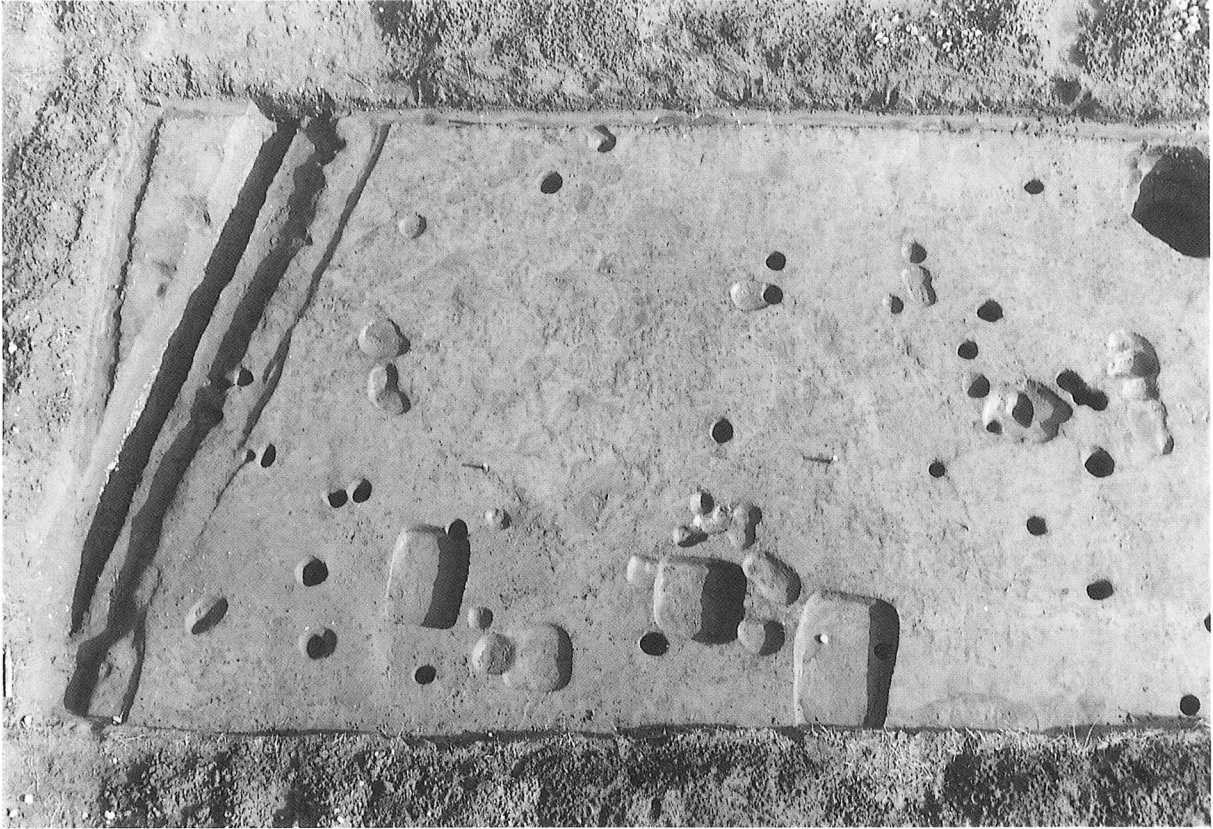
SE 04



SB 02 (西より)



SB03・05 SA01・02 SK08・09 (1993年・→北)



SB 13・SK 14~16 (1993年・←北)



SE 04・SB 04・SX 01・SX 02 (1993年・←北)



掘立柱建物 南西群・南東群一部（1996年南半部・北→）



SK 07



SK 14



SK 08·09



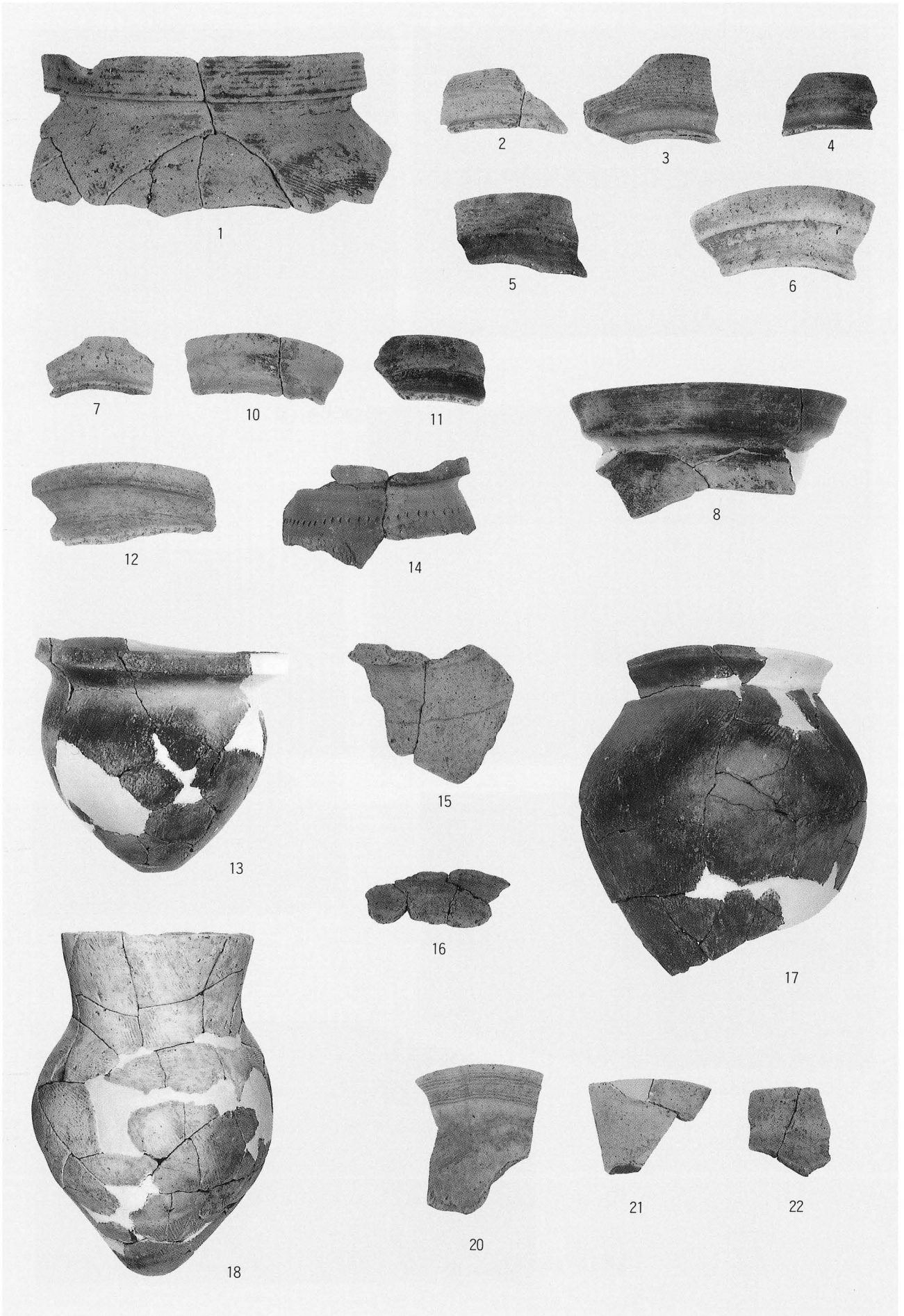
SK 21
22
17

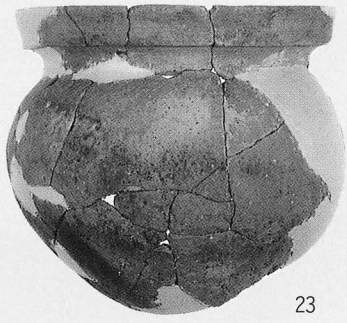


SK 12·13·11



SK 16·15

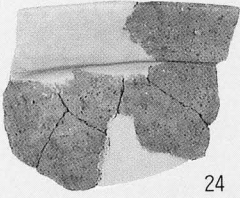




23



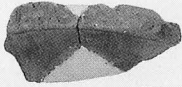
25



24



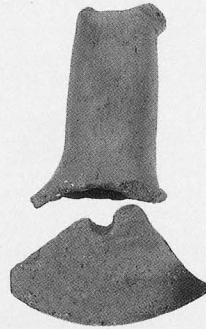
26



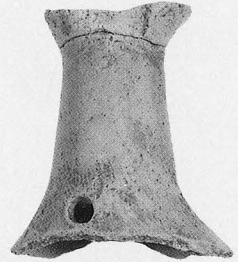
27



28



29



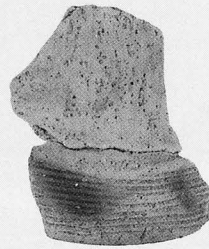
30



31



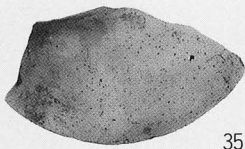
32



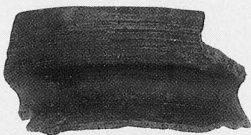
33



34



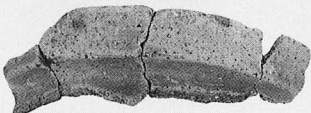
35



40



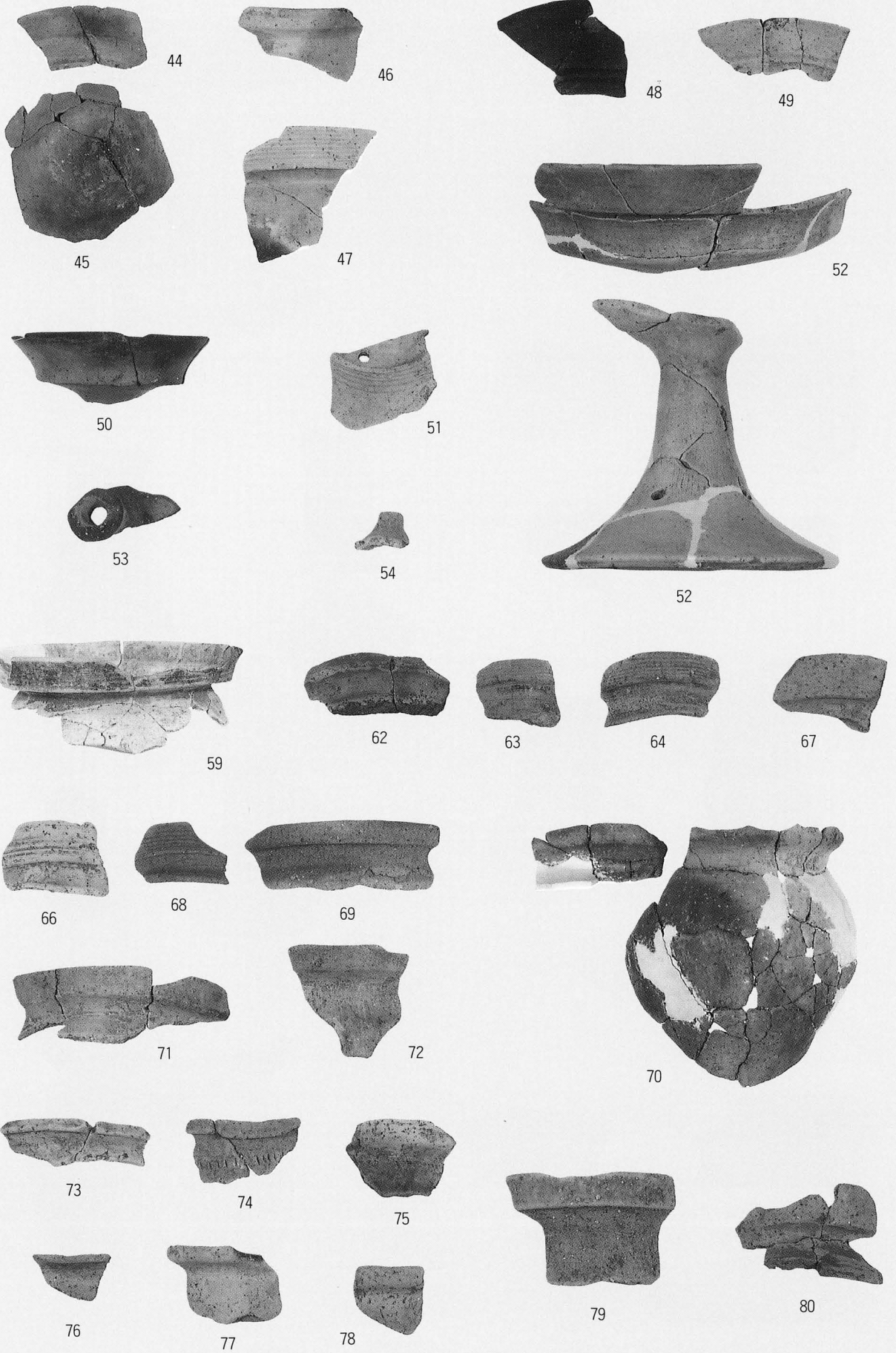
41

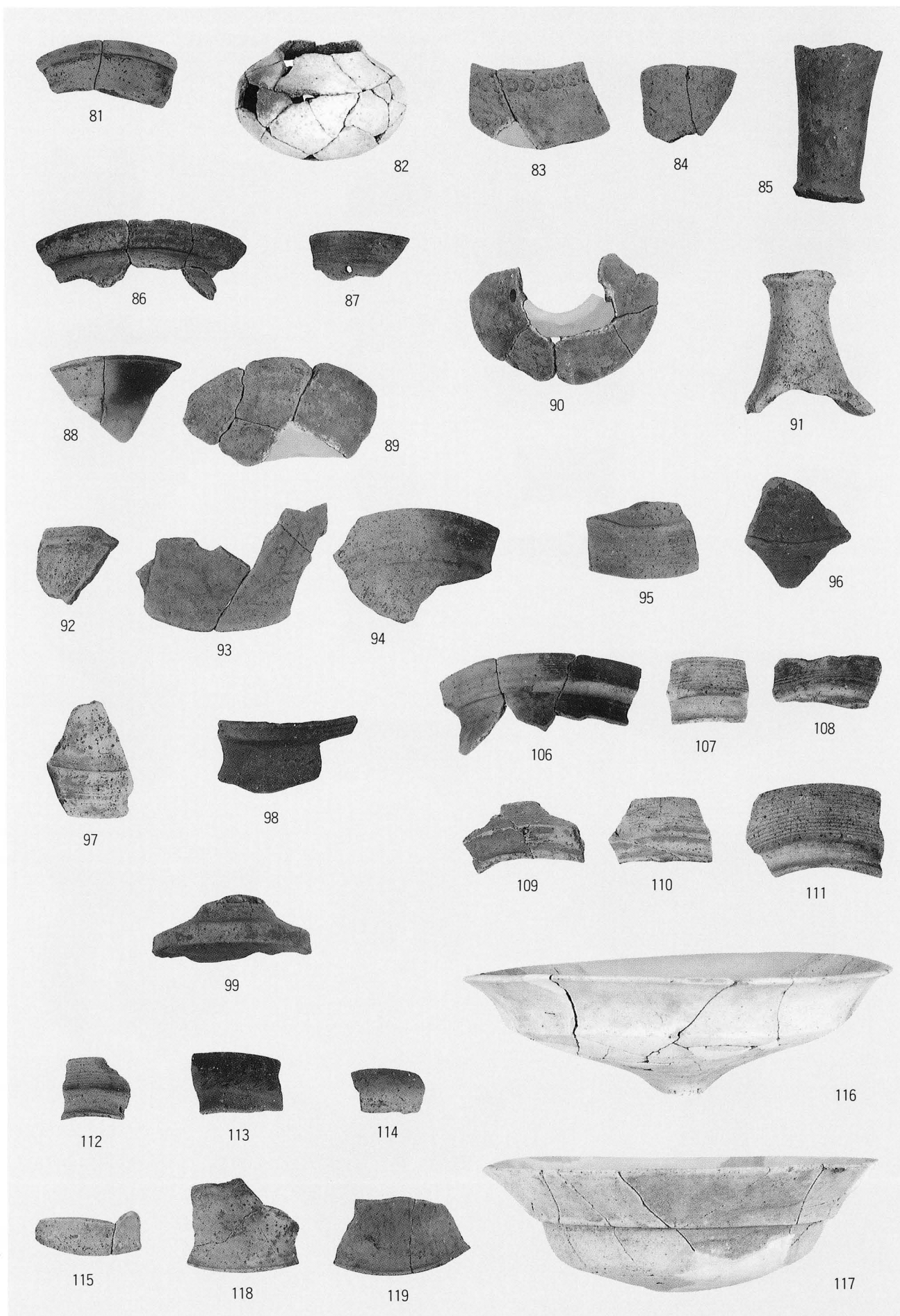


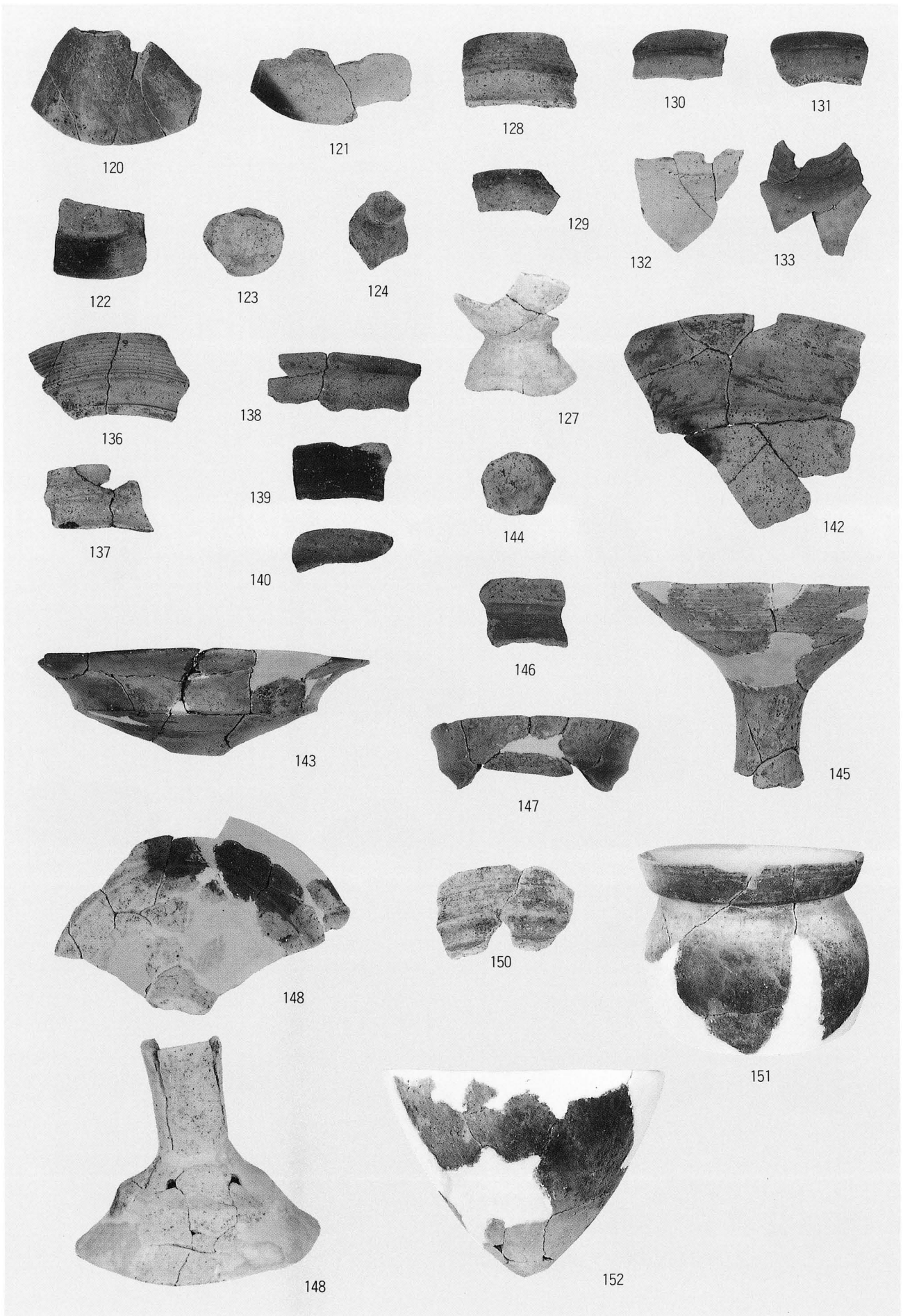
42

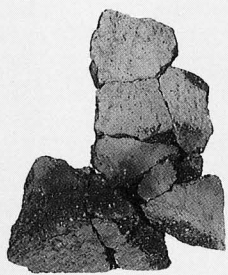


43





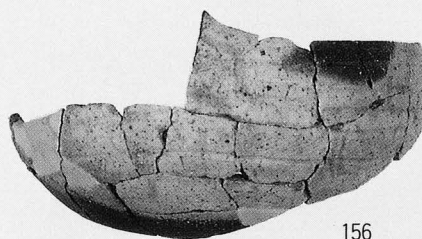




153



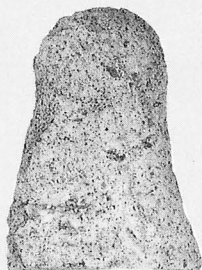
154



156



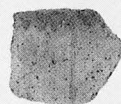
159



160



161



155



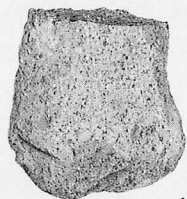
157



158



163



162



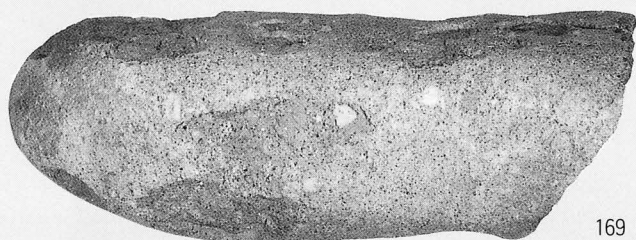
166



167



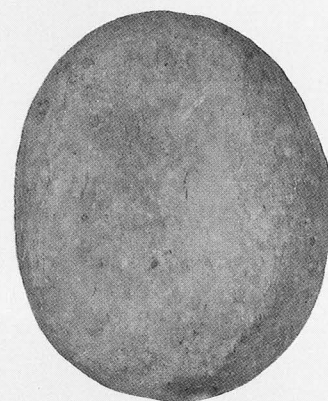
168



169



167



168



170



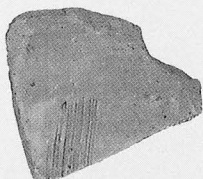
171



172



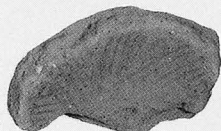
173



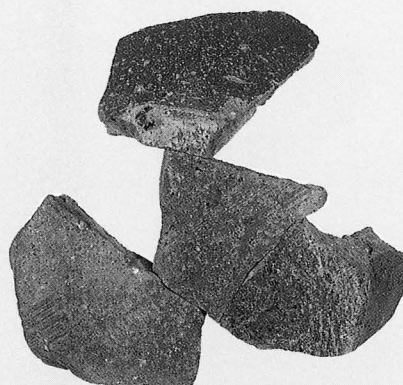
174



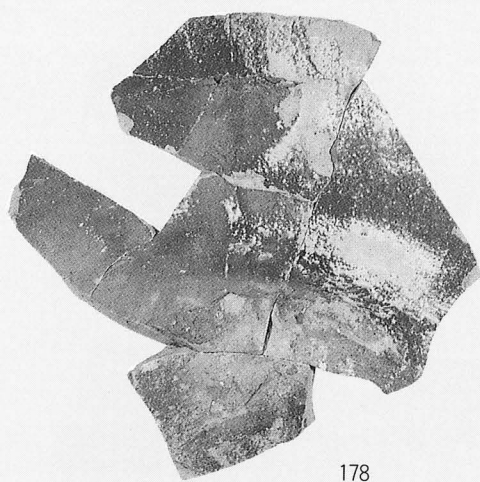
175



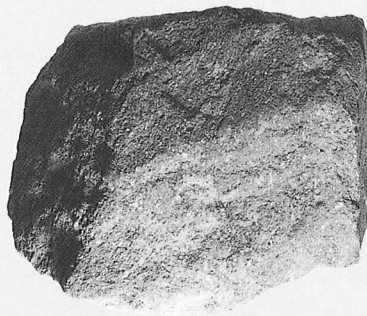
176



177



178



179



181



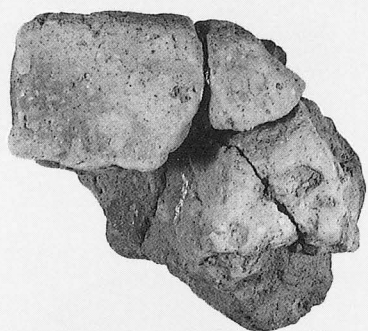
182



183



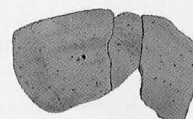
185



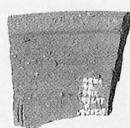
180



184



186



187



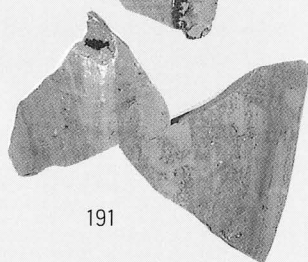
188



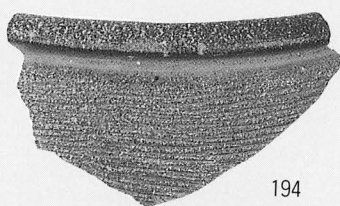
189



190



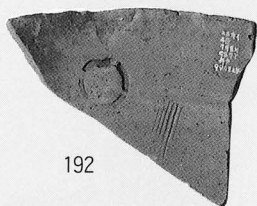
191



194



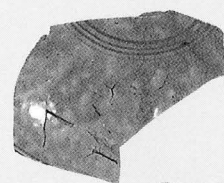
196



192



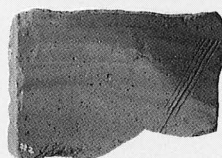
195



198



200



193



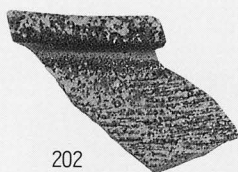
197



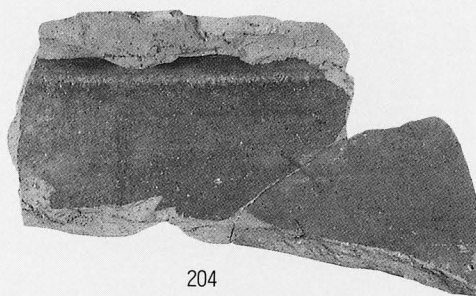
199



201



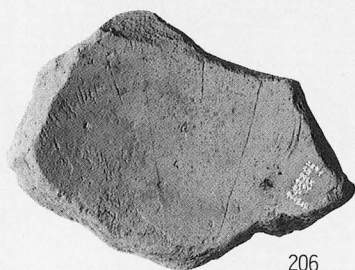
202



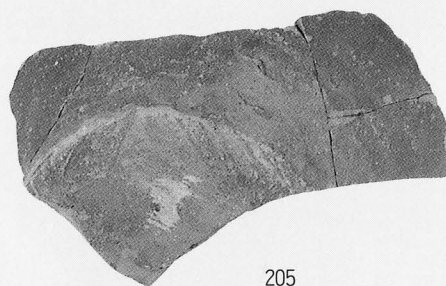
204



203



206



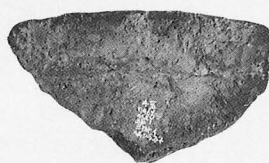
205



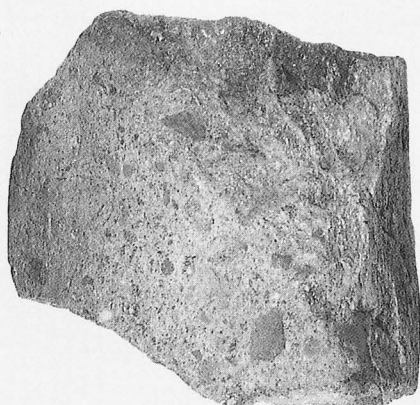
207



208



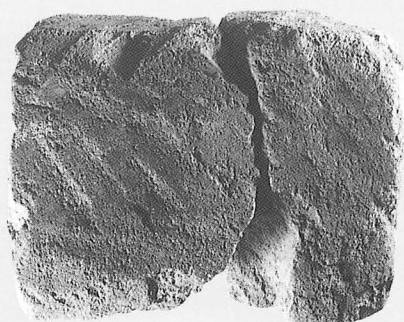
209



210



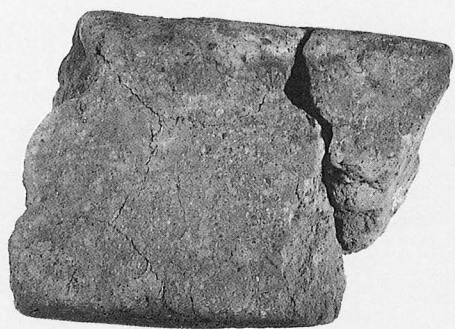
212



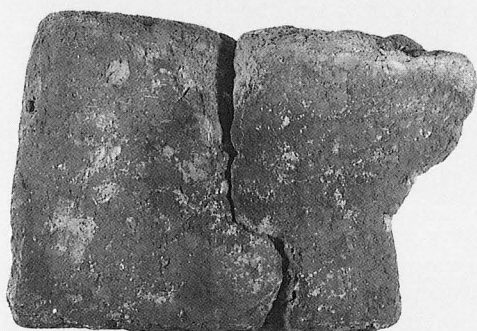
211



212



213



214



216



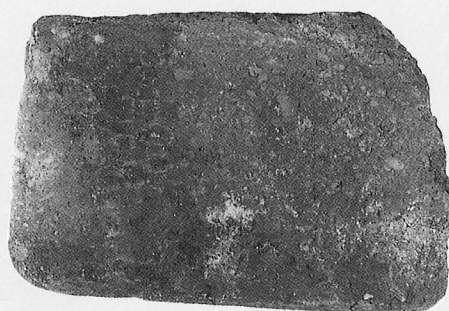
215



217



218



219



220



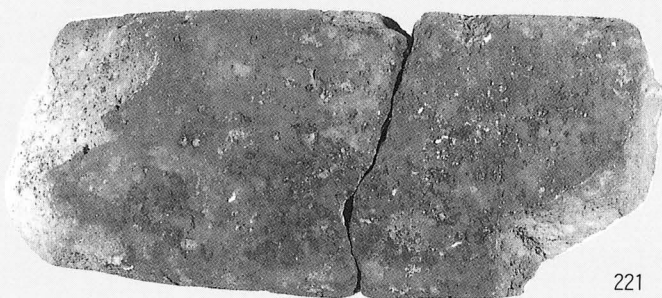
222



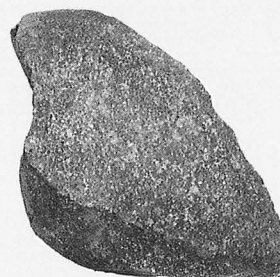
223



224



221



225



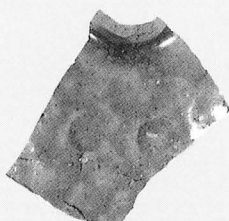
227



228



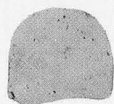
229



230



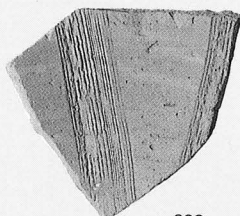
226



231



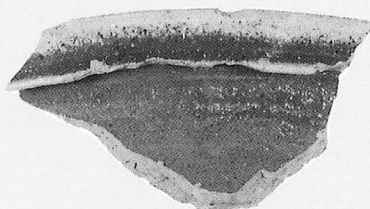
232



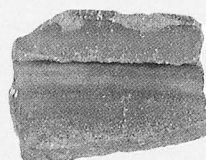
233



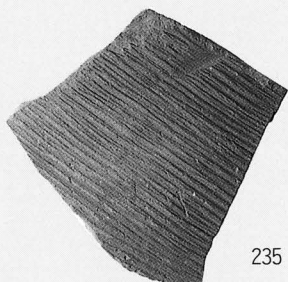
234



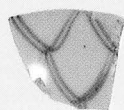
237



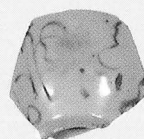
236



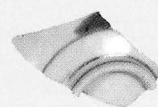
235



238



239



240

御経塚オツソ遺跡



第1図 御経塚オツ遺跡遺構平面図 (1/200)

V 御経塚オツソ遺跡

1 調査の経過と概要

平成元年度(1989年)の第1次調査は用水溝築造に伴い、幅1.7m、長さ50mの細長い調査区を設定し、11月24日から12月4日にかけて100㎡の調査を実施した。弥生時代後期後半の竪穴建物SI01を検出し、調査区南端では旧河道の肩部を確認した。平成8年度(1996年)の第2次調査は緊急性の低い街区内ということから土地区画整理事業地区内における調査計画の最終年に実施した。10月22日から12月4日にかけて450㎡を調査した。竪穴建物SI01の未検出部と新たに竪穴建物1棟SI02、掘立柱建物1棟SB01を検出した。集落の中心部は、水田高が徐々に高くなる西側の土地区画整理事業施行区外と考えられ、調査地は蛇行しながら北流する東の旧河道に向かって緩く傾斜する微高地の端部にあたる。調査面積は合計550㎡であり、吉田が担当した。出土品の整理作業は平成8～9年度に実施した。

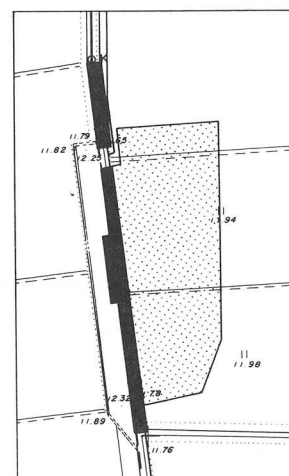
調査では下記の方々の御協力を得た。

現場作業

大瀬戸武夫 小松 義一 庄田トキ子 塚本 房子
塚本千代子 塚本 友江 浜田 五郎 浜野 光蔵
半村美紀子

整理作業

市村美知栄 大杉 幸江 長谷川啓子



■ 平成元年(1989年)調査区
▨ 平成8年(1996年)調査区

第2図 御経塚オツソ遺跡調査図

2 遺構と遺物

(1) 竪穴建物

SI01 (第3・7・12図)

調査区中央西に位置し、SB01を切る焼失建物である。平面形胴張隅丸方形の4本支柱構造であり、建て替えを行っている。規模は一辺推定6.1m、推定床面積約27㎡を測る。壁高はほぼ20cm、壁溝は幅20～25cm前後、深さ8～12cmで廻る。支柱穴はP1～P2が2.4m、P2～P3が2.65m、P3～P4が2.5m、P1～P4は2.35mで東南よりに方形配置され、径は50～60cm、深さはP3が46cmとやや浅いが他は66～72cmである。中央には1m四方の深さ6cm前後の浅い掘り込みがみられ、炭化物を含むことから灰穴炉と考えられる。北西辺及び南西辺壁際には貯蔵穴と考えられるP5・P6が位置する。P5は長さ1.6m、幅0.95m、深さ50cm、P6は長さ1.6m、幅0.8m、深さ45cmである。

覆土からは炭化材が出土しているが、1989年調査では不手際により認識していない。支柱を結び直角となるように幅25cmと15cmの梁(桁)材?と、ほぼ直交する幅10cmの垂木材がみられた。垂木材は建物中心からは放射状となる。遺物は床面より8・9・10・11が出土し、9にはP6出土の破片が接合した。P2と重なり床面からの不明品89は上下に磨痕が残り火熱を受けている。また下層より緑色珪質凝灰岩の剥片91～93が出土した。時期は弥生時代後期後半法仏式期である。

SI02 (第4・8・9・12図)

SI01の北4mに位置し、平面形隅丸長方形の2本主柱構造である。主柱、灰穴炉、貯蔵穴、壁溝の位置を変えず床を貼り増しての立て替えが行なわれているが土層は不鮮明であり、建物壁際の状況はよく解らない。規模は長辺7.4m、短辺5.0m、床面積約29.5m²を測り、壁高は前段階が15cm、新段階は10cmか。壁溝は幅20~25cm、深さ10~15cmで廻る。柱穴のP1は径40cmで、深さは前段階65cm、新段階50cmである。P2は径50cmで、深さは前段階67cm、新段階50cmである。柱穴間は2.5mと長辺のほぼ1/3となる。この線上中央に炭化物が堆積していた深さ10cm程度の灰穴炉P4が存在し、両段階とも深さは10cmである。この東南には壁溝より35cm離れ、一辺1.1mで二段掘の貯蔵穴P3を有する。段部は深さ9cm、穴部は75×60cmの楕円形状で深さ30cmである。これより北東壁溝へ伸びる溝は前段階のものである。また建物外側には1.5~2m離れ、溝SD02が北半を囲み北東へ伸びる。

出土遺物の17・18・36・43・47は南東側壁溝からのもので遺存度が高く、砥石96も出土した。38は床面より6cm浮き、39はP3から、42はP1・P2より、P4より29が出土している。時期は弥生時代後期後半法仏式期である。

(2) 掘立柱建物

SB01 (第6・10図)

SI01と重複しこれに切られる建物である。SI02と向きを合わせ南西4mに位置する。梁行1間3.35m、桁行2間3.35m・3.3mとほぼ正方形である。床面積は約10m²、主軸は(N69°W)である。柱穴は楕円形状で、長径は50~63cm、短径は42~45cmに収まり、深さは50~70cmを測る。遺物はP1より65・66が、P4より67が出土している。時期は弥生時代後期後半法仏式期が考えられ、高床倉庫であろう。

(3) 土坑 (第6・10図)

SK01は調査区北側SI02の東2mに位置する。平面楕円状で長径2.12m、短径1.5mを測る。底面は凹凸があり、深さは30cmを測る。SD02とは繋がらない。68の高坏が出土した。

SK02は調査区北側SI02の南3mで検出した。土坑状遺構が連なったものかは不明である。平面長楕円形状で長さ2.65m、幅55~63cmを測る。深さは8・13・19cmの三つの部分があり、深部上面より69・70が出土した。

SK03は調査区南西端に位置する。平面楕円形状で未掘部があるが、長さ1.3m、幅50cmであろう。深さは12cmを測る。71が出土。

以上の土坑の時期は弥生時代後期後半法仏式期である。

(4) 溝・その他 (第1・5・11図)

溝はSD01~04を検出した。弥生時代後期後半の溝はSD02~03であり、SD01は中世期である。SD02はSI02の北半を囲み北東へ伸びる。幅40~50cm深さは35cm前後、溝底は西側(SD02a)が一段高くなる。断面形は逆台形である。遺物は55~64が図示したもので、55の甕は溝底より5cm浮き伏せる状態で出土した。

SD03は調査区南側で検出し南東へ伸びる。幅40~50cm深さ5~15cmとばらつく。土器細片出土。SD04は調査区南側に位置し、北西方向から東へ伸びる。幅30cm前後、深さ15cmで断面形はSD02と同様逆台形である。76が出土した。

SD01は、幅50~80cm深さ20cmで北方へ伸びる。72~75の出土遺物より時期は15世紀前葉~中葉か。ピ

ットSP01は調査区南側河道肩部に位置し、77が出土した。この河道跡肩部上層の暗褐色土より弥生時代後期後半の83・84が、下層の灰褐色土から縄文時代後期中葉の土器78～82が出土した。

寛永通寶97はSD01を切る攪乱土から出土した。

3 ま と め

御経塚オッソ遺跡は北流する自然河川に挟まれた微高地から漸次的に河道の低湿地へと変化する緩い傾斜地に立地し、標高は11.5mを測る。弥生時代後期後半法仏式期の集落を主体とし、若干ではあるが縄文時代と中・近世期がみられる複合遺跡である。調査区は遺跡の東端部にあたり、集落は微高地の広がる西側一帯の展開が考えられる。

縄文時代の遺物は調査区南端部の旧河道の緩く落ち込む肩部下層から後期中葉加曾利B I 式並行期の土器が数点出土しただけであり、該期の状況は不明である。

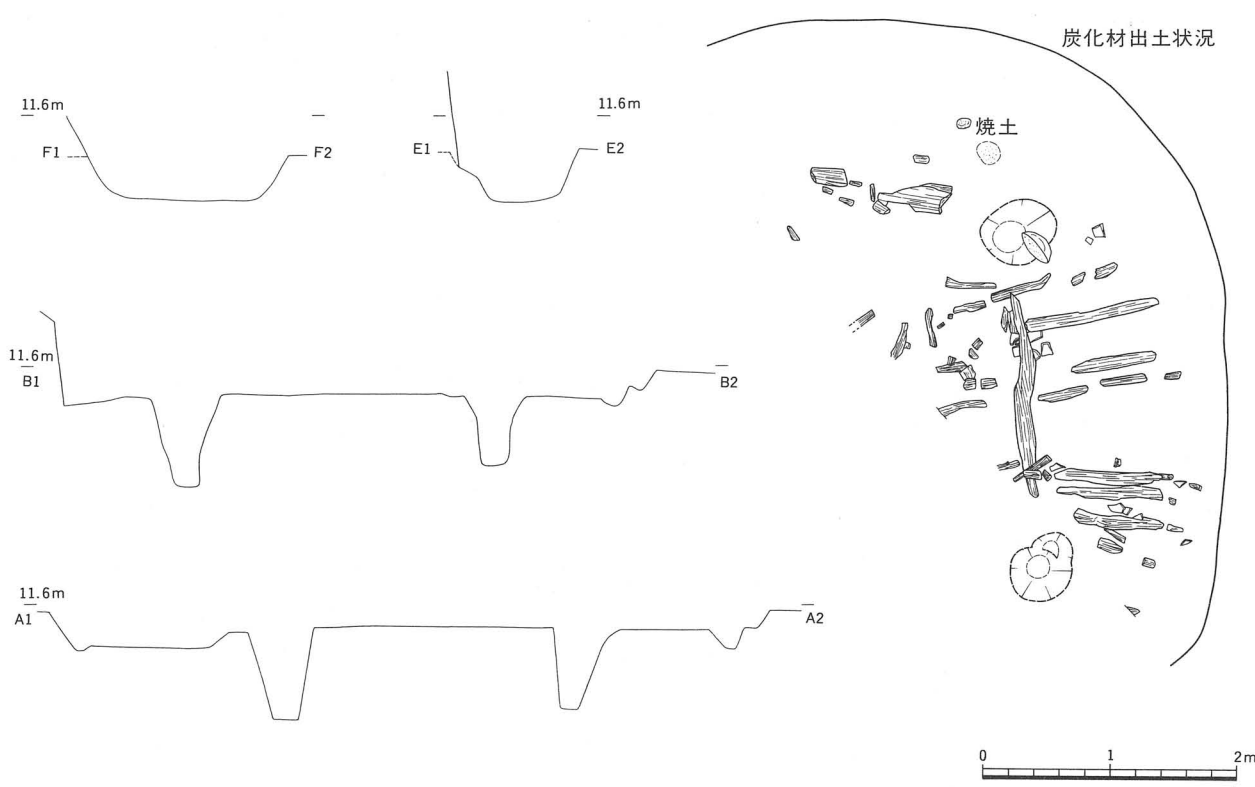
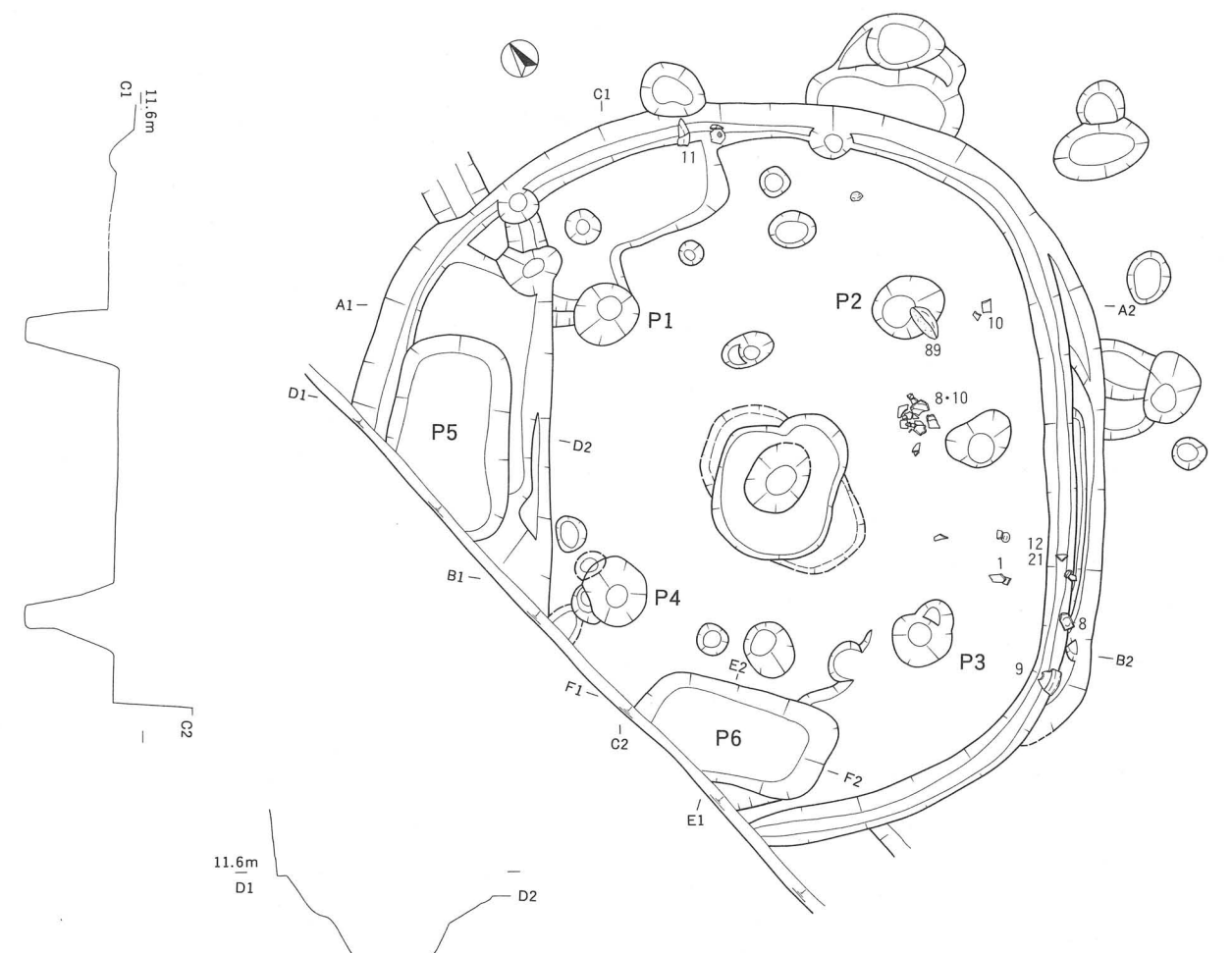
弥生時代では後期後半法仏式期の集落が営まれる。検出した主たる遺構は竪穴建物SI 01・02の2棟、高床倉庫と推察する掘立柱建物SB01の1棟、土坑SK01～03、溝SD02～04である。遺構の時期については法仏式新段階である。遺構の切り合いや建て替えにより2つの時期を確認するが、土器様相の時期幅は短いものである。第1段階としてSI02・SB01・SD02・SD04?、第2段階としてSI01・SD04ととらえている。SI02は床面積29.5㎡を測り竪穴建物のなかでは中型の部類にはいるが、2本主柱構造のものとしては現在加賀地域において最大規模の検出例となる。またSB01とは同一軸上に並び配置されている。SI01は床面積27㎡を測りSI02と同規模であるが、こちらは4本主柱構造を採用する。焼失家屋であり、玉造りに関係する。SI02の北半分を囲み北東へ伸びるSD02は雨水の排水機能をもったものであろう。調査区南側のSD04も建物を囲むように西側で伸びるとすれば、この溝もSD02同様の機能が考えられようか。

中世期の遺構は溝SD01であり、ほぼ真北の方向に伸びる。15世紀前葉～中葉頃の遺物が出土したが、遺構の性格は不明である。

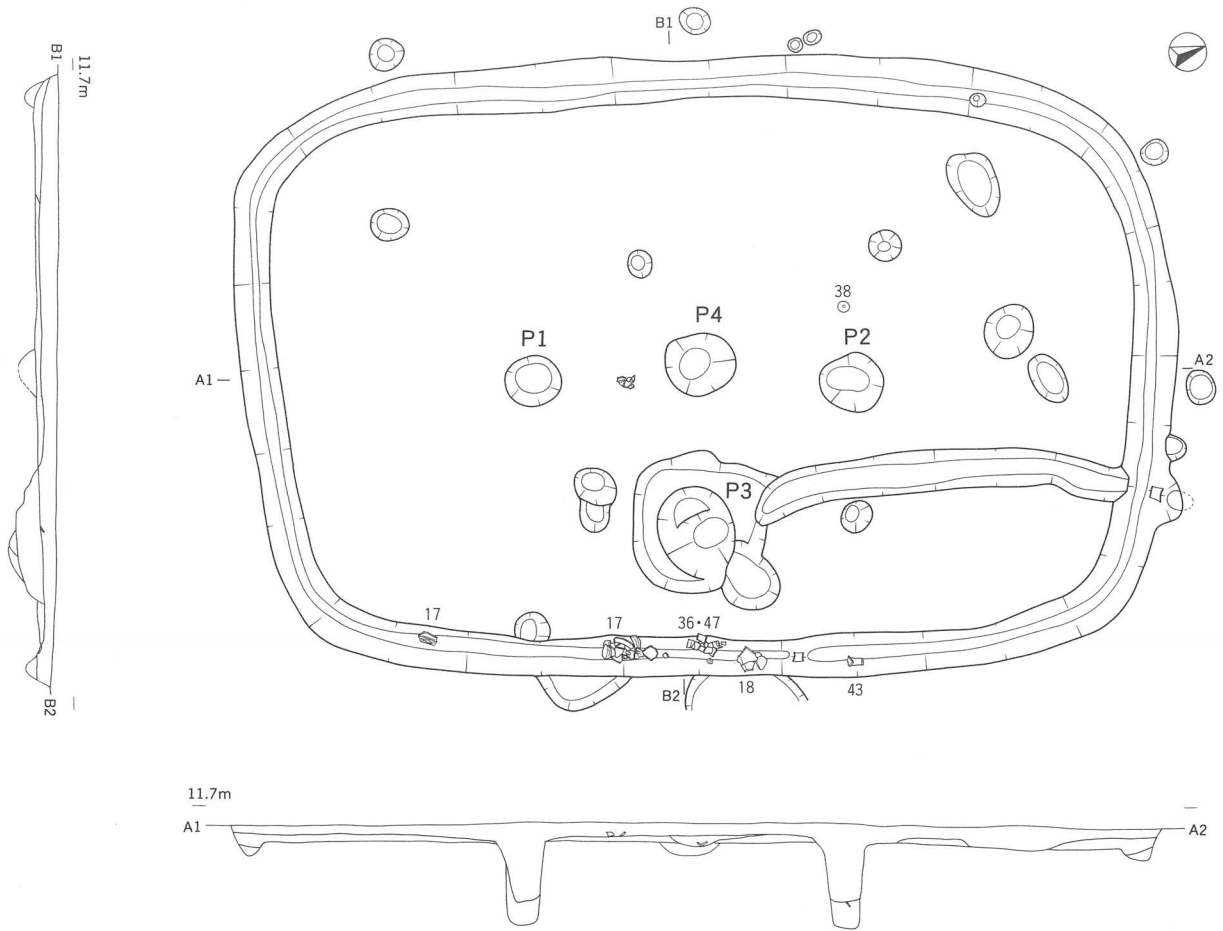
以上はなほだ簡単ではあるが気づいた点を述べまとめとした。

参考文献

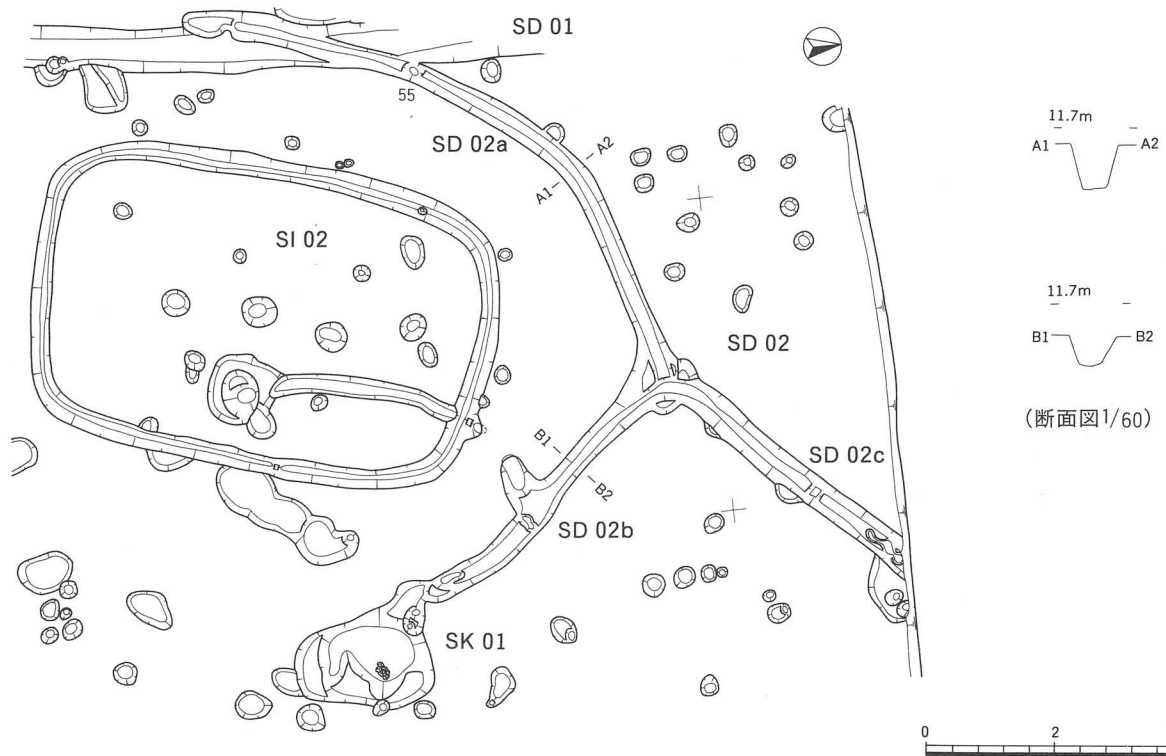
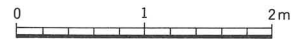
- 楠 正勝 1996年『金沢市西念・南新保遺跡IV』金沢市教育委員会
- 田嶋 明人 1993年「北陸南西部の古墳確立期前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 安 英樹ほか 1992年『松任市竹松遺跡群』石川県埋蔵文化財センター
- 安 英樹・浜崎悟司 1993年「北陸南西部、集落の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 谷内尾晋司 1983年「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学 I』石川考古学研究会
- 吉岡 康暢 1991年『日本海域の土器・陶磁 [古代編]』六興出版
- 前田 清彦 1995年『旭遺跡群』松任市教育委員会



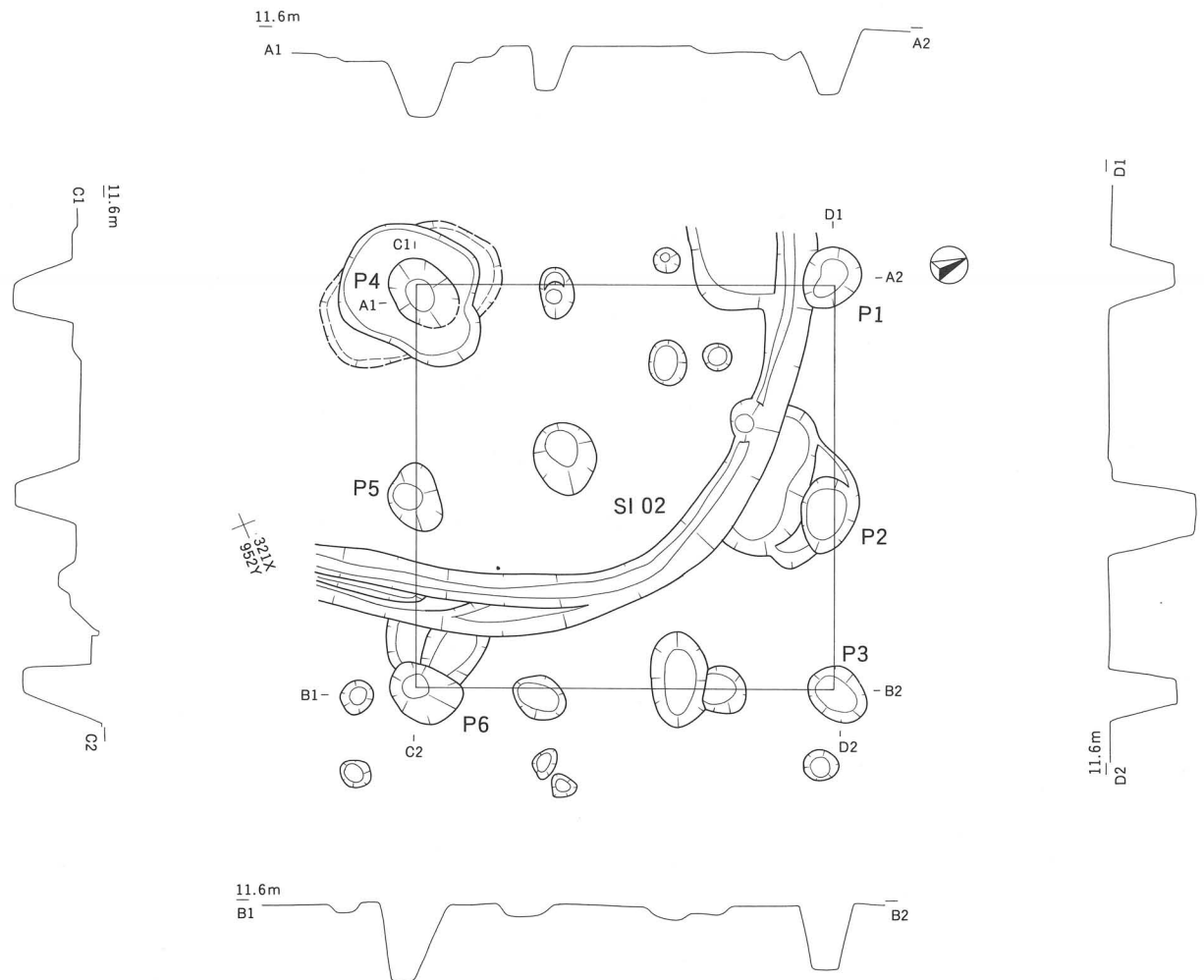
第3図 SI 01 遺構図 (1/60)



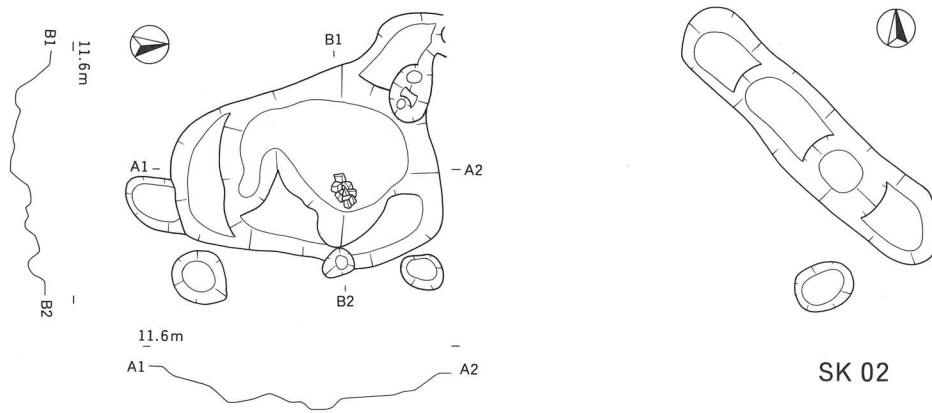
第4図 SI 02 遺構図 (1/60)



第5図 SD 02 遺構図 (1/120)

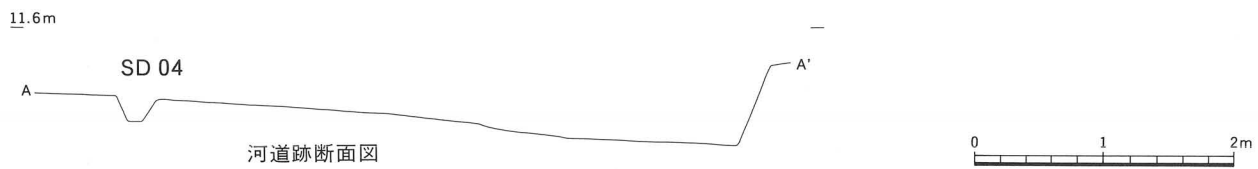


SB 01

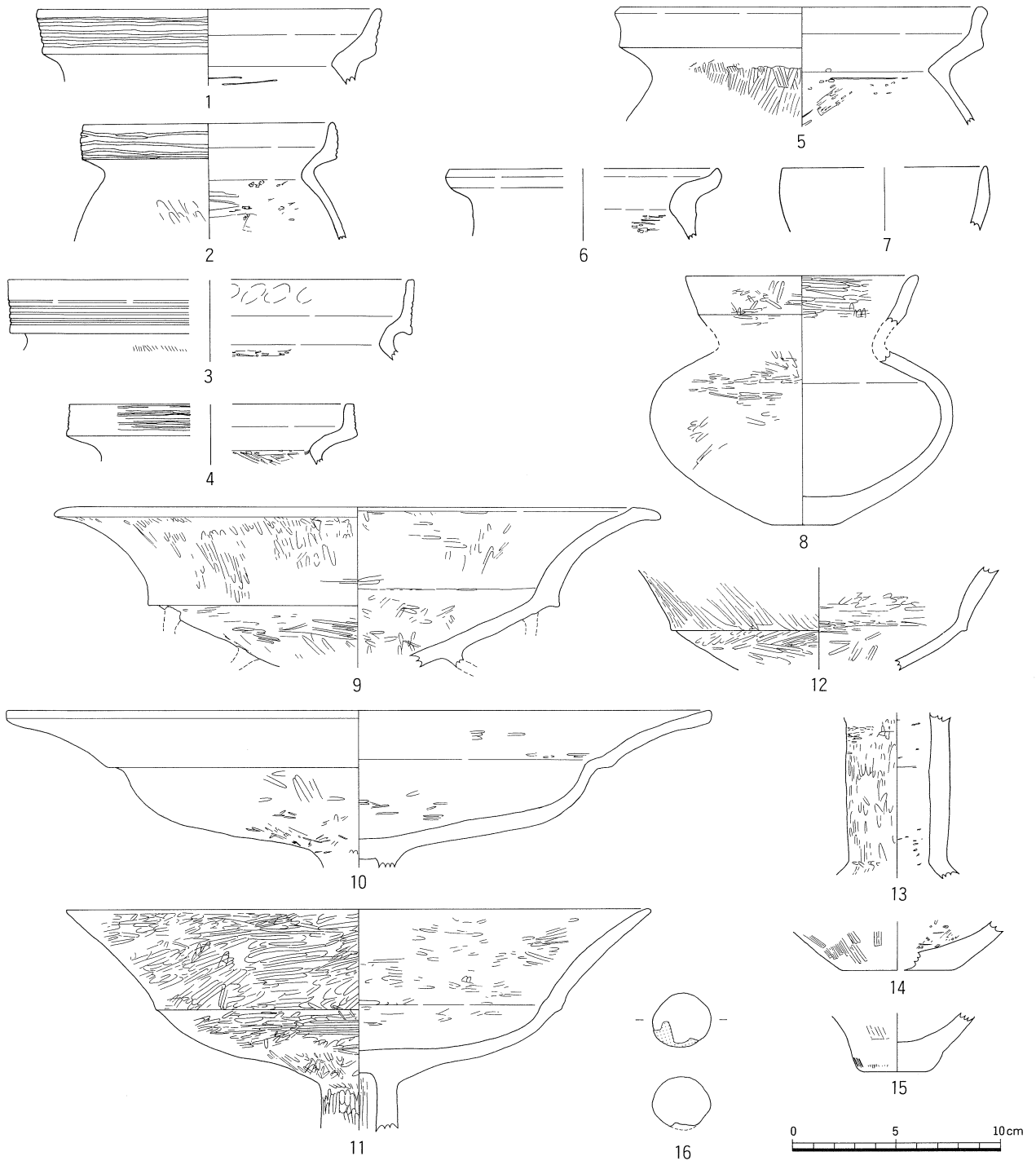


SK 01

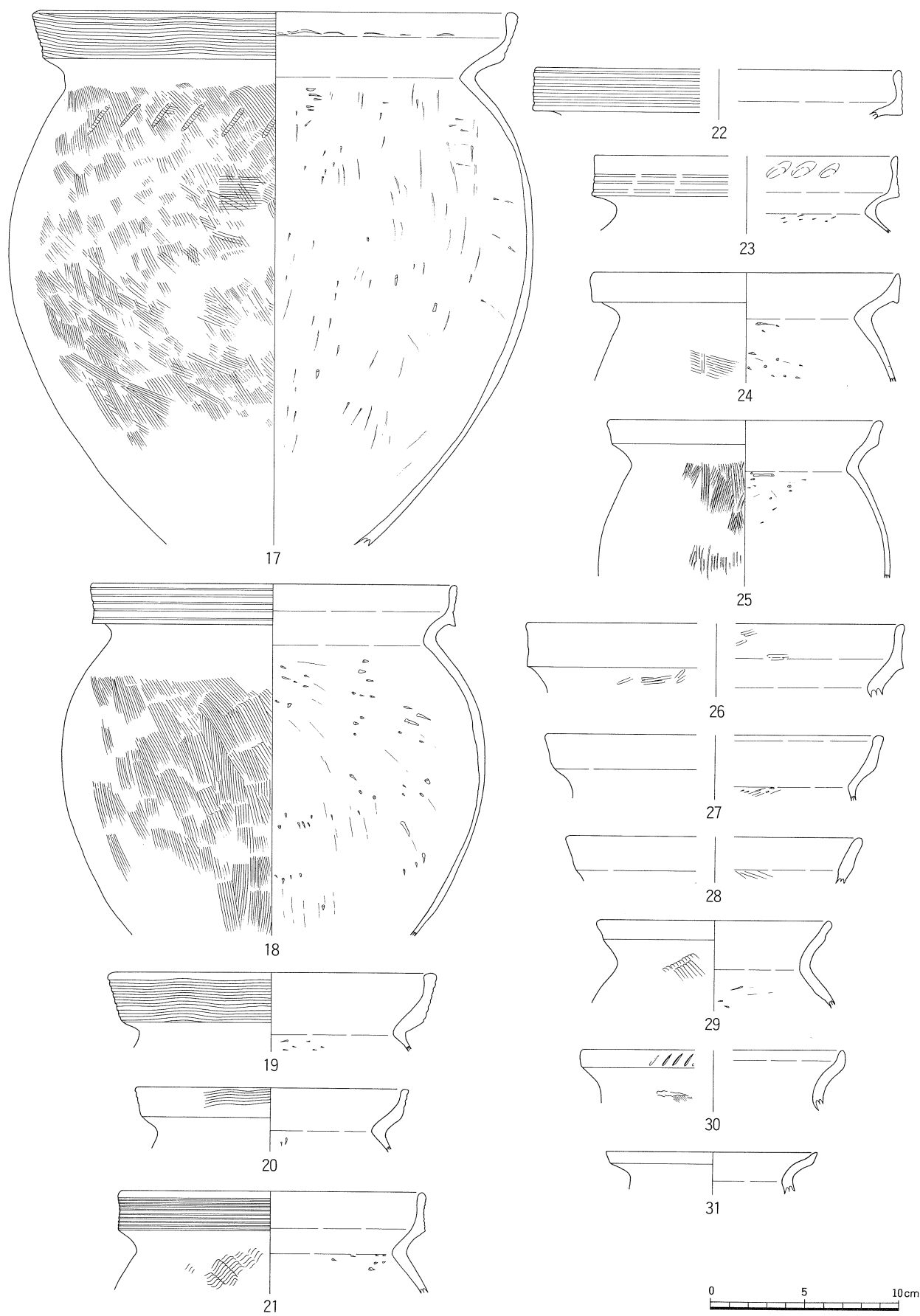
SK 02



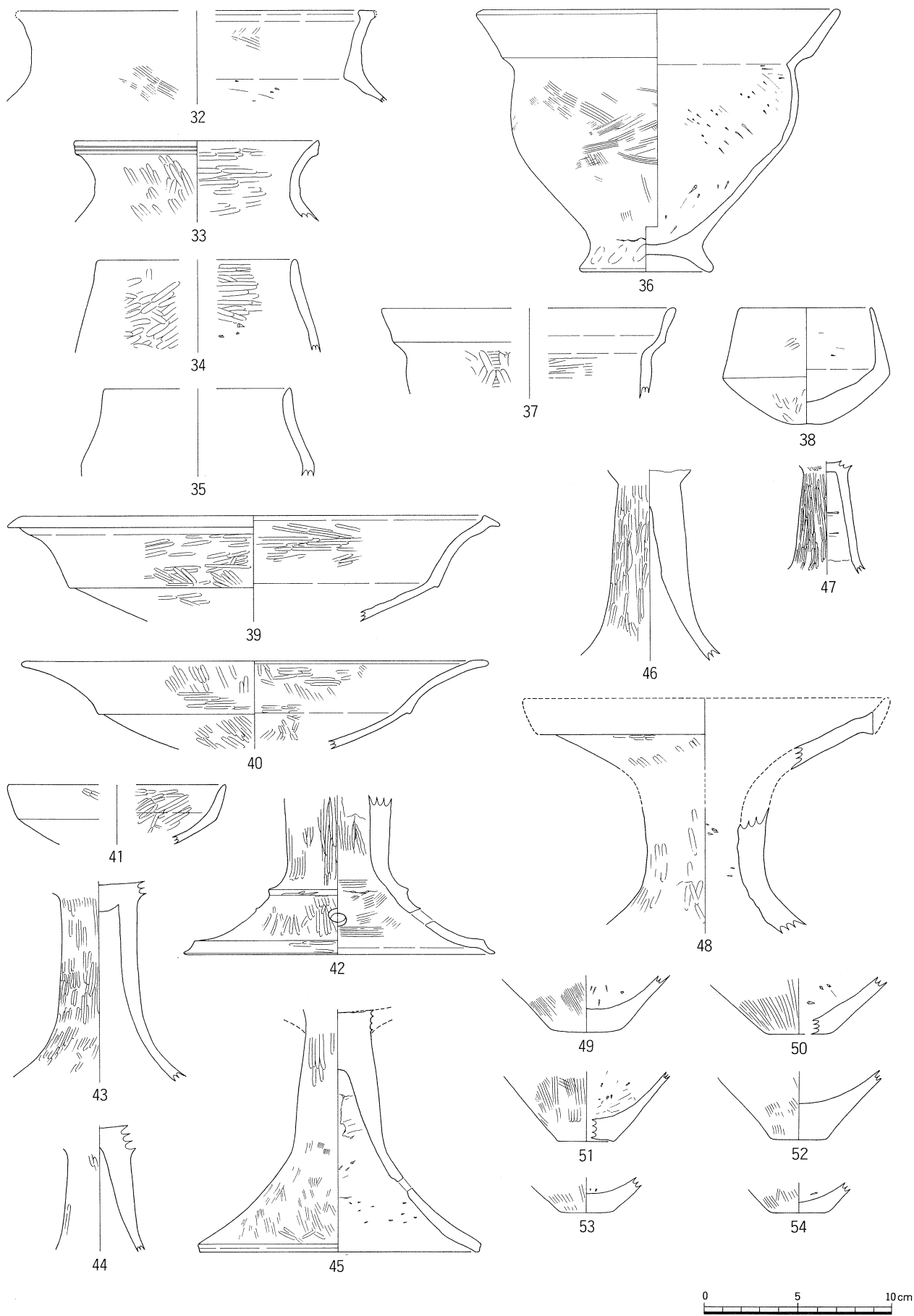
第6图 SB 01·SK 01·SK 02 河道迹遗构图 (1/60)



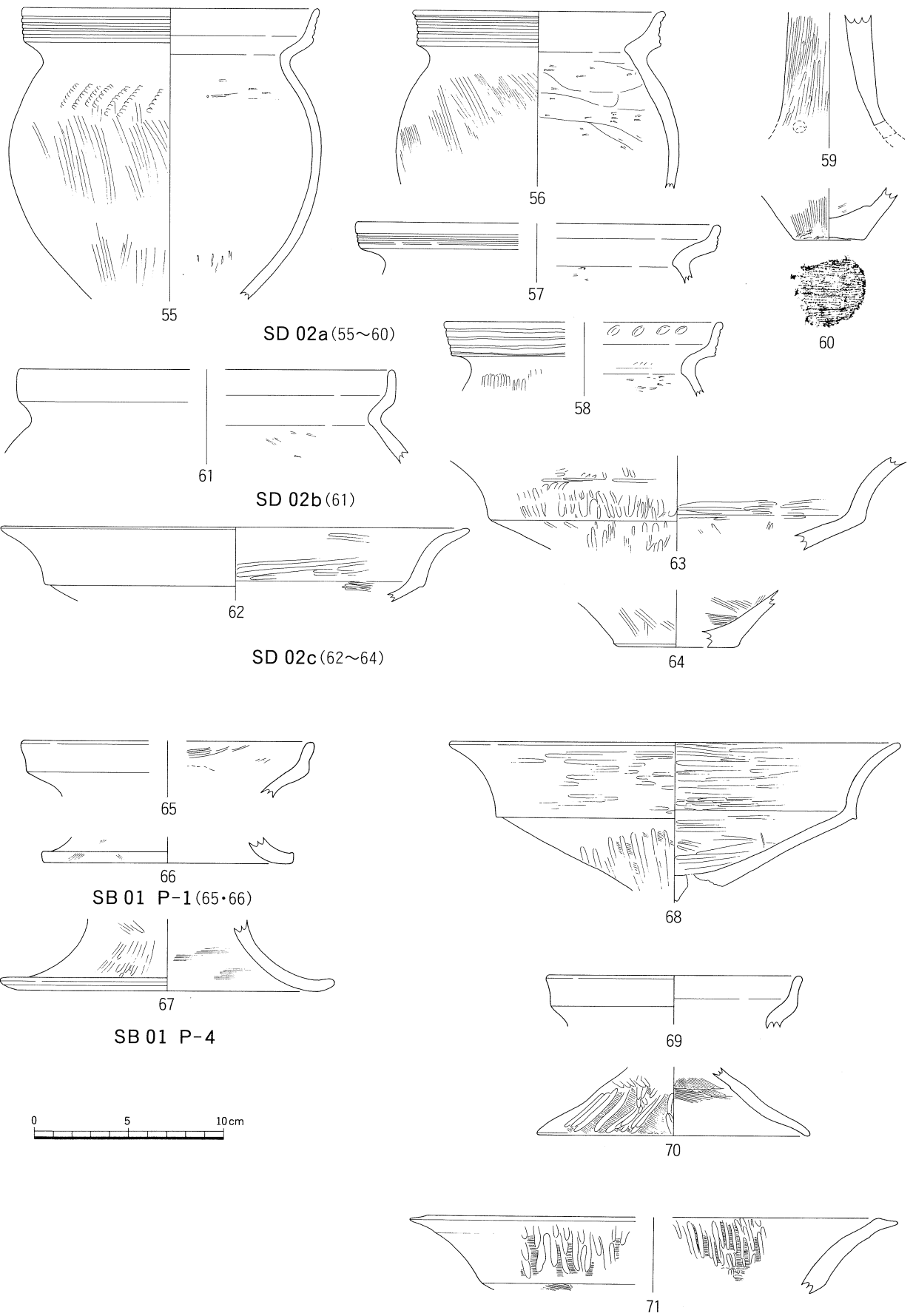
第7図 SI 01 出土遺物(1~16) (1/3)



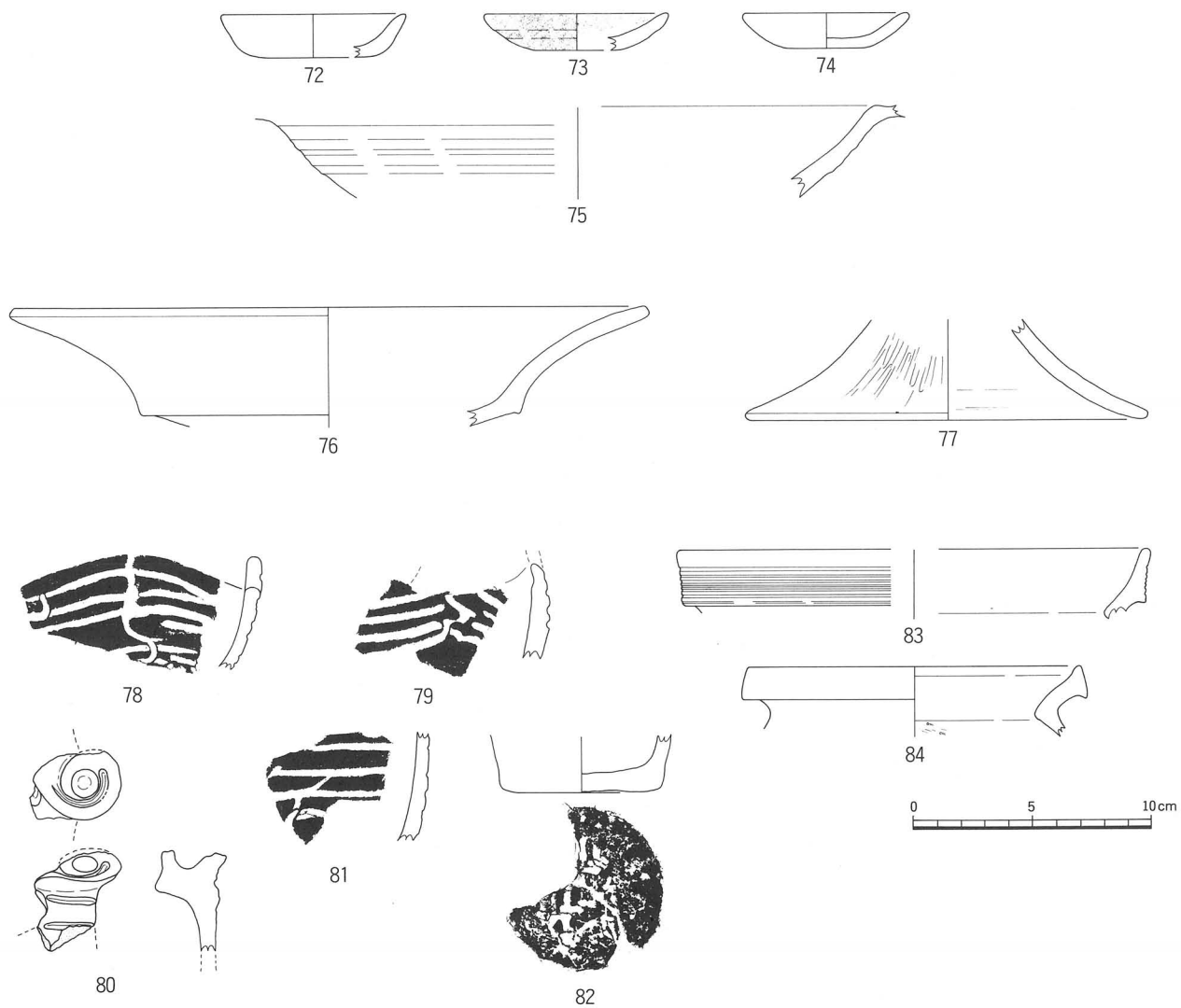
第8図 SI 02 出土遺物(17~31) (1/3)



第9図 SI 02 出土遺物(32~54) (1/3)



第10図 SD 02(55~64)・SB 01(65~67)・SK 01(68)・SK 02(69・70)・SK 03(71) 出土遺物 (1/3)



第11図 SD 01(72~75)・SD 04(76)・SP 01(77)・河道跡(78~84) 出土遺物 (1/3)



第12図 石器ほか出土遺物(85~89) (1/3) (90~97) (1/2)

出土遺物一覽表 (1)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
1	SI01 下層	甕	口径 165	1/7	橙褐色 橙褐色 口縁付近黒褐色	
2	SI01	甕	口径 120	10/11	褐色	煤炭化物附着
3	SI01 上層	甕	口径(196)	1/12	褐色	指頭圧痕
4	SI01 下層	甕	口径(136)	1/9	淡橙褐色	
5	SI01 P5	甕	口径 174	1/5	淡褐色	
6	SI01	甕	口径(130)	1/8	淡茶褐色	
7	SI01 P5	壺	口径(100)	1/8	橙褐色	
8	SI01 下層・床面	壺	口径 112 胴径 146 底径 32	全周	暗褐色 褐色	
9	SI01 床面	高坏	口径 266	ほぼ 全周	淡橙褐色 (一部黒褐色)	取手痕 2
10	SI01 床面	高坏	口径 340	1/2	淡黄褐色	
11	SI01 床面	高坏	口径 281	1/2	褐色 黒褐色	外面口縁炭化物少々附着
12	SI01	高坏		1/4	褐色	外面黒斑あり
13	SI01	器台		1/5	褐色	
14	SI01 上層	底部	底径 54	1/4	褐色 淡茶褐色	外面 黒斑 底部スス附着
15	SI01 下層	底部	底径 30	全周	暗褐色	
16	SI01 上層	球状 土製品			褐色	
17	SI02 壁溝	甕	口径 258 胴径 274	全周	淡橙褐色 褐色	
18	SI02 壁溝	甕	口径 192 胴径 225	1/4	橙褐色・暗褐色 淡茶褐色	
19	SI02 下層	甕	口径 174	1/2	褐色	
20	SI02	甕	口径 146	1/4	暗褐色 淡橙褐色	
21	SI02 上層	甕	口径 160	1/5	淡橙褐色	
22	SI02	甕	口径(192)	1/9	橙褐色	
23	SI02 P1	甕	口径(160)	1/10	褐色 暗褐色	指頭圧痕
24	SI02 下層	甕	口径 162	1/6	淡茶褐色 赤褐色	
25	SI02 上層	甕	口径 144 胴径 155	1/6	淡茶褐色 褐色	
26	SI02 上層	甕	口径(200)	1/9	橙褐色 淡茶褐色	
27	SI02 下層	甕	口径(178)	1/8	淡茶褐色 淡橙褐色	
28	SI02	甕	口径(157)	1/8	褐色	
29	SI02 P4	甕	口径 122	1/5	赤黒褐色 黒褐色	
30	SI02 下層	甕	口径(138)	1/11	淡橙褐色	
31	SI02 上層	甕	口径 111	1/6	暗褐色 淡茶褐色	
32	SI02 P1	甕	口径(196)	少片	赤褐色 黒褐色	
33	SI02 上層	壺	口径 131	1/6	淡褐色 淡橙褐色	
34	SI02 下層	壺	口径(106)	1/15	黒褐色 橙褐色	
35	SI02 下層	壺	口径(100)	1/13	淡橙褐色	
36	SI02 壁溝	台付鉢	口径 197 胴径 156 底径 61 台径 73 器高 144	ほぼ 完形	暗褐色・黒褐色 淡茶褐色	
37	SI02 下層	鉢	口径(160)	1/8	淡橙褐色	
38	SI02 下層	壺	口径 70 胴径 90 底径 18 器高 64	完形	橙褐色	
39	SI02 P3	高坏	口径 266	1/2	淡橙褐色	
40	SI02	高坏	口径 254	1/4	橙褐色 淡橙褐色	
41	SI02 下層	鉢	口径(117)	1/9	褐色 黒褐色	
42	SI02 P1・P2	高坏	裾径 169	全周	淡橙褐色	透かし穴4穴
43	SI02 壁溝	高坏		全周	淡橙褐色	
44	SI02 上層	高坏		全周	淡橙褐色	
45	SI02 上層	高坏	裾径 152	1/3		図上復元
46	SI02 上層	高坏		1/2	淡橙褐色	
47	SI02 壁溝	高坏		全周	淡橙褐色	
48	SI02	器台	口径 180	1/4	淡橙褐色	図上復元
49	SI02	底部	底径 38	全周	黒褐色・淡橙褐色 橙褐色	
50	SI02 上層	底部	底径 34	1/2	暗褐色 淡橙褐色	
51	SI02	底部	底径 30	1/4	淡橙褐色	
52	SI02 下層	底部	底径 30	1/3	淡橙褐色	

出土遺物一覽表 (2)

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
53	SI02 上層	底部	底径 30	全周	淡橙褐色 暗褐色	
54	SI02	底部	底径 28	全周	暗褐色 褐色	
55	SD02a	甕	口径 158 胴径 165	口縁 全周	茶褐色	外面スス付着 (胴部1/5)
56	SD02a	甕	口径 134 胴径 150	1/4	淡橙褐色 淡茶褐色	
57	SD02a	甕	口径(193)	1/13	褐色にスス 褐色	
58	SD02a	甕	口径(146)	1/8	褐色 暗褐色	外面スス付着 指頭圧痕
59	SD02a	脚部		1/2	淡褐色	透かし穴3か
60	SD02a	底部	底径 39	1/5	淡茶褐色 暗褐色	
61	SD02b	甕	口径(198)	1/12	褐色 淡茶褐色	外面スス付着
62	SD02c	坏部	口径 249	1/7	淡橙褐色 淡褐色に暗褐色	
63	SD02c	坏部		1/7	橙褐色 淡橙褐色	
64	SD02c	底部	底径 68	1/5	淡褐色	
65	SB01 P1	甕	口径(155)	1/8	淡茶褐色	
66	SB01 P1	裾部	裾径 134	1/7	橙褐色	
67	SB01 P4	裾部	裾径 178	1/5	褐色 褐色一部黒斑	
68	SK02	高坏	口径 240	2/3	暗褐色 黒褐色	外面一部スス
69	SK02	甕	口径 136	1/5	黒褐色 淡褐色	外面スス付着
70	SK02		裾径 145	1/6	淡褐色	
71	SK03	高坏	口径(260)	1/13	暗赤褐色 赤褐色	外面スス付着
72	SD01	中世 土師器	口径 78 底径 60 器高 19	1/6	赤橙色	
73	SD01	中世 土師器	口径(78) 底径(39) 器高(16)	1/7	赤橙色	内・外 油煤痕
74	SD01	中世 土師器	口径 70 底径 37 器高 15	1/6	赤橙色	
75	SD01	折縁 三足盤?				瀬戸灰釉陶器
76	SD04	高坏	口径 270	1/5	淡褐色 淡褐色一部灰色	
77	SP01	裾部	裾径 169	1/6	淡褐色	
78	河肩部下層	深鉢	口径 132	1/6	灰褐色	縄文土器

図番号	出土地点	器種	法量(mm) (推定)	遺存	色調 外 内	備考
79	河肩部下層	深鉢		小片	明灰褐色	縄文土器
80	河肩部下層	深鉢		小片	赤橙色	縄文土器
81	河肩部下層	深鉢		小片	灰褐色	縄文土器
82	河肩部下層	底部	底径 67	2/3	灰褐色	縄文土器
83	河肩部上層	甕	口径(200)	1/15	暗褐色 淡褐色	
84	河肩部上層	甕	口径 140	1/7	淡橙褐色にスス付着 淡橙褐色	

図番号	出土地点	器種	法量(mm, g) ()は欠部				石質等備考
			長さ	幅	厚さ	重さ	
85	SD01	打製石斧	(142)	98	36	(474)	火山礫凝灰岩
86	SI02	打製石斧	(93)	70	27	(205)	火山礫凝灰岩
87	河肩 B土	打製石斧	(88)	79	34	(232)	緑色凝灰岩
88	SI01 上層	打製石斧	76	40	15	42.8	輝石安山岩
89	SI01 床面	不明	(319)	(168)	(105)		粗粒砂岩
90	SI02	石鏃	31	19	7.5	3.3	フリント? (橙白色)
91	SI01 下層	剥片	32	11.5	12.5	4.2	緑色珪質凝灰岩
92	SI01 下層	剥片	24	26	4.5	2.7	緑色珪質凝灰岩
93	SI01 下層	剥片	23	22	6.5	2.3	緑色珪質凝灰岩
94	SI02 下層	剥片	34	28	10	9.9	緑色珪質凝灰岩
95	SD01	砥石	(30)	(32)	(17)	(14.8)	凝灰岩
96	SI02 壁溝	砥石	(48)	(42)	(14)	(30)	泥岩
97	SD01	寛永通寶	径21.5	0.85	1.58		穴一辺 6.56mm



平成元年度(1989年)調査区(北より)



平成8年度(1996年)調査区(北→)



SI 01 (1989年・南より)



SI 01 (1996年・東より)



SI 01
炭化材
出土状況



SI 02
(東より)



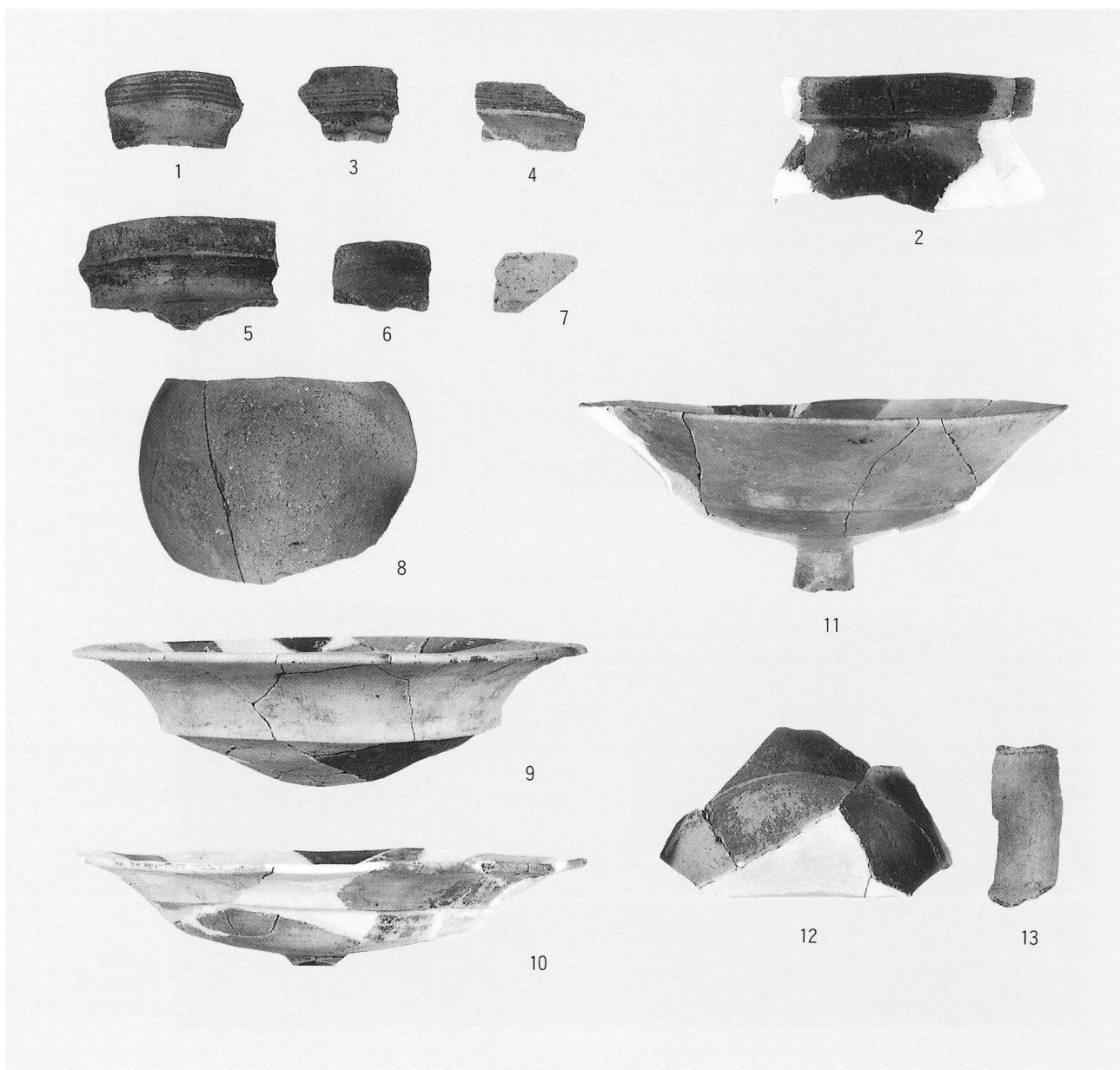
SB01
(南東より)



河道跡
検出状況
(北より)



SK 01





17



18



20



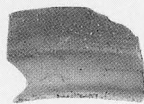
21



22



19



23



24



26



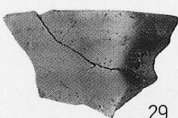
25



27



28



29



33



34



35



30



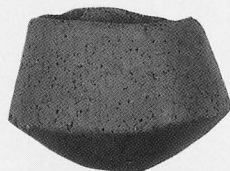
31



32



37



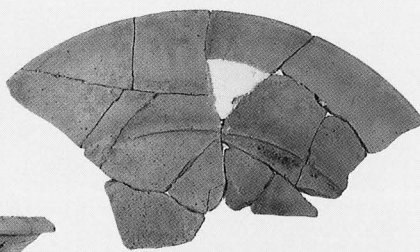
38



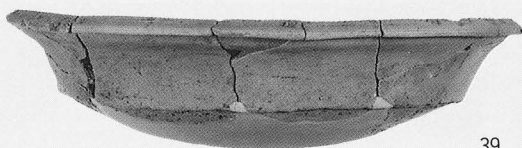
36



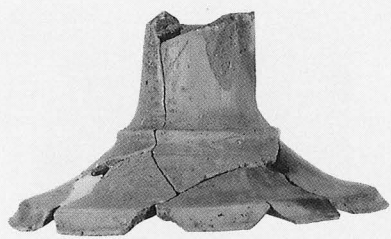
41



40



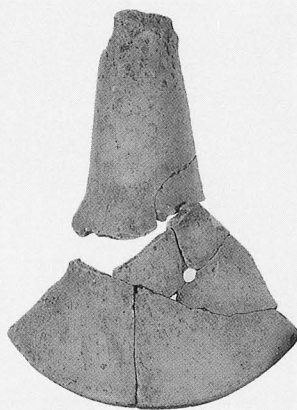
39



42



43



45



46



55



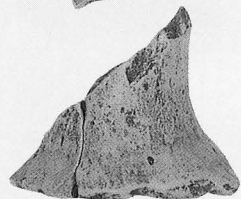
44



47



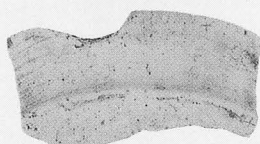
48



57



58



62



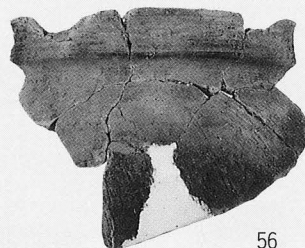
59



61



63



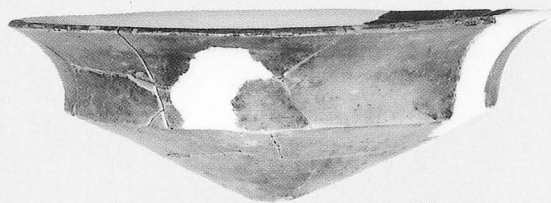
56



65



69



68



66



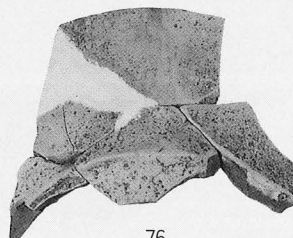
70



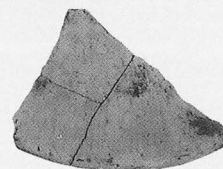
67



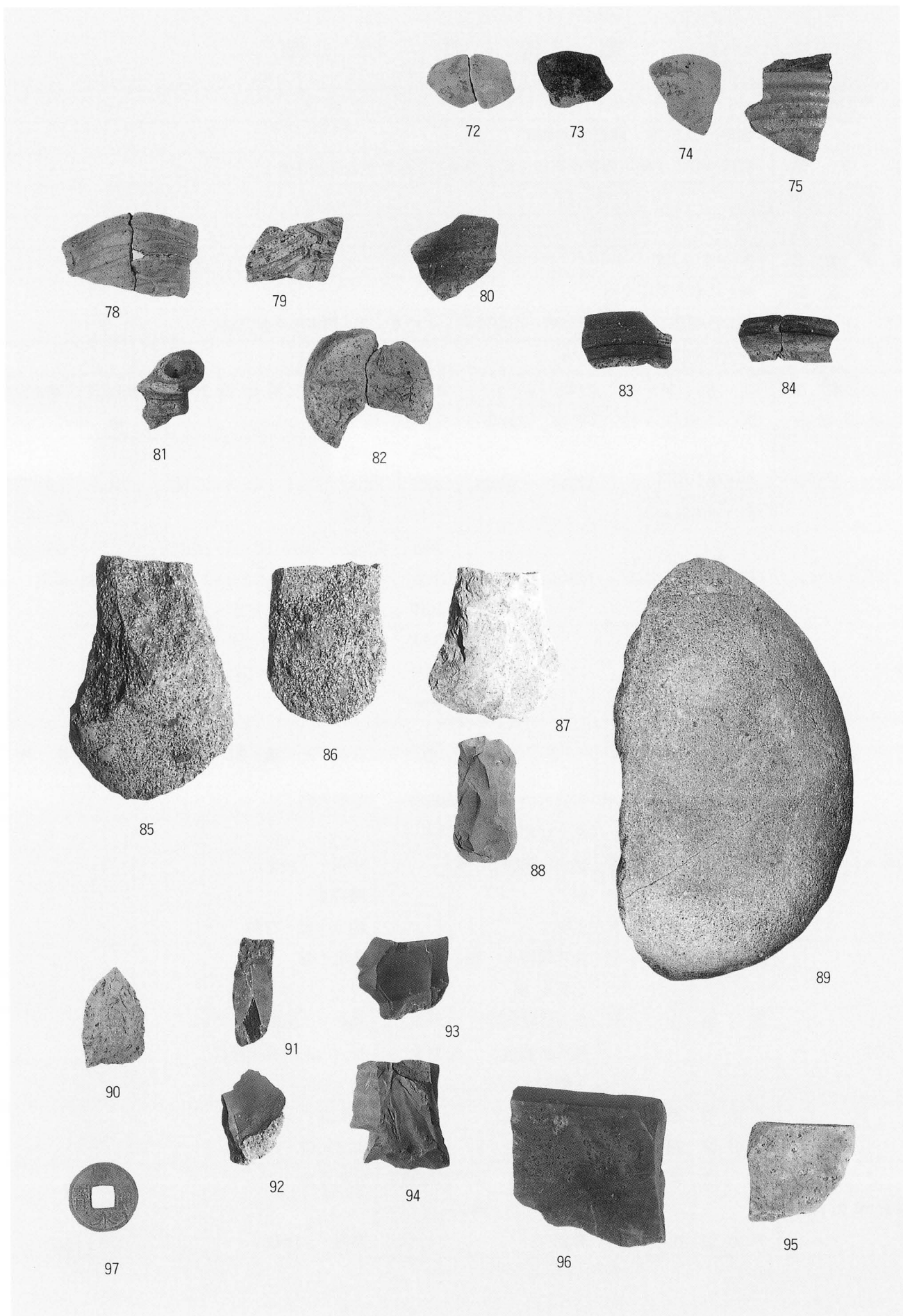
71



76



77



報 告 書 抄 録

ふりがな	ながいけ・ふつかいち・おきょうづかいせきぐん							
書名	長池・二日市・御経塚遺跡群							
副書名	御経塚第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	吉田 淳							
編集機関	野々市町教育委員会							
所在地	〒921-8815 石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1 ☎ 076-246-2344							
発行年月日	1998年3月31日(平成10年)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながいけ 長池ニシタンポ	いしかわけんいしかわぐん 石川県石川郡 ののいちまちながいけまち 野々市町長池町	17344	16026	36度 32分 24秒	136度 35分 49秒	1991年6月5日~10月30日	2500m ²	土地区画整 理事業に係 る緊急発掘 調査
ふつかいち 二日市イシバチ	ふつかいちまち 野々市町二日市町	17344	16024	36度 32分 13秒	136度 35分 51秒	1992年11月4日~12月21日 1993年6月3日~7月7日 1994年4月22日~9月14日	3950m ²	
おきょうづか 御経塚 オッソ	おきょうづかまち 野々市町御経塚町	17344	16032	36度 32分 33秒	136度 35分 50秒	1989年11月24日~12月4日 1996年10月22日~12月4日	550m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長池ニシタンポ	集落	弥生~古墳	竪穴建物3 平地式建物4 掘立柱建物6 土坑8		弥生土器			
	集落	中世	掘立柱建物1 溝		陶器・土師器			
	その他	近世	溝		陶磁器			
	その他	縄文	土坑1		縄文土器・石器			
二日市イシバチ	集落	弥生	竪穴建物4 掘立柱建物1 土坑9 溝		弥生土器			
	集落	中世	掘立柱建物12 井戸4 竪穴状遺構3 柱列6 土坑5		陶器・土師器 行火・囲炉裏炉縁石			
	その他	近世	溝		陶磁器			
	その他	縄文	土坑2		縄文土器・石器			
御経塚 オッソ	集落	弥生	竪穴住居2 掘立柱建物1 土坑3 溝3		弥生土器			
	その他	中世	溝1		陶器・土師器			

長池・二日市・御経塚遺跡群

発行 1998年3月31日(平成10年)
編集発行 野々市町教育委員会
〒921-8815
石川県石川郡野々市町本町5丁目4-1
☎ 076-246-2344
印刷 株式会社 笠間製本印刷所

